津山市埋蔵文化財発掘調査報告第84集

畔田遺跡
追坊師A遺跡
黒岩遺跡
追坊師B遺跡
城山遺跡

津山圏域クリーンセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

2015

津山市教育委員会

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第84集

畔田遺跡
追坊師A遺跡
黒岩遺跡
追坊師B遺跡
城山遺跡

津山圏域クリーンセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

２０１５

津山市教育委員会

１　黒岩遺跡遠景（西から）

２　中心部土壙墓群（右上が北）

１　方形台状墓１（右上が北）

２　方形台状墓２～４（右上が北）

１　箱式石棺１（古墳時代）検出状況（西から）

２　土器棺墓１（古墳時代）検出状況（北西から）

１　土壙１人骨出土状況

２　土壙５人骨出土状況

序

津山市は岡山県の北部に位置し、人口約10万人の歴史・文化の薫る城下町であります。現在の市街地は、慶長８（1603）年に美作18万6500石を領して入封した森忠政によって整備された城下町を基盤としております。

津山の歴史を紐解きますと、戦後間もなく調査され、遺跡公園として整備された沼弥生住居址群、美作最大の前方後円墳である美和山１号墳など多くの遺跡が存在しております。さらに和銅６（713）年に美作国ができますと国府が置かれ、その後も江戸時代の終わりまで国の中心として機能しておりました。

このため、市内には多くの文化財・歴史遺産が見られます。特に出雲往来沿いにある城下町については、戦災にあっていないこともあり、古い町並みが良く残っております。平成25年には城東地区が重要伝統的建造物群保存地区に選定され、今後の保存活用が期待されるところであります。

さて、今回の発掘調査でございますが、永年の懸案でありましたごみ処理施設であるクリーンセンター建設に伴うものであります。建設予定地内では、複数の遺跡が確認され、弥生時代の集落や墳墓などが調査されました。特に弥生時代の貯蔵穴から人骨が出土した事例は、前例がほとんど無い発見でありました。

本書は、これらの調査成果をまとめたものであります。小冊子ではありますが、今後の美作地域の歴史研究の一助になれば幸いであります。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成にいたるまで、お世話になりました津山圏域資源循環施設組合ならびに関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成２７年３月１９日

津山市教育委員会
教育長　田　村　芳　倫

例　言

1　本書は、津山圏域クリーンセンター建設事業に伴い、津山市教育委員会が津山圏域資源循環施設組合の依頼を受け、発掘調査を実施した、畔田遺跡・追坊師Ａ遺跡・黒岩遺跡・追坊師Ｂ遺跡・城山遺跡の発掘調査報告書である。

2　畔田遺跡は津山市領家 1411-1 ほか、追坊師Ａ遺跡は津山市領家 1378-1、黒岩遺跡は津山市領家 712、追坊師Ｂ遺跡は津山市領家 1378-1、城山遺跡は津山市領家 1446 に所在する。

3　試掘、確認調査は、平成 22 年３月８日から平成 24 年７月２日まで、仁木康治・平岡正宏・豊島雪絵・平井泰明が担当して行った。
本調査は、平成23年9月26日から平成24年11月15日まで、仁木・豊島・平井・仲井寛明が担当して実施した。調査面積は 10,550 ㎡である。

4　本書の執筆は、小郷利幸・仁木・豊島・平井・宮﨑絢子が担当して実施した。文責はそれぞれ文末に記している。全体の編集は平井が行った。

5　人骨鑑定は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託を行った。
第９章第３節及び図版 56 は、同社が執筆及び作成した。

6　本書に関連する出土遺物及び図面・写真は、津山弥生の里文化財センター（岡山県津山市沼 600-1）に保管している。

凡　例

1　本報告書に用いた高度値は標高である。

2　方位は平面直角座標第Ⅴ系の座標北である。

3　本報告書に掲載した遺構及び遺物の縮尺は次のとおりとしているが、例外もあるため図ごとに縮尺率を明記している。

遺構：1/40　　遺物：1/4

4　掲載遺物番号については、遺跡ごとに土器、金属製品など分けて通し番号を付け、土器以外については次の略号を番号の前に付している。

金属製品：M

5　本書で使用した時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、必要な場合には世紀などを併用した。

6　畔田遺跡については、遺構の場所を示すために、10mごとにX軸では北から順番に1～8を、Y軸では西から東にA～Gを付した。（第5章　畔田遺跡　第2図及び第3図を参照）名称は、北西隅を基準に例えば、4B区のように呼んでいる。

7　まとめは各章ごと（遺跡ごと）に記載した。

目　次

巻頭図版
序
例言
凡例
目次
第１章　発掘調査及び報告書作成の経緯と経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　　１　クリーンセンター建設に至る経緯 …… 1
　　２　試掘・確認調査の経緯と経過 …… 1
　第２節　調査の経過と体制 …… 6
　　１　調査の経過 …… 6
　　２　報告書作成の経過 …… 6
　　３　調査日誌抄 …… 7
　　４　調査及び整理の体制 …… 8
第２章　遺跡及びその周辺の地形と歴史的環境 …… 11
第３章　本事業以前に行った調査 …… 15
第４章　試掘・確認調査 …… 19
　第１節　平成21年度（Ａ～Ｅ地区） …… 19
　第２節　平成23・24年度（Ｆ・Ｇ地区） …… 21
第５章　畔田遺跡 …… 27
　第１節　遺跡の概要 …… 27
　第２節　検出された遺構と遺物 …… 29
　第３節　まとめ …… 41
第６章　追坊師Ａ遺跡 …… 44
　第１節　遺跡の概要 …… 44
　第２節　検出された遺構と遺物 …… 45
　第３節　まとめ …… 46
第７章　黒岩遺跡 …… 48
　第１節　遺跡の概要 …… 48
　第２節　弥生時代の遺構と遺物 …… 53
　第３節　古墳時代の遺構と遺物 …… 98
　第４節　まとめ …… 105
第８章　追坊師Ｂ遺跡 …… 116
　第１節　遺跡の概要 …… 116

第２節　検出された遺構と遺物 …… 117
第３節　まとめ …… 119
第９章　城山遺跡 …… 121
第１節　遺跡の概要 …… 121
第２節　検出された遺構と遺物 …… 122
第３節　城山遺跡出土骨の同定 …… 127
第４節　まとめ …… 131
図版
報告書抄録

図目次

（第１章）
第 1 図　遺跡位置図 …… 2
第 2 図　新クリーンセンター施設配置図 …… 4
第 3 図　新クリーンセンター建設予定地内遺跡分布図 …… 5
（第２章）
第 1 図　周辺遺跡分布図 …… 13
（第３章）
第 1 図　トレンチ位置図 …… 16
第 2 図　辰尾池東南遺跡確認調査出土遺物 …… 17
（第４章）
第 1 図　Ｆ地区トレンチ詳細図 …… 21
第 2 図　Ｇ地区トレンチ詳細図 …… 22
第 3 図　試掘・確認調査地区及びトレンチ配置図 …… 25
（畔田遺跡）
第 1 図　畔田遺跡全体図 …… 27
第 2 図　畔田遺跡遺構配置図（北部分） …… 28
第 3 図　畔田遺跡遺構配置図（南部分） …… 28
第 4 図　土壙 1 …… 29
第 5 図　土壙 1 出土遺物 …… 29
第 6 図　土壙 1 出土遺物 …… 30
第 7 図　土壙 2・出土遺物 …… 31
第 8 図　土壙 3 …… 31
第 9 図　土壙 4 …… 31
第 10 図　土壙 5・出土遺物 …… 32
第 11 図　土壙 6 …… 32
第 12 図　土壙 7 …… 32
第 13 図　土壙 7 出土遺物 …… 33
第 14 図　土壙 8・出土遺物 …… 33
第 15 図　土壙 9 …… 34
第 16 図　土壙 10 …… 34
第 17 図　土壙 11 …… 35
第 18 図　土壙 12 …… 35
第 19 図　土壙 13 …… 35
第 20 図　土壙 14 …… 35
第 21 図　土壙 15 …… 36
第 22 図　土壙 16 …… 36
第 23 図　土壙 17 …… 36
第 24 図　土壙 18 …… 36
第 25 図　土壙 19 …… 37
第 26 図　柱穴 6 出土遺物 …… 37
第 27 図　墓 1・出土遺物 …… 38
第 28 図　住居 1 …… 39
第 29 図　住居 1 出土遺物 …… 39
第 30 図　建物 1 …… 40

（追坊師Ａ遺跡）

第 1 図　追坊師Ａ遺跡遺構配置図 …… 44
第 2 図　溝 1 …… 45
第 3 図　溝 2 …… 45
第 4 図　溝 1 出土遺物 …… 46
第 5 図　溝 2 出土遺物 …… 46
第 6 図　土壙 1 …… 46
第 7 図　土壙 2 …… 46

（黒岩遺跡）

第 1 図　黒岩遺跡発掘調査前測量図 …… 49
第 2 図　調査区割図及び 1997 年調査時の …… 50
トレンチ配置図
第 3 図　調査区土層断面図（東西）…… 51
第 4 図　調査区土層断面図（南北）…… 52
第 5 図　上層遺構平面図 …… 53
第 6 図　黒岩遺跡平面図 …… 55
第 7 図　黒岩遺跡下層遺構拡大図 …… 57
第 8 図　黒岩遺跡遺構群分け図 …… 59
第 9 図　土壙墓 1 ～ 5 平面・断面図 …… 60
第 10 図　土壙墓 6 ～ 9、溝 3 平面・断面図 …… 62
第 11 図　土壙墓 10 ～ 13 平面・断面図 …… 63
第 12 図　土壙墓 11 出土遺物 …… 64
第 13 図　土壙墓 14 ～ 17 平面・断面図 …… 64
第 14 図　土壙墓 66 平面・断面図 …… 65
第 15 図　土壙墓 18 ～ 21・24・25 平面・断面図 …… 66
第 16 図　土壙墓 22・23 平面・断面図 …… 67
第 17 図　土器棺墓 1 平面・断面図（上）及び …… 68
土器棺実測図（下）
第 18 図　方形台状墓 1　溝 1 平面・断面図 …… 69
第 19 図　溝 1 出土遺物 …… 70
第 20 図　方形台状墓 1　溝 2 平面・断面図 …… 70
第 21 図　溝 2 出土遺物 …… 71
第 22 図　溝 3 出土遺物 …… 71
第 23 図　方形台状墓 1　溝 4 平面・断面図 …… 73
第 24 図　土壙墓 26 ～ 31 平面・断面図 …… 74
第 25 図　土壙墓 32 ～ 39 平面・断面図 …… 75
第 26 図　土壙墓 40 ～ 44 平面・断面図 …… 76
第 27 図　土壙墓 45 ～ 48 平面・断面図 …… 77
第 28 図　土壙墓 49 ～ 54 平面・断面図 …… 78
第 29 図　土壙墓 55 ～ 57 平面・断面図 …… 79
第 30 図　土壙墓 58・59 平面・断面図 …… 80
第 31 図　土壙墓 60・61 平面・断面図 …… 80
第 32 図　土壙墓 62 ～ 64 平面・断面図 …… 81
第 33 図　土壙墓 65 平面・断面図 …… 82
第 34 図　方形台状墓 2（土壙墓 54・67 ～ 70・溝 5）‥ 83
平面・断面図（1）
第 35 図　方形台状墓 2（土壙墓 67 ～ 70 溝 5）…… 84
平面・断面図（2）
第 36 図　方形台状墓 2　溝 5 出土遺物 …… 85
第 37 図　方形台状墓 3 …… 86
（土壙墓 71 ～ 77）平面・断面図
第 38 図　方形台状墓 3　土壙墓 73・74 上層出土遺物 87
第 39 図　方形台状墓 3　土壙墓 72 出土遺物 …… 87
第 40 図　方形台状墓 4（土壙墓 78・79・溝 6）…… 88
平面・断面図
第 41 図　溝 6 出土遺物 …… 89
第 42 図　溝 7 平面・断面図 …… 90
第 43 図　溝 7 出土遺物 …… 90
第 44 図　調査区割と 1997 年調査 …… 91
トレンチ配置図
第 45 図　Ａ区出土遺物 …… 92
第 46 図　Ｂ区出土遺物 …… 93
第 47 図　Ｃ・Ｄ区出土遺物（1・3・12・13・・・Ｃ区、‥ 94
それ以外はＤ区）
第 48 図　その他の出土遺物 …… 95
第 49 図　1997 年調査トレンチ 1（Ａ区）出土遺物 … 95
第 50 図　1997 年調査トレンチ 2（Ｂ区）出土遺物 … 96
第 51 図　1997 年調査トレンチ 3・4（Ｃ・Ｄ区）…… 96
出土遺物
第 52 図　1997 年調査トレンチ内その他出土遺物 …… 97
第 53 図　箱式石棺 1 平面・断面図 …… 98
第 54 図　古墳時代の遺構分布図 …… 99
第 55 図　土器棺 1 平面・見通し図 …… 100
第 56 図　須恵器 1・須恵器 2 出土状況 …… 101
第 57 図　遺構に伴う遺物 …… 103
第 58 図　遺構に伴わない遺物 …… 104

第 59 図　美作地域の弥生時代墳墓群 1 ……108
第 60 図　美作地域の弥生時代墳墓群 2 ……109
第 61 図　方形台状墓 1 の東隅部 ……112

（追坊師Ｂ遺跡）
第 1 図　追坊師Ｂ遺跡遺構配置図……116
第 2 図　溝 1 ・出土遺物……117
第 3 図　溝 2 溝 3 ・出土遺物 ……117
第 4 図　溝 4 ……118
第 5 図　溝 5 ……118
第 6 図　土壙 1 ・出土遺物……119

（城山遺跡）
第 1 図　城山遺跡遺構配置図……121
第 2 図　土壙 1 出土遺物……122
第 3 図　土壙 1 ・人骨出土状況 ……123
第 4 図　土壙 2 ……124
第 5 図　土壙 3 ……124
第 6 図　土壙 4 ……125
第 7 図　土壙 5 ・人骨出土状況 ……125
第 8 図　土壙 5 出土遺物……126
第 9 図　人体骨格各部の名称……127

表目次

（第 1 章）
表 1　確認調査概要一覧 …… 2
表 2　文化財保護法に基づく文書一覧 …… 3

（畔田遺跡）
表 1　畔田遺跡遺構一覧表…… 42
表 2　畔田遺跡遺物観察表…… 42

（追坊師Ａ遺跡）
表 1　追坊師Ａ遺跡遺構一覧表 …… 47
表 2　追坊師Ａ遺跡遺物観察表 …… 47

（黒岩遺跡）
表 1　黒岩遺跡土壙墓一覧表……114

（追坊師Ｂ遺跡）
表 1　追坊師Ｂ遺跡遺構一覧表 ……120
表 2　追坊師Ｂ遺跡遺物観察表 ……120

（城山遺跡）
表 1　城山遺跡遺構一覧表……126
表 2　城山遺跡遺物観察表……126
表 3　出土骨の同定結果……128

挿図写真目次

（第 1 章）
挿図写真 1　新クリーンセンター建設予定地…… 4

（畔田遺跡）
挿図写真 1　住居 1 作業風景（北から）…… 37

（城山遺跡）
挿図写真 1　人骨出土状況 ……122

図版目次

（巻頭図版）

巻頭図版１　１　黒岩遺跡遠景（西から）

巻頭図版１　２　中心部土壙墓群（右上が北）

巻頭図版２　１　方形台状墓１（右上が北）

巻頭図版２　２　方形台状墓２～４（右上が北）

巻頭図版３　１　箱式石棺１（古墳時代）検出状況（西から）

巻頭図版３　２　土器棺墓１（古墳時代）検出状況（北西から）

巻頭図版４　１　土壙１人骨出土状況

巻頭図版４　２　土壙５人骨出土状況

（辰尾池東南遺跡確認調査）

図版１　１　調査位置遠景（南から）

図版１　２　T-1（北西から）

図版１　３　T-2（北東から）

図版２　１　T-3（南から）

図版２　２　T-4（北から）

図版２　３　T-5（南から）

図版３　１　T-6（北から）

図版３　２　T-7（北西から）

（試掘調査）

図版３　３　調査前状況（南から）

図版４　１　T-1（南から）

図版４　２　T-2（西から）

図版４　３　T-3（北から）

図版５　１　T-4（北東から）

図版５　２　遺物出土状況（T-2）（北西から）

図版５　３　遺物出土状況（T-4）（西から）

図版６　１　調査状況（T-4）（北東から）

図版６　２　辰尾池東南遺跡確認調査出土遺物

（試掘・確認調査　平成21年度）

図版７　１　Ａ地区試掘調査前

図版７　２　Ａ地区遺構検出状況（東から）

図版７　３　Ｂ地区試掘調査前

図版８　１　Ｂ地区試掘調査後（南から）

図版８　２　Ｃ地区試掘調査後（北から）

図版８　３　Ｄ地区試掘前

図版９　１　Ｄ地区重機掘削中

図版９　２　Ｅ地区試掘調査前

図版９　３　Ｅ地区試掘トレンチ（西から）

（試掘・確認調査　平成23・24年度）

図版10　１　Ｆ地区調査前現況（北西から）

図版10　２　Ｇ地区調査前現況（西から）

図版10　３　作業状況（Ｇ地区）

図版11　１　Ｆ地区及びＧ地区調査状況遠景（北西から）

図版11　２　Ｆ地区トレンチ（上空から）

図版11　３　Ｇ地区　平成23年度調査トレンチ（上空から）

（畔田遺跡）

図版12　１　畔田遺跡遠景（北から）

図版12　２　畔田遺跡全景（左が北）

図版13　１　土壙１（北から）

図版13　２　土壙14（東から）

図版13　３　土壙18（北から）

図版14　１　土壙19（東から）

図版14　２　墓１（北から）

図版14　３　建物１（上が北）

図版15　１　住居１（上が北）

図版15　２　住居１（北から）

図版15　３　住居１内の土器34出土状況

図版16　畔田遺跡出土遺物１

図版17　畔田遺跡出土遺物２

図版55　１　畔田遺跡出土金属製品

（追坊師Ａ遺跡）

図版18　１　追坊師Ａ遺跡遠景（東から　写真左側右側は畔田遺跡）

図版18　２　追坊師Ａ遺跡全景（右が北）

図版19　１　溝１（東から）

図版19　２　溝２（東から）

図版19　３　溝２断面

（黒岩遺跡）

図版 20　1　黒岩遺跡発掘調査前（西から）
図版 20　2　黒岩遺跡調査後全景（左上が北）
図版 21　1　遺構全景
図版 21　2　Ａ群土壙墓１～５（左上が北）
図版 22　1　Ｂ群土壙墓（左上が北）
図版 22　2　Ｃ群土壙墓（左上が北）
図版 23　1　箱式石棺１（上が北）
図版 23　2　古墳時代の土壙墓（下）（上が北）
図版 24　1　上層遺構（南西から）
図版 24　2　土壙墓１～５（西から）
図版 24　3　溝 3、土壙墓６～９（東から）
図版 25　1　左：土壙墓１（南西から）
右：土壙墓２（北から）
図版 25　2　土壙墓４（南から）
図版 25　3　左：土壙墓３（東から）
右：土壙墓５（北から）
図版 26　1　土壙墓 10, 16, 17（東から）
図版 26　2　土壙墓 11 ～ 13、22（南から）
図版 26　3　土壙墓 14 ～ 17（西から）
図版 27　1　土器棺墓１検出状況（北から）
図版 27　2　土器棺墓１完掘状況（東から）
図版 27　3　土壙墓 18, 19, 21（東から）
図版 28　1　土壙墓 25, 33, 35, 36（西から）
図版 28　2　土壙墓 26 ～ 29, 31, 32, 38, 39, 45, 46（西から）
図版 28　3　土壙墓 38, 39, 41, 45（東から）
図版 29　1　土壙墓 55 ～ 57（東から）
図版 29　2　土壙墓 49, 50, 52, 53（西から）
図版 29　3　溝 5，土壙墓 51, 54（南東から）
図版 30　1　Ｃ群土壙墓（西から）
図版 30　2　溝 2，土壙墓 62 ～ 64（東から）
図版 30　3　溝１（西から）
図版 31　1　溝１北側アゼ土層断面（北から）
図版 31　2　溝１南北アゼ土層断面（東から）
図版 31　3　溝２列石（北から）
図版 32　1　方形台状墓１東隅部拡大（東から）
図版 32　2　方形台状墓２（南東から）
図版 32　3　方形台状墓２（北から）
図版 33　1　方形台状墓３（南から）
図版 33　2　方形台状墓４（南東から）
図版 33　3　方形台状墓４（北東から）
図版 34　1　溝７（西から）
図版 34　2　土壙墓 58, 59, 66（北から）
図版 34　3　方形台状墓１内土壙墓群（北から）
図版 35　1　方形台状墓１内土壙墓群（南から）
図版 35　2　方形台状墓１内土壙墓群（東から）
図版 35　3　発掘作業風景
図版 36　1　中学生職場体験
図版 36　2　現地説明会
図版 37　黒岩遺跡出土遺物１
図版 38　黒岩遺跡出土遺物２
図版 39　黒岩遺跡出土遺物３
図版 40　黒岩遺跡出土遺物４
図版 41　黒岩遺跡出土遺物５
図版 42　黒岩遺跡出土遺物６
図版 43　黒岩遺跡出土遺物７
図版 44　黒岩遺跡出土遺物８
図版 45　黒岩遺跡出土遺物９
図版 46　1　土器棺墓１（古墳時代）検出状況
（北西から）
図版 46　2　土器棺墓１（古墳時代）刀子出土状況
（北東から）
図版 46　3　須恵器２検出状況（南から）
図版 47　1　箱式石棺１（古墳時代）蓋石取り外し後
（西から）
図版 47　2　箱式石棺１（古墳時代）完掘状況
（南東から）
図版 47　3　須恵器１検出状況（南東から）
図版 48　黒岩遺跡出土遺物 10
図版 49　黒岩遺跡出土遺物 11

（追坊師Ｂ遺跡）

図版 50　1　追坊師Ｂ遺跡遠景（南から）
図版 50　2　追坊師Ｂ遺跡全景（右が北）

（城山遺跡）

図版 51　1　城山遺跡遠景（西から）
（右側端は平成24年度試掘調査のトレンチ）

図版 51　2　　城山遺跡全景（上が北）
図版 52　1　　土壙 1（西から）
図版 52　2　　土壙 1 人骨出土状況（南西から）
図版 52　3　　土壙 1 人骨出土状況
図版 53　1　　土壙 2（北から）
図版 53　2　　土壙 3（北から）
図版 53　3　　土壙 4（北西から）
図版 54　1　　土壙 5（北東から）
図版 54　2　　土壙 5 人骨出土状況
図版 54　3　　土壙配置（右から土壙 5・1・2・3）
図版 55　2　　城山遺跡出土遺物
図版 56　　城山遺跡出土骨

第１章　発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

１　クリーンセンター建設に至る経緯

津山市には、市内小桁にごみ処理施設（昭和51年建設）があり、補修をおこないながら現在も稼働している。ただこれら施設の耐用年数は20～25年と言われており、すでに耐用年数を超えている事は否めず、新たな施設を建設する事が急務であった。このような事態は周辺の町村でも同様であった。

平成10年３月に岡山県が「岡山県ごみ処理広域化計画」を策定したのをうけ、同年12月に20の市町村で津山ブロックごみ処理広域化対策協議会を設立した。その後市町村合併もあり、平成19年３月策定の「新岡山県ごみ処理広域化計画」に基づき、津山ブロック７市町村（津山市・美作市・鏡野町・勝央町・奈義町・美咲町・西粟倉村）で、基本計画の策定、候補地の選定を行う事となった。

本市では早い段階で、市内東部の綾部地区が建設の候補地としてあがっていたが、根強い反対や多額な用地・補償費が必要など事業を進めるにあたっての問題点があり、平成18年に候補地が取りやめとなった。その後候補地の公募が平成18年９月から開始され、平成19年５月には候補地が領家、為本ほか、安井地区に絞られ、同年６月に市内西部の領家地区に決定した。

平成20年５月には新クリーンセンター施設配置案（第２図）も決定した事を受け、建設予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて、担当部署との協議にはいる事となった。

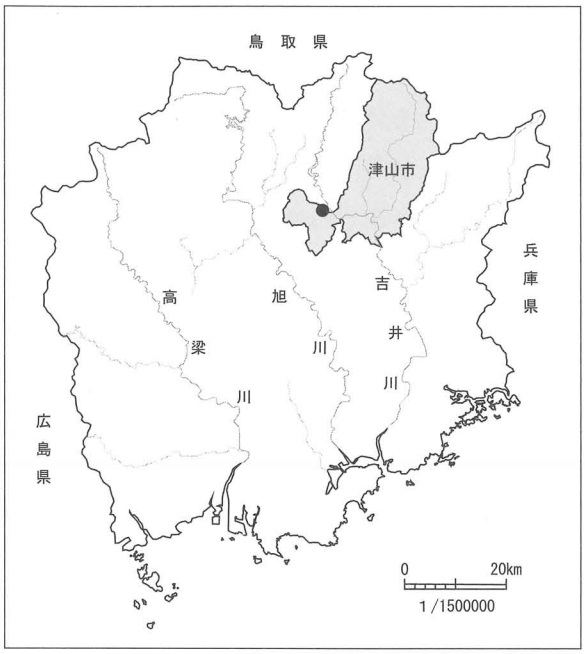
なお、平成21年１月には、美作市と西粟倉村が津山ブロック協議会から脱会し、同年４月には残る５市町（津山市・鏡野町・勝央町・奈義町・美咲町）で、津山圏域資源循環施設組合が設立された。

２　試掘・確認調査の経緯と経過

津山市領家地区の約30haの建設予定地内に、周知の遺跡として知られていたのは、黒岩１・５・６号墳、野面羅遺跡（追坊師Ｂ遺跡）だけであった（第２章　第１図）。これら周知の遺跡については出来る限り現状保存を求める一方（黒岩１・５・６号墳については現状保存）、遺跡の見られない部分について、地形図を見ながら現地を踏査した結果、集落遺跡の存在しそうな緩やかな丘陵が多く見られた。特にこの領家地区周辺には、中国自動車道建設などで弥生時代から古代にかけての遺跡（領家遺跡・宮尾遺跡・久米廃寺など）がすでに調査され各時代の遺跡が集中して見られる事や、隣接する鏡野町郷地区にも古墳など多くの遺跡が知られている事などから、確認調査の必要性を担当部署に説明し、実施する運びとなった。

確認調査必要箇所は建設予定地内に７箇所あり、これらをＡ～Ｇ地区と呼称した。（表１、第４章第２節第３図）調査予定地はすべて丘陵で樹木が繁茂しており、そのままでは確認

調査にはいる事ができない。このため、確認調査範囲を現地に設定し、その部分の樹木の伐採片づけを先行して行い調査範囲を確保した。確認調査は、B地区のみ人力で掘り下げそれ以外は重機を使用して幅２ｍ程のトレンチを尾根線とそれに直交する形で設定し、掘削後は人力で遺構の検出を行った。この結果、B・F地区以外で遺構・遺物が検出され、遺跡の範囲が確定された。これら新規発見の遺跡については、新クリーンセンター建設工事によって削平を余儀なくされる部分のため、発掘調査で記録保存を行う事となった。



第１図　遺跡位置図

なお、各地区の確認調査概要は以下のとおりで、詳細は第４章を参照されたい。

また、文化財保護法関係の手続きは、表２のとおりである。（小郷）

表１　確認調査概要一覧

地区名（遺跡名）	調査期間	確認調査結果	本調査面積
A（畔田遺跡）	H22. 3.	住居・土壙・柱穴等、土師器・須恵器等出土	3, 500 ㎡
B	H22. 3	遺構・遺物無し	
C（追坊師A遺跡）	H22. 3	遺構検出、土師器片出土	900 ㎡
D（黒岩遺跡）	H22. 3	遺構検出、須恵器片出土	4, 600 ㎡
E（追坊師B遺跡）	H22. 3	遺構検出、土師器・須恵器片出土	600 ㎡
F	H23. 6 ～ 9	遺構・遺物無し	
G（城山遺跡）	H23. 6 ～ 9 H24. 5 ～ 7	貯蔵穴、弥生土器片出土	950 ㎡

表２　文化財保護法に基づく文書一覧

埋蔵文化財発掘の通知（法第 94 条）

番号	文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積（㎡）	目的	通知者	期間	主な勧告事項
1	津資組第 329 号 H22.3.5	散布地・集落跡・古墳	津山市領家 708-1 ほか	300,000	ごみ処理場建設	津山圏域資源循環施設組合 管理者　宮地昭範	H22.4.1～ H26.3.31	発掘調査

埋蔵文化財試掘・確認調査の報告

番号	文書番号 日付	周知・周知外	種類及び名称	所在地	面積（㎡）	原因	包蔵地の有無	報告者	期間
1	津教委文第 103 号 H22.4.16	周知・周知外	集落跡	津山市領家 1411-1 ほか	800	ごみ処理場建設	有	津山市教育委員会 教育長　田村芳倫	H22.3.8～ H22.3.31
2	津教生文第 2107 号 H23.9.26	周知外	集落跡・その他の墓	津山市領家 1431-1 ほか	1322.2	ごみ処理場建設	有	津山市教育委員会 教育長　田村芳倫	H23.6.8～ H23.9.20

遺跡発見の通知（法第 97 条）

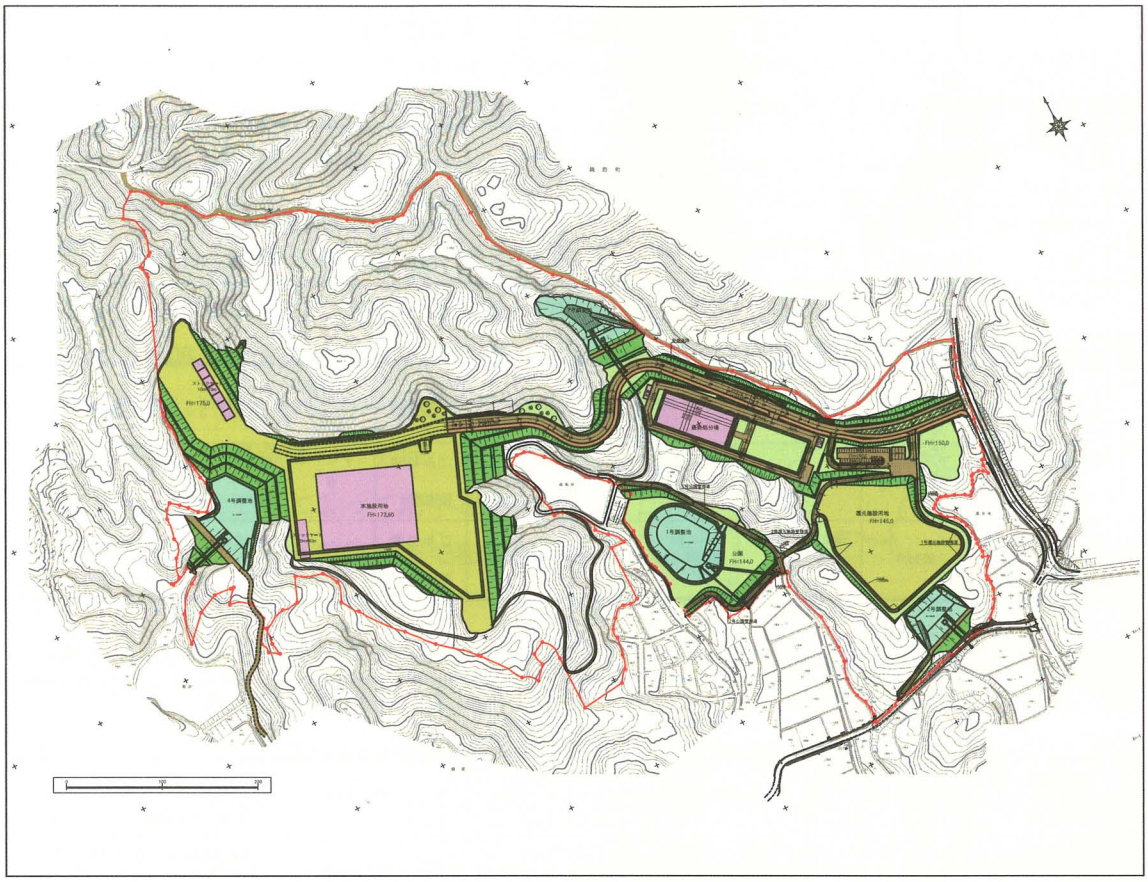
番号	文書番号 日付	遺跡の種類	所在地	発見年月日	発見の事情	土地の所有者
1	津教委文第 218 号 H22.5.12	集落跡	津山市領家 1411-1 ほか	H22.3.8～ H22.3.31	試掘調査	津山圏域資源循環施設組合 管理者　宮地昭範
2	津資組第 251 号 H23.9.26	集落跡・その他の墓	津山市領家 1446 ほか	H23.6.8～ H23.9.20	試掘調査	津山圏域資源循環施設組合 管理者　宮地昭範

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第 99 条）

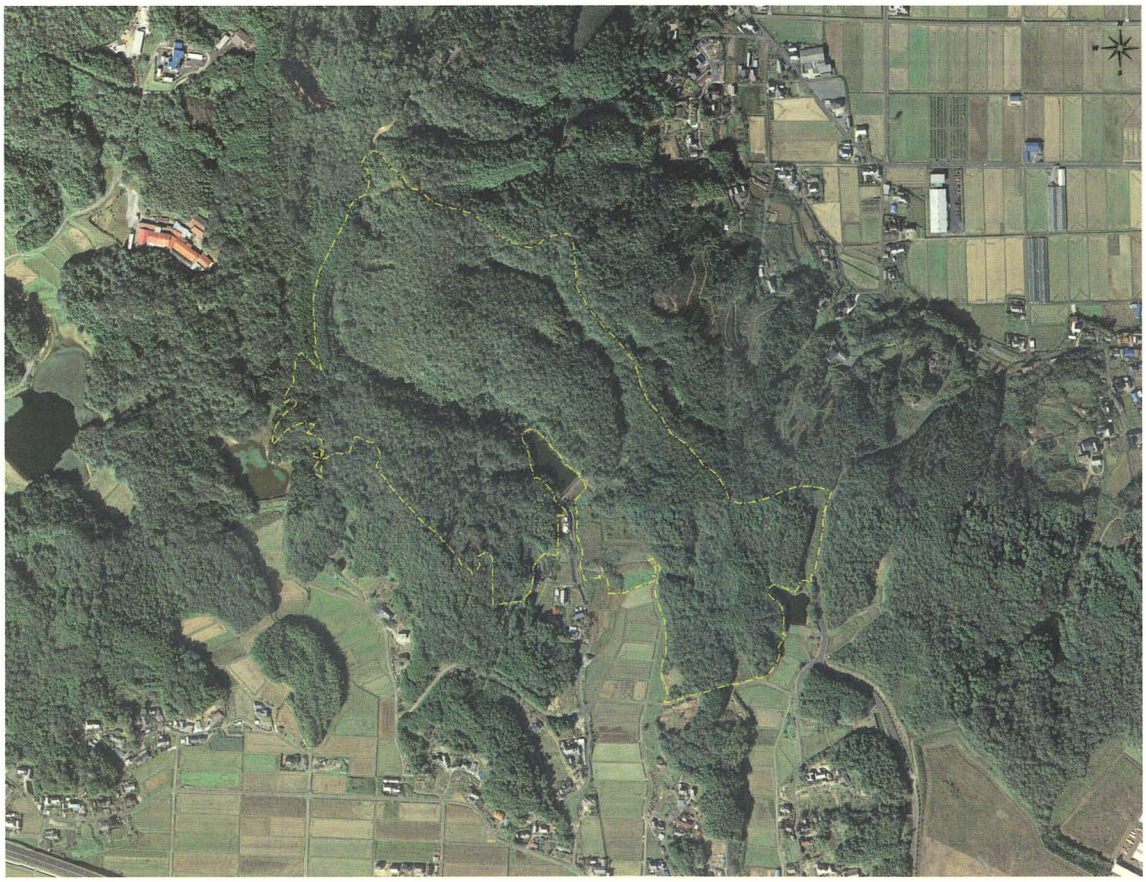
番号	文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積（㎡）	原因	報告者	担当者	備考
1	津教生文第 2345 号 H23.9.26	集落跡・その他の墓	津山市領家 711 ほか	9600	ごみ処理場建設	津山市教育委員会 教育長　田村芳倫	仁木康治・豊島雪絵 平井泰明	

埋蔵文化財発見通知（法第 100 条第２項）

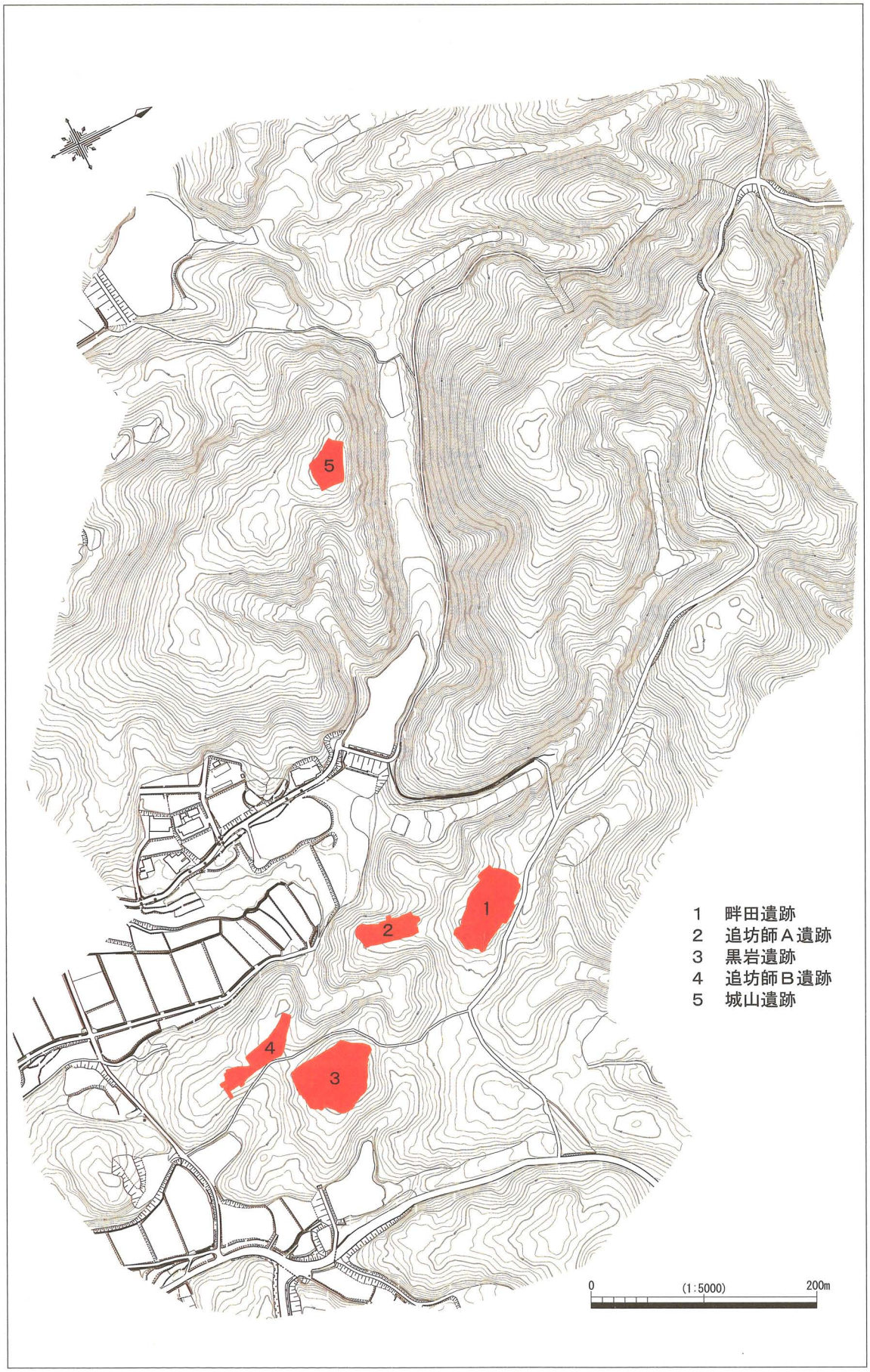
番号	文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	現保管場所	土地所有者
1	津教委文第 104 号 H22.4.19	弥生土器・土師器・須恵器 コンテナ１箱	津山市領家 1411-1 ほか	H22.3.8～ H22.3.31	津山市教育委員会 教育長　田村芳倫	津山弥生の里文化財センター	津山圏域資源循環施設組合 管理者　宮地昭範
2	津教生文第 2106 号 H23.9.26	弥生土器・土師質土器 １袋	津山市領家 1431-1 ほか	H23.9.20	津山市教育委員会 教育長　田村芳倫	津山弥生の里文化財センター	津山圏域資源循環施設組合 管理者　宮地昭範
3	津教生文第 47 号 H24.4.5	弥生土器・須恵器・土師器・古銭ほか コンテナ　10 箱	津山市領家 1411-1 ほか	H24.3.31	津山市教育委員会 教育長　田村芳倫	津山弥生の里文化財センター	津山圏域資源循環施設組合 管理者　宮地昭範
4	津教生文第 2854 号 H24.11.19	弥生土器・須恵器・古人骨ほか コンテナ　10 箱	津山市領家 711 ほか	H24.11.15	津山市教育委員会 教育長　田村芳倫	津山弥生の里文化財センター	津山圏域資源循環施設組合 管理者　宮地昭範



第２図　新クリーンセンター施設配置図



挿図写真１　新クリーンセンター建設予定地



第３図　新クリーンセンター建設予定地内遺跡分布図

第２節　調査の経過と体制

１．調査の経過

平成22年度から平成23年度にかけて実施した、クリーンセンター建設予定地内の試掘及び確認調査の結果を受けて、平成23年度から平成24年度にかけて、調査員３名体制で発掘調査を行った。

平成23年度は、９月から翌年３月にかけて、畔田遺跡・追坊師Ａ遺跡・黒岩遺跡・追坊師Ｂ遺跡の各遺跡の調査に着手し、畔田遺跡では弥生時代の貯蔵穴や、古墳時代の住居跡、古代の掘立柱建物等を検出したが、住居及び掘立柱建物は単独での検出であり、集落域は確認されなかった。追坊師Ａ遺跡では弥生時代と奈良時代の溝を検出したが、検出できた遺構はごくわずかであり、遺跡の詳しい性格は不明であった。追坊師Ｂ遺跡は奈良時代の土壙や中世から近世にかけての数条の溝を検出したが追坊師Ａ遺跡と同様に検出できた遺構はごくわずかであり、遺跡の詳しい性格は不明であった。黒岩遺跡については、表土の除去と遺構の検出に努めた。平成23年度の調査は、測量委託などの手続で一部調査を重複しながら行い、畔田遺跡と追坊師Ａ遺跡の調査を終了した。

平成24年度はまず、４月から追坊師Ｂ遺跡の作図作業を行い調査を終了した。黒岩遺跡は、遺構検出作業の結果、弥生時代から古墳時代にかけての70以上の埋葬施設を確認し、この時期の大規模な集団墓地であることが分かった。なお、黒岩遺跡の成果を一般に広く周知するため、７月７日には現地説明会を実施した。その後作図作業を行い、８月に黒岩遺跡の調査を終了した。９月からは、城山遺跡の調査に着手し弥生時代の貯蔵穴４基等を検出した。このうち２基の貯蔵穴から人骨が出土した。

11月にはすべての調査を終え、現地事務所を撤収し、現地での作業を終了した。

２．報告書作成の経過

報告書作成のための整理作業は、平成23年度から平成26年度にかけて、調査が終了した遺跡から、津山弥生の里文化財センターで行った。

なお、担当者相互の意思疎通を図るため、随時整理作業及び報告書作成のための会議を開催した。（平井）

３．調査日誌抄

畔田遺跡

平成23年 9 月26日	調査機材搬入
平成23年 9 月27日	遺構検出作業開始
平成23年12月20日	空撮実施
平成23年12月21日	測量着手
平成24年 2 月21日	地形測量実施
平成24年 3 月13日	現地調査終了

追坊師Ａ遺跡

平成23年10月18日	重機による表土除去
平成23年10月25日	遺構検出作業開始
平成23年12月20日	空撮実施
平成24年 1 月10日	測量着手
平成24年 2 月21日	地形測量実施
平成24年 3 月13日	現地調査終了

黒岩遺跡

平成23年11月 9 日	調査区の草苅実施
平成23年12月16日	調査前の地形測量実施
平成24年 1 月20日	遺構検出作業開始
平成24年 6 月26日	空撮実施
平成24年 6 月28日	津山市文化財保護委員視察
平成24年 6 月29日	測量着手
平成24年 7 月 7 日	現地説明会実施
平成24年 8 月 3 日	現地調査終了

追坊師Ｂ遺跡

平成23年11月30日	重機による表土除去
平成23年12月 6 日	遺構検出作業開始
平成24年 1 月31日	空撮実施
平成24年 3 月14日	地形測量実施
平成24年 4 月16日	測量着手
平成24年 4 月16日	現地調査終了

城山遺跡

平成24年 5 月16日	重機による表土除去
平成24年 9 月24日	遺構検出作業開始
平成24年10月18日	岡山理科大学富岡教授現地指導
平成24年10月23日	空撮実施
平成24年10月29日	測量着手
平成24年11月 1 日	岡山理科大学富岡教授現地指導
平成24年11月 7 日	地形測量実施
平成24年11月15日	現地調査終了

４．調査及び整理の体制

平成 21 年度（2009 年度）

津山市教育委員会

教育長	藤田長久
教育次長	大下順正

文化財課		**津山弥生の里文化財センター**	
課長	行田裕美	所長	行田裕美
文化財保護係長	小郷利幸	次長	小郷利幸
主査	平岡正宏	主査	平岡正宏
主任	仁木康治	主任	仁木康治
主任	豊島雪絵	主任	豊島雪絵
主事	岡﨑靖史	主事	岡﨑靖史

平成 22 年度（2010 年度）

津山市教育委員会

教育長	田村芳倫
教育次長	今井元子

文化財課		**津山弥生の里文化財センター**	
課長	行田裕美	所長	行田裕美
文化財保護係長	小郷利幸	次長	小郷利幸
主査	平岡正宏	主査	平岡正宏
主査	仁木康治	主査	仁木康治
主任	豊島雪絵	主任	豊島雪絵
主事	岡﨑靖史	主事	岡﨑靖史

平成 23 年度（2011 年度）

津山市教育委員会

教育長	田村芳倫
生涯学習部長	行田裕美

文化課		**津山弥生の里文化財センター**	
課長	赤松直人	所長	赤松直人
主幹（兼）文化財保護係長	小郷利幸	次長	小郷利幸
主査	仁木康治	主査	仁木康治
主任	森本千春	主任	森本千春
主任	豊島雪絵	主任	豊島雪絵
主任	平井泰明	主任	平井泰明
主事	岡﨑靖史	主事	岡﨑靖史

平成 24 年度（2012 年度）

津山市教育委員会

教育長	田村芳倫
生涯学習部長	行田裕美

文化課

課長	竹内清起
主幹（兼）文化財保護係長	小郷利幸
主査	仁木康治
主任	森本千春
主任	豊島雪絵
主任	平井泰明
主事	仲井寛明

津山弥生の里文化財センター

所長	竹内清起
次長	小郷利幸
主査	仁木康治
主任	森本千春
主任	豊島雪絵
主任	平井泰明
主事	仲井寛明

平成 25 年度（2013 年度）

津山市教育委員会

教育長	田村芳倫
生涯学習部長	行田裕美

文化課

課長	谷口善洋
主幹（兼）文化財保護係長	小郷利幸
主査	仁木康治
主任	豊島雪絵
主任	平井泰明
主事	仲井寛明

津山弥生の里文化財センター

所長	小郷利幸
次長	仁木康治
主任	豊島雪絵
主任	平井泰明
主事	仲井寛明

平成 26 年度（2014 年度）

津山市教育委員会

教育長	田村芳倫
生涯学習部長	松尾全人

文化課

課長	谷口善洋
主幹	小郷利幸
文化財保護係長	仁木康治
主任	豊島雪絵
主任	平井泰明
主事	宮﨑絢子

津山弥生の里文化財センター

所長	小郷利幸
次長	仁木康治
主任	豊島雪絵
主任	平井泰明
主事	宮﨑絢子

調査・整理作業

岡千晶　岡﨑ゆかり　岸本由紀子　権田俊朗　田渕千香子　野上恭子　春名博美
實石和子　宗本節子（敬称略　アイウエオ順）

発掘作業

発掘作業は、公益社団法人津山市シルバー人材センターにお願いした。作業従事者は下記の方々である。（敬称略　アイウエオ順）

（畔田遺跡）

石本寛治　稲垣精一　井上信次郎　江田勝　岡田良治　木下益穂　庄司雅雄　田丸史
林原一郎　光岡平八郎　宮崎健二　森藤和三郎　薮木正喜　山本栄造　山本満

（追坊師Ａ遺跡）

石本寛治　稲垣精一　井上信次郎　江田勝　岡田良治　木下益穂　庄司雅雄　田丸史
林原一郎　光岡平八郎　宮崎健二　森藤和三郎　薮木正喜　山本栄造　山本満

（黒岩遺跡）

石田久志　石本寛治　稲垣精一　井上信次郎　内田英文　江田勝　岡田良治　片岡計介
木下益穂　庄司雅雄　高山尚嗣　竹花修　田渕治平　田丸史　土井鯉喜丸　林原一郎
原口亘　藤島進　光岡平八郎　宮口一也　宮崎健二　森藤和三郎　薮木正喜　山本栄造
山本満　山本洋一

（追坊師Ｂ遺跡）

石本寛治　稲垣精一　井上信次郎　江田勝　岡田良治　木下益穂　庄司雅雄　田丸史
林原一郎　光岡平八郎　宮崎健二　森藤和三郎　薮木正喜　山本栄造　山本満

（城山遺跡）

石田久志　片岡計介　高山尚嗣　田渕治平　土井鯉喜丸　原口亘　宮口一也　山本洋一

発掘調査から報告書作成にあたり、津山圏域資源循環施設組合、岡山県産業労働部企業立地推進課、津山市クリーンセンター建設事務所、津山市都市建設部及び下記の方々にお世話なった。記して厚くお礼申し上げる。（敬称略　アイウエオ順）

石田爲成　宇垣匡雅　小椋繁述　可児通宏　狩野久　木村督　日下隆春　河本清
島崎東　杉山知子　頭士倫典　富岡直人　永禮宣子　三好基之
株式会社アークコンサルタント　有本観光バス株式会社　株式会社オーエスエー
久米建設株式会社　大和リース株式会社　株式会社中電工　フジテクノ有限会社

第２章　遺跡及びその周辺の地形と歴史的環境

津山市領家地区は市の西部に位置し、行政区画としては北を苫田郡鏡野町、南を津山市久米川南、東を津山市宮尾、西を津山市中北下にそれぞれ接する。地形は、北半分は津山市・鏡野町境をなす丘陵性山地から南に派生した樹状の尾根と深く狭小な谷で構成され、南半分は吉井川支流である久米川中流域の沖積平野を構成して久米川に至る。また、谷地形を利用して幾つかの溜池が造られて水田を潤している。

この地区に関係する水系は久米川以外にはなく、地区の東端は津山市・鏡野町境から南下する丘陵性山地によって区切られ、西は北半部が山地、南半部は水田で中北下地区に続いている。

領家地区から北行して峠を越すと鏡野町郷地区に通じ、地勢的に隣接する鏡野町からも鉄道などがよく利用されていたという。また、地形的な条件から、集落は山地の裾部に多くが分布するが、近年では平野部に拡大する傾向にある。

以下、この地域の歴史的環境を遺跡の分布を中心に時代別に概観したい。

縄文時代以前～縄文時代

縄文時代とそれ以前の生活痕跡は、この地域内では確認されていない。地区東端の領家遺跡から出土した打製石斧が旧石器時代に属するとされている（註１）。東接する宮尾遺跡では縄文晩期、久米川対岸の法事坊遺跡では、縄文後・晩期の土器片が出土していることから、人が何らかの形で活動していたことは想像に難くない（註２）。

弥生時代

弥生時代に入ると、遺跡数としてはそれなりの増加をみるが、何れも小規模で密度そのものもあまり高くない。遺跡は、概ね丘陵の頂部から南向きの緩斜面に分布する。遺跡の規模としては辰尾池東南遺跡が大きいとみられるが、発掘調査が行われていないことから詳細は詳らかではない（註３）。また、領家遺跡では弥生時代後期の竪穴住居から炭化材や炭化米が出土し、当時のコメの住居内での保管状況をみることができる。

ほか、畔田遺跡、追坊師Ａ遺跡、城山遺跡では柱穴、土壙などが確認され、土器片が出土しているが、何れも密度や広がりに欠ける。辰尾池西遺跡や新池東遺跡でも土器片の出土が記録され、西方にも芭蕉遺跡、鴻の池遺跡があるが、詳細はわからない。なお、二つ塚１号墳の下層遺構として、弥生時代の土壙が発掘調査時に検出されている（註４）。

久米川対岸の法事坊遺跡では、井戸や弥生時代後期の住居址が確認されている。また、古峪（ざこ）遺跡、円光寺裏山遺跡でも弥生土器片が出土しているが詳細は不明である。

古墳時代

古墳時代になると、この地区においても数的には多くはないものの古墳が築造されている。概ね直径 10m未満の円墳または方墳で、丘陵頂部に多く築造され、数基で古墳群を構

成している。これらの詳細については、発掘調査が行われた少数の例外を除いて多くがよくわかっていない。

地区東端の丘陵性山地上に占地する車戸１・２号墳は、何れも径８ｍ、高さ1.5ｍの円墳である。二つ塚１号墳は、径９ｍの円墳もしくは方墳で、出土遺物から６世紀前半から中頃の築造とみられている（註５）。同２号墳は径10ｍ、高さ1.5ｍの円墳、同３号墳は径８ｍ、高さ0.5ｍの低平な円墳である。登峪１・２号墳及び７～９号墳は、何れも横穴式石室を有する後期古墳であることが判明しているが、領家地区において現時点で確認されている後期古墳はこれらに限られる。また、登峪３号墳は発掘調査が行われていないが、墳長35ｍの前方後円墳で埴輪を伴うことが判明している。

鏡野町境に近い最奥部にある、黒岩１～６号墳は、径８～10ｍ、高さ１ｍ未満の低平な円墳または方墳とされる。また、平野部を臨む丘陵頂部に位置する、大庭様１・２号墳は共に径８ｍの円墳とされる。城山１号墳は径13ｍ、高さ約１ｍの円墳である。２号墳の規模はわからない。大字が中北下となるが、同様に平野部を臨む芭蕉古墳群は、墳長約27ｍで帆立貝式の墳形を持つ前方後円墳の４号墳を中心とするグループと、尾根を違える６・７号墳に分かれる。４号墳以外は、概ね径10ｍクラスの円墳で、７号墳のみ径約６ｍとやや小規模である。西方の多田１～４号墳も規模的に類似する古墳で、さらに西方の鴻の池１・３・４号墳は径６ｍクラスの小規模円墳である。なお、第１図には記載されていないが、池の西岸には内部主体に横穴式石室を持ち、陶棺を内蔵する鴻の池２号墳（墳長35ｍ）が築造されている。久米川流域で最後の前方後円墳とされる。

古墳時代の集落遺跡はほとんど確認されていない。領家遺跡で６世紀後半から７世紀の竪穴住居址が多数検出されている。ほか、畔田遺跡では竪穴住居址、黒岩遺跡では土壙が確認され、久米川対岸の山田遺跡でも竪穴住居址が確認されているが、築造された古墳に比較すると、遺跡としては小規模でかつ遺構密度も低い。遺跡のあり方については弥生時代とあまり変わりはみられないようである。

古代～中世

古代から中世にかけてはさらに遺跡数が減少する。領家遺跡では、奈良時代から平安時代にかけての礎石建物が検出され、石帯・緑釉陶器・円面硯などの遺物が出土している。東に隣接する久米廃寺や、久米郡衙に比定される宮尾遺跡との関係が注目され、これらを成立させた有力者の集落とみられる。ほか、時期的に相当する遺跡は法事坊遺跡があげられる。主たる存続時期は弥生時代から室町時代と幅広いが、井戸・溝状遺構などが検出され、墨書土器や施釉陶器・青磁片などの遺物が出土している。これ以外にも散発的に遺物が出土しているが（註６）、遺跡のみからこの地域の古代を推し量ることは極めて難しい。

近世～現代

「領家」という名は、古い荘園の地に因んだといわれる（註７）。中世末頃には地名として使用され、近世に入ってのち村名としてつかわれた。江戸期は、慶長８年（1603）に森忠政が津山に入封したことから森氏の支配を受け、元禄10年（1697）森氏の廃絶に伴い幕

82 鴻の池１号墳　84 鴻の池３号墳　85 鴻の池４号墳　86 鴻の池遺跡　90 多田４号墓　91 ～ 94 多田１～４号墳　95 多田５号墳　96 ～ 100 芭蕉１～５号墳　101・102 芭蕉６・７号墳　103 芭蕉遺跡　104 新池東遺跡　105 辰尾池西遺跡　106 辰尾池東南遺跡　107・108 城山１・２号墳　109 **追坊師Ｂ遺跡（旧 野面羅遺跡）**　110 ～ 115 黒岩１～６号墳　116 大庭様１号墳　117 大庭様２号墳　118・119 登峪１・２号墳　120 ～ 126 登峪３～９号墳　127 藤和田遺跡　128 ～ 130 二つ塚１～３号墳　131・132 車戸１・２号墳　135 領家遺跡　266 雫山２号墳　267 古峪遺跡　268 山田遺跡　271 法事坊遺跡　272 祇園千人塚古墳　275 円光寺裏山遺跡　1183 **畔田遺跡**　1184 **追坊師Ａ遺跡**　1185 **黒岩遺跡**　1191 **城山遺跡**　1192 城山古墓

（註：太字は本書所収遺跡、遺跡番号前の「久米」は町村合併前の旧自治体名）

第１図　周辺遺跡分布図（S＝１/10,000）

府領となり、次いで甲府藩領、再び幕領、小田原藩領、再び津山藩領とめまぐるしく領主が変わりつつ明治を迎えた。

明治以降は、津山県から北条県を経て明治９年（1876）に岡山県となり、明治22年（1889）の久米村の成立に伴い大字のひとつとなった。大正12年（1923）には、国鉄作備線（現ＪＲ姫新線）の津山口～美作追分間が開通し、地域の西南端に美作千代駅が置かれたことから地域交通の拠点ともなった。

昭和に入ってからは、昭和30年（1955）の旧久米町への合併以後も、俗に「領家田圃」と呼ばれた穀倉地帯として、一貫して町の基幹産業である農業を支えてきた。かつての出雲往来にかわる国道181号線が地区の南を走り、また、昭和50年（1975）には地区内を東西に縦断する中国縦貫自動車道（現中国自動車道）が完成した。

そして、平成６年（1994）には、地区の東端から宮尾地区にかけての丘陵に県営久米工業団地（現久米産業団地）が造成され、津山西部地域における産業振興拠点の役割が期待された。

平成17年（2005）の津山市への合併後は、５自治体で構成される津山圏域資源循環施設組合の総合型ごみ処理施設の建設が決定し、従来からの農村地帯のみならず、隣接する宮尾及び中北下地区とともに津山圏域におけるこの地区の果たす役割が増大しつつある。（仁木）

（註１）　栗野克己『領家遺跡』「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告８」岡山県教育委員会　1975
以下、この遺跡に関係する記述については本報告に従っている。

（註２）　村上幸雄・橋本惣司『稼山遺跡群Ⅰ』久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1979
以下、この遺跡に関係する記述については本報告に従っている。

（註３）『改訂版　岡山県遺跡地図』岡山県教育委員会　2003
以下、註のない遺跡の記述については本書に従っている。

（註４）　小郷利幸・豊島雪絵『大蔵池南２号鉄穴流し遺構　二つ塚１号墳』「津山市埋蔵文化財発掘調査報告79集」津山市教育委員会　2009

（註５）　註４に同じ

（註６）　本書第３章出土遺物参照。

（註７）『久米郡誌』久米郡教育会編　久米郡誌刊行会　1923

参考文献

『久米町史』久米町史編纂委員会　1984

『角川日本地名大辞典　33　岡山県』角川書店　1989

第３章　本事業以前に行った調査

津山圏域クリーンセンター建設事業予定地の一部においては、以前に計画された民間開発に伴い、旧久米町教育委員会によって発掘調査が実施されている。今回の調査事業と関連する箇所もあるため、本章ではその概要を報告する。

平成３年８月以降、現在のクリーンセンター建設予定地にほぼ相当する範囲を対象とする民間開発が具体化した。この計画に対して、久米町（当時）は町誘致企業として対応し、久米町教育委員会（当時：以下同じ）は、開発予定地内に所在する埋蔵文化財の保存について事業者及び岡山県教育委員会と協議を開始した。協議の対象となった埋蔵文化財包蔵地は、黒岩古墳群（１・５・６号墳）と辰尾池東南遺跡である。具体化以降、久米町教育委員会は数回の現地踏査を実施して周知の遺跡及び周知外の遺跡の把握にも努めた。

保存協議の結果、原則としてその時点で既知の埋蔵文化財は緑地等によって現状保存されることが図られた。ただし、辰尾池東南遺跡については遺跡地図上での遺跡範囲は保全されていたが、地形的な条件から遺跡範囲が拡大される可能性があると判断され、さらに現地踏査によって新たに古墳の存在が想定される地点が確認された。これらの取扱いについては、事業者が経費を負担して久米町教育委員会が確認調査及び試掘調査を実施し、遺跡の有無及び範囲を把握したのちに保存協議を行うことで平成６年９月中旬までに事業者と合意することができた。

以上のことを踏まえ、岡山県教育委員会、事業者及び久米町教育委員会の三者で文化財保護に関する覚書を平成７年４月 23 日付で締結し、工事等の時期が具体化した平成８年 11 月 11 日付で試掘・確認調査に関する埋蔵文化財包蔵地調査委託契約を締結した。

調査は平成８年 12 月 24 日に辰尾池東南遺跡の範囲確認調査から着手し、平成９年３月 11 日にトレンチの埋戻しを行い終了した。また、試掘調査については辰尾池東南遺跡の調査と並行して行う形で立木等伐採後の平成９年３月５日に着手し、３月 21 日に終了した。

いずれも調査主体は久米町教育委員会で、以下に概要を調査個所別に記述する。

辰尾池東南遺跡確認調査（第１図、図版１～３）

辰尾池東南遺跡は、東向きの丘陵頂部から斜面にかけて位置する。確認調査にあたっては、現在の遺跡範囲から谷に向かってテラス状に張り出した箇所を調査対象範囲とした。旧状は水田または荒蕪地（旧水田）で、調査予定地の多くにススキなどの草木が繁茂していた。

このため事前に下刈作業等を実施し、任意の位置にトレンチを７か所設定（第１図参照）してバックホウを併用して掘り下げ、その後作業員による精査を行った。調査面積はトレンチ総計で 130 ㎡である。

調査結果は、トレンチの多くは谷地形を示す堆積状況で湧水が著しく遺構は確認されなかった。また、遺物は散発的に出土したものの全て流れ込みとみられた。

以上のことから、確認調査範囲には辰尾池東南遺跡の遺跡範囲は及ばないと判断された。

辰尾池地区

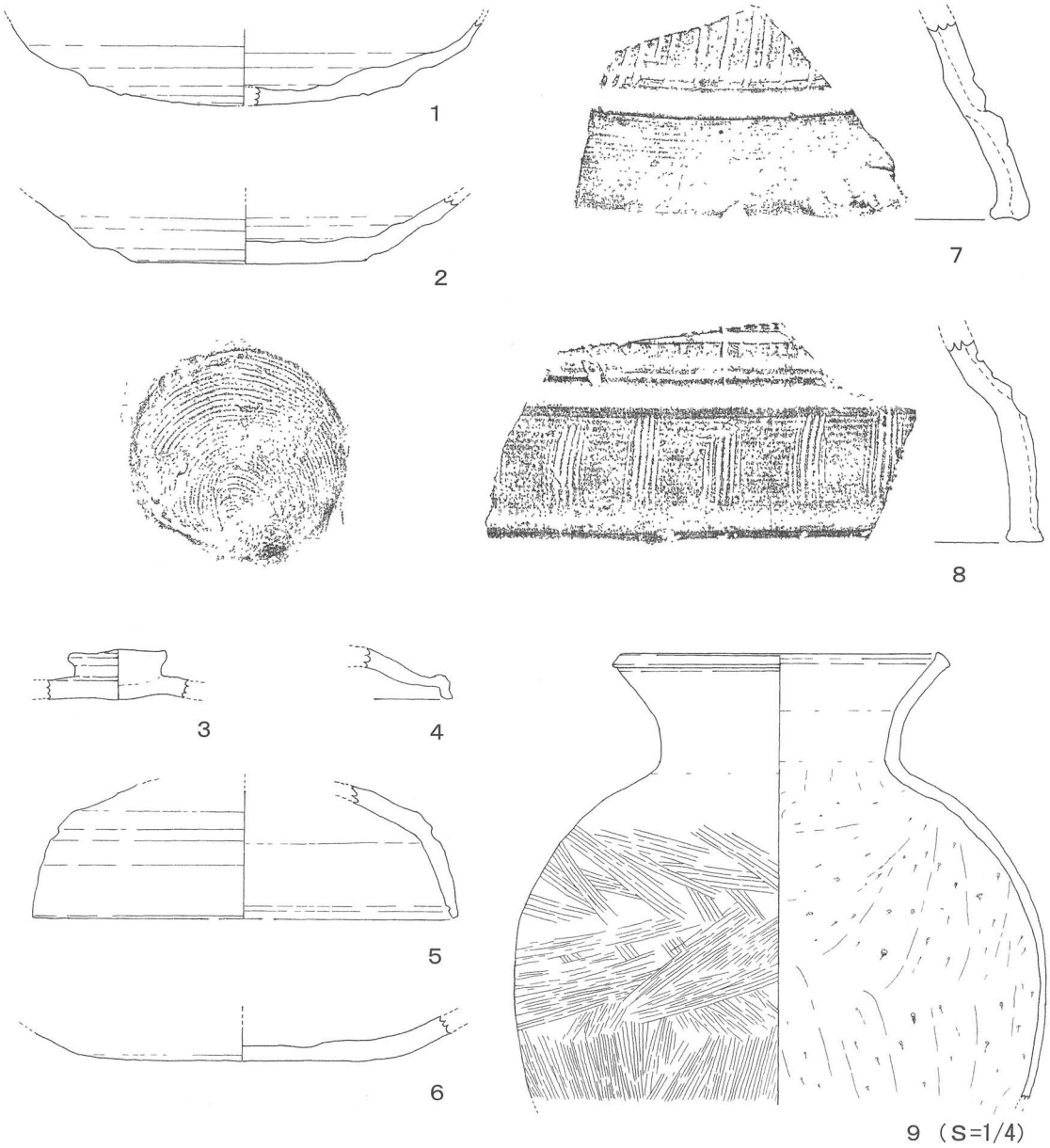
試掘調査区

第１図 トレンチ位置図（S=1/2,000）

出土遺物（第２図、図版６）

辰尾池東南遺跡確認調査では、弥生時代から古代にわたる遺物が整理用コンテナに約２箱分出土した。弥生土器・土師器・須恵器が多くを占め、T－２を除く全てのトレンチから出土したが、前述のとおり全て遺構に伴わない遺物である。出土量的にはT－７が多く、T－６がそれに次ぐ。以下に、図化が可能な遺物を紹介するが、ほとんどが古墳時代に属する遺物である。弥生土器・土師器は多くが細片で、復元できなかった。

１・２・６は須恵器底部片で、１・６は底部ヘラ切り、２は糸切りで、底径6.4cmを測る。また、１には×形のヘラ傷が残る。３は須恵器のつまみ部分、４は蓋の端部である。



第２図　辰尾池東南遺跡確認調査出土遺物（S=1/2・1/4）

２・３・６は古代に属すると考える。５は須恵器杯蓋で復元径12cmを測る。７・８は何れも須恵器の脚部片で、８には外面が６条のハケ目で単位文様に等間隔に加飾される。９は土師器壷で口径17.6cm、胴部最大径30cmに復元される。４はT－４、１～３・７・８はT－６、５・６・９はT－７から出土した。

試掘調査（古墳推定地）（第１図、図版３－３～６）

黒岩池西側の丘陵頂部において、分布調査によって人工的な地形の改変が認められたため、埋蔵文化財の分布が推定される箇所と判断し試掘調査を実施した。

調査の実施にあたっては、地形を考慮して古墳の所在を想定し、丘陵頂部に設定した４本のトレンチを互いに直交させて設定し、人力で掘り下げ、精査を行って遺構の有無を確認した（第１図参照）。調査面積はトレンチ総計で51.6㎡である。

調査結果は、T－１、T－２では地山面からやや浮いた状態ではあったが、多量の弥生土器の散布が認められた。また、T－３ではピット及び石列が確認され、付近では弥生土器が出土した。また、T－４においては、段状遺構の一部とみられた平坦面と、土壙１基が確認された。土壙埋土からは壷・高坏などの弥生土器片がまとまった状態で比較的多量に出土し、遺物の出土状況等から遺構は弥生時代に属するものと判断された。

試掘調査地点では、当初古墳の所在を推定したが、調査によって丘陵上に弥生時代の遺跡が分布することが明らかになり、保存協議の対象となることが判明した。

出土遺物

古墳想定地の試掘調査においては、整理用コンテナに約４箱の遺物が出土した。遺物は弥生土器がほとんどである。これらについては、本書第７章の黒岩遺跡の調査報告に一括して整理・掲載しているので、該当個所を参照されたい。

以上が、今回のクリーンセンター建設の前に行われた本地区の埋蔵文化財調査の概要である。久米町教育委員会は、調査終了後に試掘調査によって確認された新規発見遺跡に対する遺跡範囲の確定作業を含む保存協議を事業者と行う予定としていたが、その後開発事業自体が休止状態となった。このため、岡山県遺跡地図の改定の際、新規発見遺跡については周辺の地形を考慮して遺跡範囲の設定を行い、野面羅遺跡（遺跡番号：久米町№109）として周知し、以後の開発協議に備えることとした。（仁木）

第４章　試掘・確認調査

第１節　平成21年度（Ａ～Ｅ地区）

はじめに

平成21年度の試掘調査は、調査対象地のうち最も面積の狭いＢ地区から着手した。その後、樹木伐採の完了したＡ地区→Ｃ地区→Ｄ地区→Ｅ地区の順に調査を進めた。調査期間は平成22年３月８日～３月31日、調査面積は合計約800㎡である（第３図）。

Ａ地区（対象面積4,260㎡、調査面積230㎡）

津山市と鏡野町を画する山から南東に延びるなだらかな丘陵の一部で、丘陵頂部東寄りに市境の道路が走る。対象地区に合計27本のトレンチを設定し、重機により掘削した。その結果、丘陵頂部の南半部、及びそこから少し下がったところで遺構が検出された。遺構は丘陵頂部付近で竪穴住居跡、土壙、柱穴を検出し、南側では浅い溝、近世墓等を検出した。遺物は土師器片、須恵器片、寛永通宝などが出土した。対象地区内の北半部では遺構は検出されなかったため、地区の中央部から南側にかけて遺跡が存在すると考えられる。

Ｂ地区（対象面積195㎡、調査面積30㎡）

Ａ地区のある丘陵から南西に短く延びる尾根の先端である。「キ」字形にトレンチを設定し、人力により掘削したが、表土を除去するとすぐに地山が表れ、遺構・遺物は検出されなかった。

Ｃ地区（対象面積1,746㎡、調査面積90㎡）

Ｂ地区同様、Ａ地区のある丘陵から南東側に延びる丘陵である。地区内に合計16本のトレンチを設定し、重機により掘削した。その結果、尾根の東側では遺構はなく、尾根の西側のトレンチ１箇所で遺構を検出し、土師器片が出土した。遺構はさらに谷に向かって延びているため、対象地区の東側を中心に遺跡の存在が推測される。

Ｄ地区（対象面積3,613㎡、調査面積105㎡）

Ａ地区の丘陵から南側に延びる丘陵である。本地区はかつて弥生土器が出土していたことから、遺跡の存在が推測されていた。丘陵の裾部を中心に合計17本のトレンチを設定し、重機により掘削したところ、トレンチからは須恵器等が出土したため、裾部付近にまで遺跡が広がっていることが確認された。

Ｅ地区（対象面積5,254㎡、調査面積345㎡）

Ｄ地区の位置する丘陵の南西に接する丘陵である。本地区は野面羅遺跡として周知されていたが、発掘調査範囲確認のため合計40本のトレンチを設定し、重機により掘削した。

その結果、丘陵の中央から南にかけてのトレンチで遺構を確認し、土師器片や須恵器片などが出土した。

まとめ

工事予定地の５箇所のうち、Ｂ地区を除く４箇所で遺構が確認された。Ａ・Ｃ・Ｅ地区については、遺構の検出状況や遺物の出土状況から、遺構の密度は低いと考えられる。Ａ地区については、出土遺物から古墳時代及び近世の遺跡の存在が想定される。また、Ｄ地区からは過去に弥生土器の出土があることや、今回の調査により須恵器が出土していることから、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡の存在が推測される。（豊島）

第２節　平成 23・24 年度（F・G地区）

はじめに

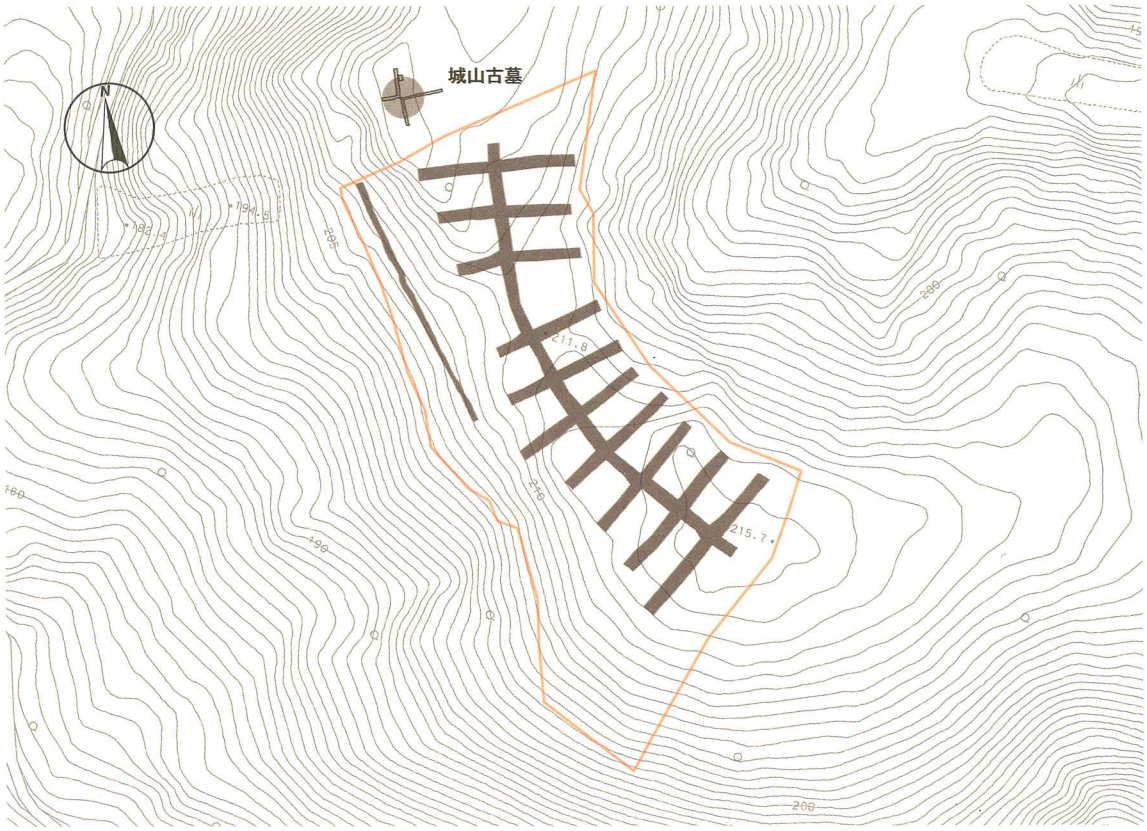
平成 23・24 年度においては、F 地区及びG地区の試掘・確認調査を実施した。F 地区及びG地区は、計画時には周知の遺跡は確認されていなかったが、事前の分布調査によって遺跡が所在する可能性があるとみなされた地点である。

調査期間は、平成 23 年度事業分として試掘調査を実施した。F 地区が平成 23 年６月８日から平成 23 年７月 29 日、G地区が平成 23 年７月２日から平成 23 年９月 20 日である。また、平成 24 年度事業分として実施したG地区の確認調査が平成 24 年５月 16 日から７月２日である。以下、調査地点ごとに概要を報告する。

F 地区（第１図、図版 10 ～ 11）（対象面積 4,300 ㎡、調査面積 918.2 ㎡）

津山市と鏡野町を画する山塊から南東方向に延びた尾根の頂部で、同じ山塊の最高位には目崎城がある。この城の主郭は鏡野町側にあるが、山塊の頂部が津山市との行政界であるため、津山市との境界に隣接する位置にまで関連するとみられる郭や堀切が所在する（註１）。

現地踏査の結果により、工事計画範囲の尾根上に堀切とみられる窪地状の地形や、山腹部分に並行した凹凸を示す地形がみられたことから城郭関連遺構の所在も考えられた。加えて、立木伐採後に行った踏査の際に新たに盛土とみられる高まりが確認された。この高



第１図　F 地区トレンチ詳細図（S=1/1,500）

まりは開発区域外であったが、開発区域に極めて近接し今後協議の対象となる可能性があるとみられたために併せて試掘調査の対象とした。ただし、面的な伐採は行っていない。

調査にあたっては、立木等の取り片付け後、尾根頂部の主軸上にトレンチを設定した。さらに、そのトレンチから等高線に直交する方向に11本のトレンチを配した。トレンチ幅は２ｍを基準としている。尾根上の窪地状の地形についてはサブトレンチにより精査した。また、山腹の凹凸部分については別に１本トレンチを設定し、盛土状の高まりについては４本のトレンチを直交するよう設定した。

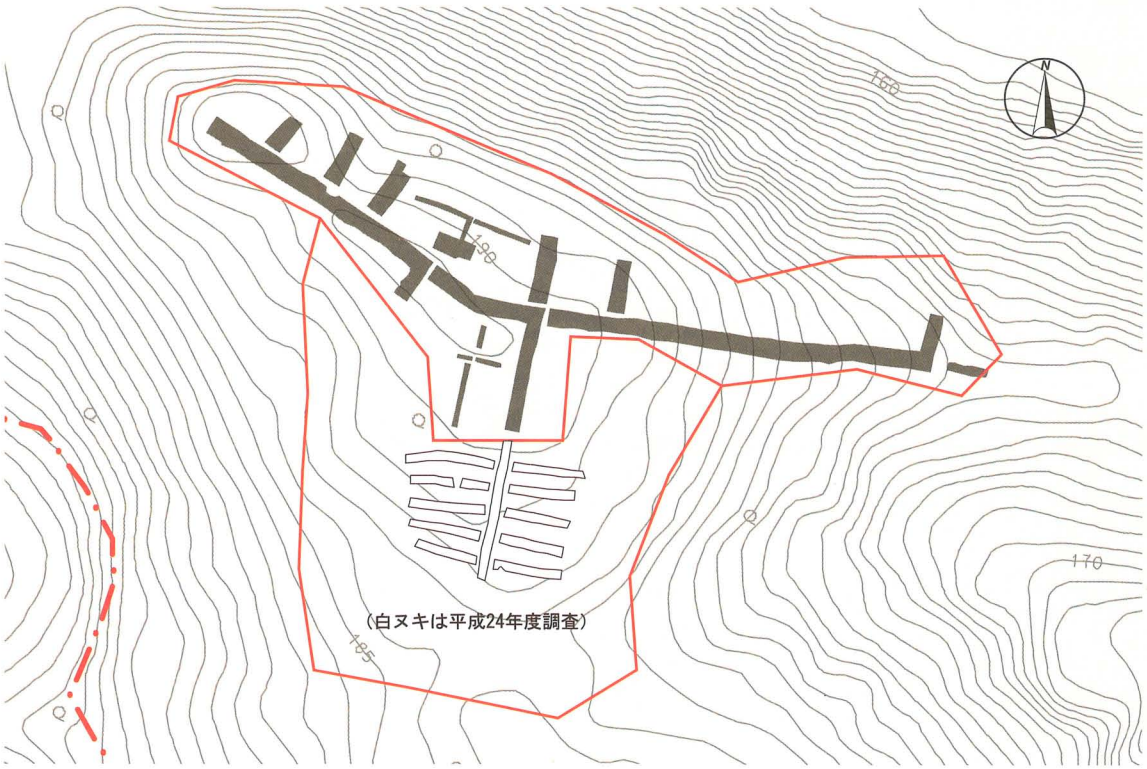
発掘作業は基本的にバックホウを使用して表土掘削を行い、作業員による精査を行ったが、盛土状の高まりについては全て人力で掘削作業を行っている。

調査の結果、尾根鞍部の窪地状の地形については人工的な改変ではなく、鞍部を道として利用したことに伴って形成された自然地形であることが判明した。また、山腹の凹凸状の地形については人工的な改変であることが判明したが、検出状況から遺構ではないと判断された。何れのトレンチからも遺物は出土しなかった。

Ｇ地区（平成23年度）（第２図、図版10～11）（対象面積2,140㎡、調査面積404㎡）

Ｇ地区は、Ｆ地区南側の独立丘陵上にあり、北を辰尾池奥の谷によって画される。地元では具体的な場所を指さないながらも、「城山」と称されていた。この地区では、分布調査によって墳墓状の高まりが２か所確認されていたことから、その性格の把握を主目的とした。併せて、地元での呼称等から城郭関連遺構についても考慮している。調査対象面積は、当初約4,800㎡を見込んでいたが、現地踏査の結果2,140㎡を試掘調査対象面積とした。

調査は、Ｆ地区と同時期に伐採が行われていたため既に伐採済みの状態であったことか



第２図　Ｇ地区トレンチ詳細図（S=1/1,000）

らＦ地区の調査と並行して適宜調査準備を行い、Ｆ地区発掘作業終了後に機材を移転して７月２日から着手した。２か所の墳墓状の高まりについては、３本ないし４本のトレンチを直交して設定し、人力による掘り下げと精査を実施した。その他の遺構については尾根の主軸上と、等高線に直交するように９本のトレンチを設定して重機で表土を排土し、のち人力で掘り下げて精査を行った。また、遺構が確認された部分については遺構の広がりを把握するため部分的に周辺を拡張した。

試掘調査の結果、墳墓状の高まりについては旧地形に伴う残丘であることが判明した。遺物の出土も皆無である。また、北側の墳墓想定位置付近の頂部からわずかに北向きに下った斜面において、弥生時代に属する貯蔵穴とみられる遺構を確認した。遺物は、弥生時代後期に属する土器片が出土した。

Ｇ地区（平成24年度）（第２図）（対象面積2,060㎡、調査面積135㎡）

平成23年度調査においてＧ地区において遺構の確認された位置は、丘陵頂部の平坦面の北端であり、南に向かって緩やかに下降する窪地状の平坦面が広がっていた。このため、遺跡範囲を確定することを目的として、平成24年度において南側に新たに11本のトレンチを設定して確認調査を行った。結果、遺構は確認されず遺物も認められなかったことから、南側には遺跡は分布しないことが明らかになった。

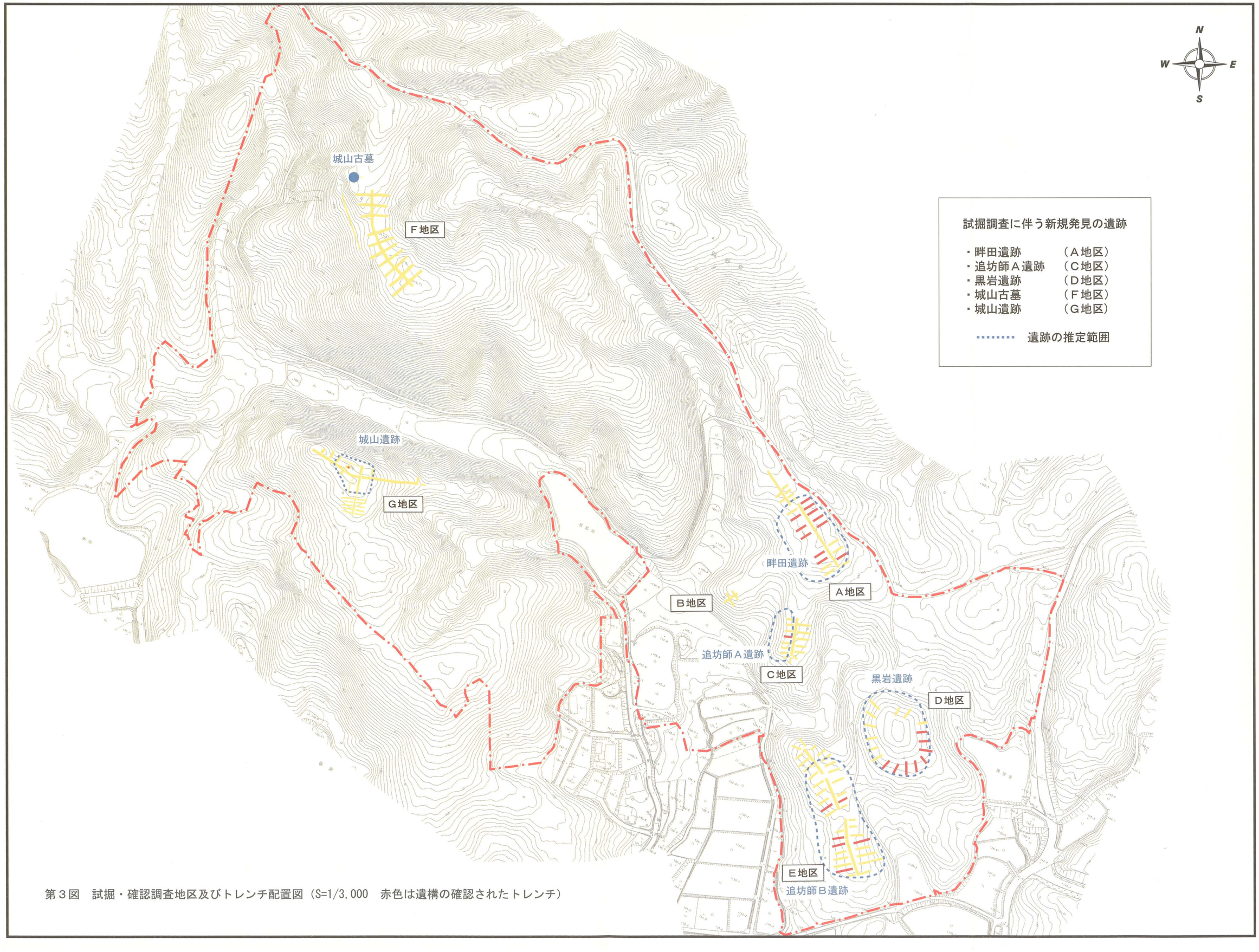
まとめ

平成23年度の試掘調査の結果、Ｆ地区においては、開発協議対象となる埋蔵文化財は当該位置には所在しないことが判明した。

また、伐採後に確認された高まり部分については、径５ｍ、高さ0.8ｍのほぼ円形のプランを示す盛土遺構であることが判明した。裾部に周溝等は確認されなかったが、一部に集石が認められ、その部分から若干の土師質土器片が出土した。このことから、遺跡名称を「城山古墓」として遺跡発見の手続きをとっている。現状と出土遺物からみて、墳墓的な性格を持つ遺構であると考えられる。

Ｇ地区については、当初想定された古墳は確認されなかったものの、弥生時代の遺構が存在することが明らかになった。確認された新規遺跡は、名称を「城山遺跡」として遺跡発見の手続きを行った。この遺跡については、造成計画範囲内に位置しており、設計変更ができないことから発掘調査が不可避であった。このため、平成24年度に追加して確認調査を実施し、遺跡範囲を画定したうえで全面調査を実施することとなったが、確認調査により遺跡の広がりが認められなかったため、平成23年度調査において遺構が確認された頂部一帯の約950㎡を発掘調査の対象とすることが確定した。（仁木）

（註１）分布調査時に確認された。行政界を画す林道の鏡野町側に隣接し、堀切及び郭面が残る。林道を挟んで尾根を津山市側（南）に進めば、Ｆ地区の試掘調査地点である。ただし、目崎城との関連については検討が必要である。



第３図　試掘・確認調査地区及びトレンチ配置図（S=1/3,000　赤色は遺構の確認されたトレンチ）

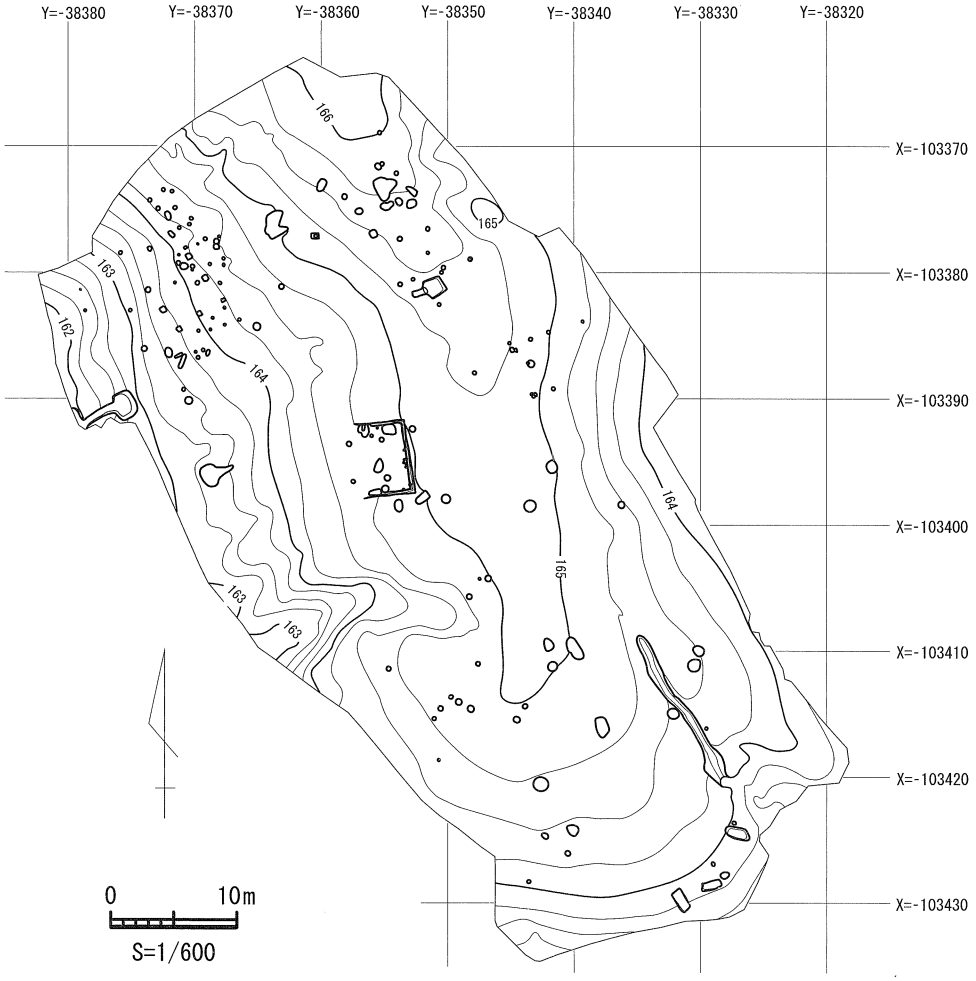
第５章　畔田遺跡

第１節　遺跡の概要

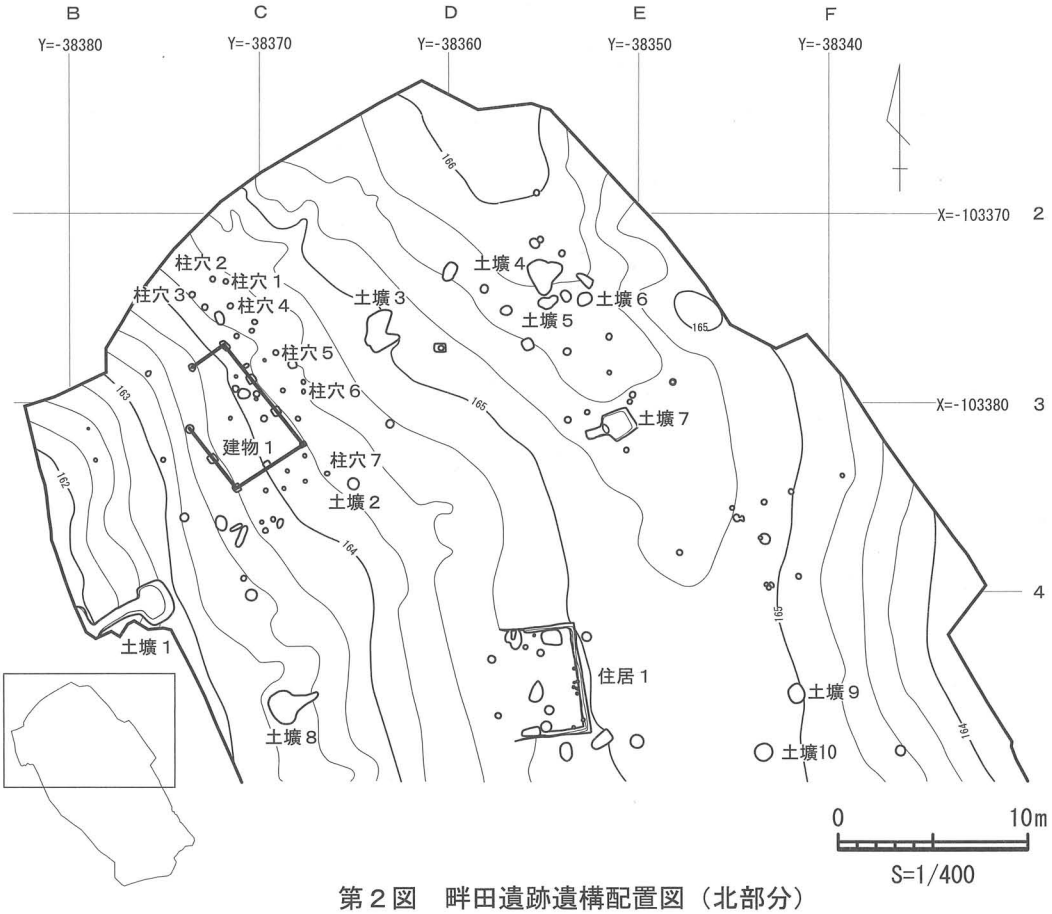
畔田遺跡は、津山市領家 1411-1 ほかに所在し、約 30ha の新クリーンセンター建設予定地北辺の南東方向にのびる丘陵上に位置している。遺跡の範囲の標高は約 162 ～ 166ｍである。

遺構は、調査区北西部において、掘立柱建物１基、貯蔵穴２基及び複数の土壙を検出し、特に土壙１とした貯蔵穴からは、多くの弥生時代後期の土器が出土した。調査区中央部では古墳時代の住居跡１基を検出し、調査区南部では明治期の墓１基、時期は不明であるが土壙墓３基を検出した。ただし、検出できた遺構の数は多くなく、しいて言えば調査区北西部に遺構が密に存在している。

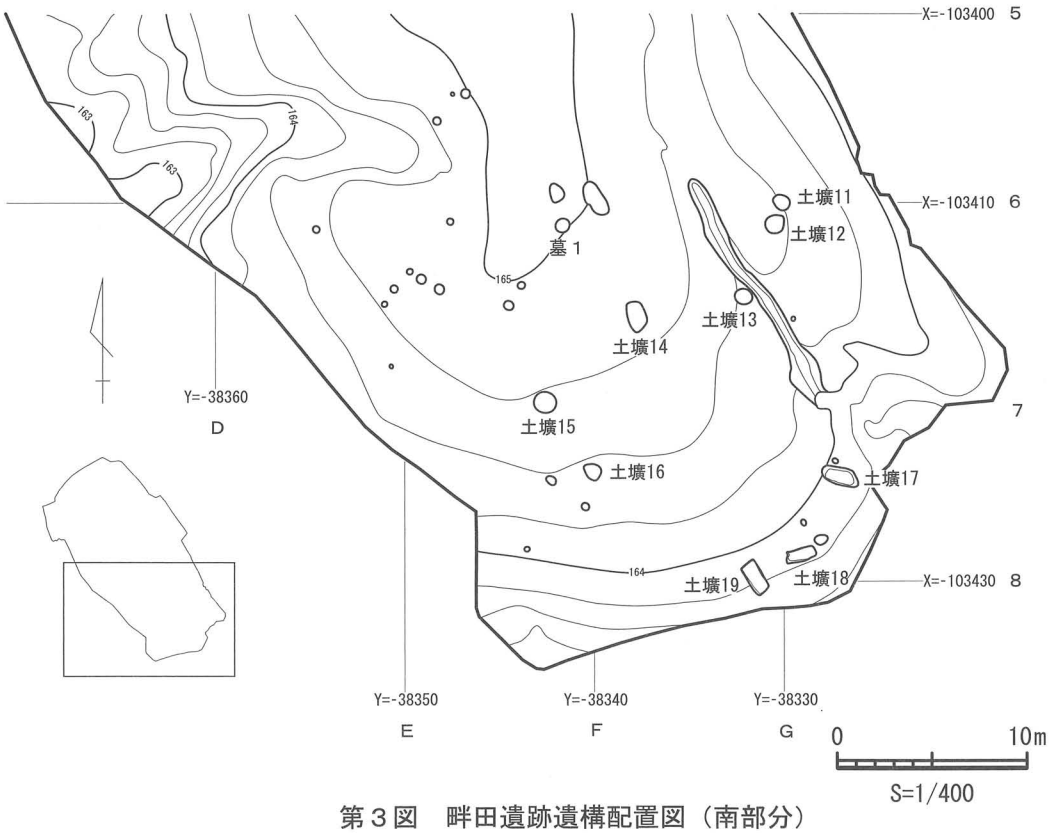
なお、本調査区内において、複数の柱穴を検出しているが、遺物の出土した柱穴のみ番号を付し、その他のものは第２図及び第３図の遺構配置図において位置のみを示した。また、これらの柱穴から出土した遺物のうち図示できるもののみを掲載している。(平井)



第１図　畔田遺跡全体図



第２図　畔田遺跡遺構配置図（北部分）

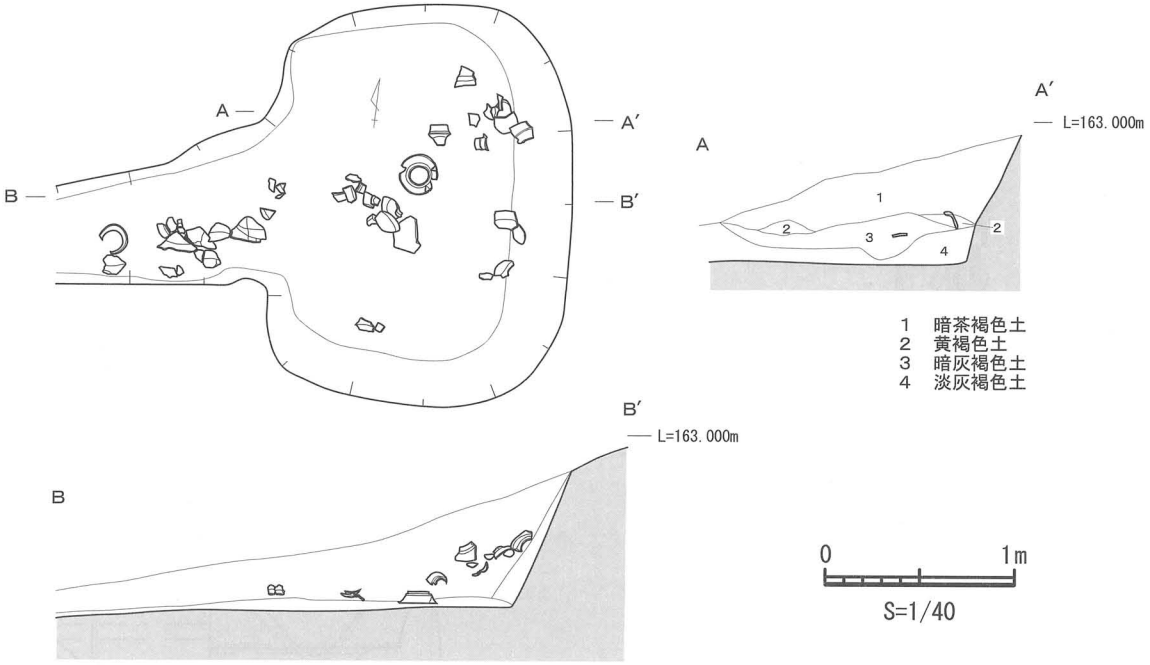


第３図　畔田遺跡遺構配置図（南部分）

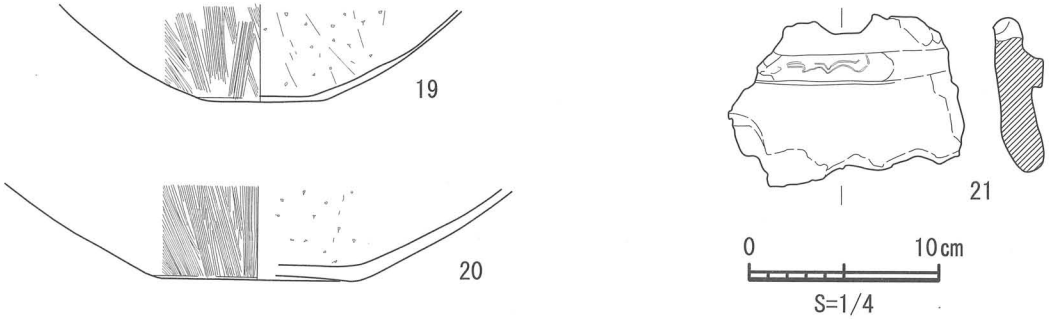
第２節　検出された遺構と遺物

土壙１（第４・５・６図）

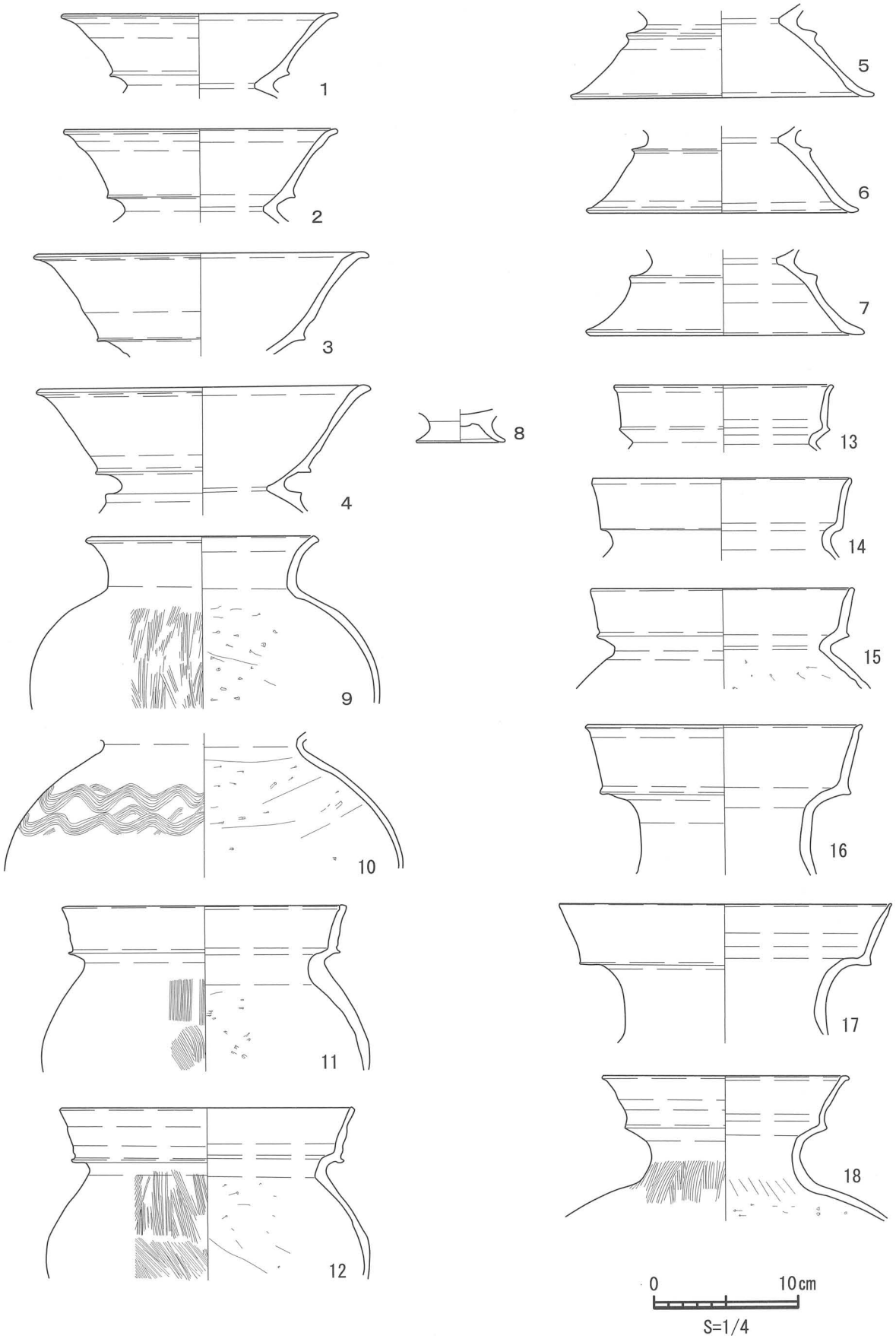
４Ｂ区に位置し、平面形は213 cm ×162 cmを測る隅丸方形を呈し、また、土壙西側中央付近から調査区西辺に向かって幅80 ～ 60 cmの溝状に遺構がのびている。検出面からの深さは、土壙が西に向かってかなり削平されているため、最深部で70 cm、最浅部で15 cmを測る。遺物は床面より10 ～ 20 cmほど上の第３層より上から多く出土している。鼓形器台１～７、このうち５は床面上から出土している。低脚坏８、甕９～15、10は肩部に波状文を施す。壺16 ～ 18、壺もしくは甕の底部19.20、器台21は上下２つの円孔があり、突帯には波状文を施す。土器の特徴から弥生時代後期後葉のものであろう。



第４図　土壙１



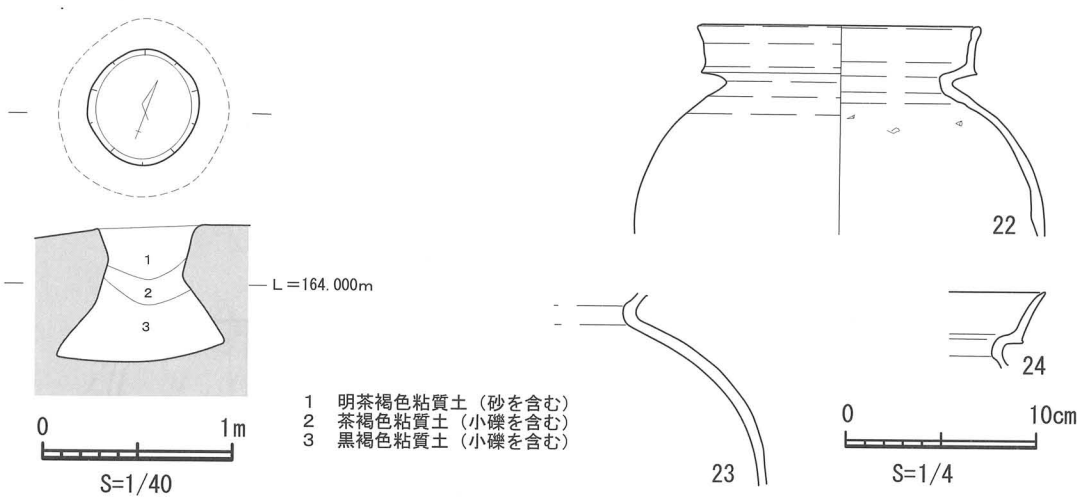
第５図　土壙１出土遺物



第６図　土壙１出土遺物

土壙２（第７図）

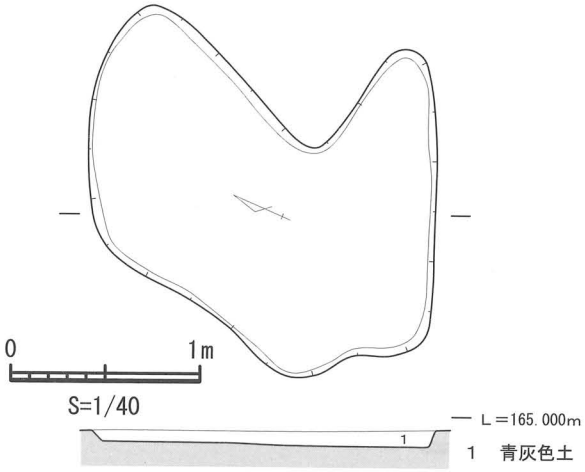
３Ｃ区に位置し、平面形は長軸 95 cm × 短軸 90 cmで、ほぼ正円形を呈している。検出面からの深さは、69 cmを測り、土壙断面は袋状を呈する。遺物は床面付近より 22～24 の甕が出土している。その他土器片が出土しているが、いずれも極小破片のため図示することができなかった。この土壙の時期は、弥生時代後期後葉と考えられる。



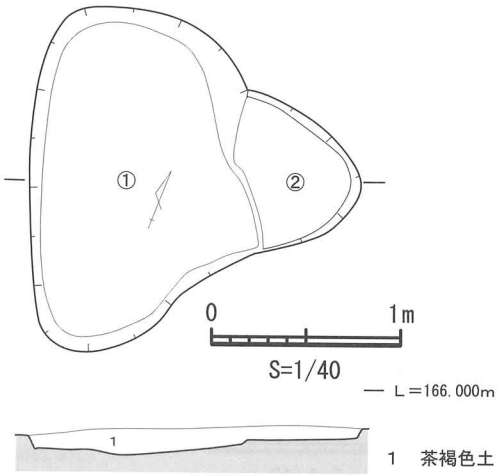
第７図　土壙２・出土遺物

土壙３（第８図）

２Ｃ区に位置し、平面が 205×108 cmと 163×60 cmの２つの土壙が重なり合っていると考えられる土壙である。土層観察等からは、遺構の前後関係は不明。遺物は、極小破片のため図示できないが、須恵器が数点出土している。



第８図　土壙３



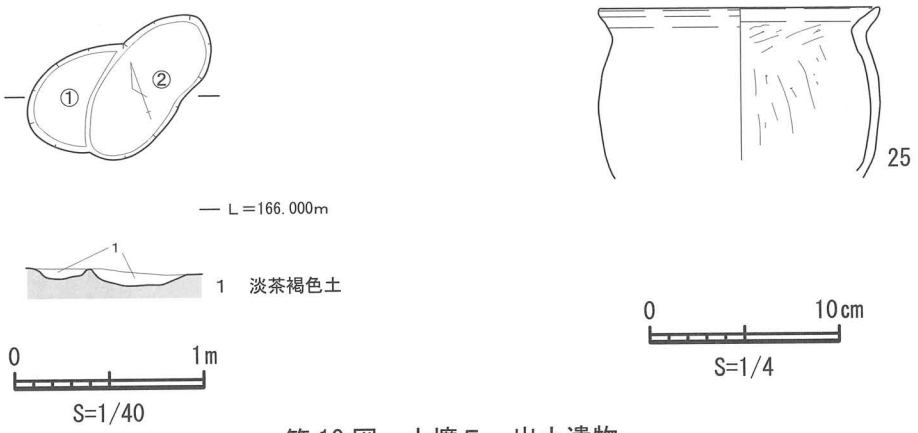
第９図　土壙４

土壙４（第９図）

２Ｄ区に位置する。西側から①(182×104 cm) と②(不明 ×88 cm) の２つの土壙が重なり合っていると考えられる土壙である。遺構の切りあい関係から①が新しく②が古いことが分かるが具体的な時期差については不明。極小破片のため図示できないが、埋土から須恵器片及び土師器片を出土している。

土壙５（第 10 図）

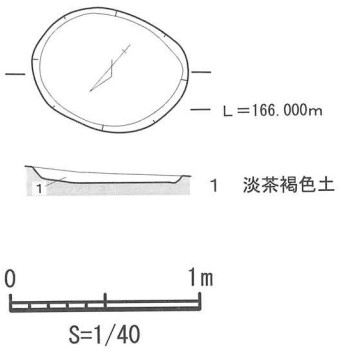
２Ｄ区に位置する。西側から①(60×80 cm) と②(45×90 cm) の２つの土壙が重なり合っていると考えられる土壙である。遺構の切りあい関係から①が古く②が新しいことが分かるが具体的な時期差については不明。出土遺物は埋土から 25 が出土している。弥生時代後期後葉から古墳時代前期初頭にかけて埋没した土壙であろう。



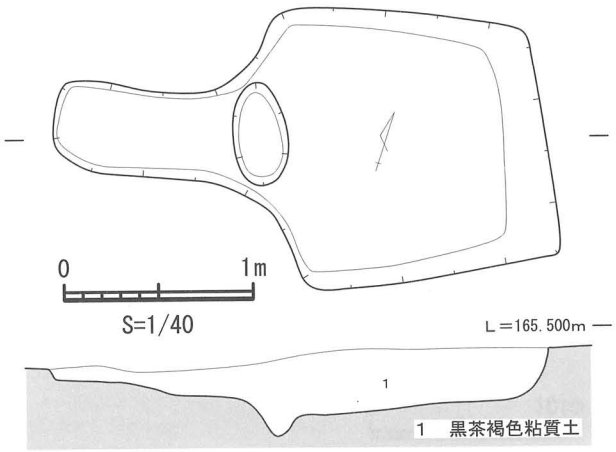
第 10 図　土壙５・出土遺物

土壙６（第 11 図）

２Ｄ区に位置する。平面形は 80×64 cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは、５cmを測る。遺物は、埋土から土器片１点が出土しているが、極小片のため図示できず、時代等明らかにすることはできないが、弥生時代のものであろう。



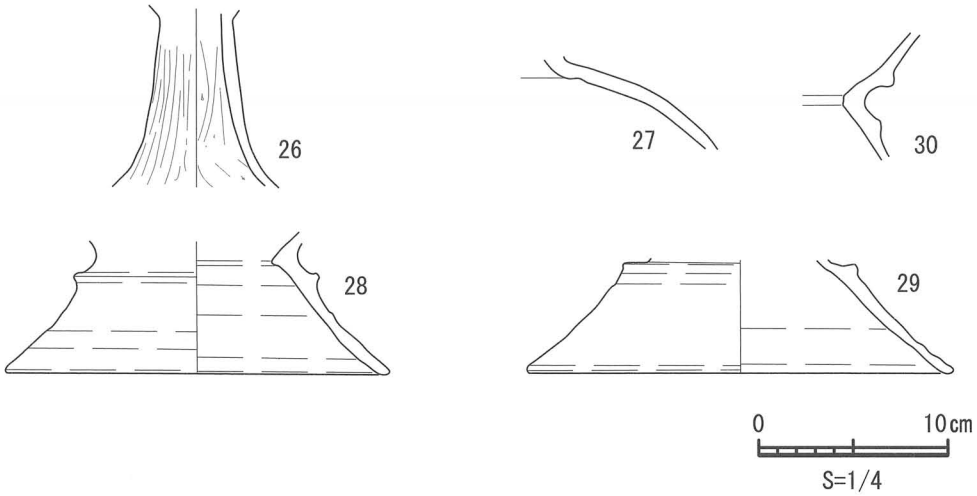
第 11 図　土壙６



第 12 図　土壙７

土壙７（第 12・13 図）

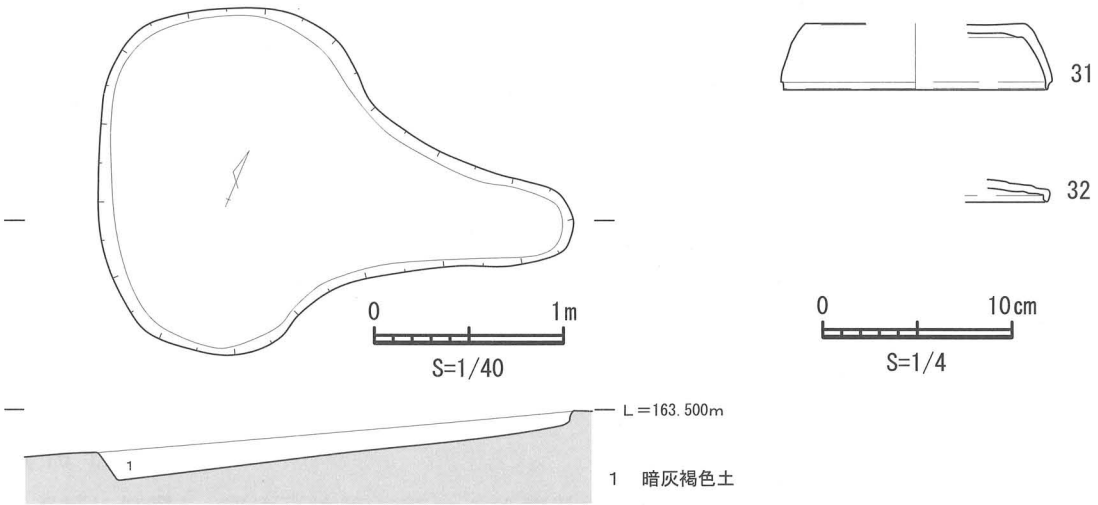
２Ｄ区に位置する。平面形は 263×145 ㎝の方形の有柄形をし、検出面からの深さは、32 ㎝を測る。ただし柄形の部分は、深さ６～ 15 ㎝程度である。遺物で図示できるものは、26 ～ 30 の５個体で、いずれも埋土から出土している。26 は高坏の脚部分、27 は壺もしくは甕の胴部である。28 ～ 30 は鼓形器台で内面上半へラミガキ、下半へラケズリ、外面はナデを施す。弥生時代後期後葉のものと考えられる。



第 13 図　土壙７出土遺物

土壙８（第 14 図）

４Ｃ区に位置し平面形は 252×181 ㎝の不定形の土壙である。検出面からの深さは、15 ㎝を測る。遺物は埋土から須恵器の蓋 31. 32 が出土している。出土遺物の特徴から、奈良時代初頭のものであろう。



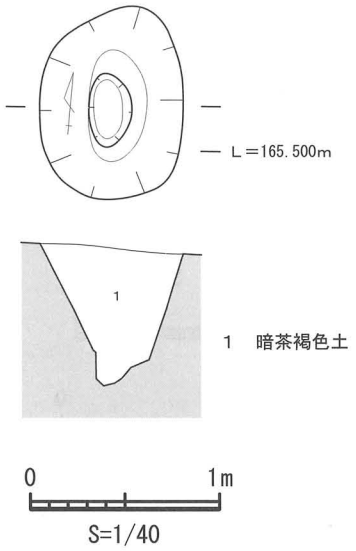
第 14 図　土壙８・出土遺物

土壙９（第 15 図）

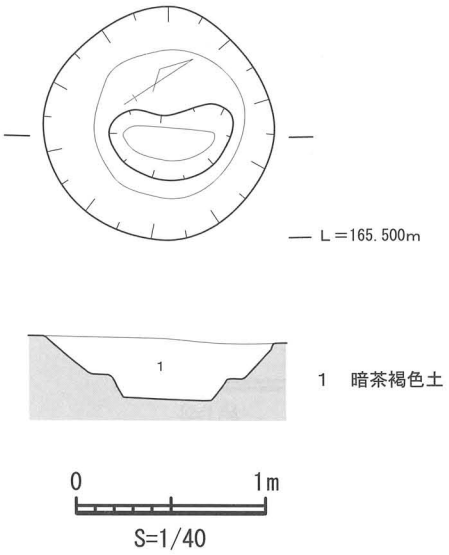
４Ｅ区に位置し、平面形は 103×76 ㎝の楕円形を呈する。検出面からの深さは 76 ㎝を測る。土壙の断面形は逆三角形を呈し、検出面より約 60 ㎝下のところに段を有する。76 ㎝の深さがあるにもかかわらず、土層観察では分層できず、一度に埋まったものと考えられる。出土遺物はなく、遺構の時期、性格等は明らかにできなかった。

土壙 10（第 16 図）

４Ｅ区に位置し、平面形は 92×91 ㎝の正円形を呈する。深さは、検出面から 25 ㎝を測る。検出面から 15 ㎝下の部分に段を有する。遺物の出土はなく、遺構の時期や性格は明らかにできなかった。



第 15 図　土壙９



第 16 図　土壙 10

土壙 11（第 17 図）

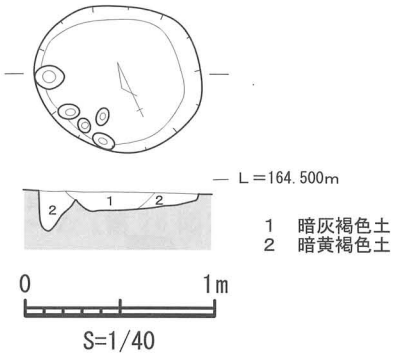
５Ｆ区に位置し、平面形は 89×80 ㎝の円形を呈する。検出面からの深さは 10 ㎝を測る。土壙内西側には、径 15 ㎝、深さ 20 ㎝のピットを有する。出土遺物はなく時期等は不明。

土壙 12（第 18 図）

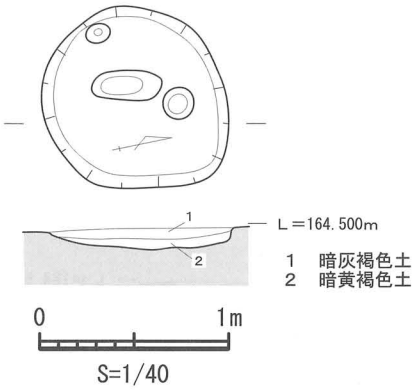
６Ｆ区に位置し、平面形は 106×95ｍの不整形な円形を呈する。検出面からの深さは 11 ㎝を測る。土層はいわゆるレンズ状の堆積をしており、出土遺物がなく時期は不明であるが、自然に埋没していったものと考えられる。

土壙 13（第 19 図）

６Ｆ区に位置し平面形は 92×81 ㎝の円形を呈する。検出面からの深さは 17 ㎝を測る。土壙床面北側に径約 30 ㎝、深さ８㎝の窪みがある。出土遺物はなく時期は不明。



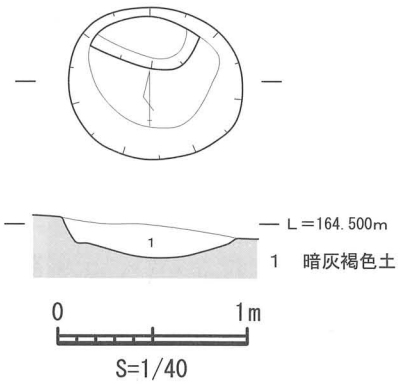
第 17 図　土壙 11



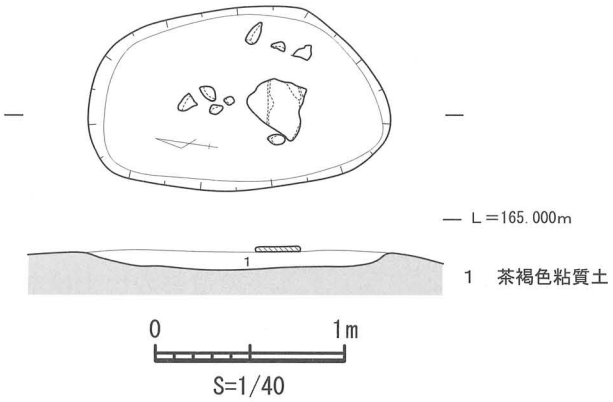
第 18 図　土壙 12

土壙 14（第 20 図）

６Ｆ区に位置し、160×99 ㎝の楕円形を呈する。検出面からの深さは、９㎝を測る。土壙中央部やや南側に約 30×30 ㎝、厚さ２㎝の石があり、また、周辺には 10 ㎝角の石数個を検出した。これらの石が、本来この面に据えられたものなのか、落ち込みによるものなのかは、検出状況等では判断できなかった。出土遺物はなく時期や遺構の性格については不明。



第 19 図　土壙 13



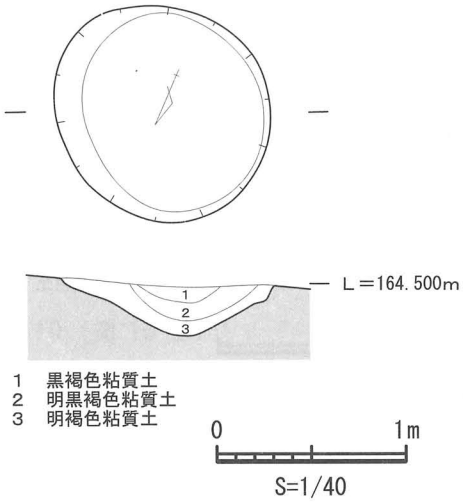
第 20 図　土壙 14

土壙 15（第 21 図）

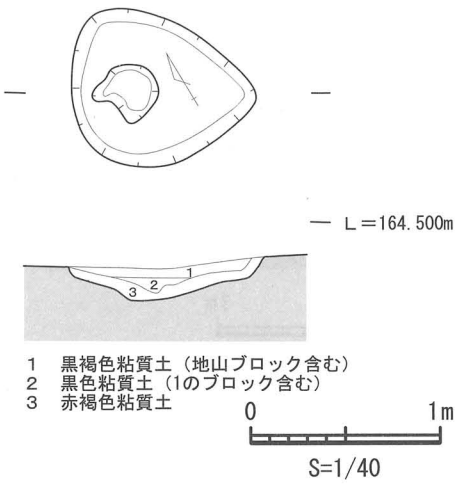
７Ｅ区に位置し、113×113 ㎝の円形を呈する。検出面からの深さは、26 ㎝を測り、土壙の形態はすり鉢状をしている。土器等出土遺物がなく、時期等は明確にできないが、検出時の状況から、比較的新しい時期のもの（明治時代以降）と考えられる。

土壙 16（第 22 図）

７Ｆ区に位置し、平面形は 98×87 ㎝の不整形な円形を呈する。検出面からの深さは 18 ㎝を測る。土壙の形態は、すり鉢状をしており、土器等遺物の出土はない。土壙 15 と形態がよく似ており、これと同じ性格の土壙と考えられる。



第 21 図　土壙 15



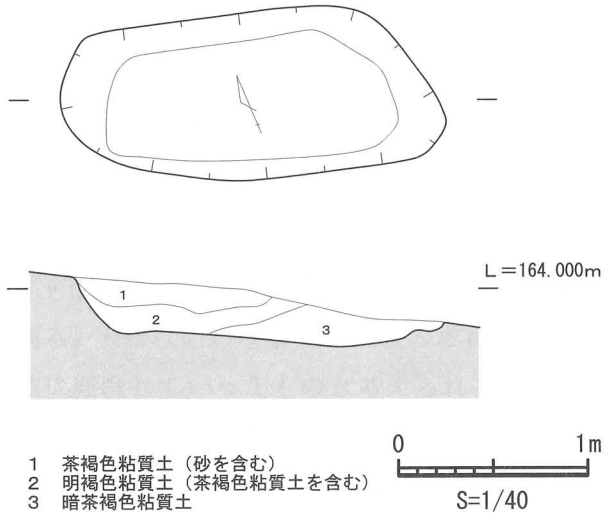
第 22 図　土壙 16

土壙 17（第 23 図）

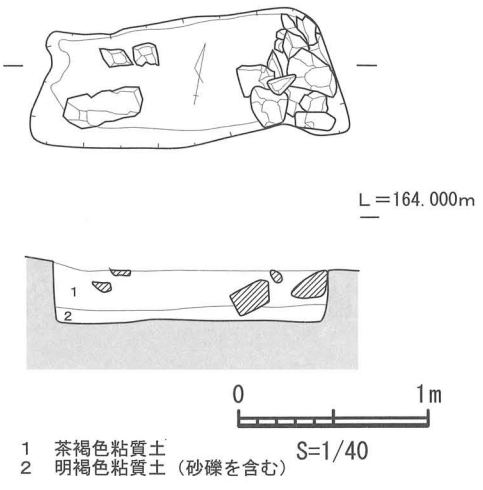
7 G 区位置し、平面形は 203×89 ㎝のやや不整形であるが、隅丸方形を呈し、検出面からの深さは、27 ㎝を測る。土壙墓の可能性が考えられるが、検出過程や土層観察からは、土壙の性格を知る手掛かりは得られず、土器等遺物の出土もないため、土壙墓の可能性があることを示すのみとする。

土壙 18（第 24 図）

7 G 区に位置し、平面形は 155×68 ㎝のやや不整形であるが隅丸方形を呈する。検出面からの深さは、33 ㎝を測る。土壙西側の隅と東側において石を検出しており、土壙隅に置かれたものについては、検出した状況から棺台として利用されたものと推測され、また、東側のものについては、墓標的な意味で土壙上に配されたものが棺の腐朽とともに土壙内に落ちたものであろう。土器等の遺物の出土はなく時期は明らかではないが、土壙墓と考えられる。



第 23 図　土壙 17



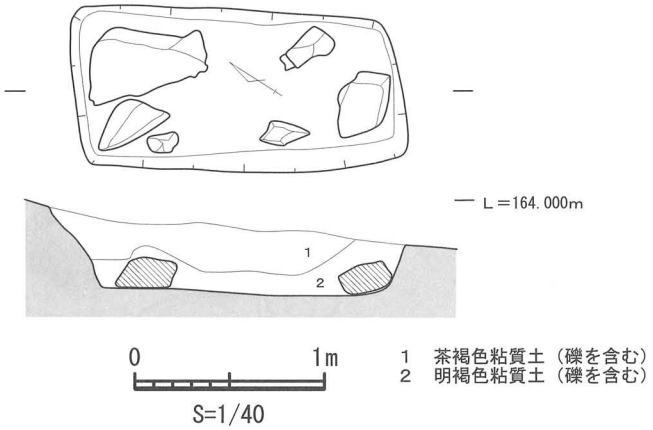
第 24 図　土壙 18

土壙19（第25図）

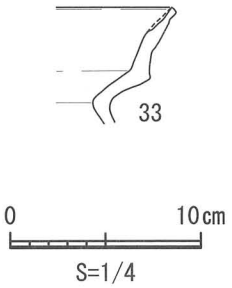
７Ｆ区に位置し、平面形は175×86㎝の方形を呈する。検出面からの深さは、33㎝を測る。床面からは、棺台に利用されたものと考えられる数個の石を検出しており、また、周辺の状況から土壙墓と考えられるが、出土遺物はなく、時期は不明。

柱穴１～７（第26図）

出土遺物から弥生時代のものと考えられる小穴が特に建物１付近に集中している。しかし、大きさや深さは一様ではなく、すべてが柱穴とは考えられないが、土器が出土したものを柱穴として取り上げた。柱穴６から出土した33のみが図示できたが、他は極小破片のみで図示できなかった。柱穴６は弥生時代後期後葉のもの、その他の柱穴については年代は不明。



第25図　土壙19

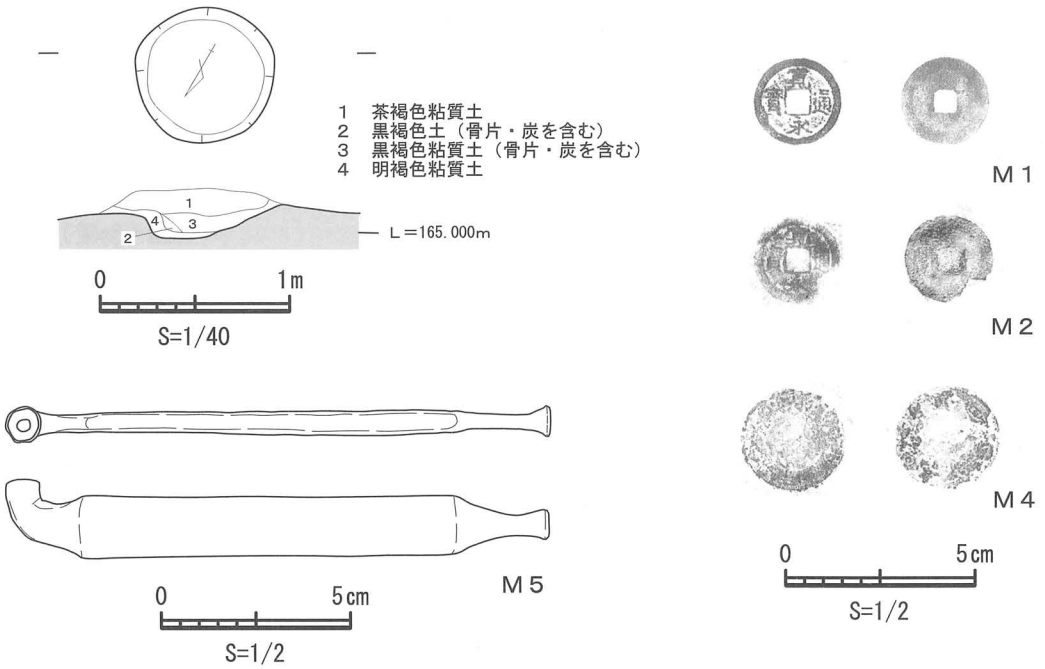


第26図　柱穴６出土遺物

挿図写真１　住居１作業風景（北から）

墓１（第 27 図）

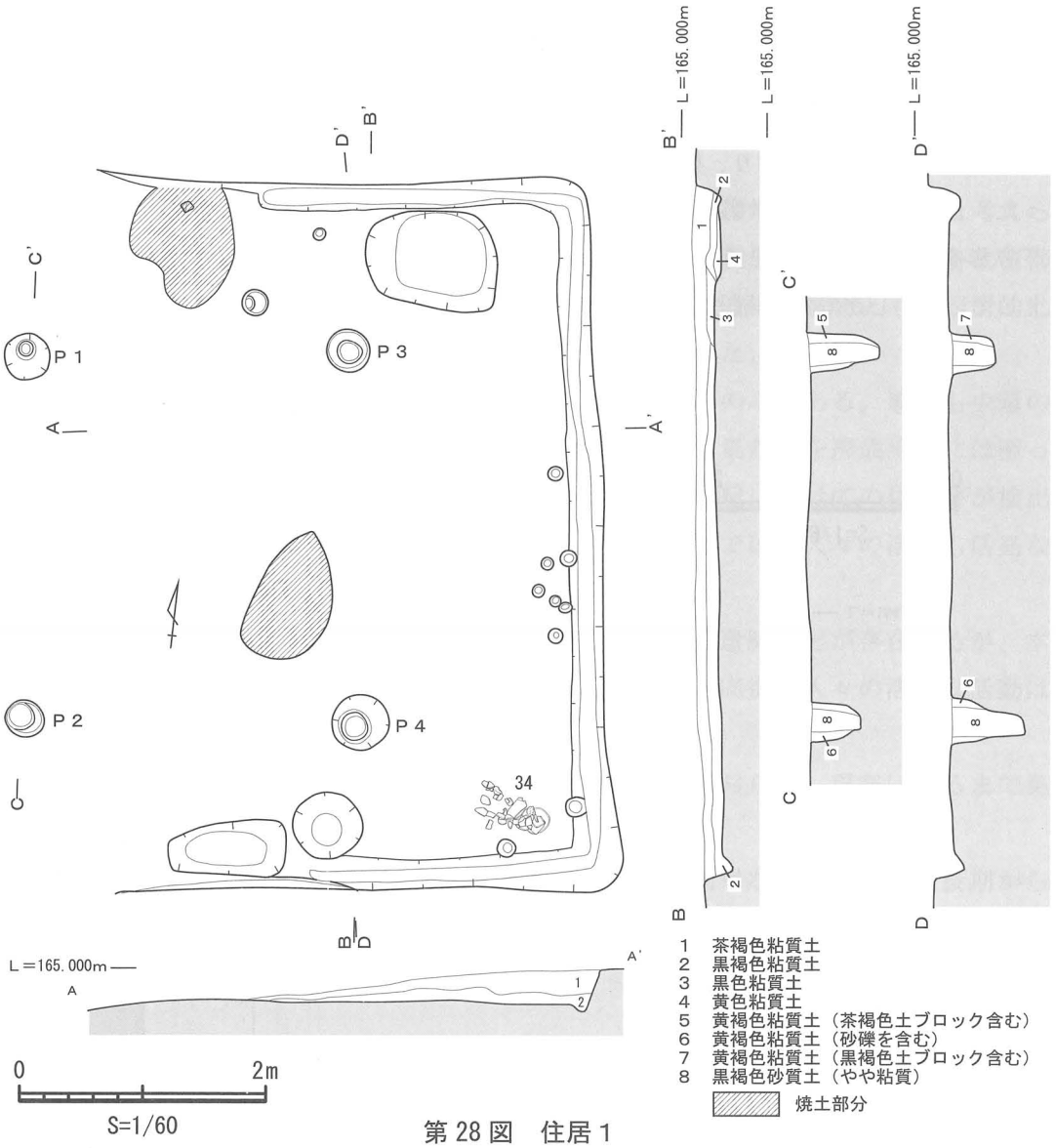
６Ｅ区に位置し、平面正円形の土壙である。規模は径 74×73 ㎝、深さは検出面より 24 ㎝を測る。出土遺物は埋土３より寛永通宝２枚Ｍ１、Ｍ２、銭文は不明の銭貨Ｍ３、銭貨表面が剥落し年号を読み取ることができないが、明治６（1873）年から明治 21（1888）年にかけて発行された１銭銅貨Ｍ４及び吸口、雁首およびその両者をつなぐラウが一体で作られている煙管Ｍ５が出土している。また、極小片の人骨が少量出土している。出土品から、明治６年以降に作られた墓である。



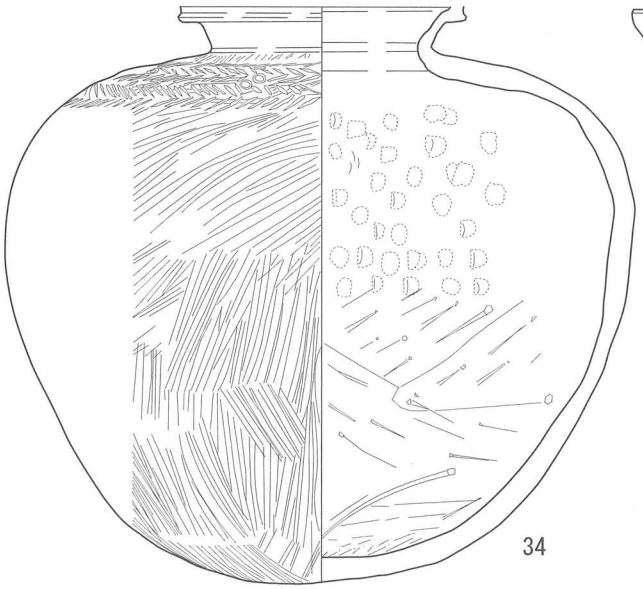
第 27 図　墓１・出土遺物

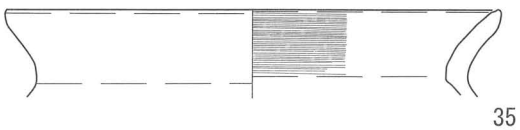
住居１（第 28・29 図）

４Ｄ区に位置する。住居の規模は、西側部分が流失しており、東西の規模は明らかにできないが、南北に 578 ㎝で平面形は方形を呈する。深さはもっとも残りの良い住居東側で約 30 ㎝を測る。住居中央部東寄りと北壁沿いに赤褐色の焼土面を検出した。柱穴は４本で構成され、柱間の距離は南北方向（Ｐ１－Ｐ２、Ｐ３－Ｐ４）が約 300 ㎝、東西方向（Ｐ１－Ｐ３、Ｐ２－Ｐ４）が約 270 ㎝を測る。柱穴の規模は 35 ～ 45 ㎝の平面が円形を呈しており、深さは検出面から約 40 ～ 60 ㎝を測る。また、住居の壁際には幅約 25 ㎝、深さ約 10 ㎝の壁体溝を検出している。この壁体溝は住居中央部から西にかけては地形の流失により検出できなかったが、本来は住居壁沿いに壁体溝がめぐっていたと考えられる。出土遺物は、極小破片が多く図示できたのは 34 と 35 である。34 は、住居南東隅に床面よりやや浮いた状態で検出をした。欠損しているものの有段口縁を持つ壺で、肩部に綾杉文を２段施している。また、この部分に円形のスタンプ文を施している。頸部は内外面ともにヨコナデを施し、胴部内面の上半部は指頭圧痕がみられ、下半部はヘラケズリを施している。外面はハケを施す。当地周辺にこのような土器は見られず、山陰地方に類似の土器が見られ、古墳時代中期前葉ころのものとされていることから、このころのものであろう。



第28図　住居1



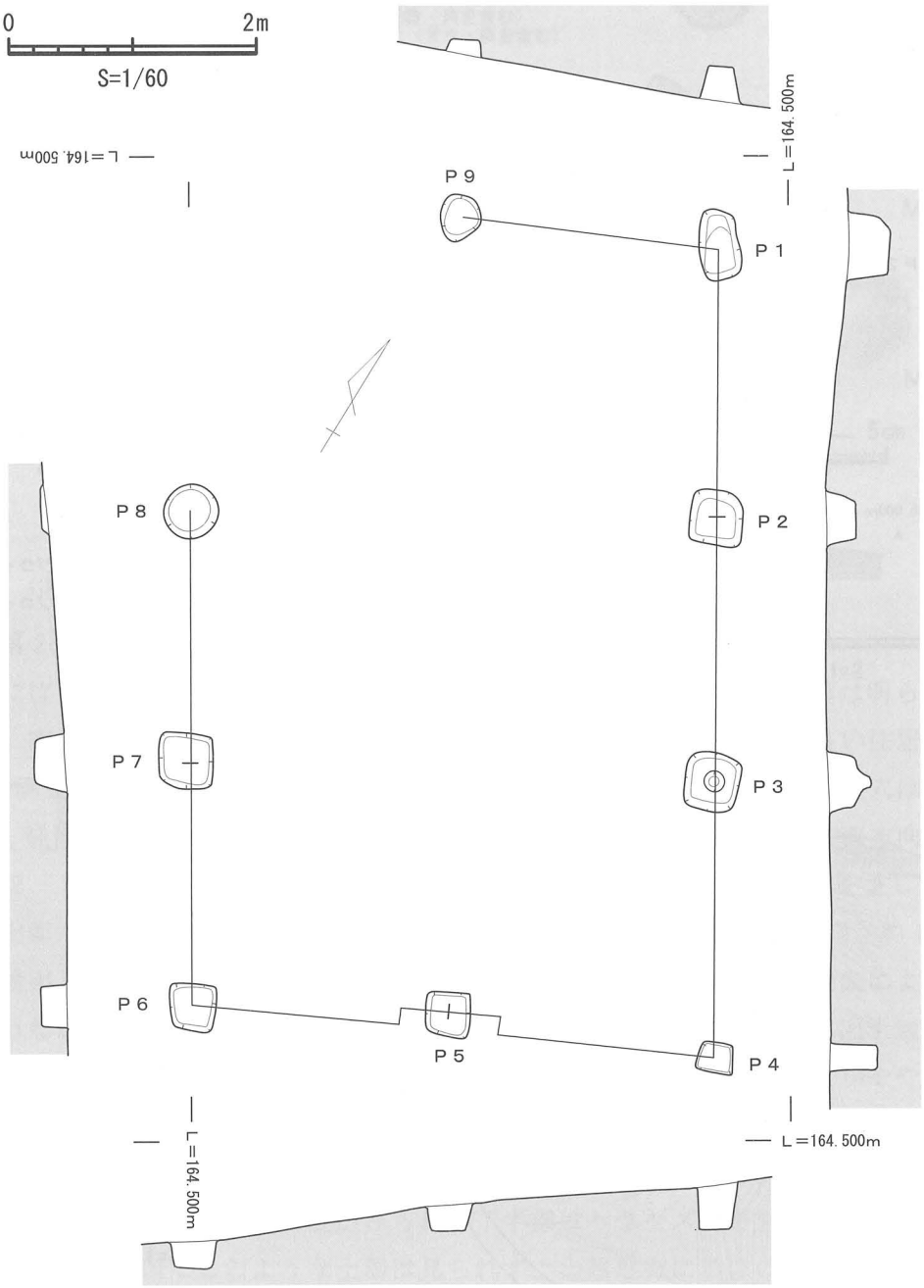


0　10cm
S=1/4

第29図　住居1出土遺物

建物１（第 30 図）

３Ｂ区北東部を中心とする場所に位置する。建物北西部は地形が流失しているため、一部柱穴が検出できない等不明な部分はあるが、桁間３間 × 梁間２間の規模である。桁行は 653 ㎝、梁行は 423 ㎝を測り、柱間の距離が桁行で 223 ㎝～ 213 ㎝、梁行で 217 ㎝～207 ㎝あった。床面積は約 28 ㎡である。棟はＮ－31°―Ｗを向く、柱穴の掘方の平面形は、大部分が方形を呈しており、規模は一辺が、27 ～ 45 ㎝に収まる。Ｐ７からは土師器と須恵器が出土している。しかし極小破片で明確な時期は特定できないが、古代に属するものであろう。



第 30 図　建物１

第3節　まとめ

今回、調査した畔田遺跡の弥生時代の遺構で、主なものは後期後葉の貯蔵穴と考えられる土壙数基のみである。他に住居等の検出はない。これらの土壙を検出した遺跡北西部の地形がかなり流出しているという原因もあるのであろうが、遺構、遺物ともに局所的にしか検出されておらず、人々の営みはかなり稀薄な状況であった。

これに続く古墳時代の主な遺構は単独で検出された住居跡のみである。遺物も少量の出土にとどまっており、これらのことから古墳時代においても集落域を形成するには至っておらず、また、周辺では、領家遺跡から6世紀後半から7世紀にかけての住居跡が検出されているものの他には目立った集落遺跡はなくこの周辺地域では、人々の活動も活発なものではなかったようである。

古代においても、周辺では、領家遺跡、久米廃寺及び宮尾遺跡などが存在するが、本遺跡では掘立柱建物1棟のみの検出で他に遺構もなく前時代と同様、人々の活発な活動は感じられない。

こののち、畔田遺跡では、目立った遺構遺物は検出されておらず、現在に至るまで集落域が形成されることはなかった。

このようなことから畔田遺跡は、かなり限定された土地利用ながら弥生時代後期から古代にかけての集落遺跡であると考えていいだろう。(平井)

参考文献

「領家遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』8　岡山県教育委員会　1975

「宮尾遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』4　岡山県教育委員会　1973

「久米廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』4　岡山県教育委員会　1973

「坂下門前遺跡2　坂長ヨコロ遺跡　坂長熊谷遺跡」『鳥取県教育文化財団調査報告書』114　財団法人鳥取県教育文化財団　2010

「長瀬高浜遺跡Ⅷ　園第6遺跡」『鳥取県教育文化財団調査報告書』61　財団法人鳥取県教育文化財団　建設省倉吉工事事務所　1999

表１　畔田遺跡遺構一覧表

土壙

遺構名	平面形	長軸（cm）	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	備考
土壙１	有柄方形	213	162	70	弥生時代後期後葉	
土壙２	円形	95	90	69	弥生時代後期後葉	袋状土壙
土壙３	不定形			7		2つの土壙が重なる
土壙４	不定形			14		2つの土壙が重なる
土壙５	不定形			7	弥生時代後期後葉	2つの土壙が重なる
土壙６	楕円形	80	64	5		
土壙７	有柄方形	263	145	32	弥生時代後期後葉	
土壙８	不定形	252	181	15	奈良時代初頭	
土壙９	楕円形	103	76	76		
土壙10	円形	92	91	25		
土壙11	円形	89	80	10		
土壙12	円形	106	95	11		
土壙13	円形	92	81	17		
土壙14	楕円形	160	99	9		
土壙15	円形	113	113	26		
土壙16	不整円形	98	87	18		
土壙17	隅丸方形	203	89	27		
土壙18	隅丸方形	155	68	33		
土壙19	方形	175	86	36		

柱穴

遺構名	平面形	長軸（cm）	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	備考
柱穴１	円形	25	24	34		
柱穴２	円形	25	24	29		
柱穴３	円形	32	30	17		
柱穴４	円形	33	32	32		
柱穴５	円形	25	25	23		
柱穴６	円形	21	19	35	弥生時代後期後葉	
柱穴７	円形	22	22	50		

墓

遺構名	平面形	長軸（cm）	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	備考
墓１	円形	74	73	24	明治時代	

竪穴住居

遺構名	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	床面積(㎡)	柱穴	柱間距離(cm)	焼土面	壁体溝	時期	備考
住居１	方形	578			4	306～262	有	有	古墳時代中期前葉	

掘立柱建物

遺構名	規模	柱間距離（cm）		桁行(cm)	梁行(cm)	面積(㎡)	棟方向 N-°-E・W	時期	備考
		桁	梁						
建物１	3×2	223～213	217～207	653	423	28	N-31°-W	古代	

表２　畔田遺跡遺物観察表

土器

掲載番号	遺構名	器種	計測値（cm）（　）は復元値			色調	形態・手法の特徴	備考
			口径	底径	器高			
1	土壙1	鼓形器台	(19.0)			橙色	内外：ヨコナデ	
2	土壙1	鼓形器台	(18.7)			浅黄橙色	内外：ヨコナデ	
3	土壙1	鼓形器台	(23.0)			浅黄橙色	内：ナデ　外：ヨコナデ	
4	土壙1	鼓形器台	(23.0)			明黄褐色	内：ナデ　外：ヨコナデ	
5	土壙1	鼓形器台		21.0		橙色	内外：ヨコナデ	
6	土壙1	鼓形器台		(18.4)		にぶい黄橙色	内：ナデ　外：ヨコナデ	

7	土壙1	鼓形器台		(19.0)		にぶい黄橙色	内：ナデ　外：ヨコナデ	
8	土壙1	低脚坏		6.2		黄橙色	内外：ヨコナデ	
9	土壙1	甕	(16.0)			橙色	口縁：ヨコナデ　内：ヘラケズリ　外：ハケ	
10	土壙1	甕				橙色	内：ヘラケズリ　外：ヨコナデ	波状文
11	土壙1	甕	(19.6)			にぶい橙色	口縁：ヨコナデ　内：ヘラケズリ　外：ハケ	
12	土壙1	甕	(20.0)			橙色	口縁：ヨコナデ　内：ヘラケズリ　外：ハケ	煤付着
13	土壙1	甕	(15.0)			明黄褐色	内外：ヨコナデ	
14	土壙1	甕	(18.0)			橙色		
15	土壙1	甕	(17.8)			黄橙色	口縁：ヨコナデ　内：ヘラケズリ	
16	土壙1	壺	(19.0)			黄橙色	口縁：ヨコナデ　内：ヘラケズリ　外：ハケ	
17	土壙1	壺	(22.8)			橙色		
18	土壙1	壺	(17.0)			橙色	口縁：ヨコナデ　内：ヘラケズリ　外：ハケ	
19	土壙1	甕		(7.0)		橙色	内：ヘラケズリ　外：ハケ	煤付着
20	土壙1	壺		(10.0)		明黄褐色	内：ヘラケズリ　外：ハケ	
21	土壙1	器台				橙色	外：ナデ	突帯に波状文
22	土壙2	甕	(14.8)			にぶい黄橙色	口縁：ヨコナデ　内：ヘラケズリ	煤付着
23	土壙2	甕				黄橙色	内：ヘラケズリ　外：ハケ	
24	土壙2	甕				明赤褐色		
25	土壙5	甕				明赤褐色	内：ヘラケズリ　外：タタキ	煤付着
26	土壙7	高坏				明黄褐色	内：ヘラケズリ　外：ヘラミガキ	
27	土壙7	甕				明黄褐色	内：ヘラケズリ　外：ヨコナデ	
28	土壙7	鼓形器台		(20.0)		明黄褐色	内：ヘラケズリ　外：ヨコナデ	
29	土壙7	鼓形器台		(22.0)		明黄褐色	内外：ヨコナデ	
30	土壙7	鼓形器台				明黄褐色	内：（上）ナデ（下）ヘラケズリ　外：ヨコナデ	
31	土壙8	蓋	(14.0)		3.5	灰白色	内外：ヨコナデ	
32	土壙8	蓋				青灰色	内外：ヨコナデ	
33	柱穴6	甕				黄橙色	内外：ヨコナデ	
34	住居1	壺				明黄橙色		
35	住居1	甕	(26.0)			黄橙色	内：ハケ　外：ヨコナデ	

金属製品

掲載番号	遺構名	器種	材質	計測値（cm）・重さ（g）				時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚	重さ		
M1	墓1	銭貨	銅	2.34		0.12	1.5	18世紀	寛永通宝
M2	墓1	銭貨	銅	2.32		0.1	1.0	18世紀	寛永通宝
M3	墓1	銭貨	銅			0.14			
M4	墓1	銭貨	銅	2.76		0.17	4.5	明治6年（1873）～明治21年（1888）発行	1銭貨
M5	墓1	キセル	銅	14.38	1.48	0.58	27.5		

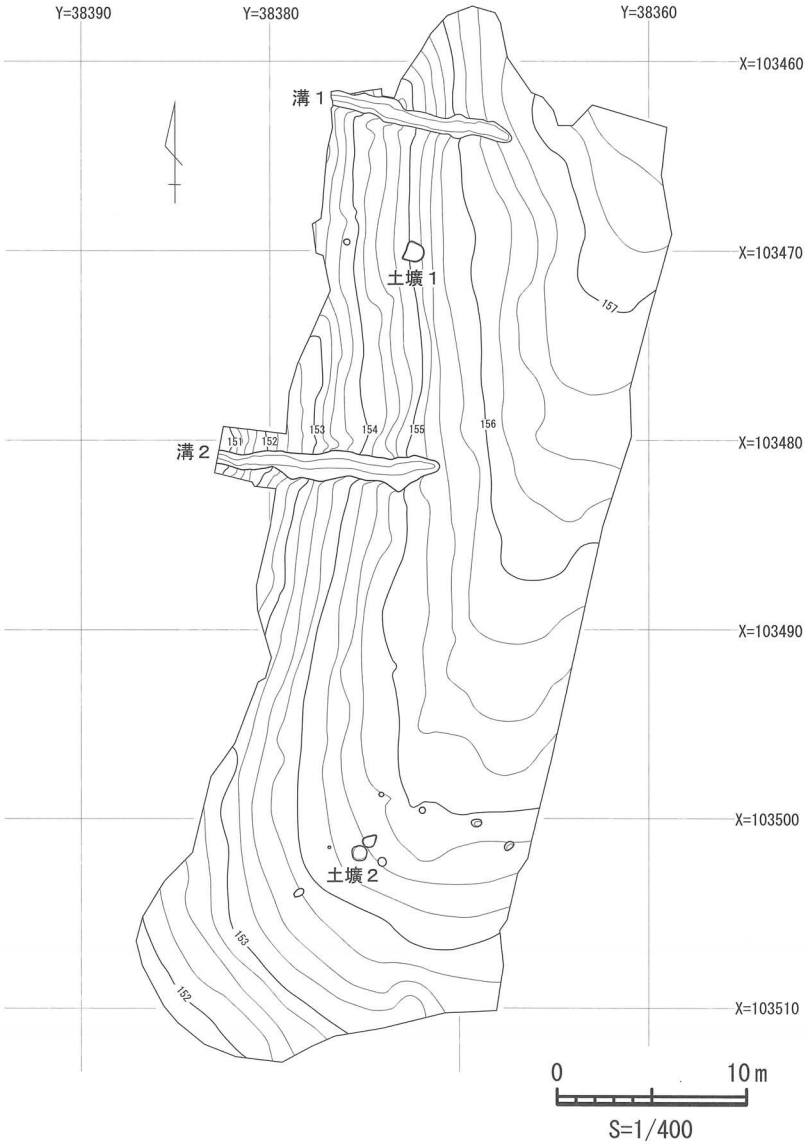
第６章　追坊師Ａ遺跡

第１節　遺跡の概要

追坊師Ａ遺跡は、津山市領家 1378-1 に所在し、新クリーンセンター建設予定地北辺から南東にのびる丘陵上に位置する畔田遺跡あたりから南に派生する尾根の西側斜面に位置する。

遺跡の範囲の標高は約 151 ～ 158ｍである。遺構は、東から西に向かう溝２条と土壙２基を検出しているのみであり、検出できた遺構は多くない。

なお、他に数基の土壙及び柱穴と思われるものを検出しているが、遺物等の出土がなく詳細は不明である。これらのものは、第１図の遺構配置図に位置のみを記している。（平井）



第１図　追坊師Ａ遺跡遺構配置図

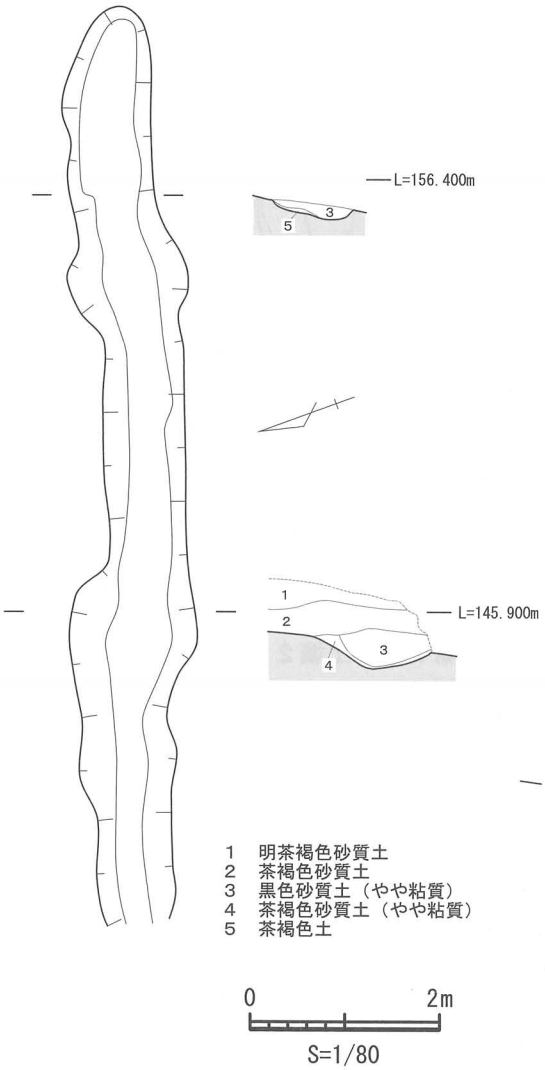
第２節　検出された遺構と遺物

溝１（第２・４図）

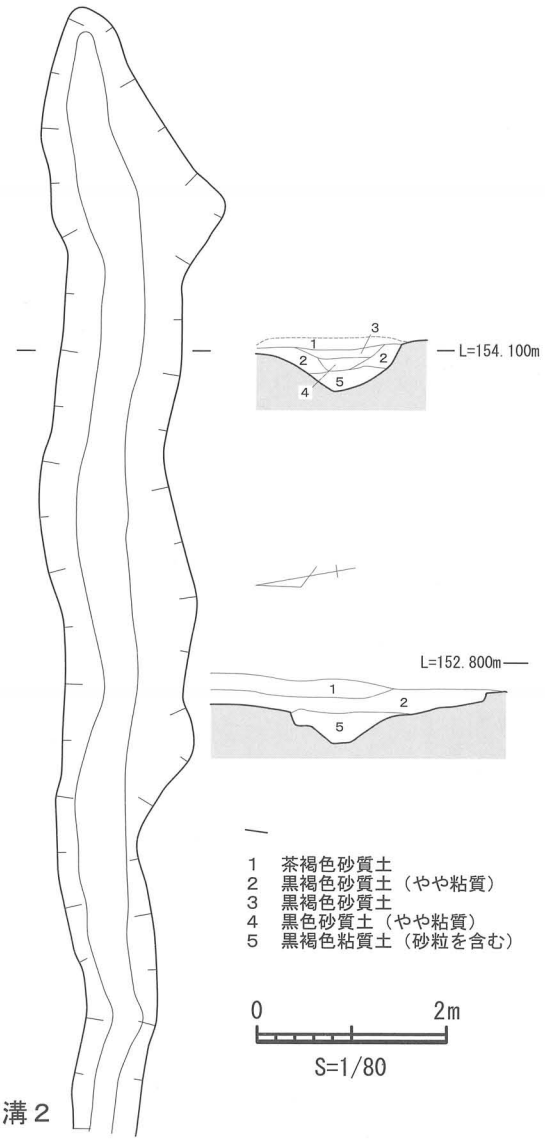
調査区北辺に位置し、溝は東西に流走している。溝の幅は、70 ～ 130 ㎝を測り、深さは５～ 55 ㎝程度残存していた。埋土は、基本的に単層である。遺物は１の甕が１点のみ出土しており、時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

溝２（第３・５図）

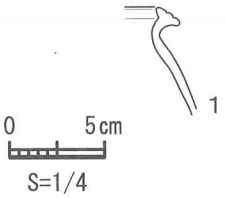
調査区中央部に位置し、溝は東西に流走している。溝の幅は 64 ～ 150 ㎝を測り、深さは、８～ 24 ㎝程度残存していた。埋土は、基本的には２層に分けることができる。また、土層の状況から具体的な年代は不明であるが、一度埋没した溝の掘り直しが行われていたことが分かった。遺物は埋土から、２の高坏、３の坏蓋が出土しており、７世紀後半から８世紀前半に比定される。



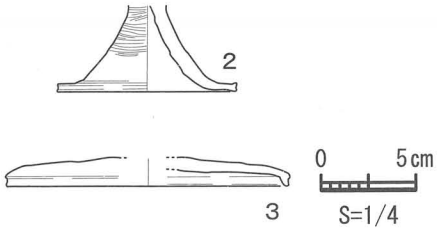
第２図　溝１



第３図　溝２



第４図　溝１出土遺物



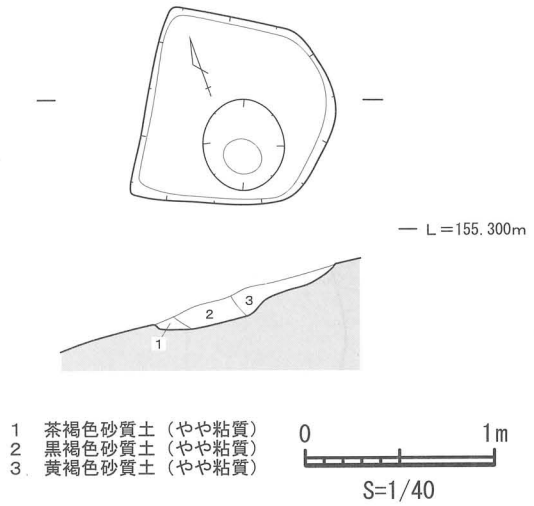
第５図　溝２出土遺物

土壙１（第６図）

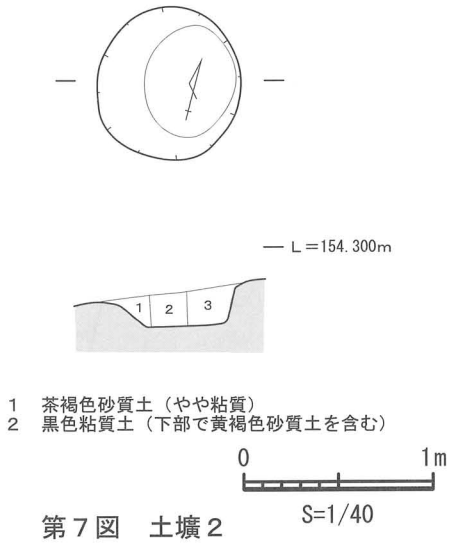
調査区北部の西斜面に位置し、平面形は径約 100 cmの不定形の土壙である。検出面からの深さは、12 cmを測る。また床面南側に径 40 cm深さ 10 cm程度のくぼみがある。出土遺物がなく時期等の詳細は明らかにできなかった。

土壙２（第７図）

調査区南側の斜面に位置し、平面形は 75×80 cmの円形を呈する。検出面からの深さは 18 cmを測る。土層の観察から柱抜取痕の存在も考えられる。ただし、同様の土壙を周辺で検出することができず、詳細は不明。出土遺物もなく時期等も明らかにできなかった。



第６図　土壙１



第７図　土壙２

第３節　まとめ

今回調査した調査区は、西に向かう急な斜面上に位置しており、検出できた遺構のうち時期が推定できる溝１は弥生時代後期中葉で、溝２は７世紀後半から８世紀前半のものであるが、その他に目立った遺構は検出されず、そのため、各遺構どうしの関連や、各時期における様相などの詳細を明らかにすることができなかった。(平井)

表１　追坊師Ａ遺跡遺構一覧表

溝

遺構名	断面形	上端幅 (cm)	床面幅 (cm)	深さ (cm)	床面標高 (m)	時期
溝１	椀の底形	70～130	25～55	5～55	155～150	弥生時代後期中葉
溝２	逆台形	64～130	28～65	5～55	155～153	7世紀後半から8世紀前半

土壙

遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	備考
土壙１	不定形	100	100	12		
土壙２	円形	80	75	18		

表２　追坊師Ａ遺跡遺物観察表

土器

掲載番号	遺構名	器種	計測値（ｃｍ）（　）は復元値			色調	形態・手法の特徴	備考
			口径	底径	器高			
1	溝1	甕				浅黄橙色	内：ヘラケズリ　外：ヘラミガキ　口縁に凹線文	
2	溝2	高坏		(9.4)		にぶい橙色	内外：ヨコナデ　外：カキ目	
3	溝2	坏蓋	(14.8)			灰色	内外：ヨコナデ	

第７章　黒岩遺跡

第１節　調査の概要

１．はじめに

黒岩遺跡は、津山市領家の北西からのびる標高159ｍの丘陵上に位置する遺跡である。丘陵は、北西から南西方向に向かってなだらかにのびており、頂上から北東にかけては大きく削平を受けているため急傾斜になっている（第１図）。

この丘陵は、1997年に開発予定があり、丘陵頂部を中心として十字にトレンチを設定し、試掘調査を実施した経緯がある。その際、トレンチ内から弥生時代後期後葉の土器が多数出土したことから、この丘陵上には弥生時代の墳墓群が存在すると推測されていた（1997年試掘調査時の出土遺物については、第２節で記述する）。

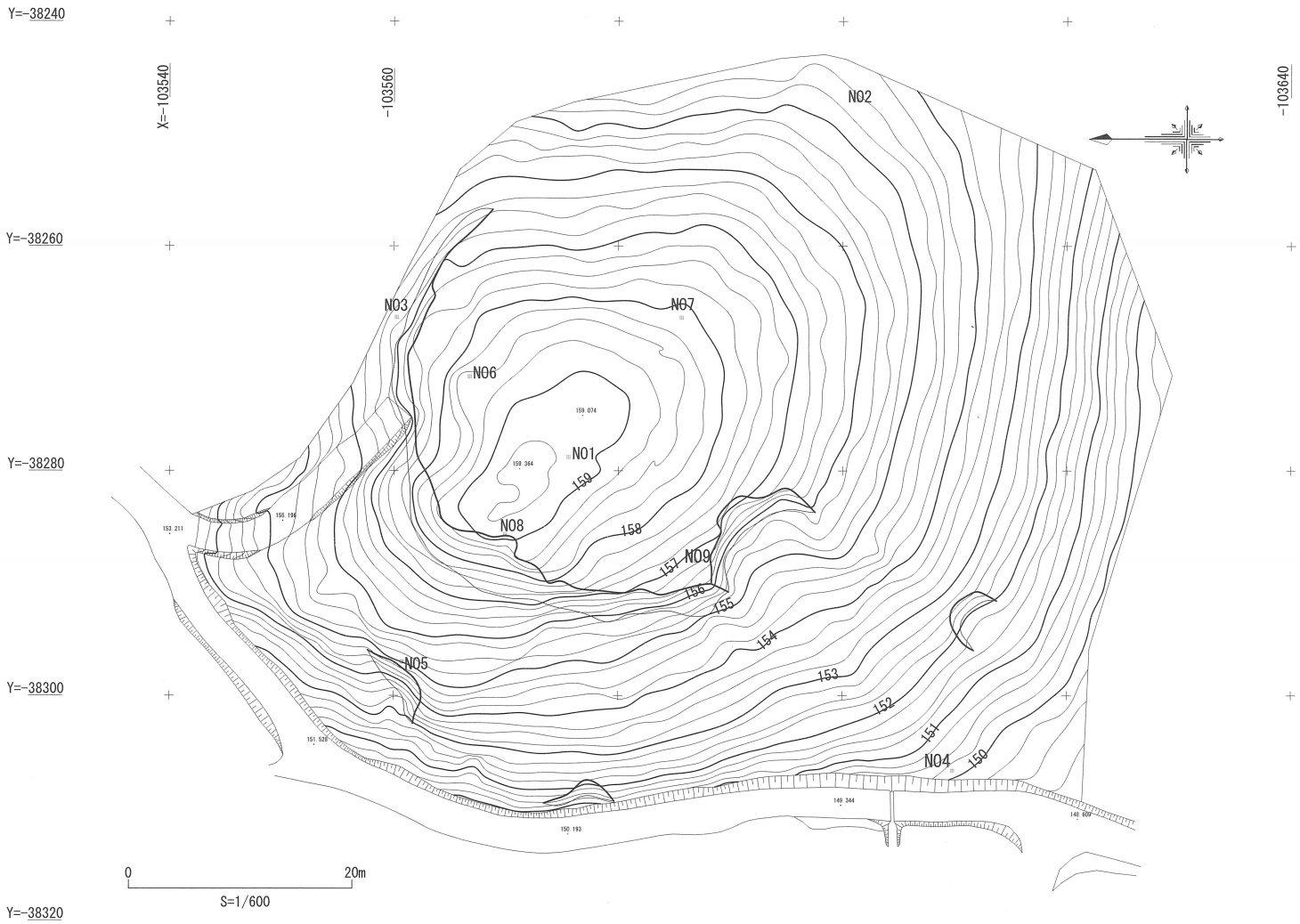
今回、クリーンセンター建設に伴い、黒岩遺跡の存在する丘陵全体が再び開発行為の対象となったため、事前に全面調査を実施する運びとなった。

調査の結果、丘陵上には多数の遺構が残っていたことが明らかになった。遺構のほとんどは、頂上付近から２ｍの標高差の地点内の丘陵頂部を中心に検出された。丘陵の頂部では遺構は表土直下の遺構（以下、上層遺構とする）、及びそこから10㎝程度掘り下げたところで検出された遺構（以下、下層遺構とする）とに分けられる。丘陵の下位部分には遺構はほとんどみられなかったが、一部古墳時代の遺構が存在したことが判明した。丘陵の西側部分は削平を受けているため、遺構は全くみられなかった。また、丘陵尾根がのびる南側部分についても、遺構は存在しなかった。

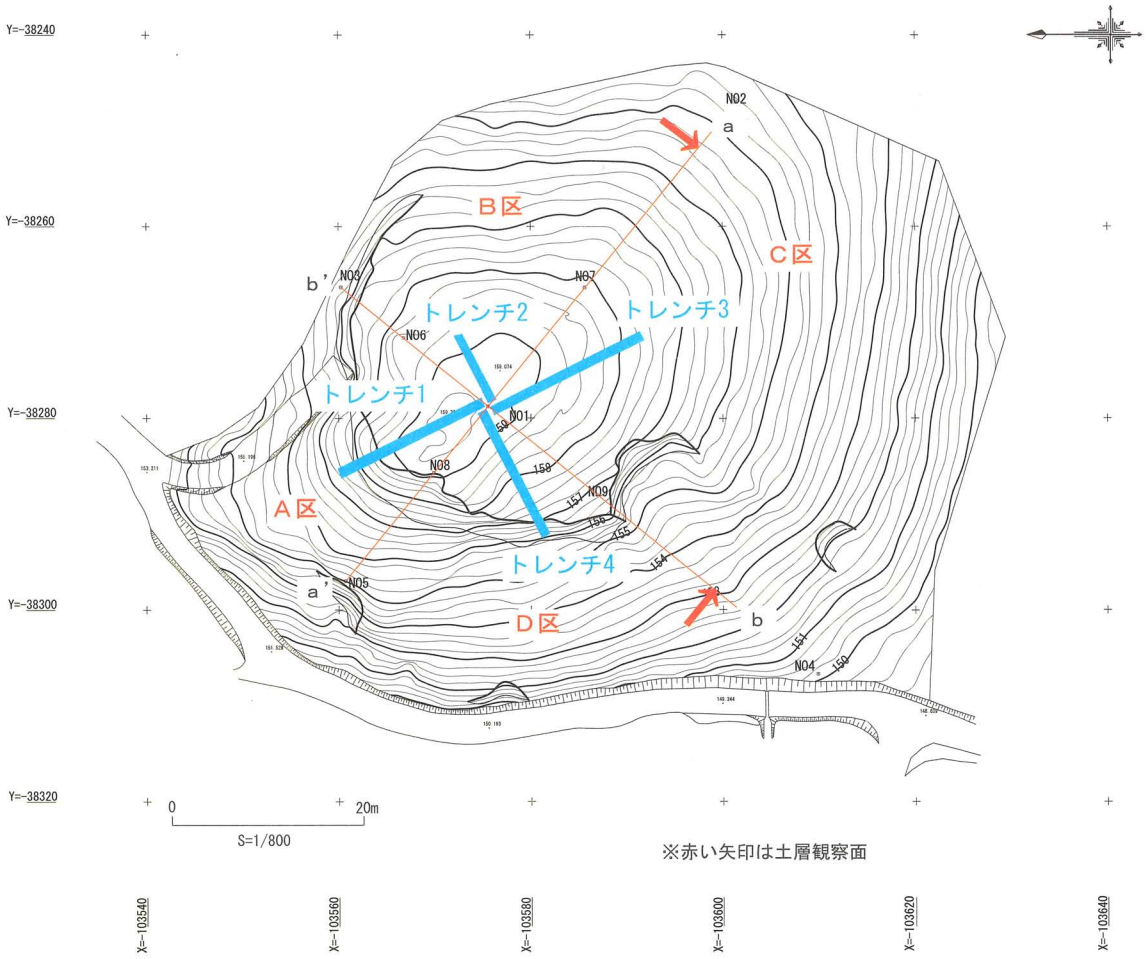
検出した丘陵頂部付近の遺構のうち、下層からは弥生時代後期の墳墓群が良好な状態で遺存していた。これは、美作地域における墳墓のあり方を良好に示すものとして貴重な発見である。さらに、古墳時代の遺構としては、中期の箱式石棺墓や土器棺墓などが発見された。これにより、黒岩遺跡の存在する丘陵は、弥生時代から古墳時代にかけての墓域として利用されていたことが明らかになった。

２．調査区の設定

調査の実施にあたり、土層観察用のアゼを丘陵頂部を中心にして十字に残し、それぞれの区域をＡ区～Ｄ区の４箇所に分けた。後述する出土遺物は、この区割ごとに記述を行っている。土層観察用のアゼは、丘陵頂部の地形の概ね長軸と短軸に設定し、北をＡ区、東をＢ区、南をＣ区、西をＤ区とした（第２図）。基本層序は、表土が10～20㎝あり、その下は暗灰色土がほぼ全体にみられる。上層で検出された土坑は表土下でみられる。暗灰色土の下は黄褐色粘質土である。この層は場所により検出されず、暗灰色土の直下で地山に達するところもみられる。丘陵頂部ではこの層を地山まで掘削した段階で下層遺構が検出された。また、表土下の暗灰色土を掘削する段階で、後述する土壙墓群に供献されたと考えられる土器が多数出土した。

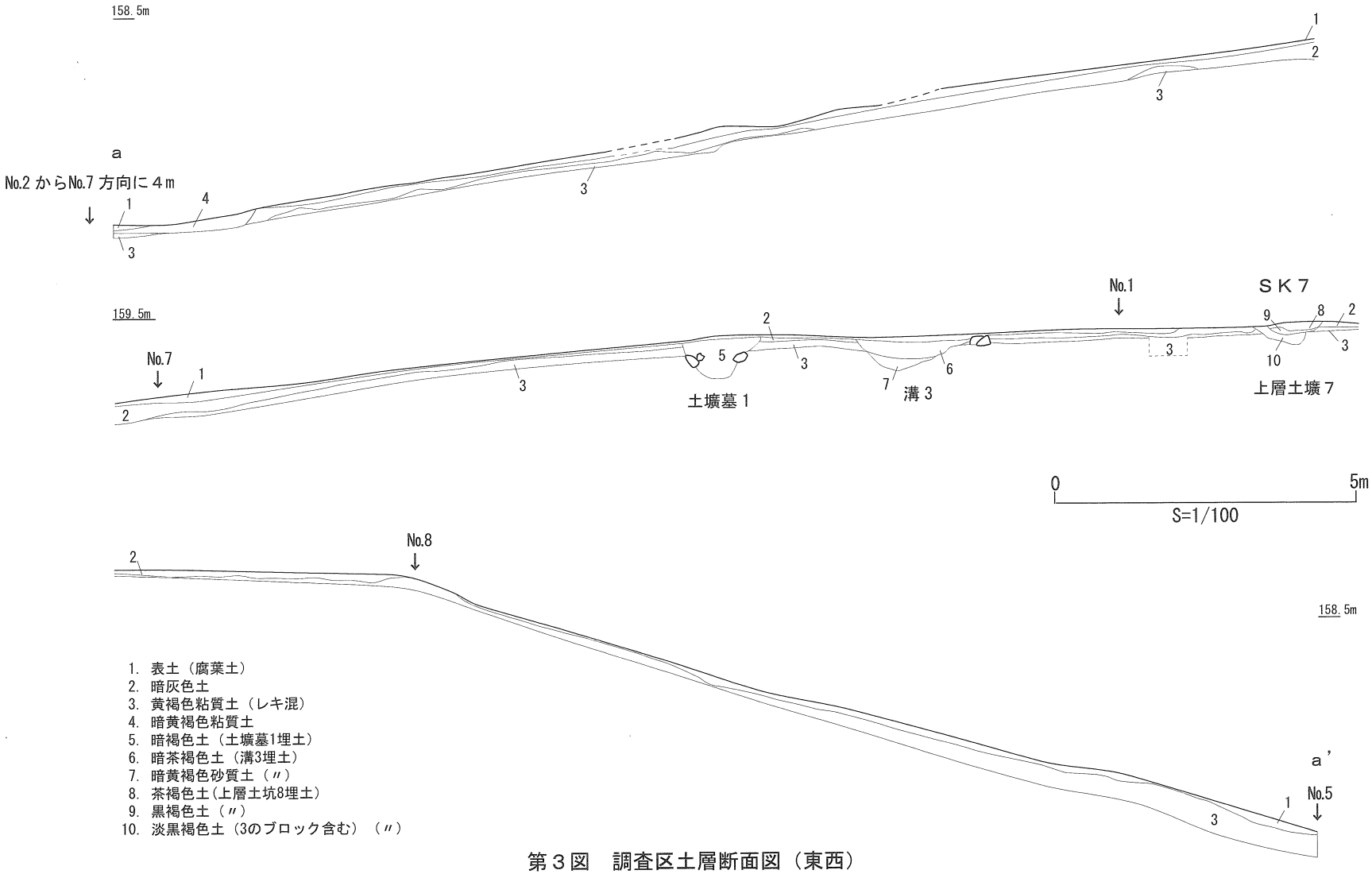


第１図　黒岩遺跡発掘調査前測量図



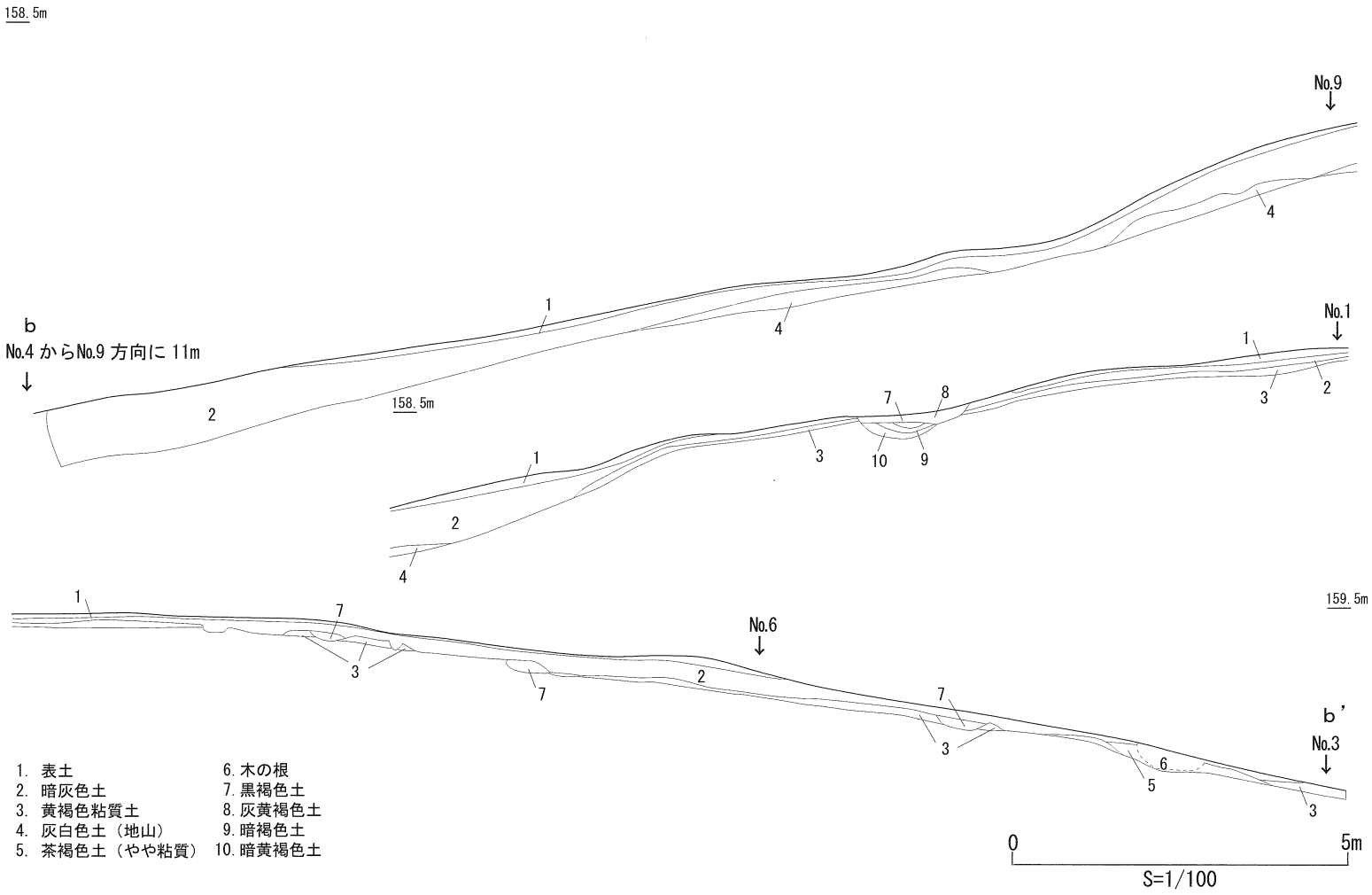
第２図　調査区割図及び 1997 年調査時のトレンチ配置図

なお、弥生時代の遺構については上層と下層にわけて記述しているが、上層と下層に分けられるのは丘陵頂部のみであり、頂部から下がったところで検出された遺構については遺構は１層のみであった。これらの遺構については、下層の遺構と同時期の中で考えるべきものであるため、いずれも下層の遺構に含めて報告を行う。(豊島)



1. 表土（腐葉土）
2. 暗灰色土
3. 黄褐色粘質土（レキ混）
4. 暗黄褐色粘質土
5. 暗褐色土（土壙墓1埋土）
6. 暗茶褐色土（溝3埋土）
7. 暗黄褐色砂質土（〃）
8. 茶褐色土(上層土坑8埋土)
9. 黒褐色土（〃）
10. 淡黒褐色土（3のブロック含む）（〃）

第３図　調査区土層断面図（東西）



第４図　調査区土層断面図（南北）

第２節　弥生時代の遺構と遺物

１．上層の遺構（第５図）

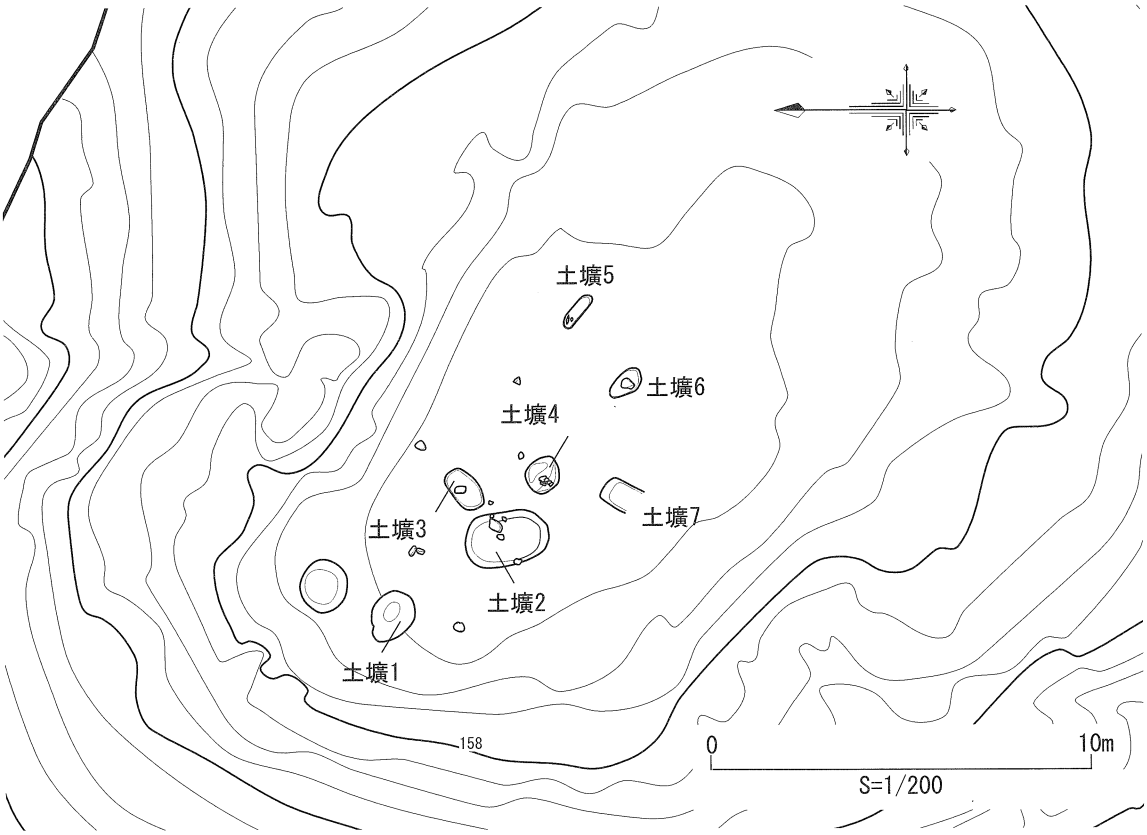
土壙が７基検出された。これらの土壙はすべて丘陵の頂部付近に位置する。土壙は円及び楕円形のもの、不整形のものなど様々である。

土壙１の直上や、土壙７で弥生時代後期の土器が出土したが、それ以外は遺物はなく、時期を特定できなかった。また、土壙１出土の土器についても、底面から浮いた状態での出土であることから、遺構に伴うものであるかは不明である。

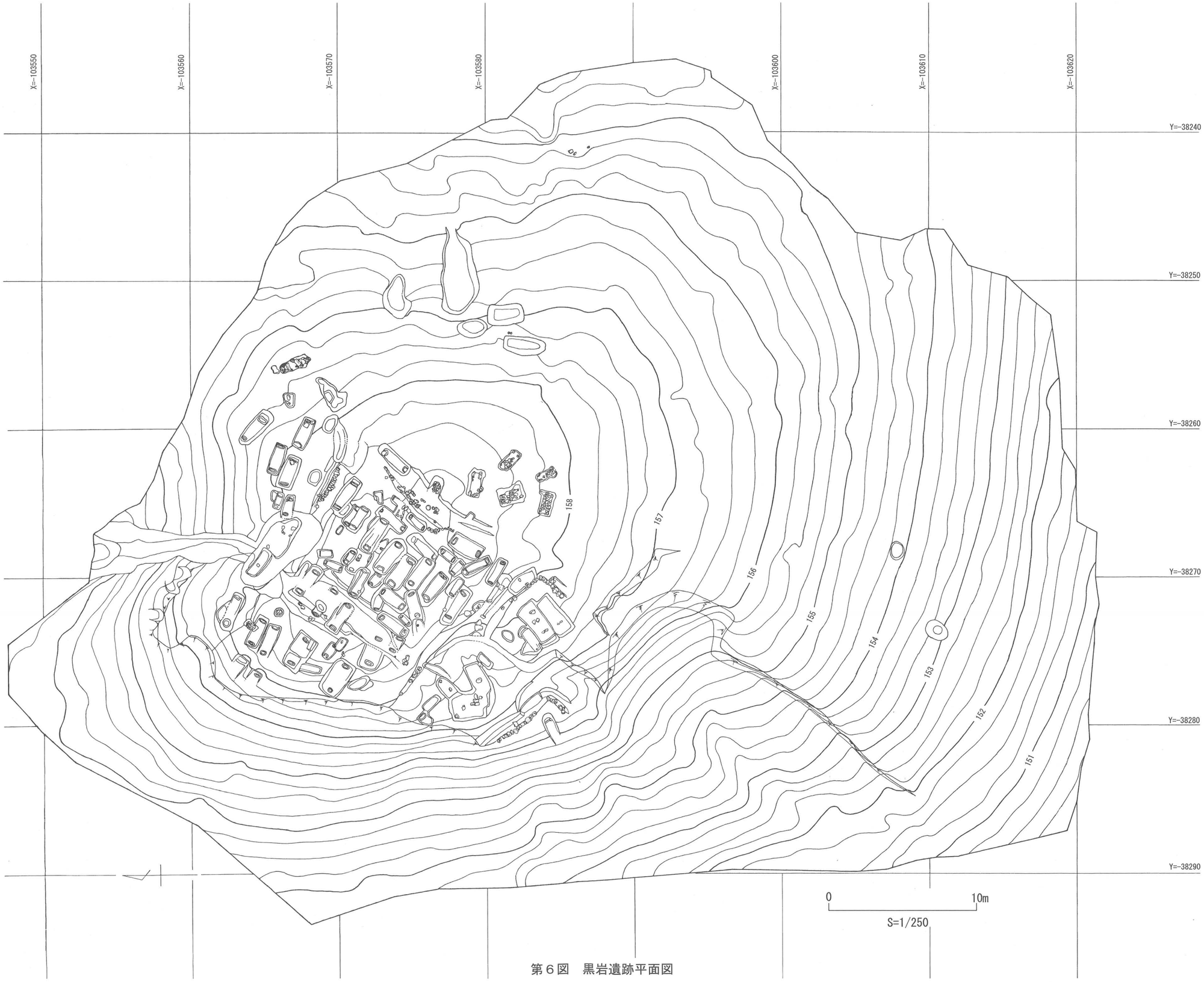
２．下層の遺構

発見された遺構は、方形台状墓４基、これに伴う土壙墓が 48 基、土器棺墓１基、溝などで区画されない部分に位置する土壙墓が 31 基である（第６・７図）。埋葬施設の総数は 80 である。これらの遺構のうち、丘陵頂部からやや下がったところに位置する土器棺墓及び方形台状墓に伴う溝については、上層・下層の区別はないが、墳墓群の遺構であるため下層遺構として一括して取り扱う。土壙墓群は、上層の遺構検出時には表出しておらず、上層の遺構検出の後、堆積していた黄褐色粘質土を 10 ～ 20 ㎝程度掘削した段階で検出された。

土壙墓群については、方形台状墓に伴って築かれたものの他に、区画されない部分に築



第５図　上層遺構平面図


X=-103550
X=-103560
X=-103570
X=-103580
X=-103600
X=-103610
X=-103620
Y=-38240
Y=-38250
Y=-38260
Y=-38270
Y=-38280
Y=-38290
158
157
156
155
154
153
152
151
0
10m
S=1/250

第６図　黒岩遺跡平面図

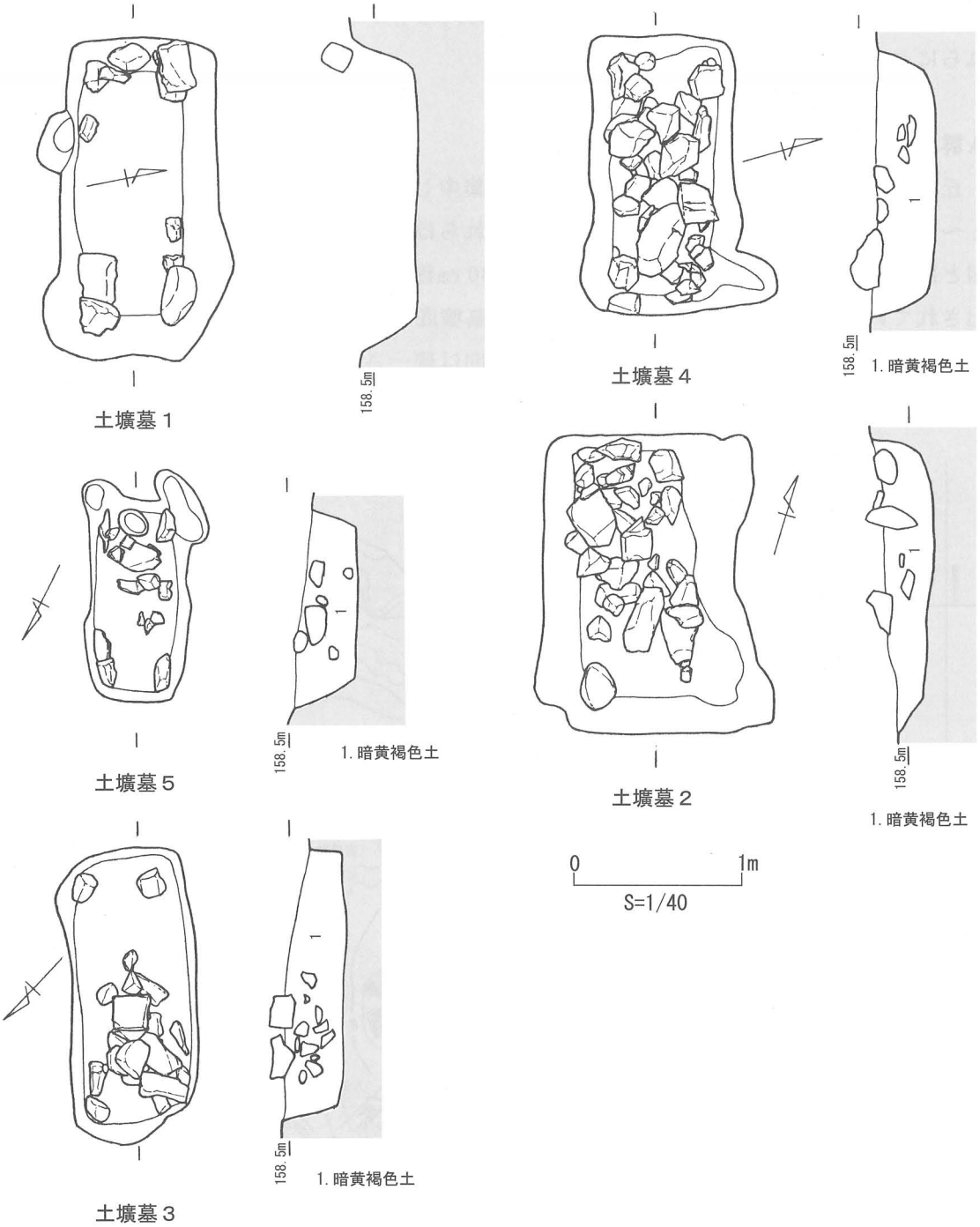
第７図　黒岩遺跡下層遺構拡大図

かれたものが存在するため、検出位置や主軸方向などから３つの群に分けた（第８図）。これらについては、群ごとに記述する。

Ａ群（土壙墓１～８）（第９・10図）

丘陵の頂部から少し南東に下がった部分に集中してみられる一群である。中でも土壙墓１～５は墓壙が良好な状態で残っている。これらは本遺跡で検出された多くの土壙墓の様相とは異なり、すべての墓壙内に直径20～30㎝程度の石が墓壙床面から浮いた状態で検出されている。やや小型の土壙墓５を除き、墓壙底の長さは140～160㎝、幅60～70㎝の範囲におさまる規模である。墓壙の主軸方向は統一されていないが、地形に沿って作られているような印象を受ける。土壙墓１は他の２～５ほど多くの石は検出されていないが、

第８図　黒岩遺跡遺構群分け図（S=1:400）



第９図　土壙墓１～５平面・断面図

墓壙の四隅に石がみられる。土壙墓２は墓壙床面から浮いた状態で多くの石が検出された。石を取り除くと土壙墓１同様、墓壙の隅に石がみられるが、四隅すべてではない。土壙墓３は、土壙墓２と同様、石が検出されているが、墓壙の全面には及んでおらず、北側半分に偏った状態でみられる。また、この中には墓壙の隅に置かれた石も含まれている。墓壙の南側半分には、短辺の隅に１つずつ、墓壙床面から浮いた状態で石が検出されている。土壙墓４は、土壙墓２と類似したあり方を示しており、石が多くみられたほか、四隅にも石が置かれていたことが推測される。土壙墓５は残りの良い５基のうち最も小型で、墓壙

底の長さ100 cm、幅48 cmを測る。床面から浮いた状態でみられる石は土壙墓２や４より少ないが、墓壙の四隅に石が置かれていたことが検出状況からわかる。

これらの土壙墓からは、出土遺物はほとんどなく、土壙墓４から弥生土器の小片が出土したのみであった。

土壙墓１～５の大きな特徴としては、土壙墓１以外は墓壙上に多くの石が検出されたこと、墓壙の四隅に石を据えたと考えられることがあげられる。墓壙内に木棺の存在を示すような痕跡はないが、これまでの調査例から推測すると、墓壙内にみられる多数の石は墓壙を掘削し、木棺が据えられた後に、墓壙上に置かれた石と考えられる。また、墓壙隅に据えられた石は、木棺の支えの石と推測される。

土壙墓６～８は１～５の北東部にある。いずれも方形台状墓に伴う溝によって部分的に削平されているため遺存状態は悪く、全体の形を復元することが困難であるが、土壙墓２～５で検出されたものと同様に石が遺存していたことからその痕跡を確認することができた。土壙墓６は、土壙墓１の北側に位置し、西半分を方形台状墓に伴う溝３によって切られている。遺存する東側部分には一辺10～20 cm程度の石が墓壙床面から浮いた状態で検出された。墓壙の幅は95 cm、残存する深さは９cmである。土壙墓７は溝３の底部でわずかに確認された遺構で、土壙墓であるかは判然としないが、周辺に墓壙上に石を伴う土壙墓が検出されていることなどから土壙墓と判断した。溝３との前後関係については、溝３の埋土を掘削した段階で発見されたため、土壙墓７が溝３によって切られているものと推測される。土壙墓７の東側には石がまとまった状態で検出されているが、これらの一部は土壙墓７に伴うものである可能性も考えられる。土壙墓８は溝３の中で検出されたもので墓壙の外形ラインがわずかに残る。墓壙上には石がみられるが、これらは溝３に伴う石列、あるいは石列が動いたものである可能性も考えられるため、土壙墓８に伴うものであるかは不明である。

以上の埋葬施設のうち、土壙墓１～７については、墓壙上に石を伴うもので、一つのまとまりをもって構成されている群ととらえることができる。８については、遺存状態が悪いため詳細は不明である。

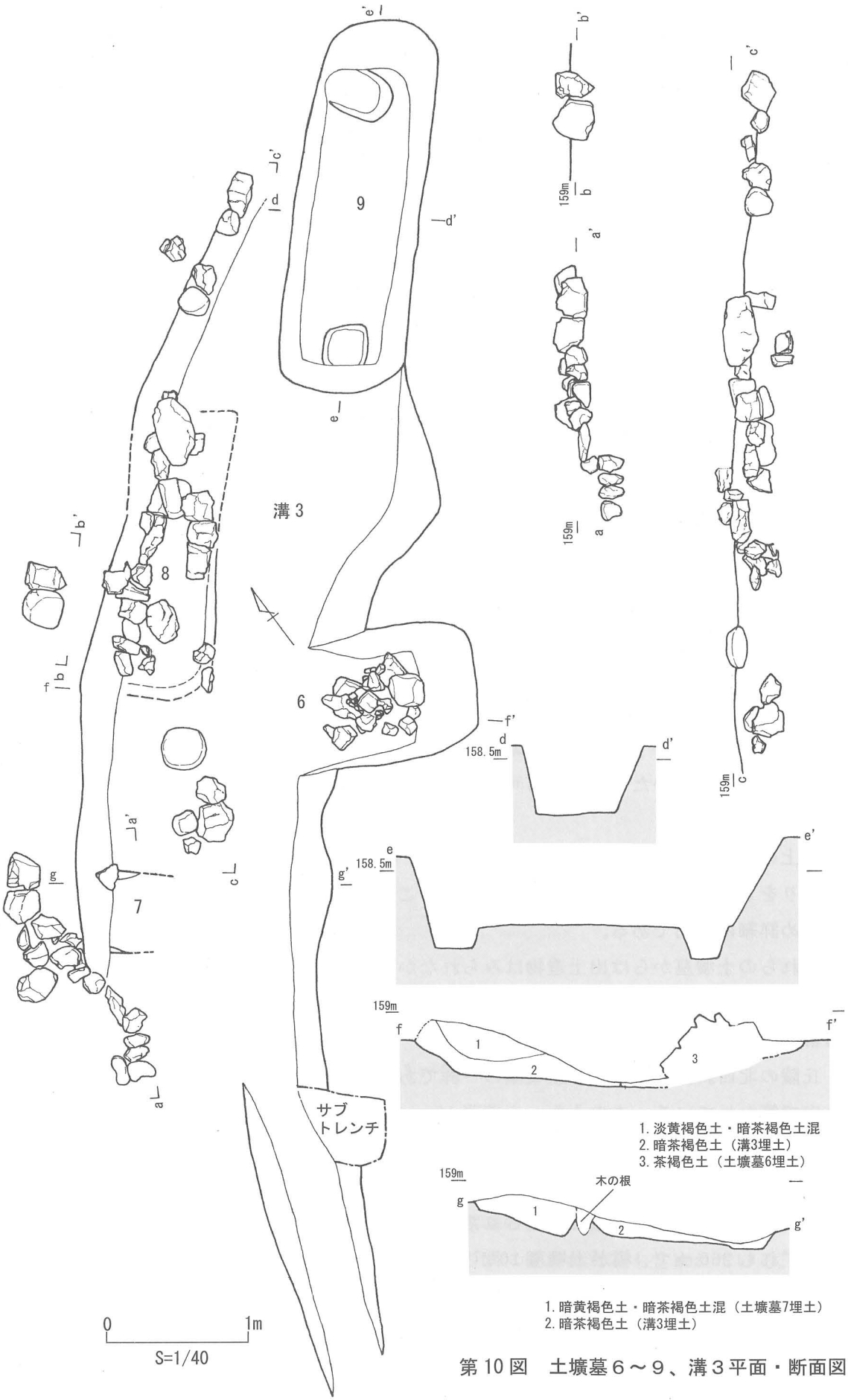
これらの土壙墓からは出土遺物はみられなかった。

Ｂ群　（土壙墓10～23・66・土器棺墓１）

丘陵の北西斜面に位置する土壙墓の一群である。墓壙はいずれも主軸が尾根に直交する方向で築かれている。このうち、土壙墓18～23は方形台状墓１に伴うと考えられる溝１を切る形で築かれている。

①土壙墓10～13（第11・12図）

土壙墓10及び13は丘陵で確認された土壙墓群の中でも大型の墓壙をもち、墓壙の全長はいずれも260 cmで、幅が土壙墓10が156 cm、土壙墓13が148 cmをはかる。いずれも墓壙両端に木棺を据えた小口溝の痕跡がみられる。土壙墓10は墓壙底部の中心付近に段差がみられるほか、南東小口付近が一段高くなっているところがみられる。土壙墓13は規模、主軸方向が土壙墓10とほぼ同じであることから、同時期に並列して築かれたと考えられる。



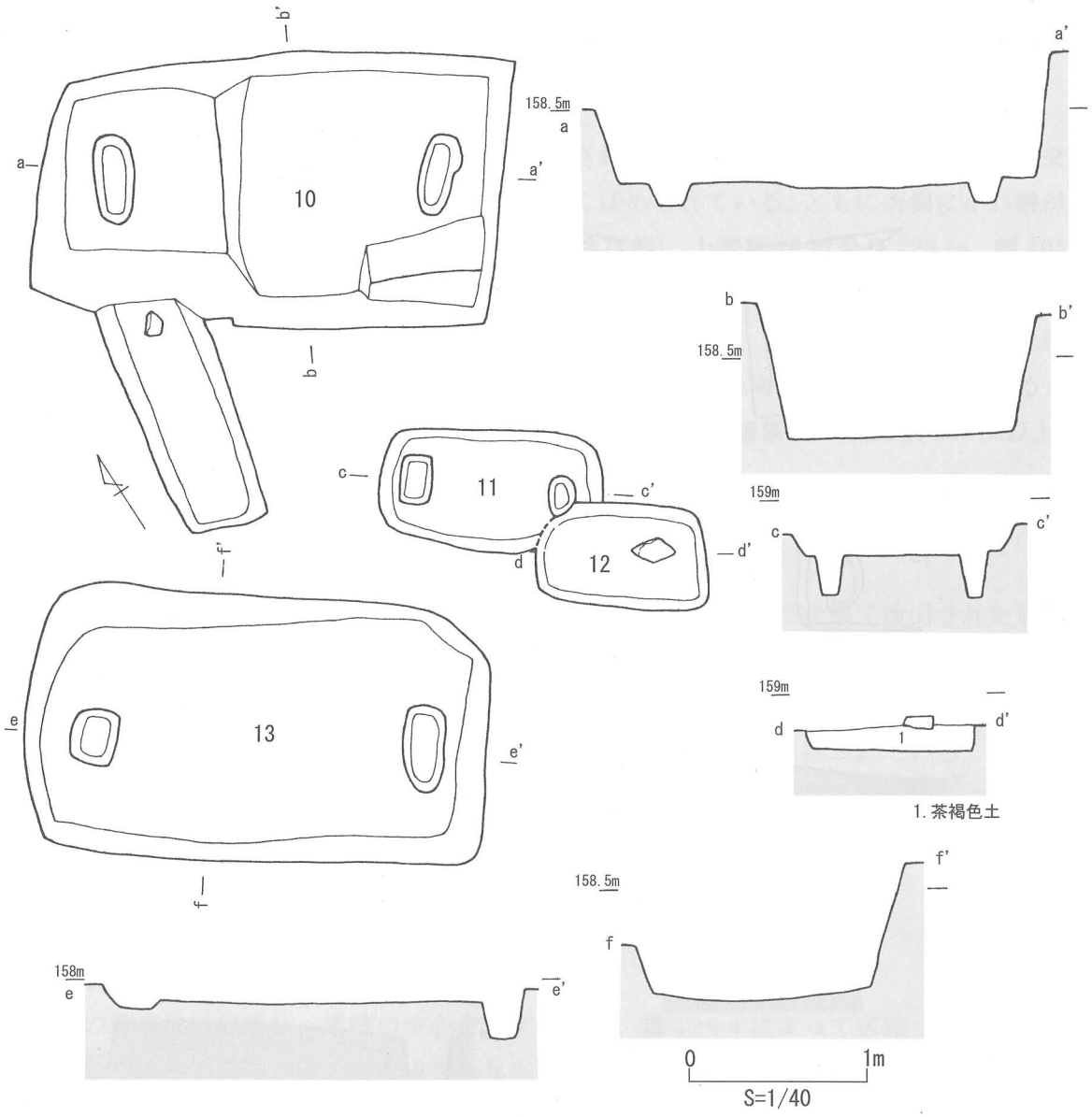
第10図　土壙墓６～９、溝３平面・断面図

土壙墓11、12は切り合っており、11が古く、12が新しい。墓壙全長は11が126㎝、12が96㎝と、土壙墓の中では規模の小さいものである。11には墓壙両端にしっかりとした小口溝がみられるが、12には小口溝がなく、墓壙上には、墓標と推測される石が1個、床面から浮いた状態でみられる。

出土遺物は少なく、土壙墓11からは、壺の口縁部が出土している（第12図1）。端部がわずかに外反するものである。弥生時代後期に位置づけられる。また、図示できなかったが、土壙墓13からも弥生土器と考えられる小片が出土した。

②土壙墓14～17（第13図）

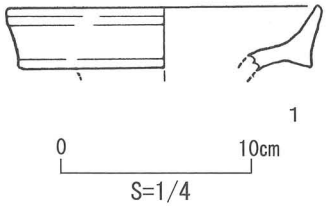
土壙墓14、15と土壙墓16、17はそれぞれ並列しており、16、17の斜面下に14、15が築かれている。14、15は削平のため全体の規模は不明であるが、片側に小口溝があり、



第11図　土壙墓10～13平面・断面図

周辺の土壙墓の様相から、本来は両側に小口溝をもつものであったと推測される。16、17も、両側に木棺を固定するための小口溝が両側にみられる土壙墓である。墓壙規模や主軸がほぼ同じであることから、同時期に築かれたと考えられる。なお、16の上層からは、須恵器の甕と土師器の甕を合わせ口にした古墳時代の土器棺墓が検出されている。

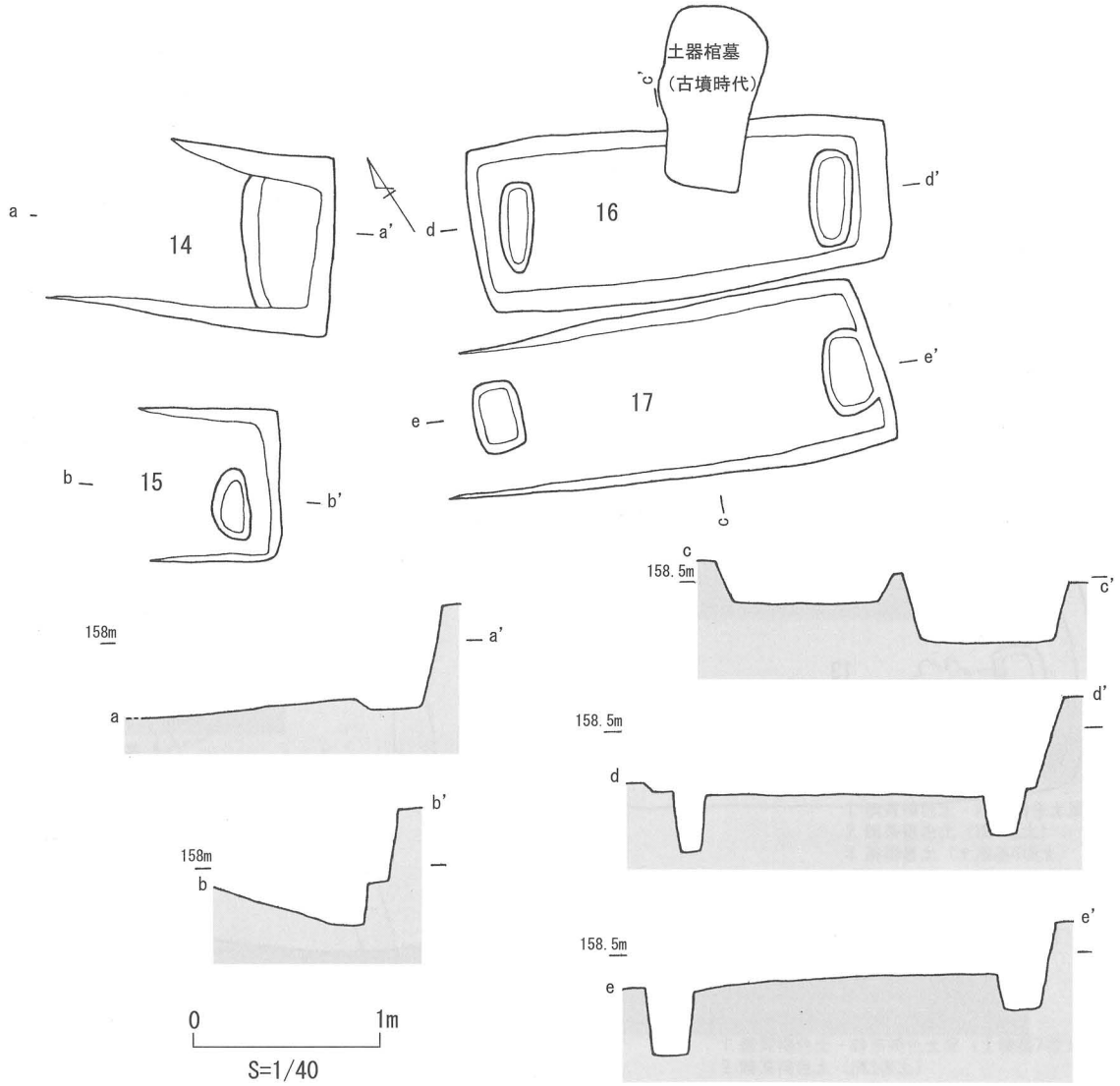
土壙墓14～17からは、出土遺物は全くみられなかった。



第12図　土壙墓11出土遺物

③土壙墓66（第14図）

土壙墓16の北側1ｍのところに位置する土壙墓である。全長266㎝、幅85㎝をはかる。墓壙両側底部に木棺の小口溝と思われる痕跡が確認できるが、西側小口のものは掘方が円形であり、小口溝とするのにはややいびつである。

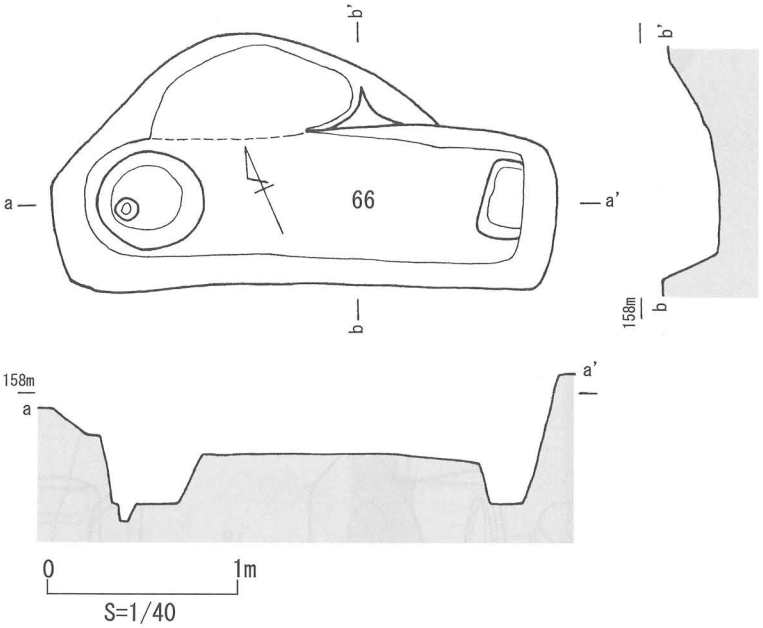


第13図　土壙墓14～17平面・断面図

出土遺物はみられなかった。

④土壙墓 18 ～ 23（第 15・16 図）

すべて区画溝１と切り合っている土壙墓の一群である。土層の観察により、溝１が埋まった後に土壙墓の掘削が行われていることから、溝１の方が古く、土壙墓群の方が新しいことが分かる。土壙墓 20、21 については溝１との前後関係は不明であるが、埋葬施設の方向や位置関係から判断すると、20、21 についても溝１よりも新しいと推測される。土壙墓 18、19 は溝１にほぼ直交して検出された。土壙墓 19 は墓壙底が一段掘りくぼめられている。ともに両側に小口溝がみられる。土壙墓 18 は全長約 220 cm、幅 73 cm（遺存部）、土壙墓 19 は全長 228 cm、幅 103 cmを測る。土壙墓 20、21 は溝１の北東部、丘陵頂部から北斜面に至る直前の部分に位置し、いずれも溝１に直交する。土壙墓 21 は両側小口に溝をもつが、土壙墓 20 は検出できた部分からは小口溝は検出されなかった。土壙墓 22、23 は、溝１の南西側で溝１に直交する土壙墓で、切り合い関係から溝１よりも新しく位置づけられる。土壙墓 22 は推定長 235 cm以上、土壙墓 23 は推定長 135 cmで、ともに両側に小口溝を有する。



第 14 図　土壙墓 66 平面・断面図

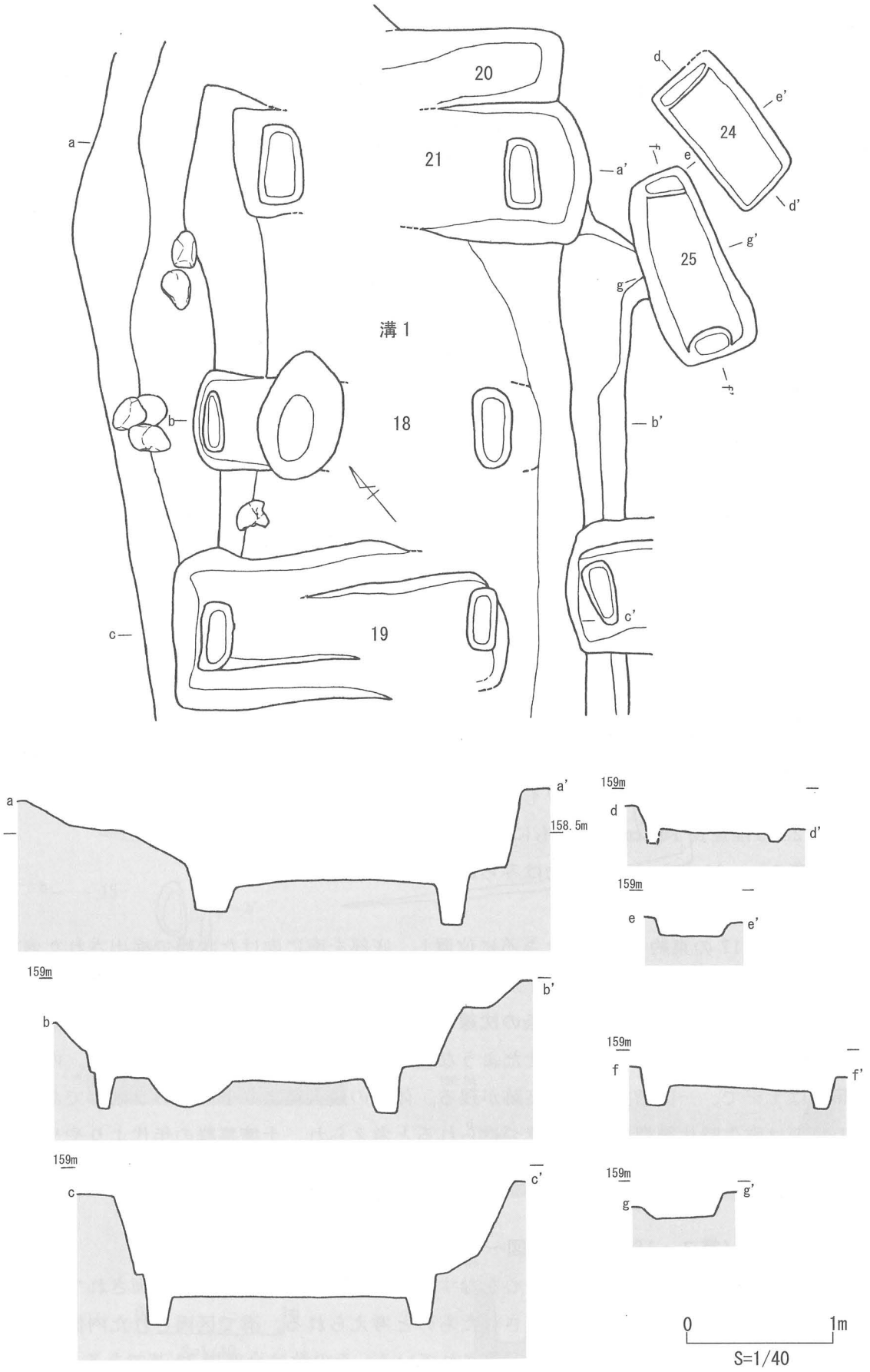
土壙墓 18 ～ 23 からは出土遺物はみられなかった。

⑤土器棺墓１（第 17 図）

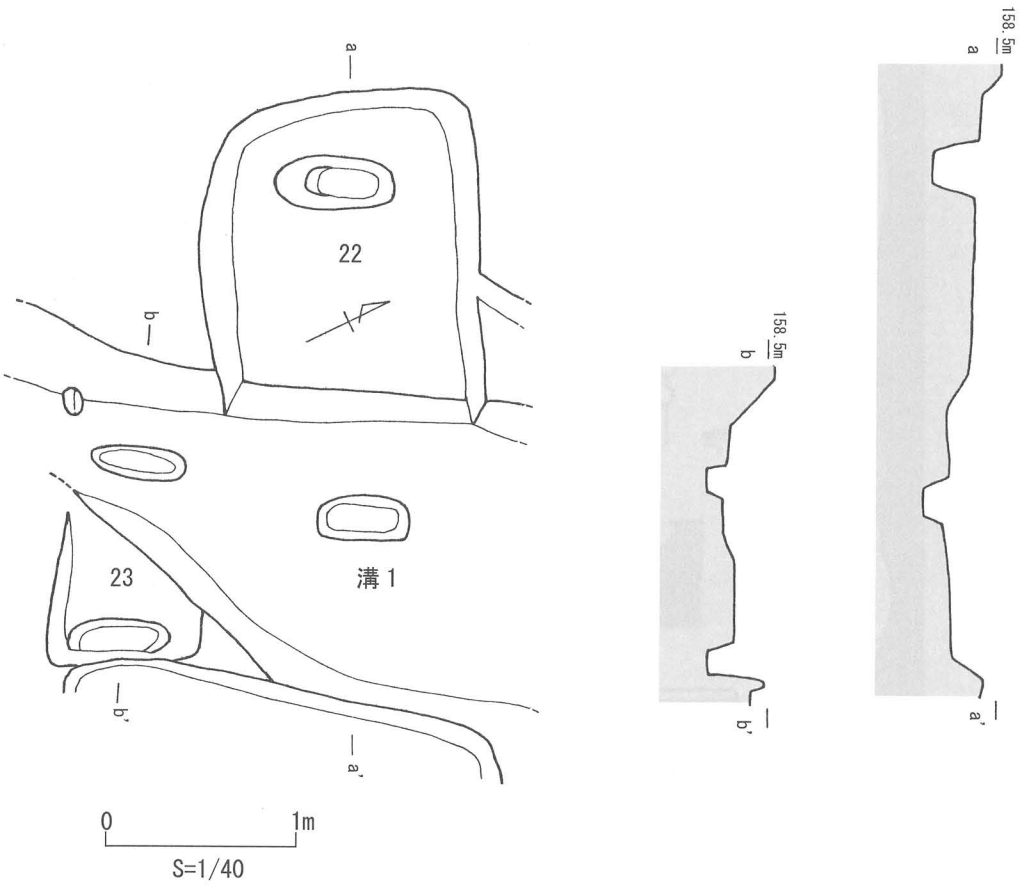
土壙墓 16、17 の東約 0.6ｍのところに位置し、底部を南に向けた状態で検出された壺棺である。検出時は既に全体の半分を欠いた状態であった。壺は口径 18.5 cm、底径 12.8 cm、高さ 50.9 cmを測る。口縁部には３条の沈線が施されている。体部全体にはハケ目が施され、片部にはＳ字文を横にして連続させたような模様がヘラ描によって描かれている。内面は口頸部はナデで、一部指押さえの痕跡が残る。体部の最大径より下部はヘラ削りである。壺の時期は弥生時代後期前葉に位置づけられると考えられ、土壙墓群の年代よりやや遡るものである。出土遺物はみられなかった。

方形台状墓１（第７・10 図、第 18 図～ 29 図）

丘陵の最高位に位置し、遺跡の中心をなす墳墓で、溝１～４によって区画されている。盛土はなく、地山を削り出して造成されたものと考えられる。溝で区画された内側には、土壙墓がほとんど隙間のない状態で配置されている。その数は全部で 34 基である。溝１を除き、各溝には所々で列石が遺存しており、本来は溝と列石によって区画されていた墳墓



第15図　土壙墓18～21・24・25平面・断面図



第16図　土壙墓22・23平面・断面図

であったことが分かる。

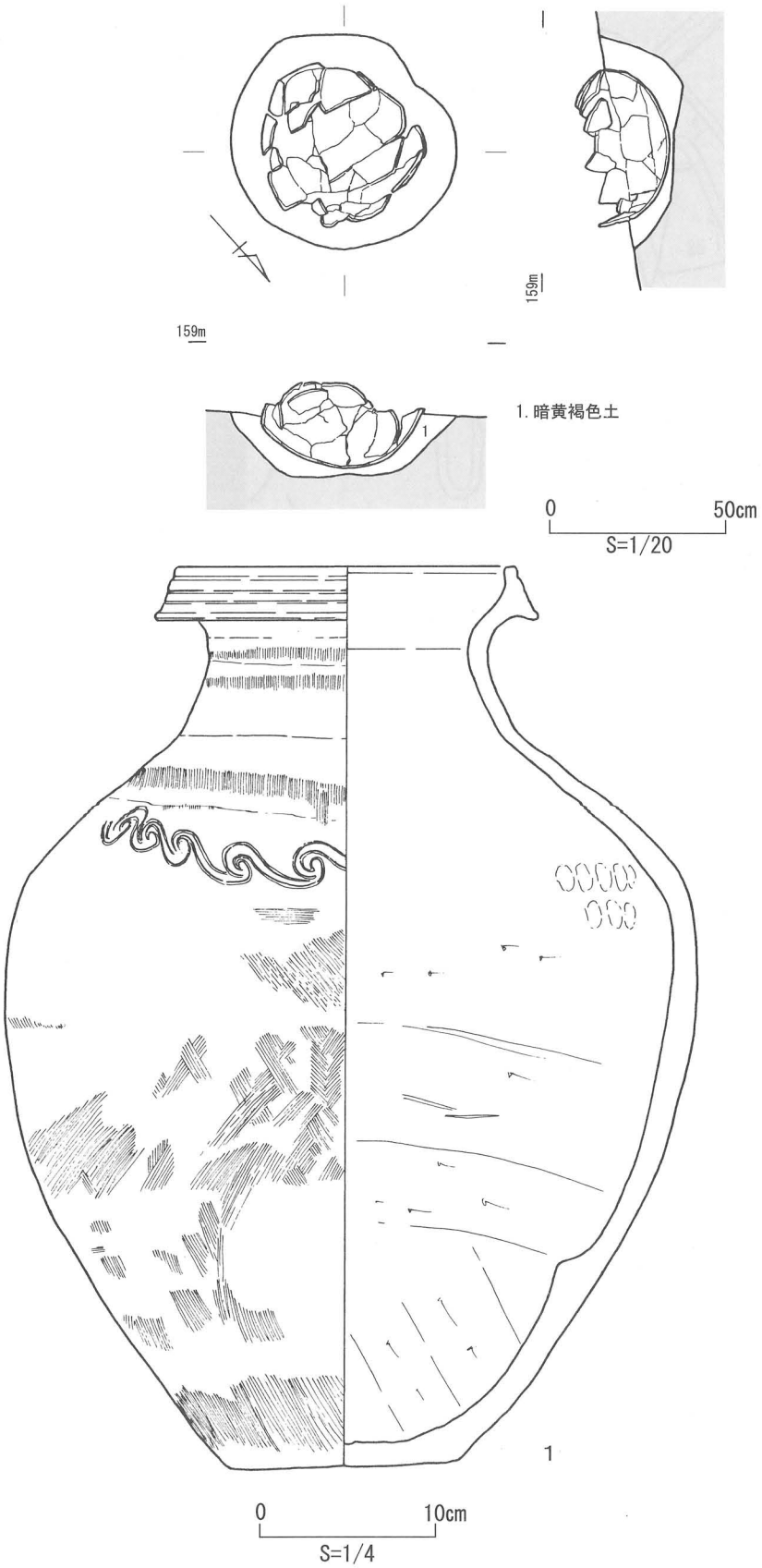
溝1（第18・19図）

墓の北西部を区画する溝で、長さ約6m、幅2～2.5m、深さは約0.5mをはかる。溝1に直交する形で土壙墓18～23が検出されているが、土層の観察からは溝1が埋まった段階で土壙墓の掘削がなされていることから、これらの土壙墓は溝1の存続時期にはなかった土壙墓である。溝の断面形は浅いレンズ状であるが、両端の立ち上がり部分にテラス状の平坦面をもつ。これは、溝の北側部分で明瞭にみられ、溝の南側部分では土壙墓と切り合っているため、検出されなかった。北側の平坦面には、部分的に列石が残っている箇所がみられる。列石は2箇所で残っており、石は20～30㎝の河原石が3個、もう1箇所では同大の2個の河原石がともに面を南東側に向けて立て並べられている。2箇所とも方形台状墓の内側に向けて並んでおり、他の箇所で検出された列石が方形台状墓の外側に面を向けて並べられている状況とは異なっている。

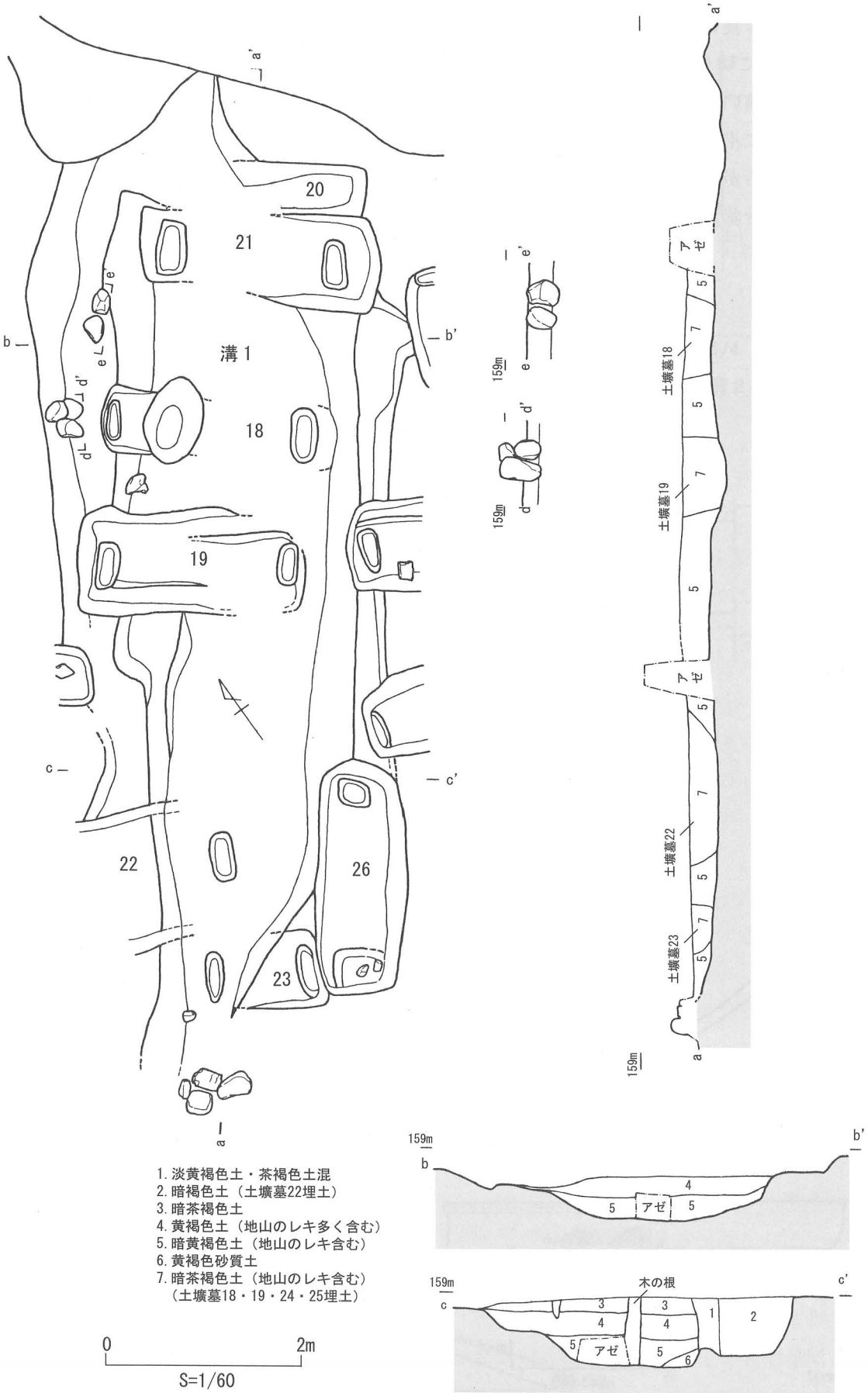
出土遺物はほとんどなく、土器の底部片が出土したのみである（第19図1）。

溝2（第20・21図）

溝2は、方形台状墓1の北東部を区画する溝である。残存する長さ7.3m、幅0.4～0.6m、

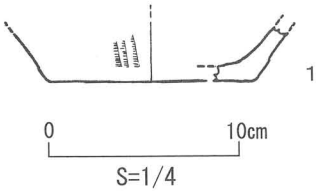


第 17 図　土器棺墓 1 平面・断面図（上）及び土器棺実測図（下）

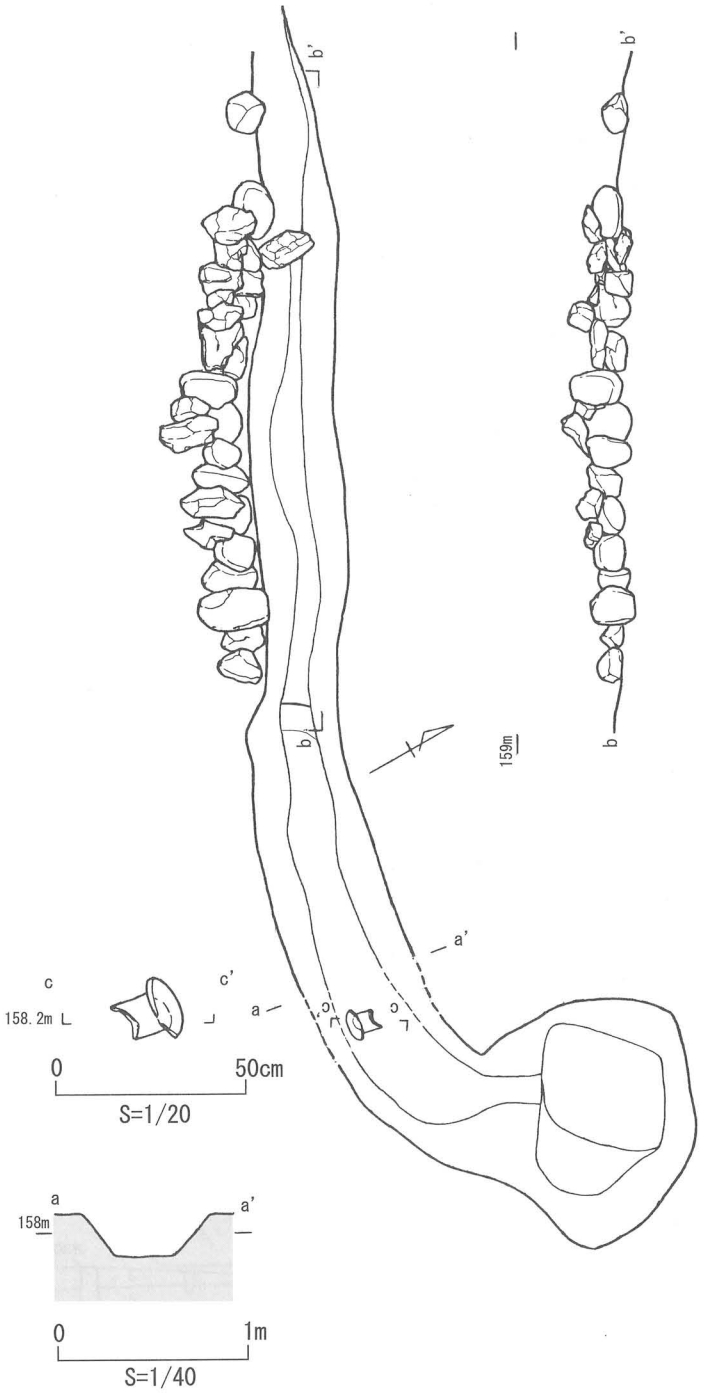


第18図　方形台状墓1　溝1平面・断面図

深さは残りの良いところで約0.25mを測る。溝の西半分は土壙墓58、59に切られており、東側の端は緩やかに北に向かってカーブを描いている。溝の南側、つまり方形台状墓1の内側には、溝に沿って列石が検出された。列石は一部動いているものはあるが、河原石及び周辺の石を立て並べたような状態で、方形台状墓の外側に向けて面をそろえて3m程度残っている。

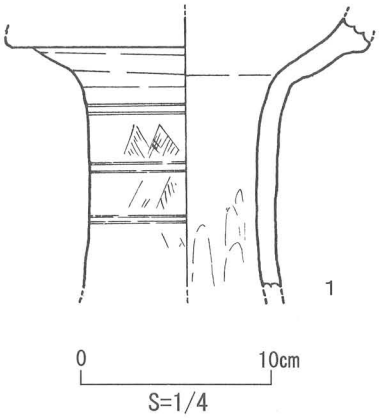


第19図　溝1出土遺物



第20図　方形台状墓1　溝2平面・断面図

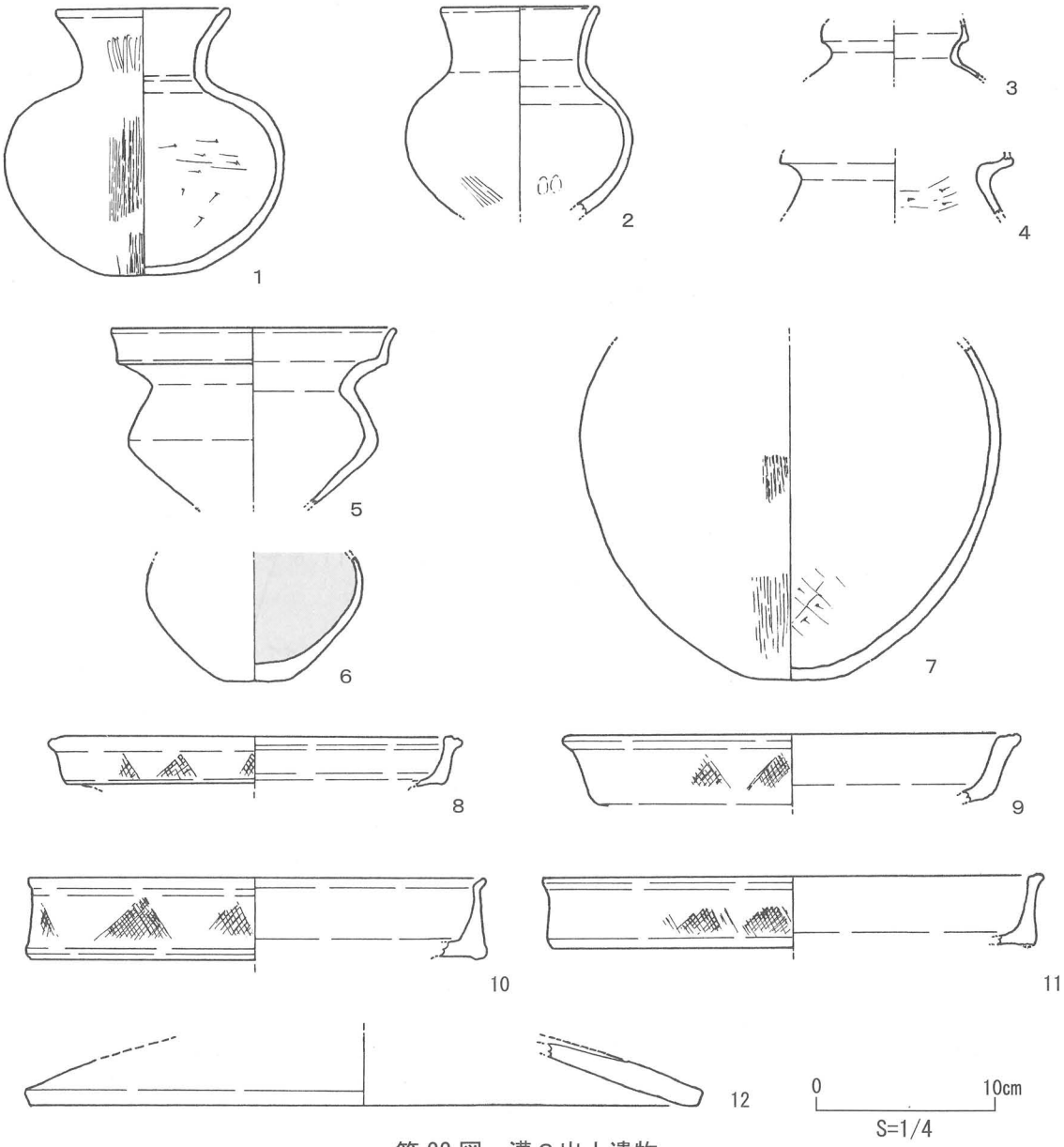
出土遺物は、溝の埋土直上から長頸壺の頸部片が出土している。頸部に凹線文２条が３段に施され、その間には鋸歯文が施されており、内面は指ナデの痕跡がみられる（第21図１）。時期は弥生時代後期中葉に位置づけられよう。



第21図　溝２出土遺物

溝３（第10・22図）

方形台状墓１の南東部を区画する溝で、長さ8.5m、幅1.85～２m、残存する深さは0.1～0.2mを測る。溝３は土壙墓６～９が切り合い関係にある。土壙墓６・７については先述のとおり、墓壙上に石を伴う土壙墓



第22図　溝３出土遺物

である可能性が考えられる。土壙墓８はわずかに痕跡が残るのみであるため不明だが、土壙墓９は、方形台状墓１内にある土壙墓と同タイプの両小口に溝をもつものであることから、方形台状墓１にともなう埋葬施設と判断できる。溝の西側には石が所々で検出されているが、溝に伴う列石として原位置を保っているのは土壙墓８の西側のものや、その北側にみられる４個の石が想定される。これらはすべて南東側（方形台状墓の外側）に面をそろえている。列石は河原石は少なく、角礫が多く用いられている。

溝３からは、一定量の土器が出土した（第22図）。小型の短頸壺（１・２）は外面ハケで、１の内面はヘラ削り、２の内面は指押さえがみられる。二重口縁の甕（３～５）のうち、５は外反する口縁部をもち、体部の中央が大きく張っている。６・７は甕の底部である。６は内面のみ丹塗りである。７の外面はタテハケ、内面はヘラ削りである。８～11は器台あるいは装飾壺の口縁部である。すべて二重口縁部分に鋸歯文が施されている。12は器台の底部である。６は内面丹塗りである。これらの土器は概ね弥生時代後期中葉に位置づけられる。

溝４（第23図）

溝４は部分的な検出であるが、方形台状墓の南西側を区画する溝である。長さ約12mで、溝５及び溝６と重複しているため、幅は不明であり、深さは判明しているところで0.1mである。溝の東側は残存状況が悪いため確認できないが、溝の西端部において列石が検出された。石は溝の内側に長さ2.3mにわたって部分的にみられ、河原石を使用しており、面をすべて南側、つまり方形台状墓１の外側に向けて並べられていた。

出土遺物は、溝４の東半部に溝５があり、そこからの出土遺物との区別が付きにくいが、溝５と重複していない西半部からの出土遺物はみられなかったことから、溝４からの出土遺物はみられなかったと判断した。

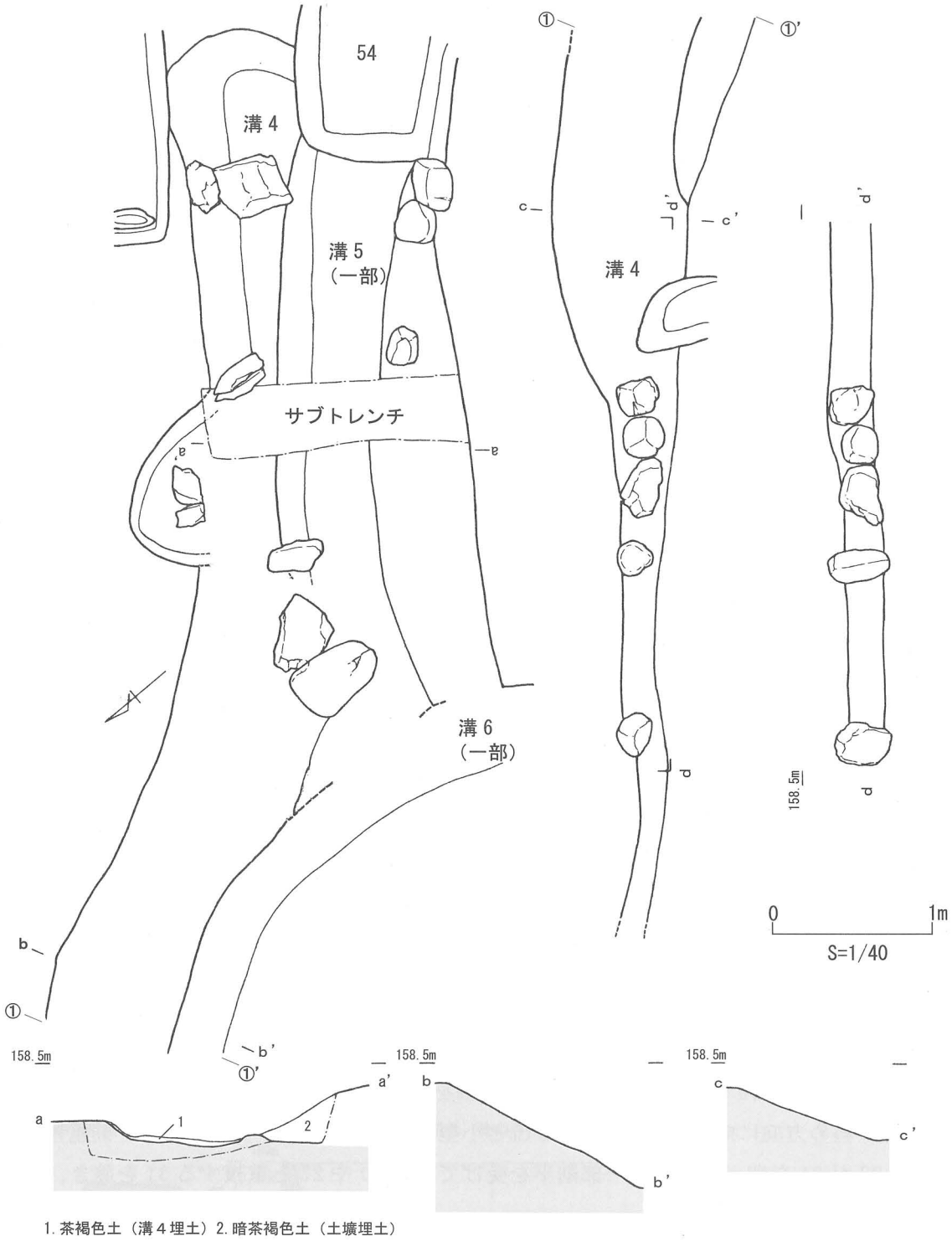
これらの溝で区画された方形台状墓１の規模は、溝２－溝４、及び溝１－溝３を方形台状墓１の区画と考えると、北東－南西14.4m、北西－南東11.8～12.7mとなる。

方形台状墓１に伴う埋葬施設（第10・15・24～29図）

方形台状墓１内で検出された埋葬施設は、溝で区画された空間の内部及び溝内に築かれたものを合わせると、土壙墓９、24～53、55～57の全部で34基と推測される。これらの土壙墓は概ね北東－南西方向、北西－南東方向の２方向に主軸をもつものが大半を占めるが、一部異なる方向のものもあり、区画内に隙間なく墓が築かれていることが分かる。主軸方向の中心は方形台状墓の区画溝２、４に平行する向きである北西－南東方向である。この方向はすなわち丘陵の尾根方向に並行している。もう一つの主軸方向は北東－南西方向で、先の主軸と直交する向きである。以下、各土壙墓についてみていく。

①土壙墓９（第10図）

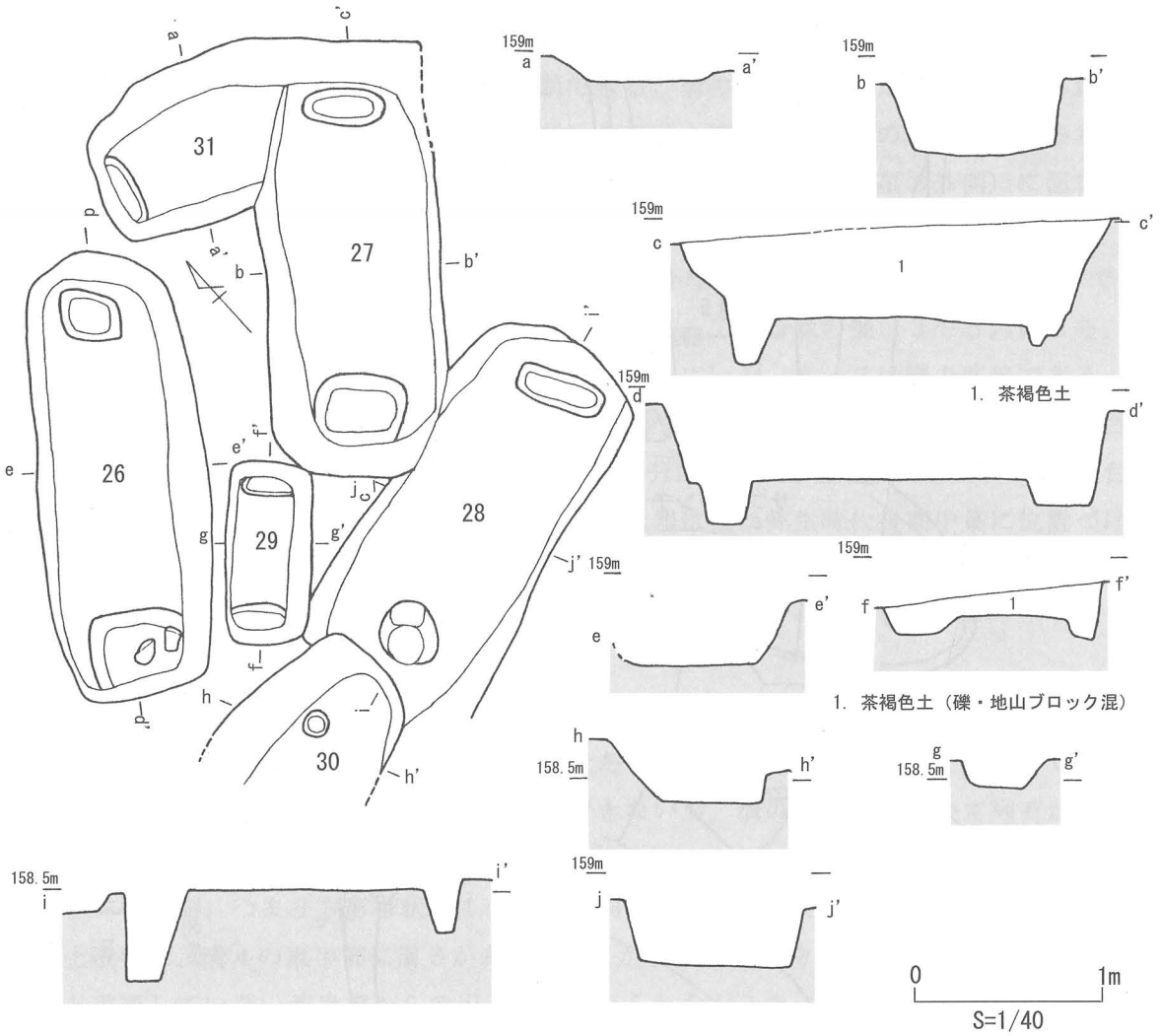
土壙墓９は、溝３に重なった状態で検出され、その前後関係は不明である。墓壙は全長266㎝、幅88㎝をはかる長方形で、墓壙の両小口部には木棺の側板を支える小口板の痕跡である小口溝を有する。



第23図　方形台状墓１　溝４平面・断面図

②土壙墓 24、25（第 15 図）

方形台状墓１の北隅にみられる土壙墓である。方形台状墓内の多くの土壙墓群とはやや主軸方向が異なり、南北方向に近い主軸をもつ土壙墓である。土壙墓 24 は全長 105 ㎝、25 が 133 ㎝を測るやや小型のものである。



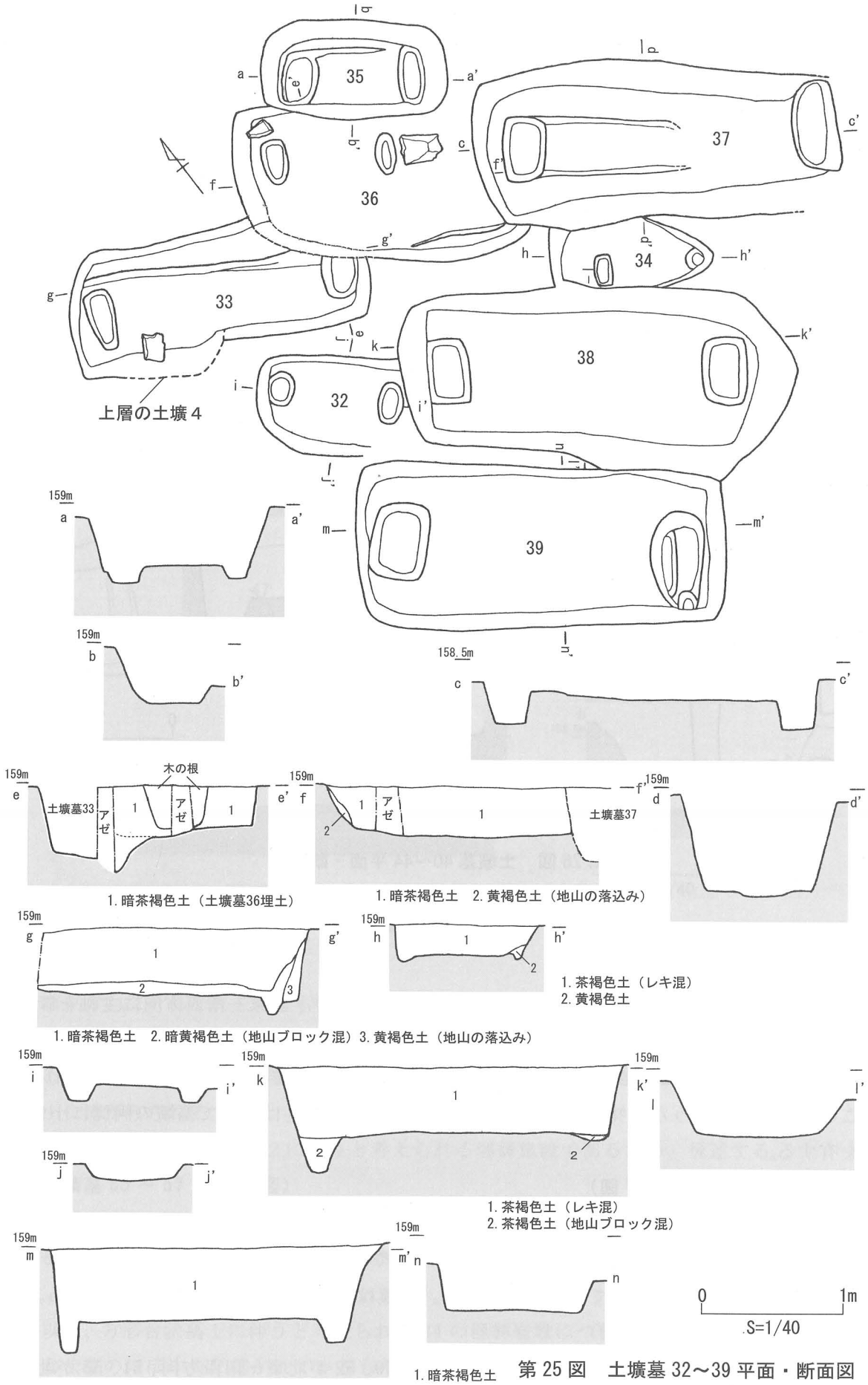
第 24 図　土壙墓 26～31 平面・断面図

③土壙墓 26 ～ 31（第 24 図）

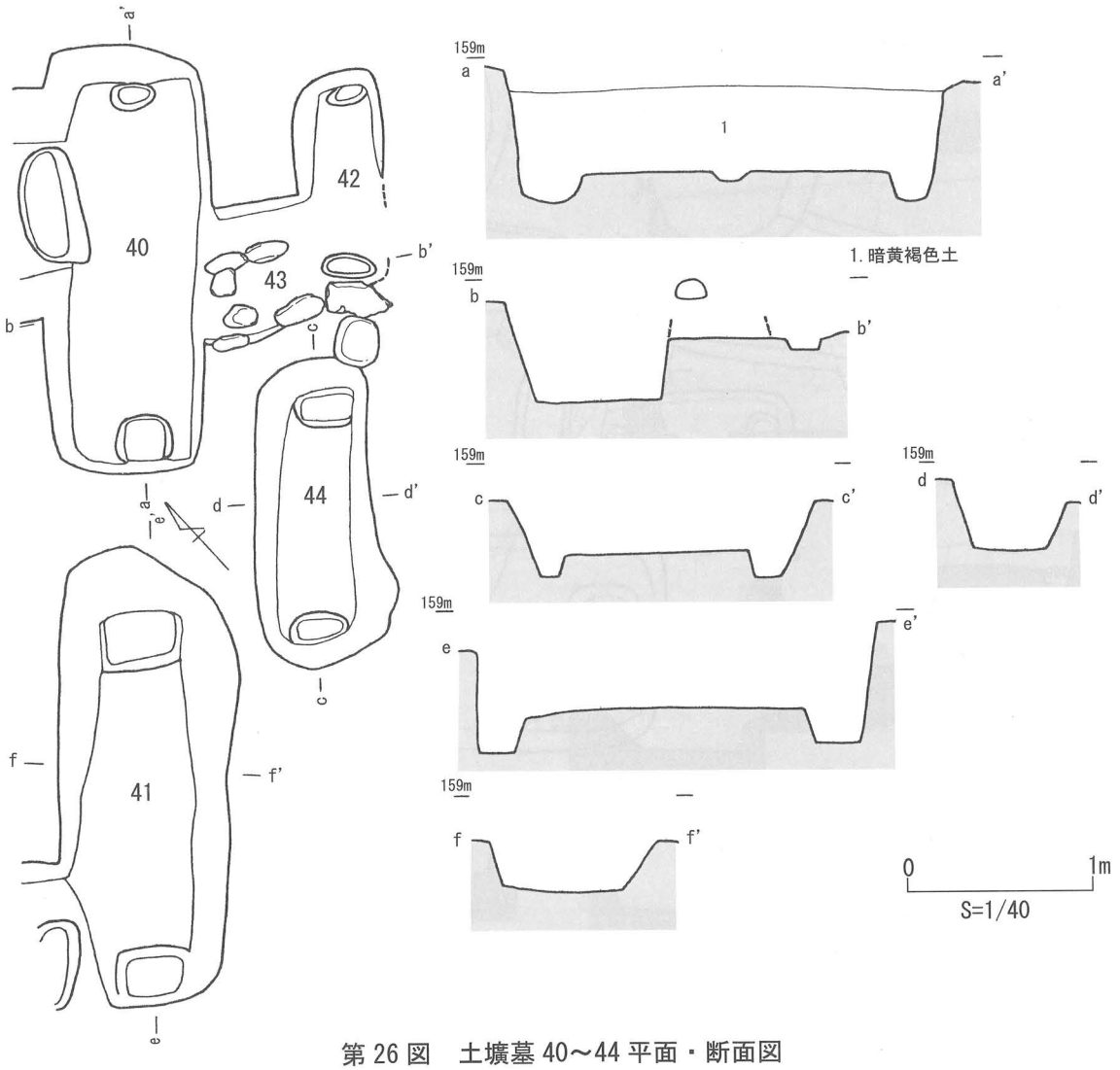
方形台状墓 1 の西隅にみられる土壙墓群である。26 は溝 1 を切っていることから、溝が埋まった後に築かれている。26、27 ともに主軸を北東－南西方向に向けている。28 及び 30 は主軸が斜め方向に向く。29 は全長 98 cmと小型の土壙墓である。31 は 27 と一部重複しており、27 が 31 を切っている。一部削平を受けている 30 や 27 と重複する 31 を除き、墓壙内に小口溝を有する。

④土壙墓 32 ～ 39（第 25 図）

方形台状墓 1 のほぼ中心に位置する土壙墓群である。溝 1 を切る 33 がわずかに主軸が異なるが、それ以外のものはすべて主な主軸方向である北西－南東方向に主軸を向けた土壙墓群である。すべて墓壙の両側に小口溝をもつ。37 ～ 39 は台状墓のほぼ中心に位置し、全長 250 cmを超える大型の土壙墓である。37 の墓壙底部には小口溝の幅に沿って一段低くなっている箇所がみられる。これは墓壙に据えられた木棺の側板の痕跡と推測される。34、35 はそれぞれ全長 115 cm、132 cmと小型のものである。



第 25 図　土壙墓 32～39 平面・断面図



第 26 図　土壙墓 40～44 平面・断面図

⑤土壙墓 40 ～ 44（第 26 図）

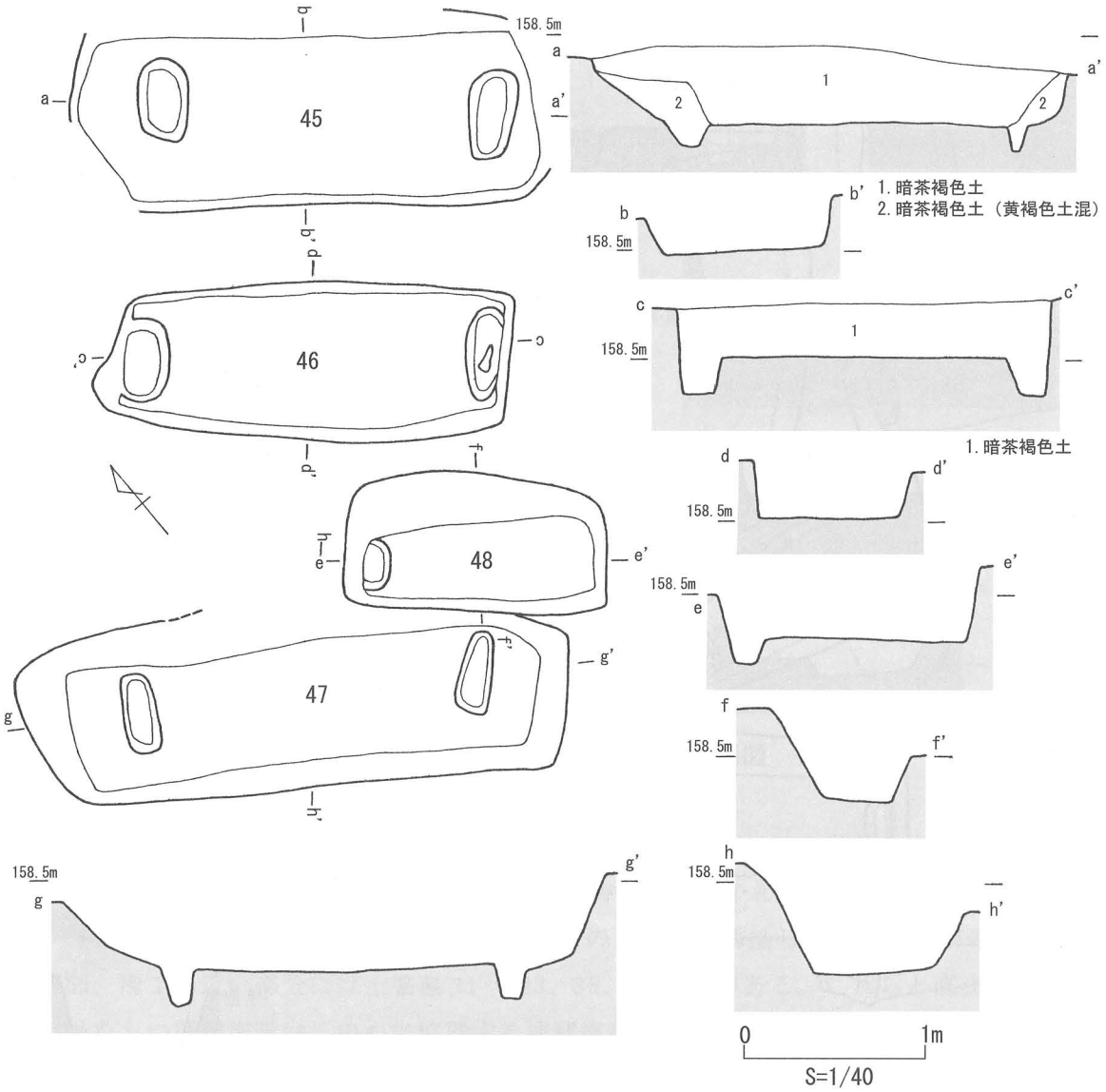
方形台状墓１の東隅に位置する土壙墓である。43 を除き、北東－南西方向に主軸をほぼそろえている。40、41 は縦に２つ並んだ状態で築かれている。43 は 40 と 42 の間にみられるが、他の土壙墓とは様相が異なり、墓壙内部に河原石が立て並べられた状態で検出された。この石が墓標のような意味をもつのかは不明である。43 以外はすべて墓壙の両側に小口溝を有する。

⑥土壙墓 45 ～ 48（第 27 図）

方形台状墓１の中心から南側にかけて築かれた土壙墓である。主軸方向はすべて北西－南東方向である。45 は 39 に隣接し、部分的に 28 や 41 と接するが新旧関係は不明である。47 と 48 の新旧関係についても明瞭ではない。規模は 47 が最大で、全長 300 ㎝を測る。

⑦土壙墓 49 ～ 53（第 28 図）

方形台状墓１の南隅に築かれた土壙墓である。49、52 が北東－南西方向、51、53 が北西



第27図　土壙墓45～48平面・断面図

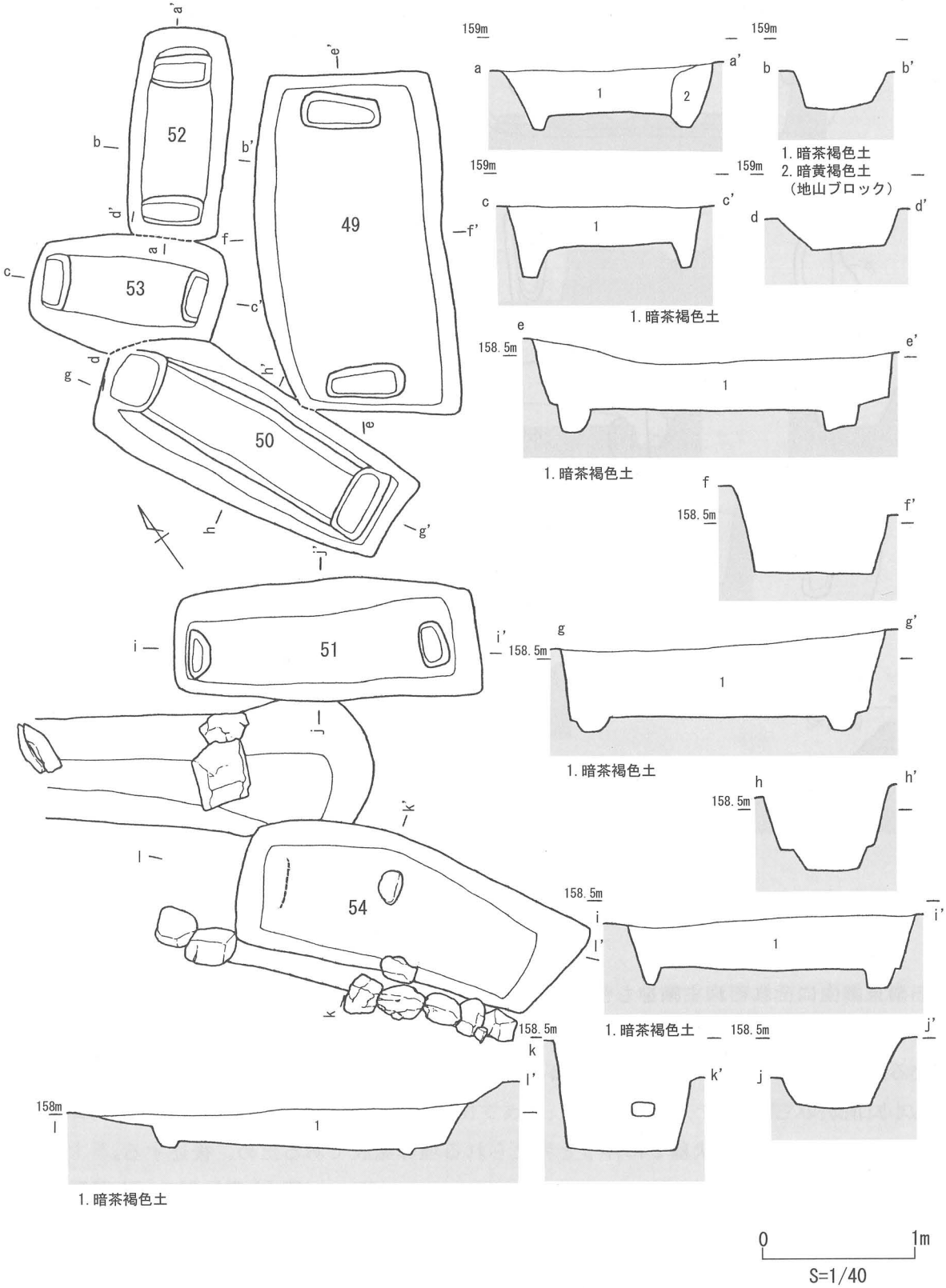
－南東方向にそれぞれ主軸をもつ。49は全長224㎝、幅122㎝の大型の墓壙である。この中で、50のみ斜め方向に墓壙が築かれている。50の墓壙底には、小口溝の幅で一段低くなっている。これは土壙墓37と同様であり、木棺の側板の痕跡と推測される。その他の土壙墓にも小口溝がみられる。

土壙墓54は方形台状墓2に伴うと考えられる埋葬施設であるため、後述する。

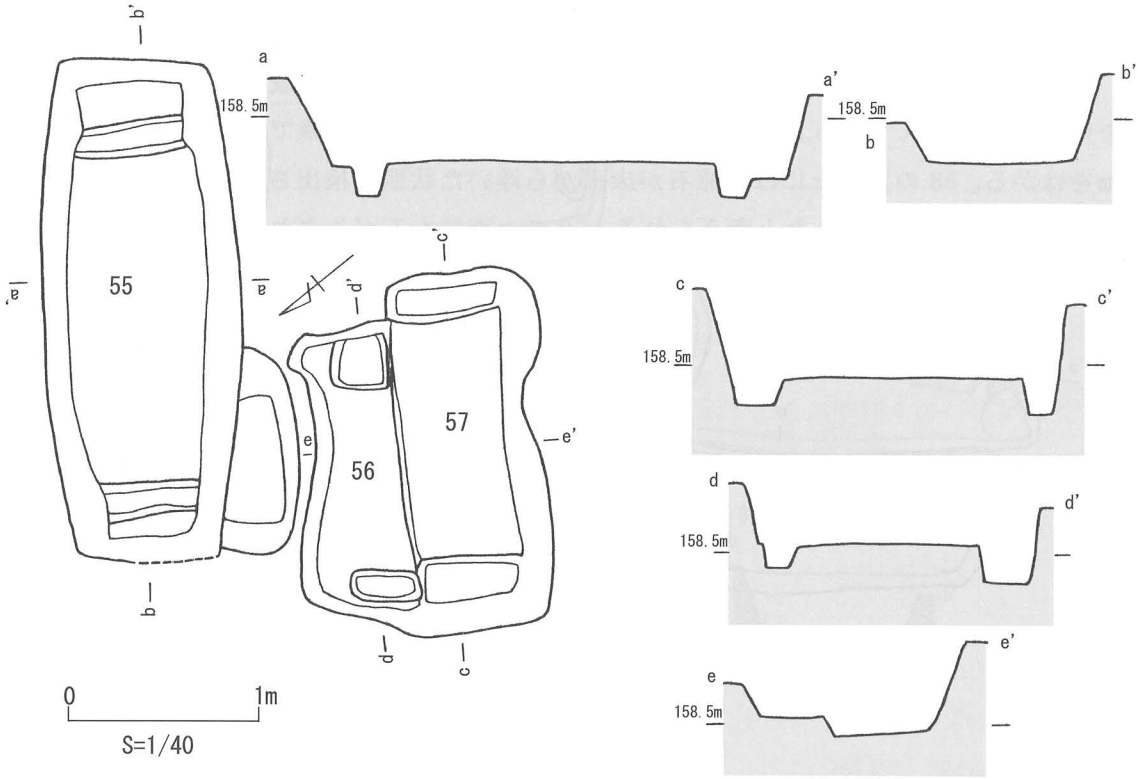
⑧土壙墓55～57（第29図）

方形台状墓1の北東に位置し、主軸をすべて北西－南東に向けた土壙墓である。56、57はやや小型でそれぞれ全長156㎝、188㎝である。56～58すべて墓壙に小口溝を有する。

以上、方形台状墓1に伴うと考えられる34の埋葬施設についてみてきた。このうち、方形台状墓のほぼ中央に築かれているものは主軸を北西－南東方向に向ける土壙墓37～39、



第 28 図　土壙墓 49～54 平面・断面図



第29図　土壙墓55～57平面・断面図

45などで、墓壙の全長は250㎝を超える。これら3基の周囲には、同じく主軸を北西－南東方向に向ける土壙墓37及び小型の34が38に隣接し、その北東0.5mほど間隔を空けて55～57がある。また、土壙墓45の南西0.5mのところに隣接して46～48がみられる。北西部、溝1に近い部分には土壙墓31～33、35、36などがある。これらと直交する向きに主軸をもつ埋葬施設は、中心に位置する埋葬施設の隙間を埋めるような形で配されており、主に南東側でみられる。土壙墓40～42、44、49、52などがこれにあたり、溝3内に位置する土壙墓8なども同様の向きを示している。北西側で同様の主軸方向を示すのは土壙墓26、27、29などである。

区画内には、直交関係にある土壙墓がほとんどの割合を示すが、一部斜め方向に主軸をもつものがある。その土壙墓は区画内の隅にみられ、北隅の土壙墓24、25、西隅の土壙墓28、30、南隅の土壙墓50などがあげられる。これらの土壙墓の配置は、方形台状墓1の性格を考える上で重要な埋葬配置であると考える。

土壙墓群の墓壙をみると、墓壙の片側のみに小口溝をもつもの、あるいは一部判明していないものもなどはあるが、短辺の両側に小口溝をもつものが大半を占めることがわかる。

土壙墓埋土中からの出土遺物はほとんどなく、土壙墓37、50及び53から弥生土器の小片が出土した以外はみられなかった。

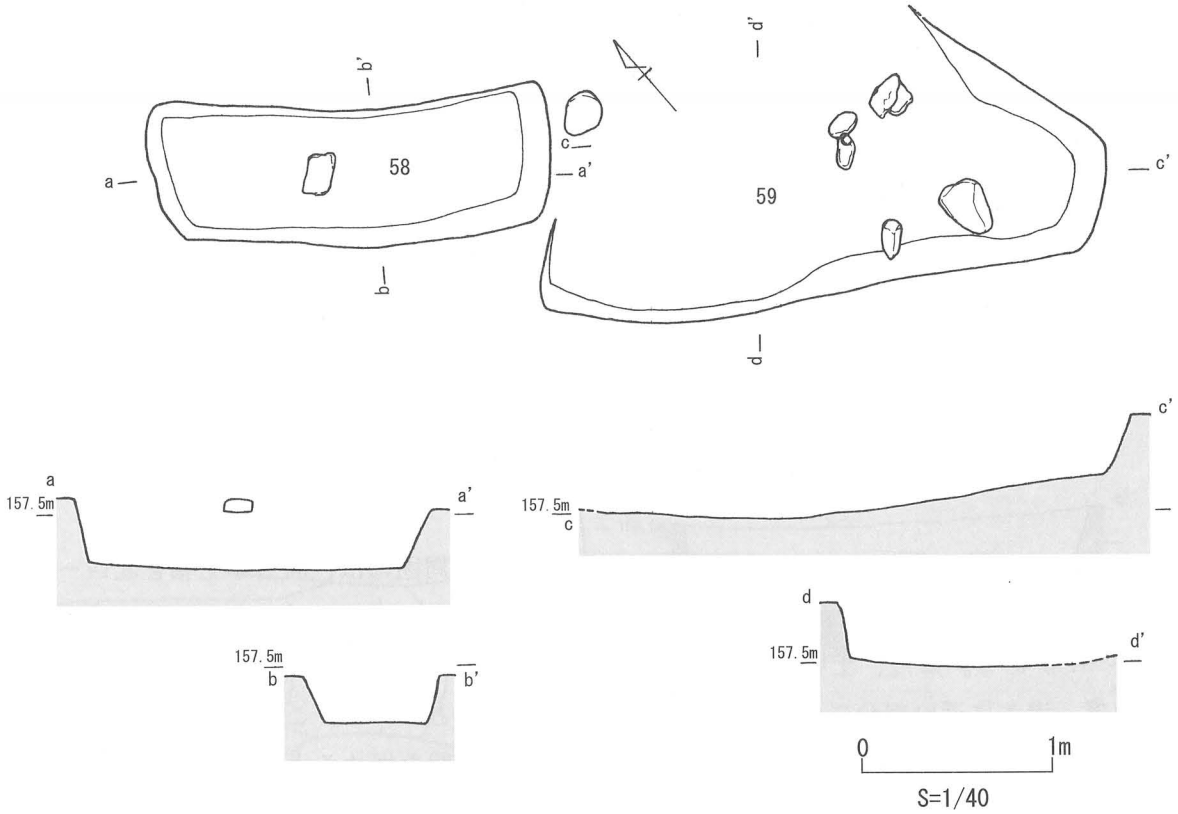
C群（土壙墓58～65）（第30～33図）

方形台状墓1の北西部を画する溝2から1m程離れた地点に、主軸を北西－南東方向に

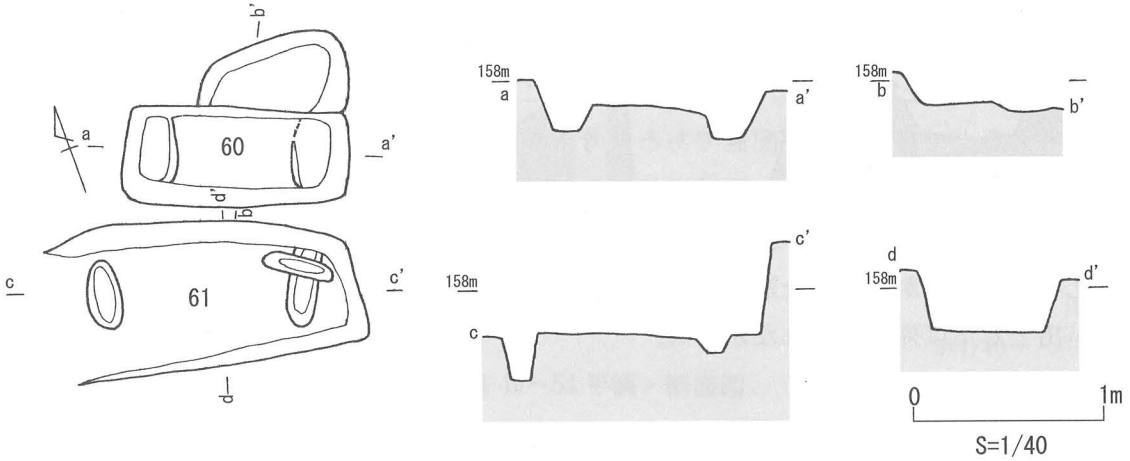
向けた土壙墓 58 ～ 65 からなる一群がある。いずれの土壙墓からも遺物は出土しなかった。

①土壙墓壙墓 58・59（第 30 図）

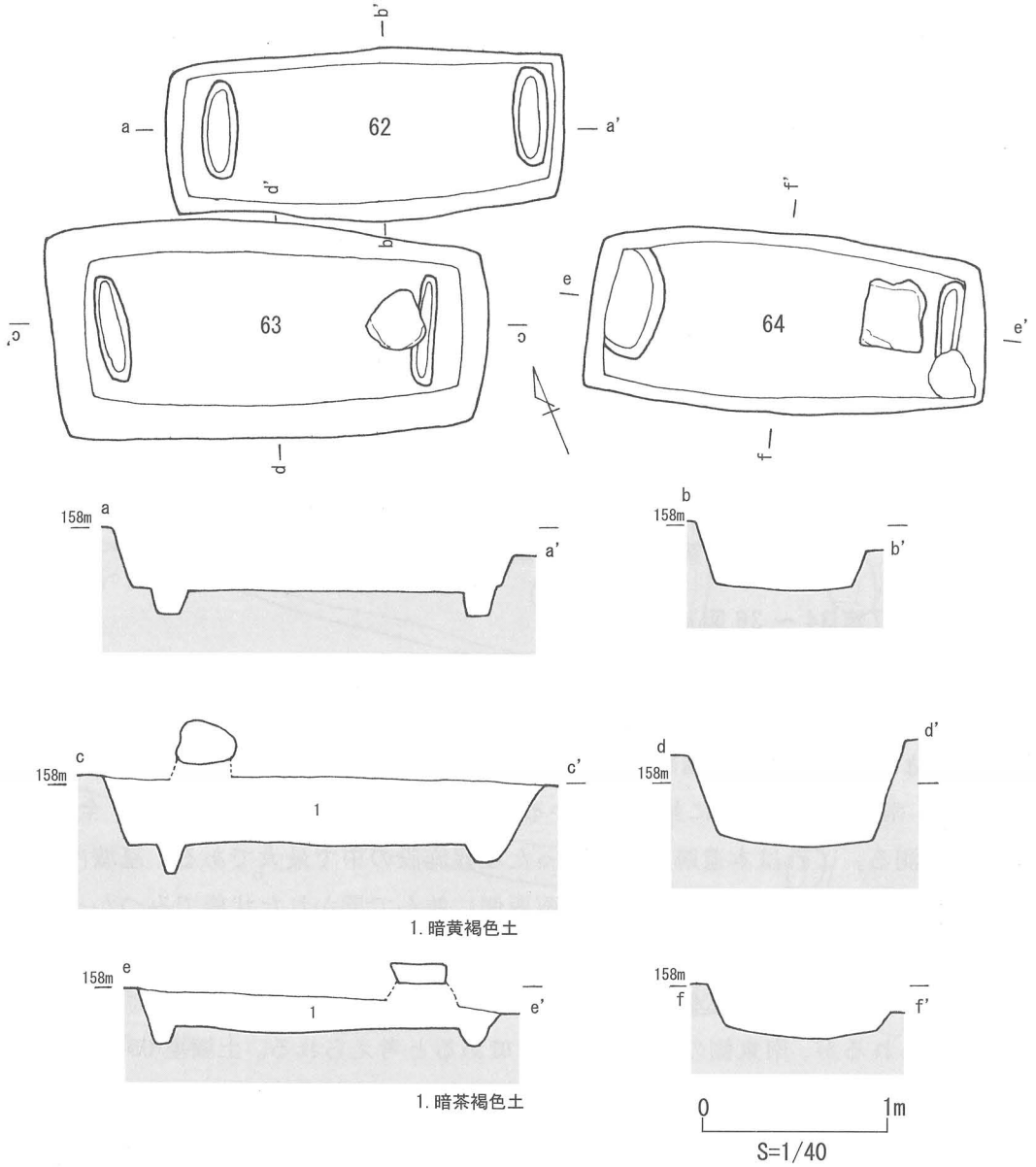
方形台状墓 1 のある丘陵から少し下がったところに位置する土壙墓である。溝 2 の西側を切る形で築かれている。59 は遺存状況が悪く、全体の形が明確ではない。58 は全長 210 cmをはかる。58 の墓壙上には河原石が床面から浮いた状態で検出された。この河原石は墓壙上に墓標として置かれたと考えられる。59 の上面にも石がみられるが、方形台状墓を構



第 30 図　土壙墓 58・59 平面・断面図



第 31 図　土壙墓 60・61 平面・断面図



第 32 図　土壙墓 62～64 平面・断面図

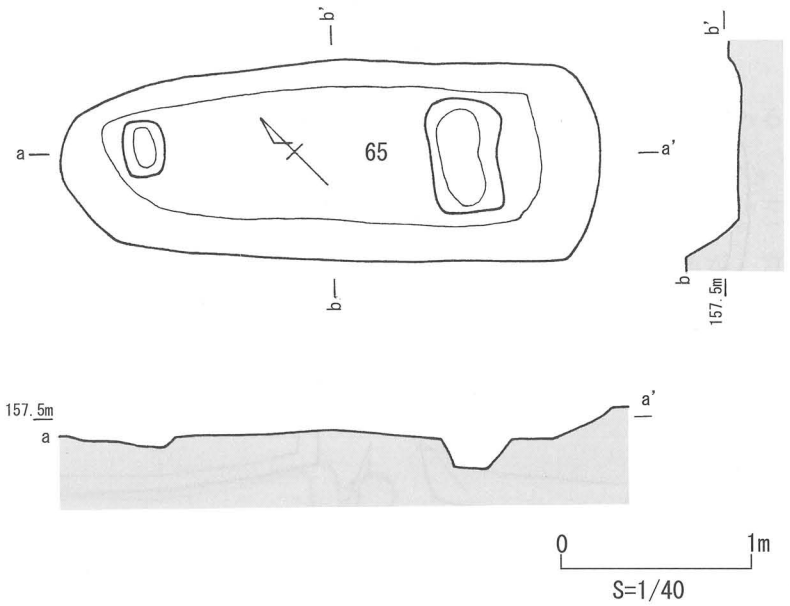
成する列石が転落したものと推測される。ともに小口溝はみられない。

②土壙墓 60 ～ 64（第 31、32 図）

主軸をほぼ同じくする土壙墓群で、すべて墓壙の両側に小口溝をもつタイプのものから構成される。土壙墓 63、64 の墓壙上には一辺 30 ㎝程度の河原石が床面から浮いた状態でみられることから、土壙墓 58 同様、墓標として置かれたものと考えられる。60 は全長 119 ㎝と小型であるが、土壙墓 62 ～ 64 は全長 220 ～ 230 ㎝前後で同大である。

③土壙墓 65（第 33 図）

土壙墓 62 ～ 64 から 1.5m離れたところ、丘陵の最も低いところで検出された。全長 284 ㎝と大型で、両側に小口溝をもつ。

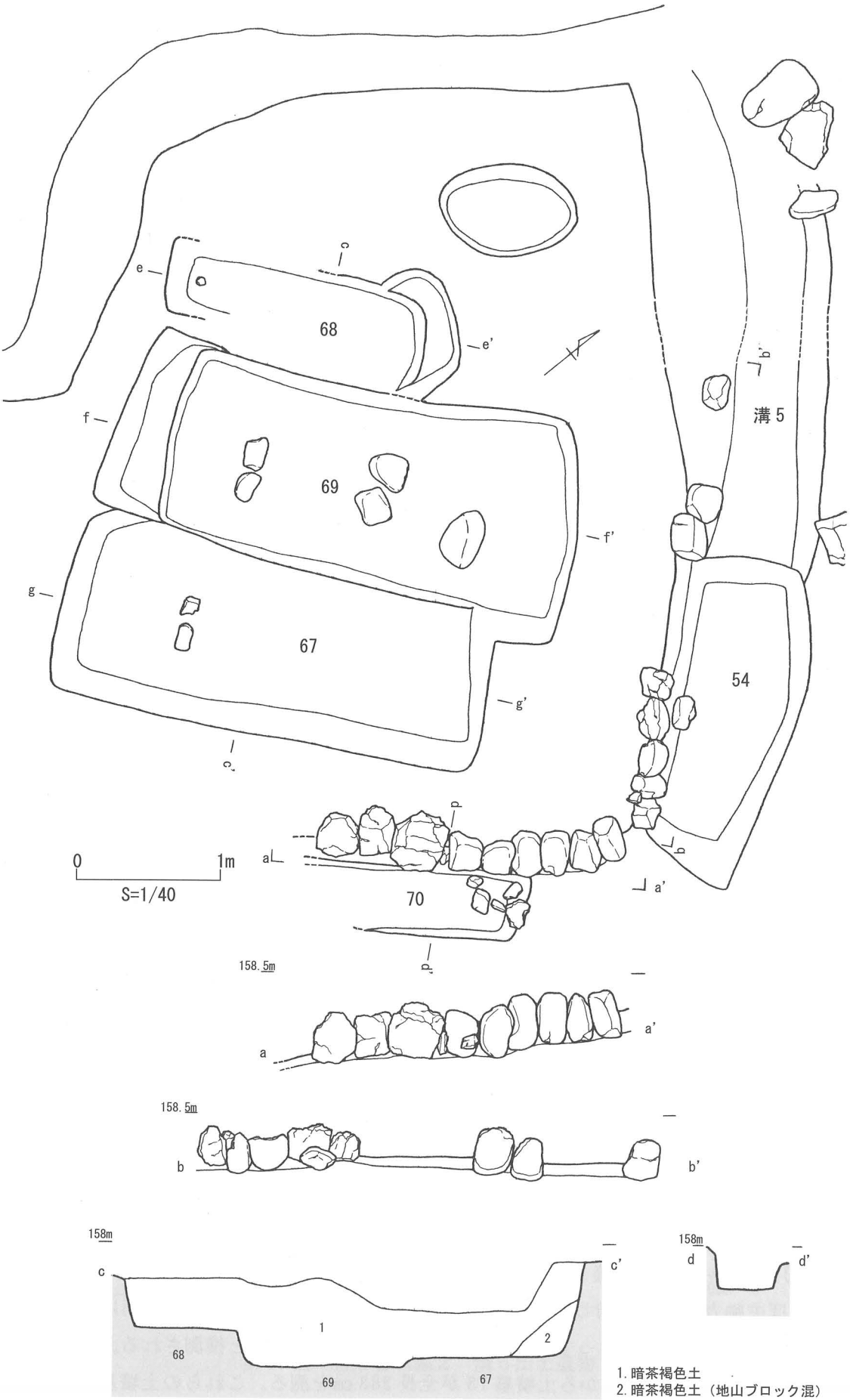


第33図　土壙墓65平面・断面図

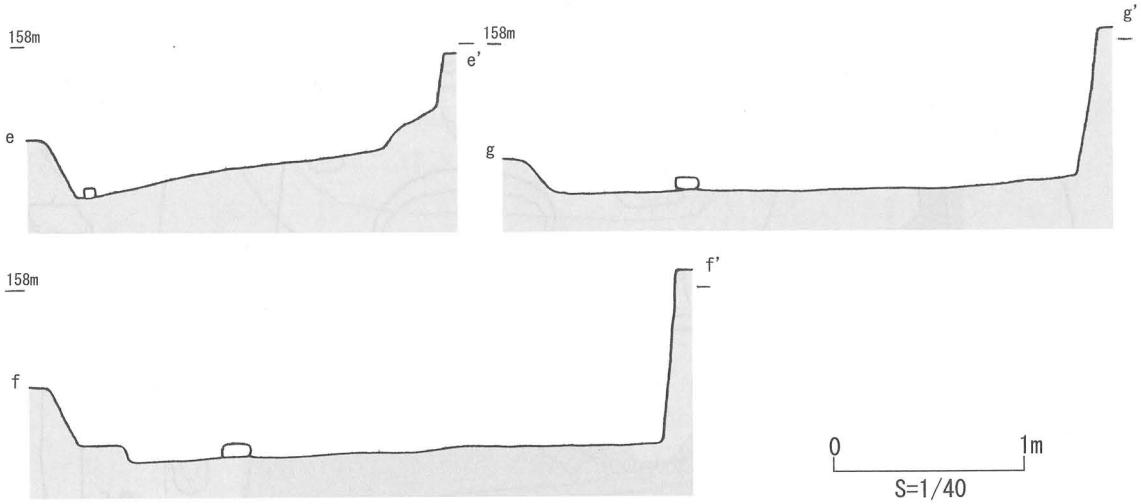
方形台状墓２（第34～36図）

方形台状墓１の南東に接し、溝５によって区画されている。盛土はなく、地山を削りだして造成されたと推測される。規模は、北東－南西５ｍ、北西－南東6.2ｍである。方形台状墓に伴うと考えられる埋葬施設は全部で５基あり、そのうち中心となるものが３基（土壙墓67～69）南西－北東方向に並列している。最も大きなものは土壙墓69で、全長350㎝、幅163㎝を測る。これは本遺跡でみつかった埋葬施設の中で最大である。墓壙内の床面には20㎝×10㎝程度の平らな石が２個、南西側に並んで置かれた状態でみつかっていることから、これらは枕石であると推測され、頭位方向は南西側であったことが分かる。墓壙上に河原石が３個、浮いた状態でみつかっており、墓壙中心部の２個は墓標の石である可能性も考えられるが、南東側の１つは転落石であると考えられる。土壙墓69に隣接する土壙墓67も全長304㎝を測る大型の土壙墓で、69同様、南西側に枕石２個が並べて置かれている。また、69の北西側に隣接する土壙墓68は、全長185㎝と他の２基に比べて小型であり、墓壙南西側に枕石と考えられる石が１個置かれている。これらの３基は、配置や埋土の状況から、同時期に築かれ、埋葬がなされたと考えられる。区画をなす溝５は、斜面の上側では浅い溝として残っているが、台状墓の南東側では段となってわずかにみられるのみである。区画の北東側では溝に並行して列石が鉤状に残る。列石は主に河原石からなり、40㎝×20㎝程度の石を縦に並べている。列石は北東側で2.5ｍ、南東側で２ｍ程度遺存しているが、両側でさらに続いていたと推測される。方形台状墓の周囲２箇所、列石に沿った形で土壙墓54と土壙墓70が検出されている。土壙墓54は溝５内に位置する全長226㎝の土壙墓で、小口溝や枕石などはみられない。土壙墓70は南東部の列石に沿って検出されたもので、幅が狭く、半分は削平により遺存していないため、土壙墓であるか判別が付きにくいが、ここでは土壙墓と判断した。

出土遺物は、溝５埋土からまとまった量の土器が出土している。１は長頸壺の頸部である。口縁部を欠き、頸部は４段に刻まれた鋸歯文と、その間に施された３段の沈線文で加飾さ



第34図　方形台状墓２（土壙墓54・67～70・溝５）平面・断面図（１）

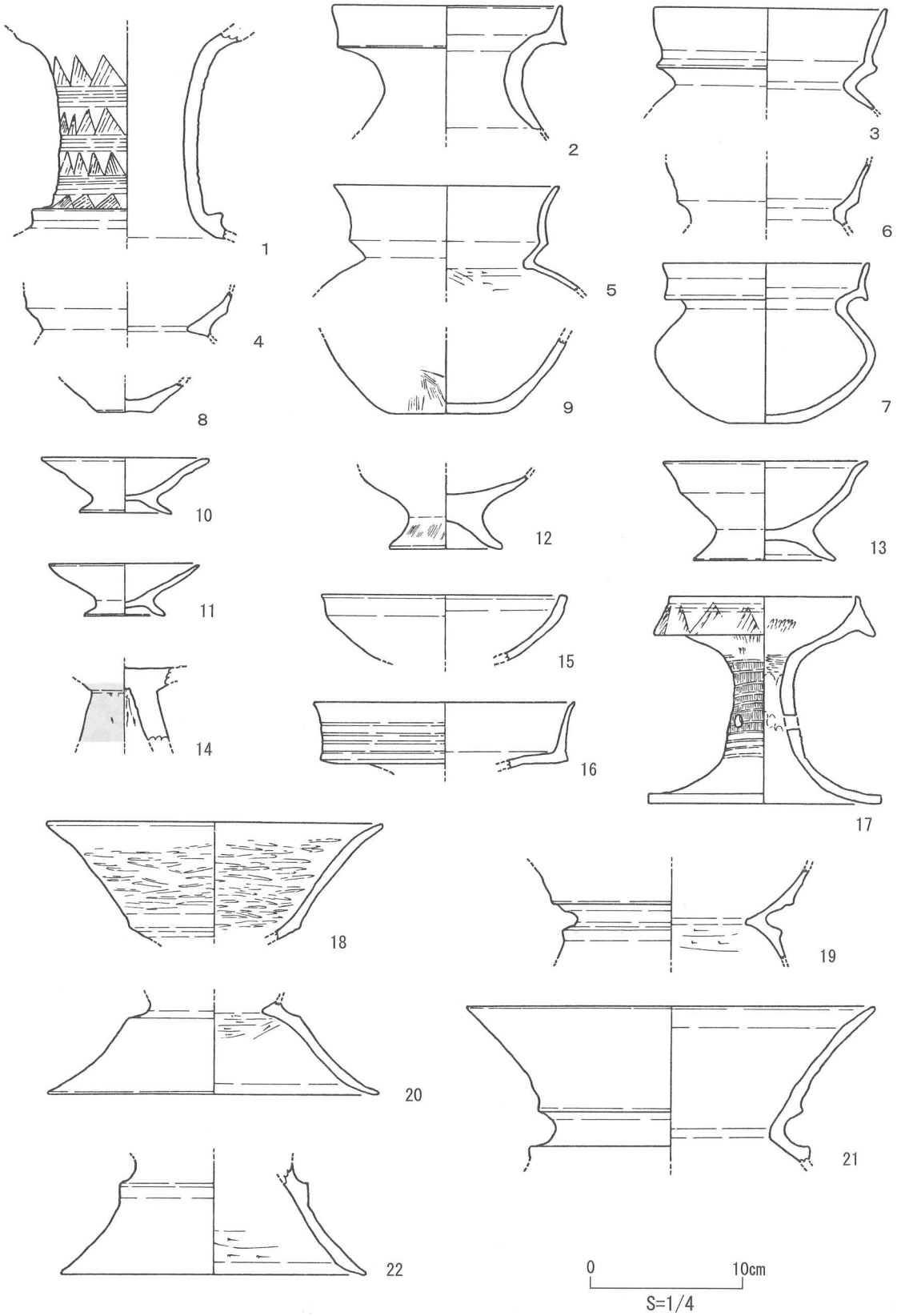


第35図　方形台状墓２（土壙墓67～70・溝５）平面・断面図（２）

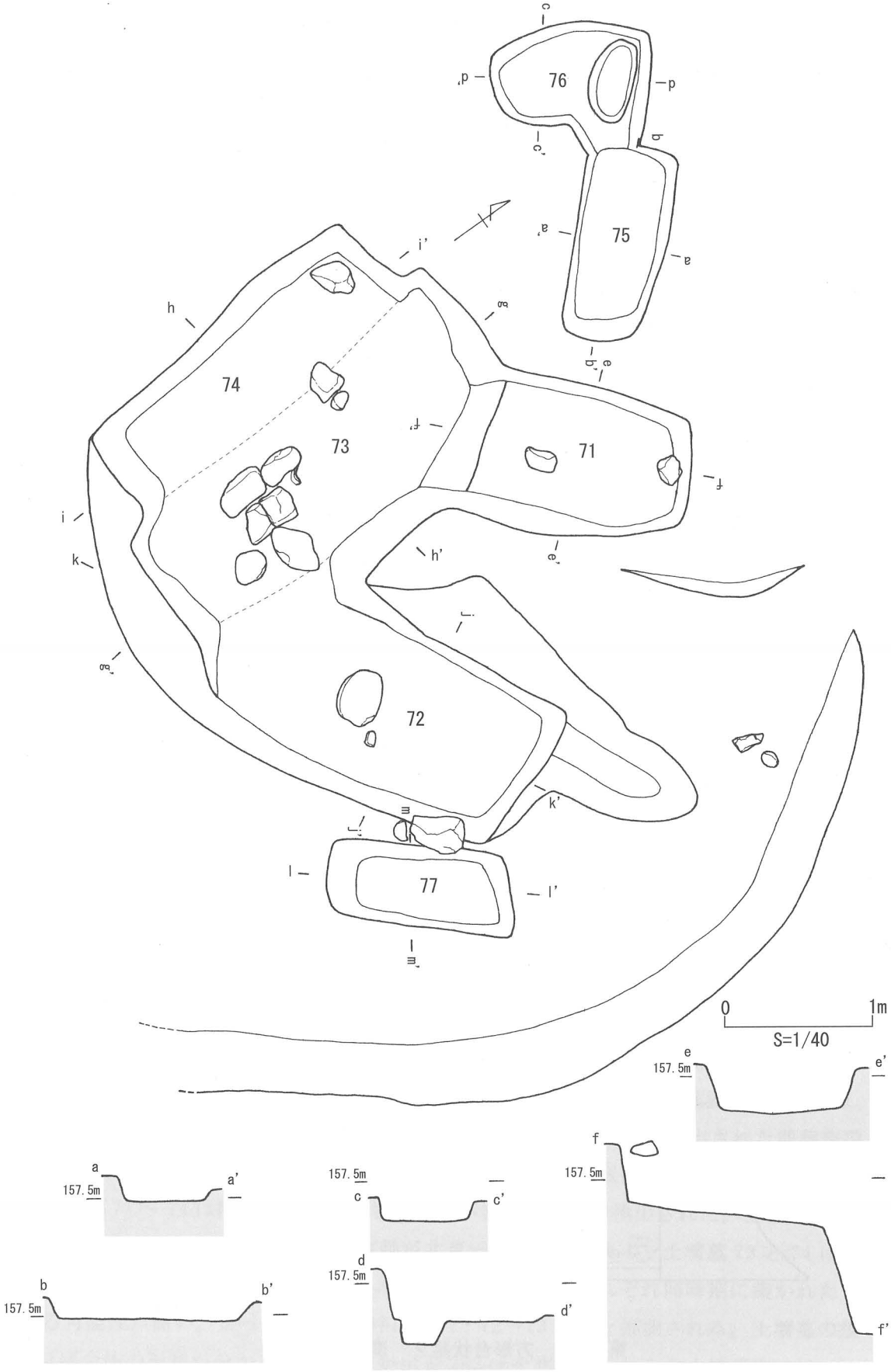
れている。２は二重口縁の短頸壺である。３～６は甕の口縁部で、やや外反あるいは外側に拡張する二重口縁をもつ。７は小型の甕である。10から13は低脚杯で、10はやや口縁部が外反し、11は口縁部が直線的に広がる。13の口縁部は坏部と口縁部との間に明瞭な稜をもつ。14、15は高杯の一部で、14の外面は丹塗りである。16は口縁部に沈線文が施されている。器台の口縁部と推測される。17は小型の器台で、口縁部が鋸歯文で飾られる。脚部の３方向には円孔が穿たれている。18～22は鼓形器台である。いずれも筒部は短く太い。18の器受部は外面・内面ともヘラミガキが施されている。19、20、22は器受部の一部及び脚台部で、内面にヘラ削りが施されている。このほか、方形台状墓内の土壙墓67～69から小型の甕の口縁部片、及び土壙墓54から弥生土器の小片などが出土した。これらの土器は、１の長頸壺の頸部がわずかに上方に広がっていることや、17の器台の形態や、甕の口縁部形態などは後期中葉頃の特徴を備えているが、鼓形器台の筒部が短い点等、後期後葉の特徴をもつものもある。

方形台状墓３（第37～39図）

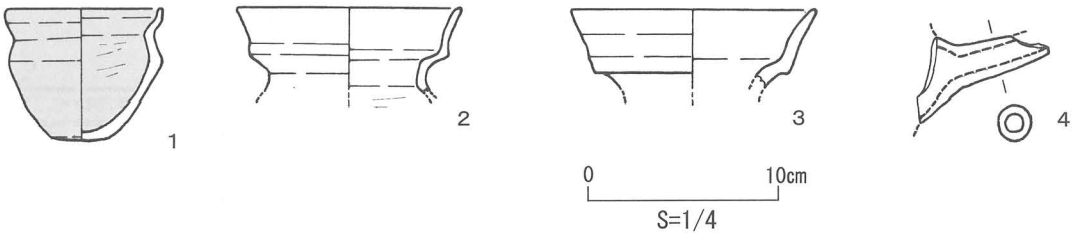
方形台状墓２の北西側に隣接して検出された方形台状墓である。方形台状墓２との間は溝ではなく段状の区画があり、斜面上側には方形台状墓１に伴う溝４がある。西側は削平されているため、全体の形状は把握できないが、隅丸方形の区画になると推測され、規模は、北東－南西6.4m、北西－南東６m以上になると考えられる。区画内で検出された埋葬施設は、土壙墓71～77の７基であり、小型の土壙墓75、76もこの区画内に入るものと推測される。土壙墓71～74は隅丸長方形の土壙墓４つが接した状態で検出された。土壙墓71は73に切られている。土壙墓71と72は主軸が北東－南西方向であり、土壙墓73と74は南北にほぼ主軸方向がほぼ同じで並列してみられることから、それぞれ同時期に築かれたものである可能性が高い。よって、築造順序は、71・72→73・74と推測される。土壙墓の規模は、ほぼ全体の形状が分かる土壙墓73が全長283㎝を測る。これらの土壙墓内には、一辺20～30㎝程度の河原石が墓壙床面から浮いた状態で検出されているが、これらは斜面



第36図　方形台状墓２　溝５出土遺物



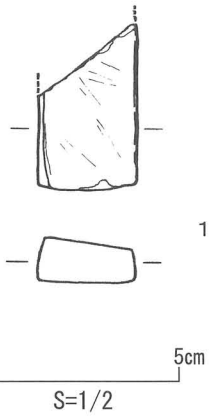
第37図　方形台状墓３（土壙墓71～77）平面・断面図



第38図　方形台状墓３　土壙墓73・74上層出土遺物

上からの転落石であるのか、元位置を保ち、墓標石のような役割をもつものであったかは不明である。

出土遺物は、土壙墓71～74の掘削中に出土した弥生土器が少数みられるほか、土壙墓73、74の上層で土器が出土している（第38図）。１は小型の甕で、外面と内面に丹塗りが施されている。実用品でなく、ミニチュア品と考えられる。２、３は甕の口縁部と考えられる。いずれも外反する二重口縁である。４は注口土器の注口部である。また、土壙墓72からは砥石が出土している（第39図）。残存長は4.2㎝である。これらの土器は甕の口縁部の形状から弥生時代後期後葉のものと推測される。



第39図　方形台状墓３
土壙墓72出土遺物

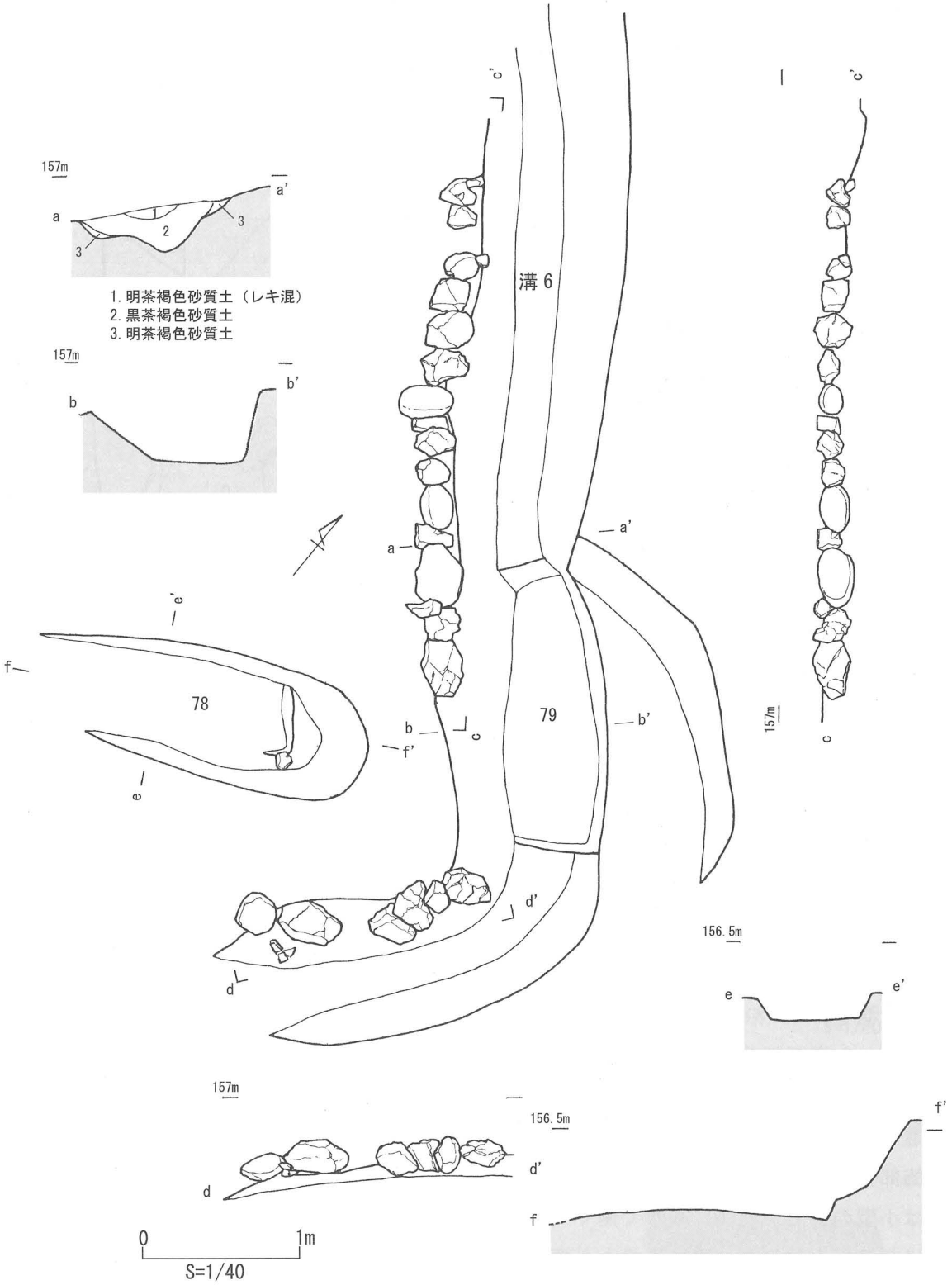
方形台状墓４（第40・41図）

方形台状墓３の斜面下に位置する方形台状墓で、南西側は削平を受けている。盛土はなく、地山を削り出して造成されたと推測される。規模は、北東－南西3.8m以上、北西－南東７m以上である。方形台状墓に伴う埋葬施設は土壙墓78のみであるが、中心からやや南東方向に寄っているため、本来は別に埋葬施設が存在していた可能性がある。小口部に僅かに段がみられるが、これが小口溝であるかは不明である。また、この段に接して10㎝程度の石が１個検出されており、これが枕石の一つである可能性がある。方形台状墓４を区画する溝６は等高線に並行して掘削されており、南西に鉤形に曲がる。残存長7.5m、幅0.9～１mを測る。溝に沿って列石がみられ、遺存するのは等高線に平行した方向で3.4m、鉤形に曲がった南西部分で1.6mである。方形台状墓３と異なり、河原石よりも角礫が多く使われ、また、石を縦にして並べるのではなく、横方向にして並べられている。

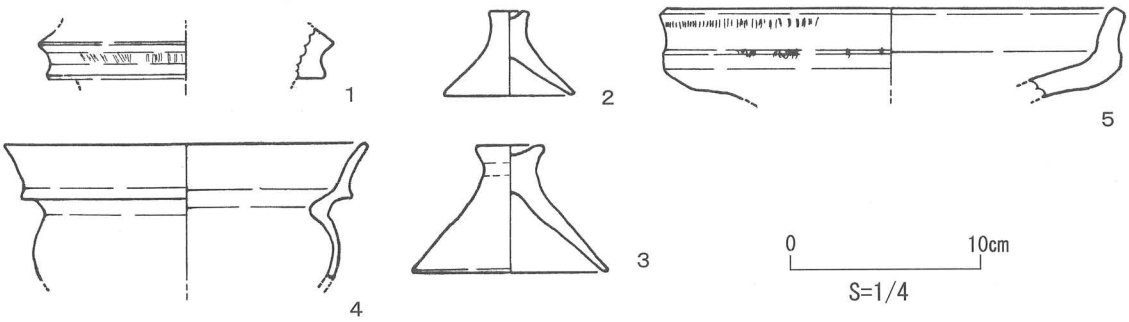
遺物は、溝６から弥生土器が出土している（第41図）。１は長頸壺の体部につけられた装飾部分と推測される。装飾部には爪形文のような刻目が施されている。２、３は蓋である。４は小型の甕で、外側に大きく開く二重口縁をもつ。５は高杯の口縁部と考えられる。端部に刻目がみられる。甕の形態から概ね弥生時代後期後葉のものと推測される。

溝７（第42・43図）

丘陵の北側斜面で検出された溝である。長さは約7.6m、幅は丘陵上位で１m、下位で2.5mを測る。溝は、上端は土壙墓58、59の北側から検出され、下端は調査区外に延びる。



第 40 図　方形台状墓４（土壙墓 78・79・溝６）平面・断面図



第41図　溝６出土遺物

溝の性格は不明だが、自然流路である可能性も考えられる。

出土遺物は、調査区北端部から出土した弥生土器の底部がある。上からの流れ込みと考えられる（第43図１）。

３．丘陵頂部上層で出土した弥生土器（第44～52図）

本発掘調査によってみつかった方形台状墓内の土壙墓や、それ以外の土壙墓の埋土中からは出土遺物はほとんどみられなかったが、表土除去後の暗灰色土中から多数の弥生土器が出土した。遺物の大半はこの段階で出土したものである。これらの弥生土器は墓に供献されたものと考えられるが、元位置をとどめているものはない。

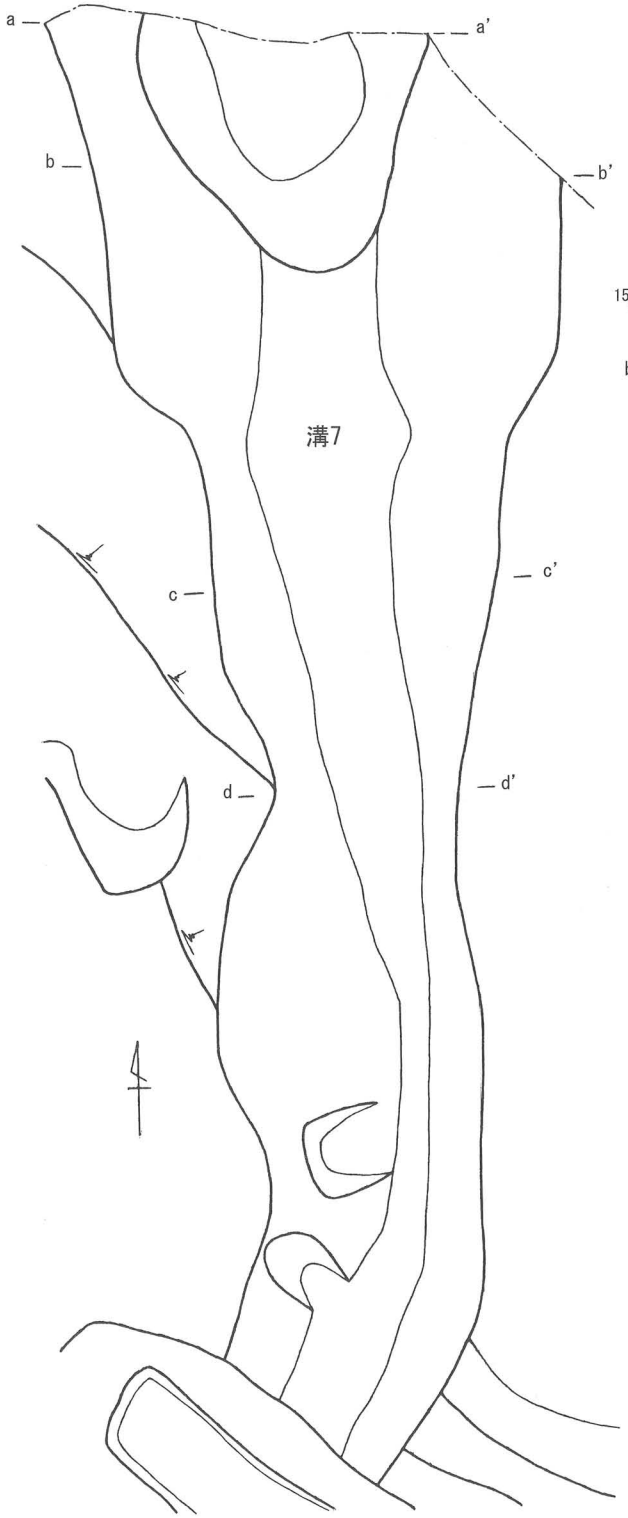
出土した弥生土器については、調査開始時に設定したアゼを境にして区分した区画ごとに報告する。

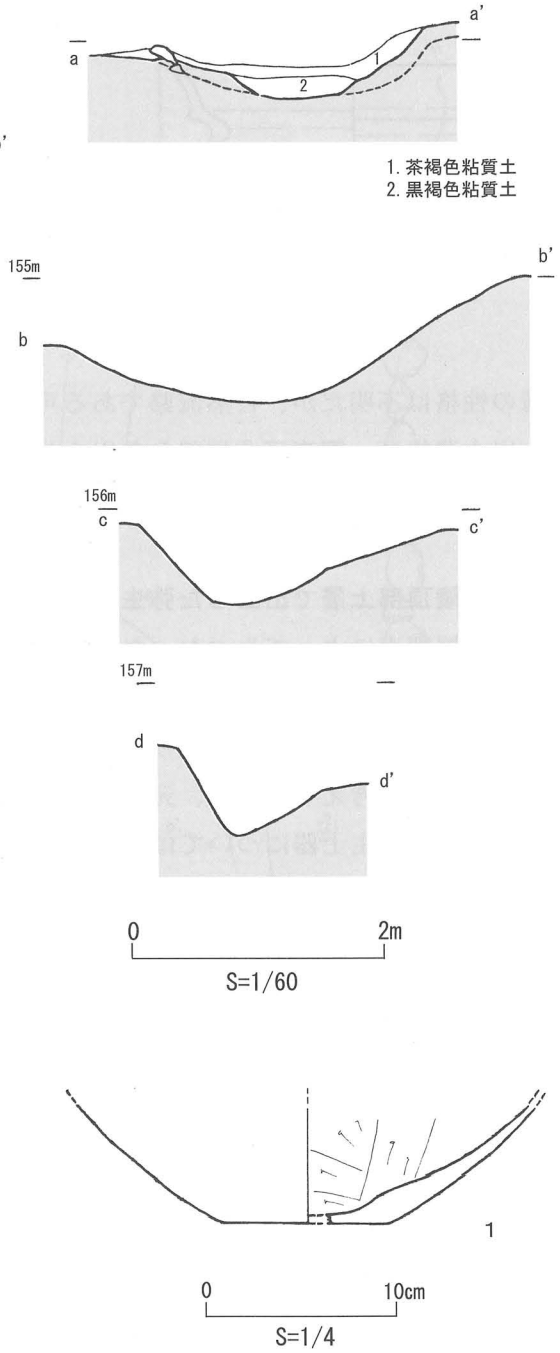
また、1997年に実施された試掘調査時に出土した土器についても、同じ丘陵上に設定されたトレンチであるため、ここで報告する。今回の調査との対応関係は、トレンチ１（＝Ａ区）、トレンチ２（＝Ｂ区）、トレンチ３（＝Ｃ区）、トレンチ４（＝Ｄ区）となる（第44図）。

Ａ区出土土器（第45図）

丘陵北側部分を中心に出土した土器である。１～５は高杯である。１は杯部の底に穿孔がなされている。脚部には４方向にスカシ孔がみられる。３、４の杯部は口縁部が大きく外反する。４の高杯は、口縁部の立ち上がり部分が段をなしており、円柱状の脚部をもつ。口縁部付近と杯部付近にそれぞれスカシ孔がみられる。スカシ孔は口縁部に４個×４箇所、杯部に２個×３箇所でみられる。５は短く直線的に開く高杯脚部である。６は壺あるいは甕の底部である。内面にヘラ削りがみられる。７～19は器台である。９、11は口縁部に大きく櫛描波状文が描かれ、10、12には鋸歯文が描かれている。15、16は器台の脚部中央付近で、15には突帯が巡らされている。16は長方形のスカシ孔が２段にみられる。17～19は小片であるが大型の器台の脚部である。

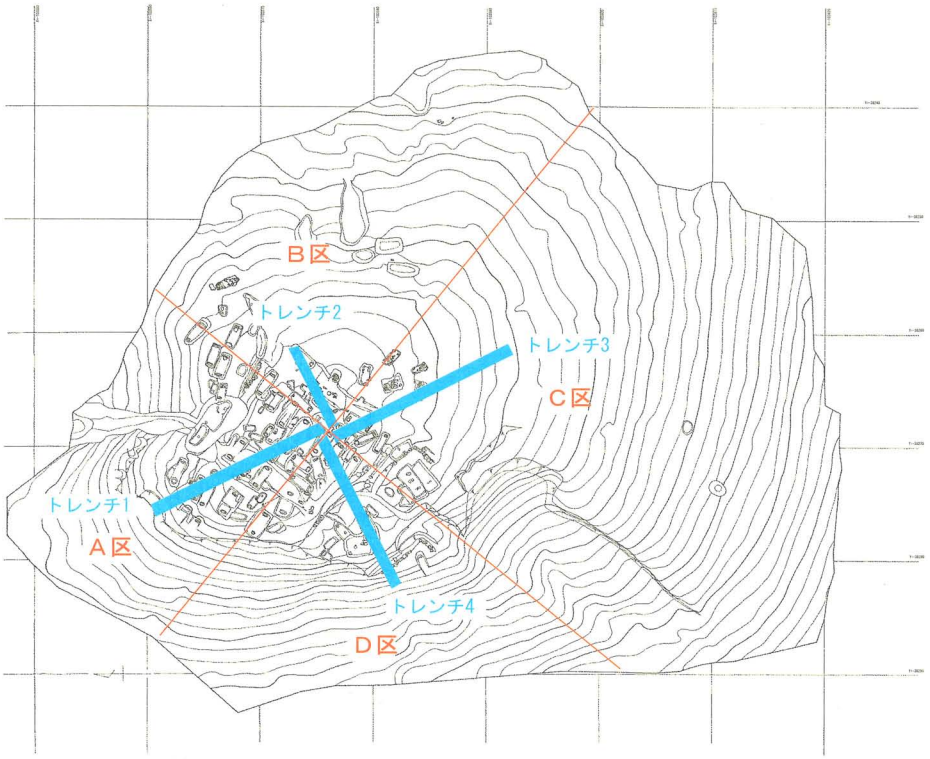
これらの土器は全体の判明しているものが少ないが、高杯３、４の器形などから弥生時代後期中葉～後葉と考えられる。





第43図　溝７出土遺物(S=1/4)

第 42 図　溝７平面・断面図



第44図　調査区割と1997年調査トレンチ配置図

B区出土土器（第46図）

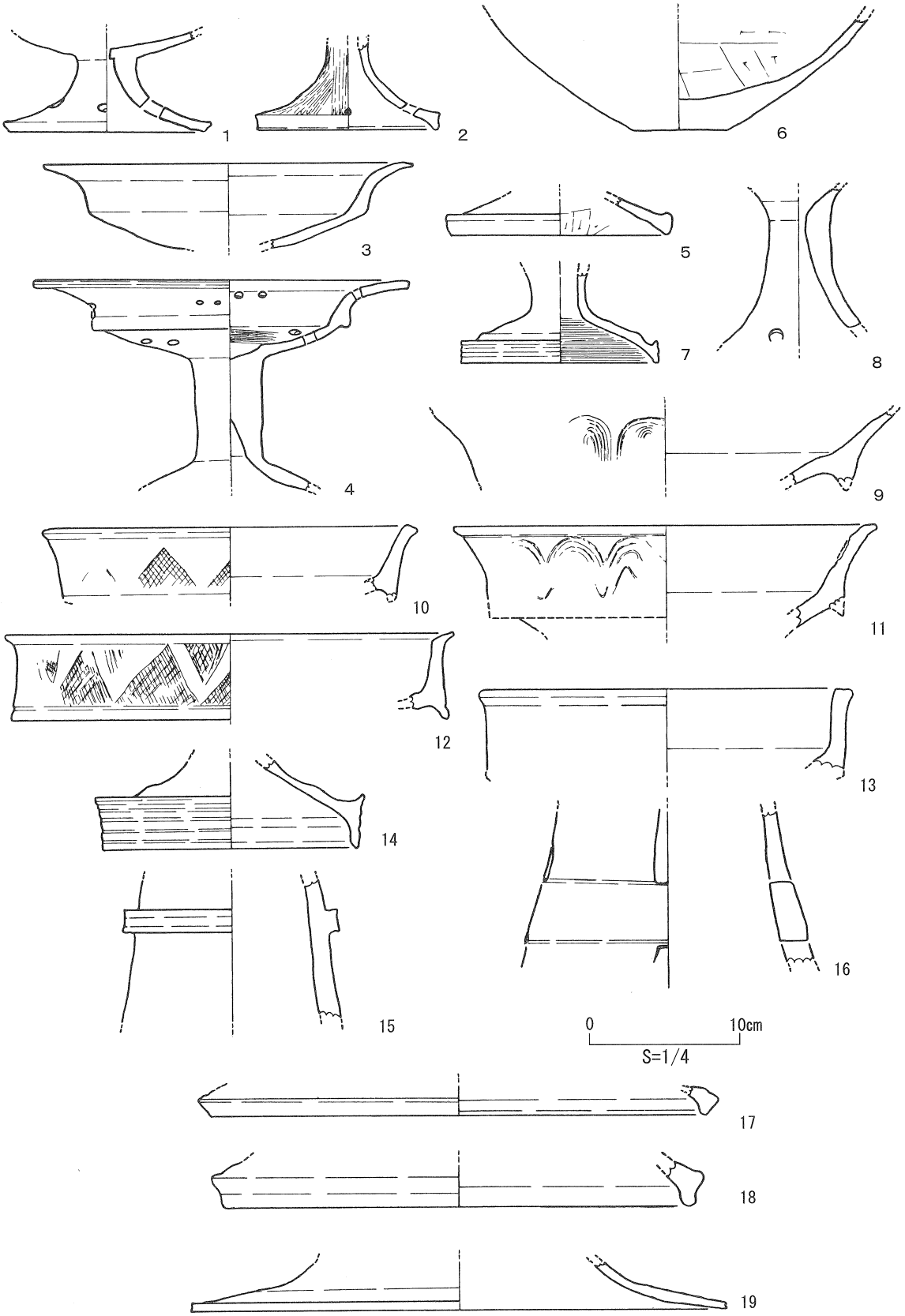
丘陵の西側部分から出土した土器で、数量は遺構密度が高いA区に比べ少ない。1・2は壺の口縁部である。1は無頸のもので、上方に拡張している。3は口縁部を欠くが、長頸壺である。玉ねぎ形の体部をもつ。頸部は鋸歯文が残存部で4段にみられ、その間は沈線文が2条施されている。体部との屈曲部には突帯があり、その直下に刻目がある。体部最大径の部分にも突帯が2段に巡らされ、突帯部分に刻目が施されている。また、2段の突帯間には細い帯状の粘土帯が縦につけられている。この粘土帯は規則的ではなく、2箇所でみられる。5～8は器台の口縁部と考えられるが、7、8は長頸壺の口縁部になる可能性がある。6、8の口縁部及び7の頸部付近はいずれも鋸歯文で加飾されている。10は大型器台の脚部である。

土器の時期は、3の長頸壺が後期中葉頃と考えられる。残りは後期中葉～後葉の範疇に入ると考えられるが詳細な時期は不明である。

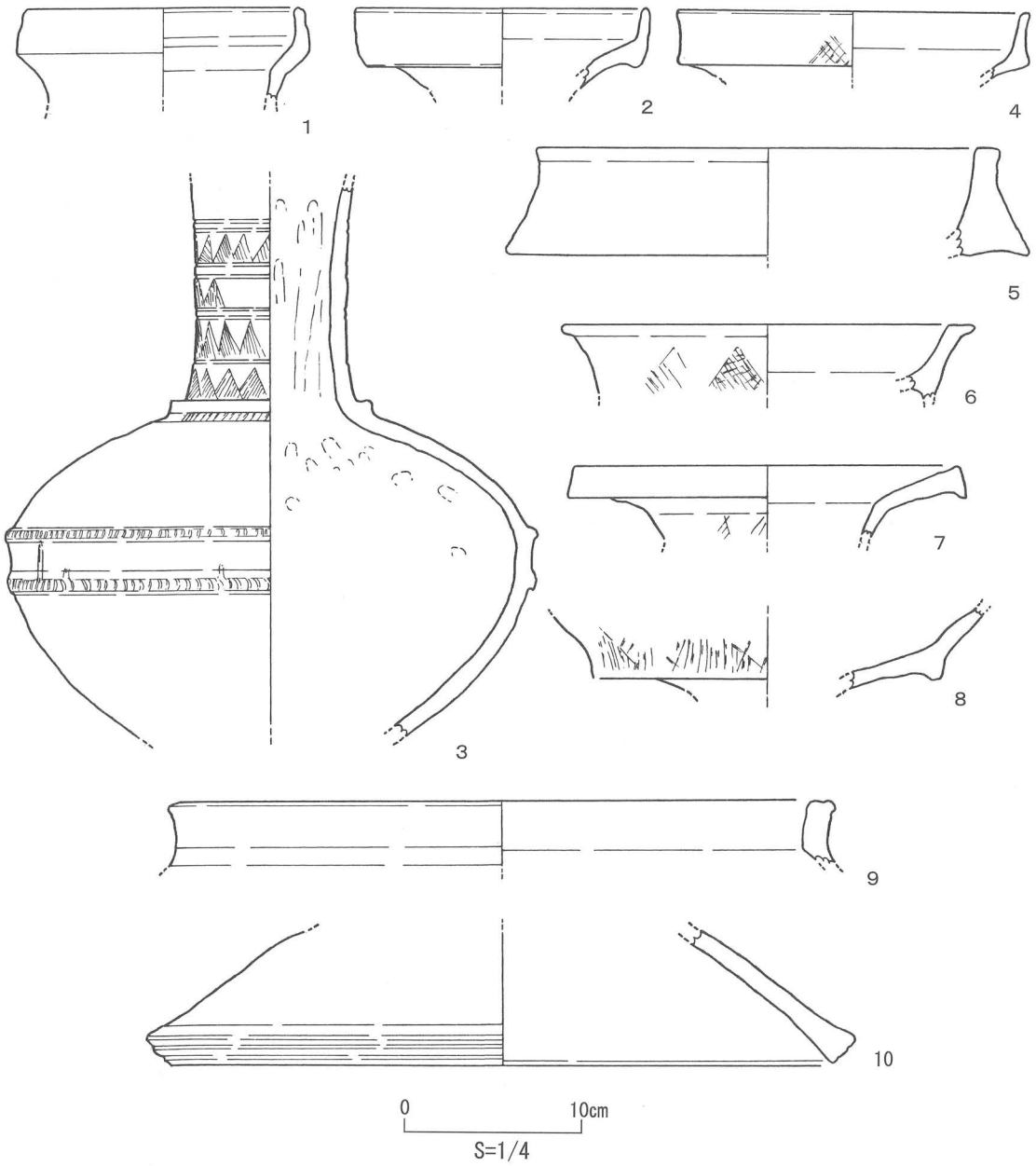
C区・D区出土土器（第47図）

丘陵の南半分を中心に出土した土器である。1、12、13は長頸壺である。1、12は口縁部を外側上方に大きく拡張させ、頸部に沈線文が施されている。13の底部には焼成後に孔が穿たれていることから、実用品ではない性格をうかがわせる。3、4は高杯の杯部と考えられる。3は口縁部の立ち上がり部分に明瞭な段をもち、外面は波状文やハートを変形させたような文様で加飾される。7は短脚の高杯で、脚部がハの字状に開く。8、10は器台あるいは壺の口縁部であり、鋸歯文が施されている。

これらの土器は弥生時代後期後葉に位置づけられる。



第45図　A区出土遺物



第46図　B区出土遺物

その他出土土器（第48図）

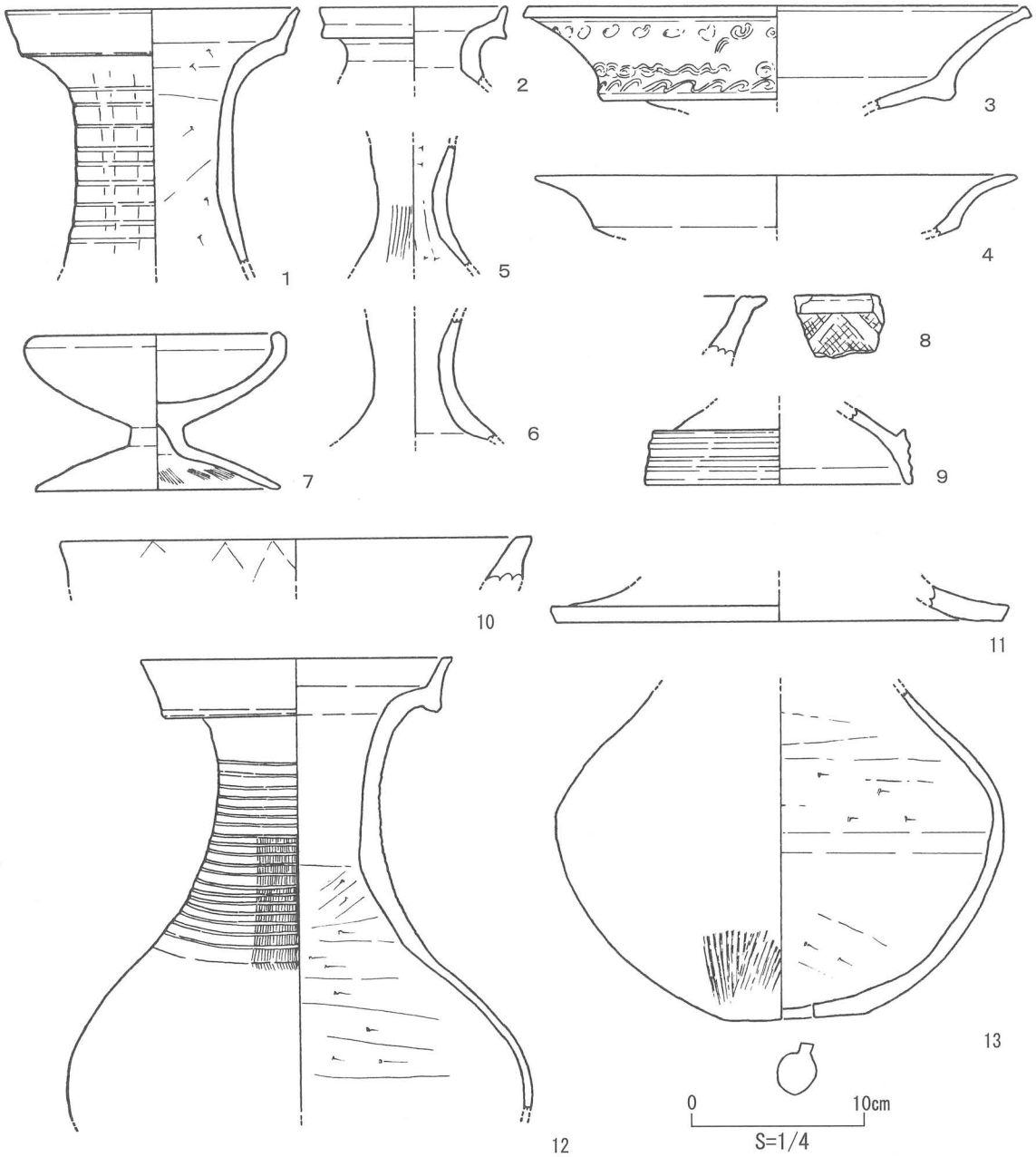
その他、丘陵頂部で出土した土器を掲載する。１の甕は口縁部が斜めに拡張される。２は小型の壺と考えられる。３、４は高杯で、脚部下半に円孔が穿たれている。５～７は器台と考えられる。７は特に大型品で、口縁部外面は渦巻き状のスタンプ文で加飾されている。

土器の時期は、１の甕が後期前葉の様相を呈する。それ以外のものについては後期中葉～後葉と考えられる。

４．1997年試掘調査時出土の土器（第49～52図）

トレンチ１（Ａ区）出土土器（第49図）

１は大きく外反する口縁部をもつ高杯である。２は高杯の脚部で、端部を拡張し、その



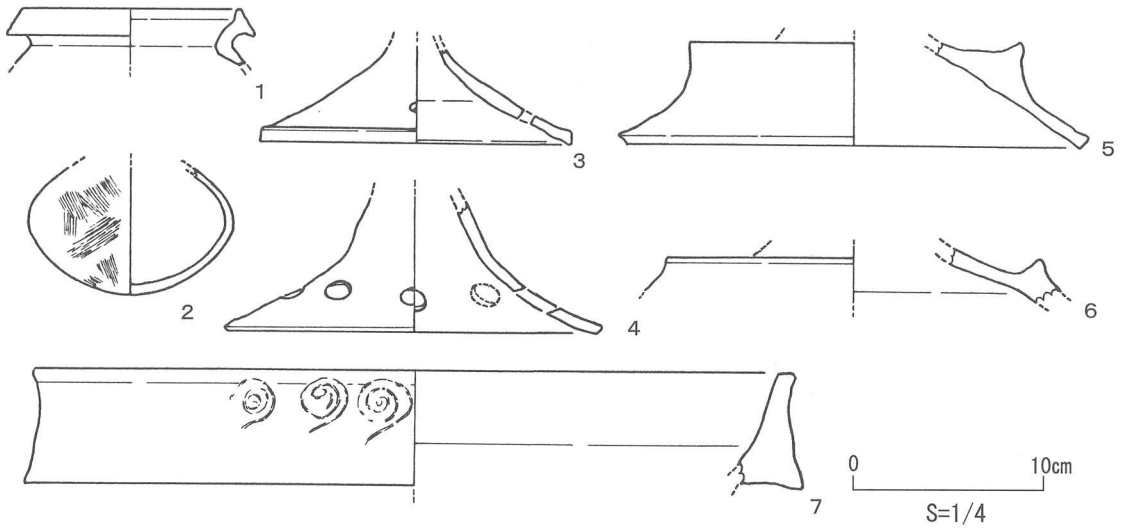
第47図　C・D区出土遺物（1・3・12・13…C区、それ以外はD区）

上面に波状文が施されている。3～7は器台と考えられるものである。4は装飾器台の脚部である。突帯を2段に巡らせ、突帯上の中心部には波状文、上下端部には刻み目が施されており、装飾的要素の強いものである。突帯間にはスカシ孔が4方向にみられる。5～7は大型器台の口縁部及び脚部である。5の口縁部には波状文が大きく施されている。

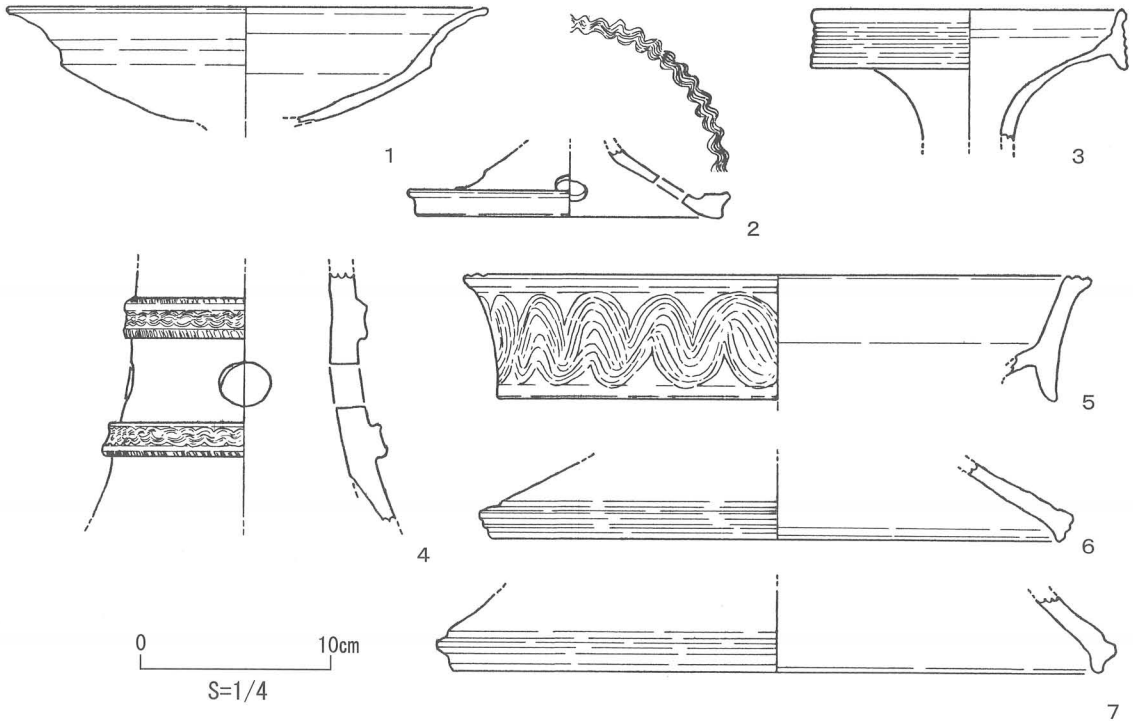
これらの土器は、明確に時期を判定するのは困難であるが、1の高杯の器形などから弥生時代後期後葉と考えられる。

トレンチ2（B区）出土土器（第50図）

1、3～5は器台である。1の口縁部には格子目の鋸歯文が施される。4、5は大型器



第48図　その他の出土遺物



第49図　1997年調査トレンチ1（A区）出土遺物

台の脚部である。3は高杯と考えられる。

これらの土器の時期は、概ね弥生時代後期後葉に位置づけられる。

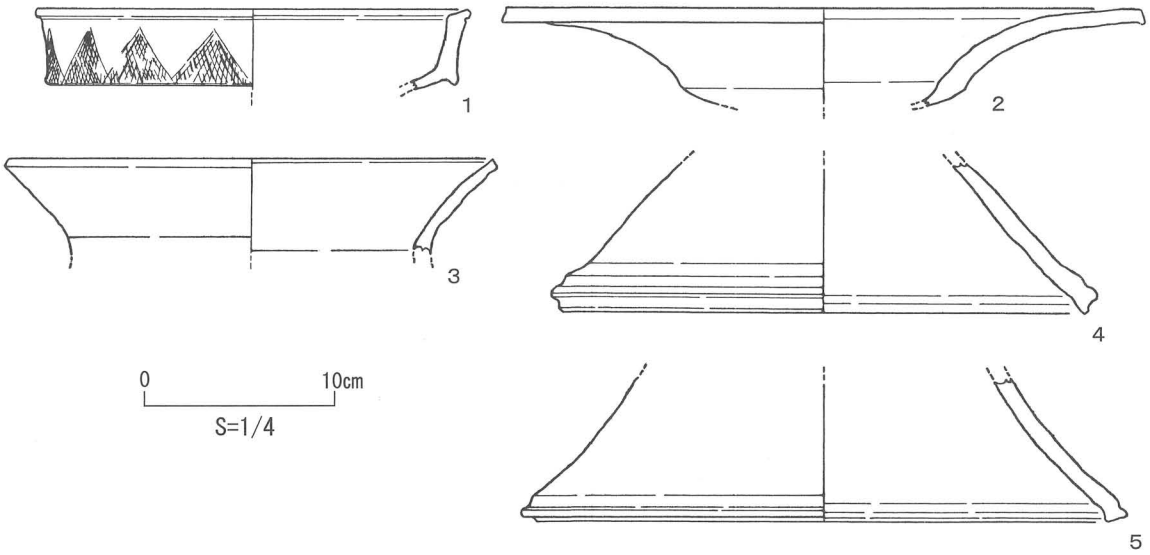
トレンチ3・4（C・D区）出土土器（第51図）

1、2は甕である。1は小型の手づくね土器で、ミニチュア品と考えられる。2の口縁部は斜め下方に拡張されている。3は低脚杯の脚部と考えられる。4、5は高杯で、いず

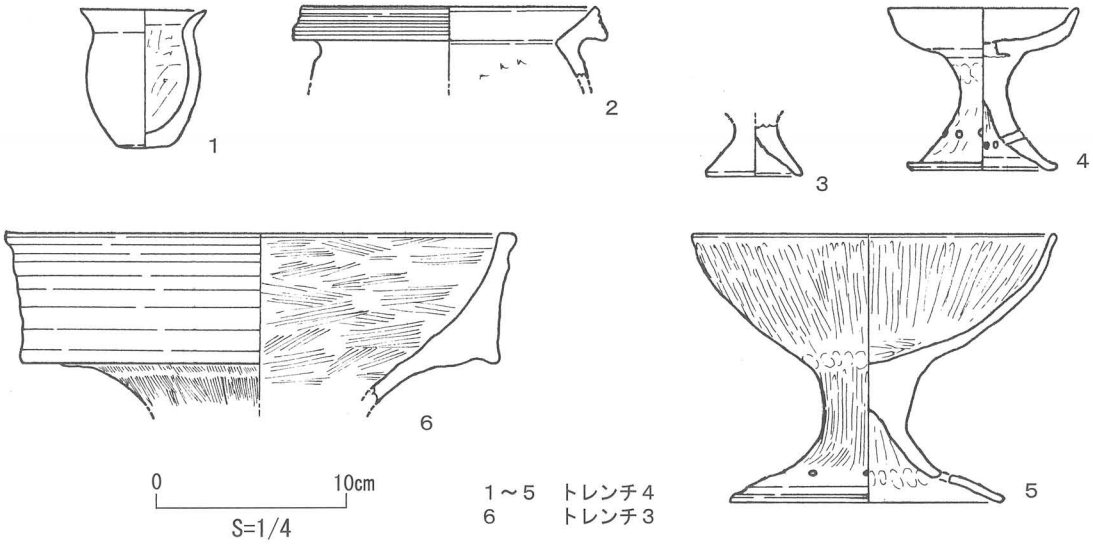
れも口縁部は拡張させず、まっすぐに立ち上がるものである。４は脚部の下端にスカシ孔が施されている。５の高杯も同様にスカシ孔がみられる。内面、外面とヘラミガキが丁寧に施され、杯部と脚部の境目部分の外面及び脚部の内面には指押さえの痕跡が見られる。６は大型器台の口縁部になると考えられる。外面、内面にハケ目が施されている。これらの土器のみでの時期は判断し難いが、２の甕の口縁部形態などはやや古い様相を呈しており、それ以外のものは弥生時代後期中葉頃に位置づけられよう。

その他の出土土器（第 52 図）

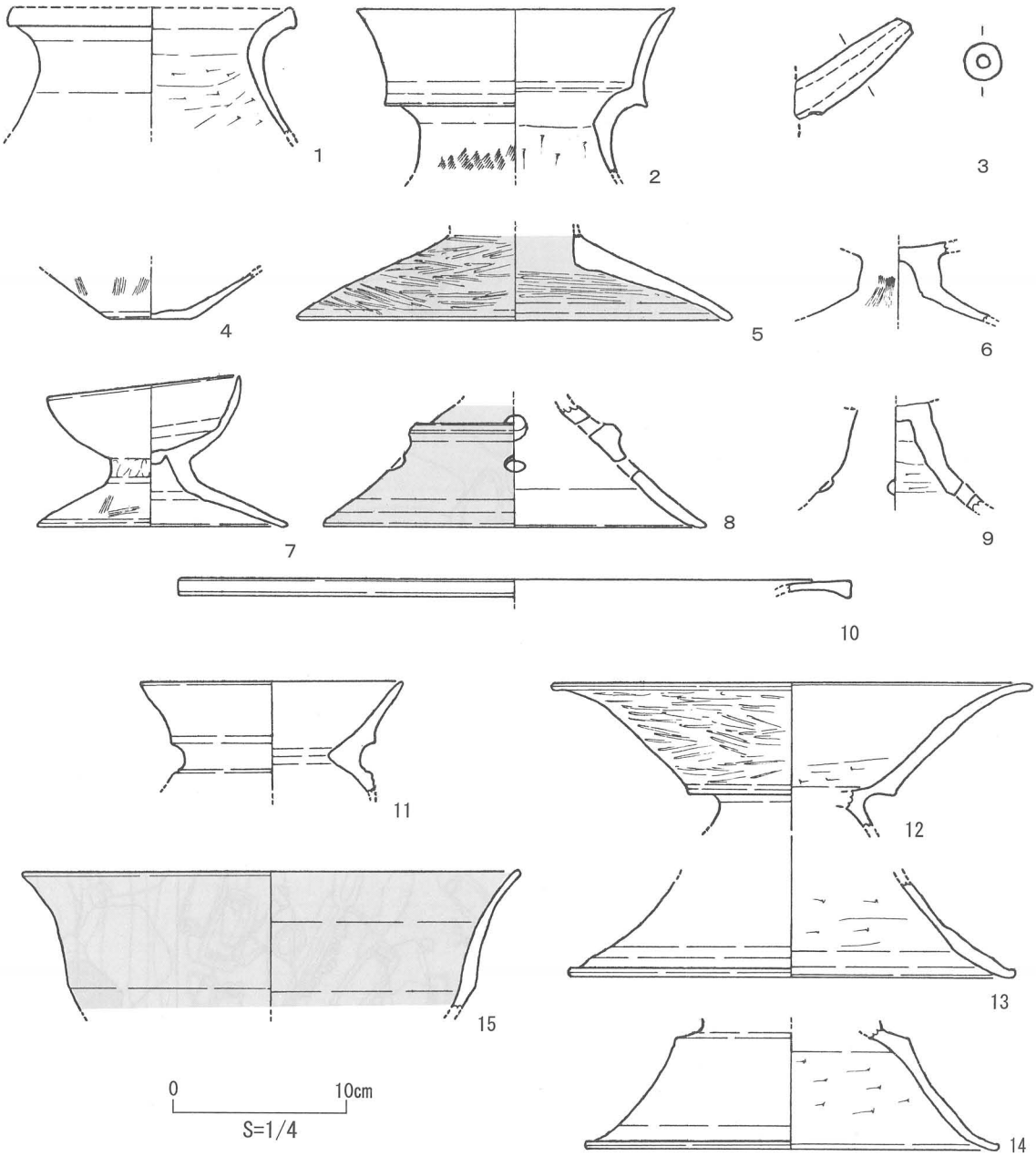
その他丘陵上で出土した土器である。１は甕の上部で口縁端部を欠くが、短く上方に拡張するものと考えられる。２は広口壺の口頸部で、大きく上方に外反する口縁部をもつ。



第 50 図　1997 年調査トレンチ２（Ｂ区）出土遺物



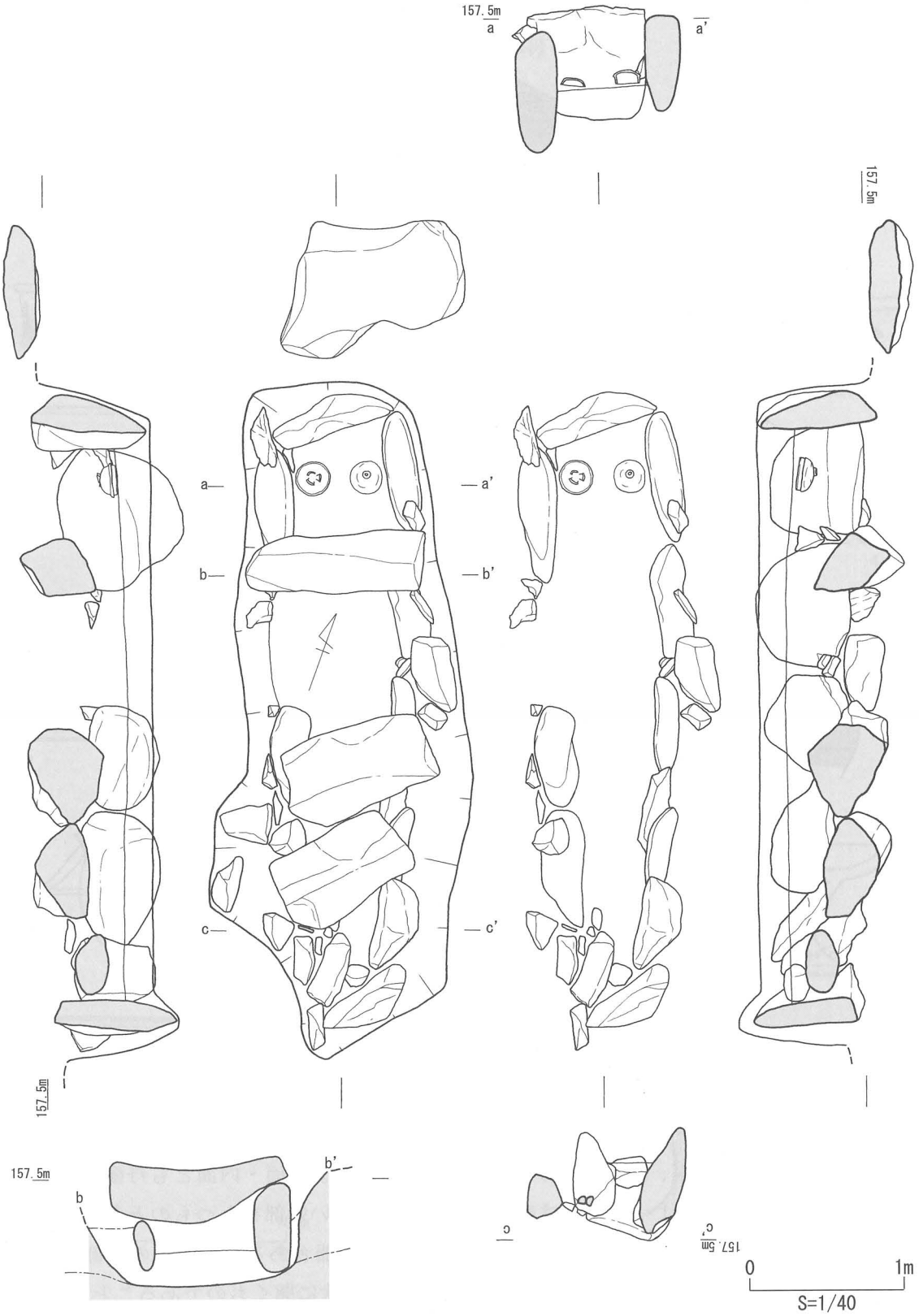
第 51 図　1997 年調査トレンチ３・４（Ｃ･Ｄ区）出土遺物



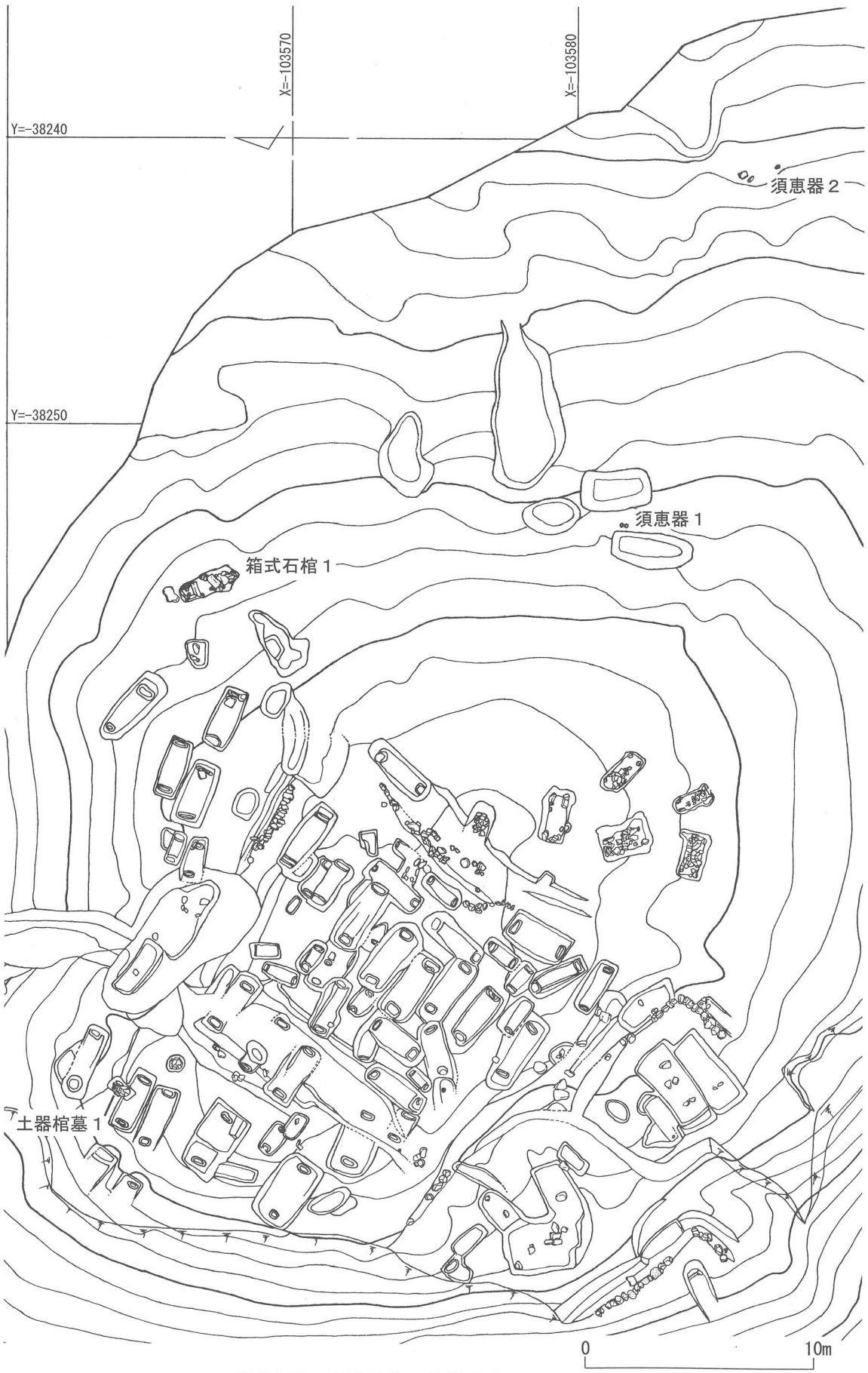
第52図　1997年調査トレンチ内その他出土遺物

頸部には三角形のスタンプ文が連続的に施されている。３は注口土器の注口部である。５～９、15は高杯である。５～７は短くハの字状に開く脚部である。５は外面と内面丹塗りである。８はスカシ孔が４方向２段に施され、間に突帯が１条巡る。外面丹塗りである。15は高杯と考えられるが、器台である可能性も考えられる。外面・内面とも丹塗りである。10～14は器台である。11・12・14は鼓形器台で、太く短い頸部をもつものと考えられる。12は外面に丁寧なヘラミガキが施されている。13は鼓形器台あるいは器台の脚部である。

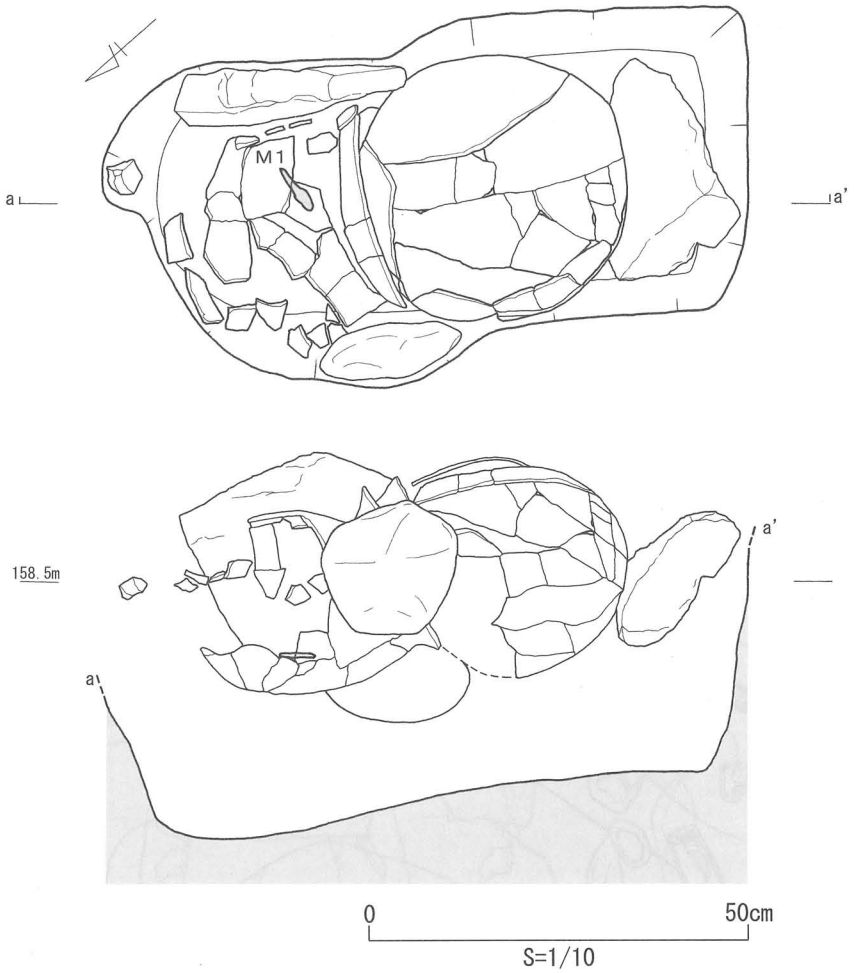
以上の土器は、２の二重口縁や、高杯脚部が短くハの字状に開くものであること、鼓形器台の頸部が短いことなどから、概ね弥生時代後期後葉に位置づけられると考えられる。(豊島)



第53図　箱式石棺１平面・断面図（S=1：40）



第 54 図　古墳時代の遺構分布図（S=1：250）

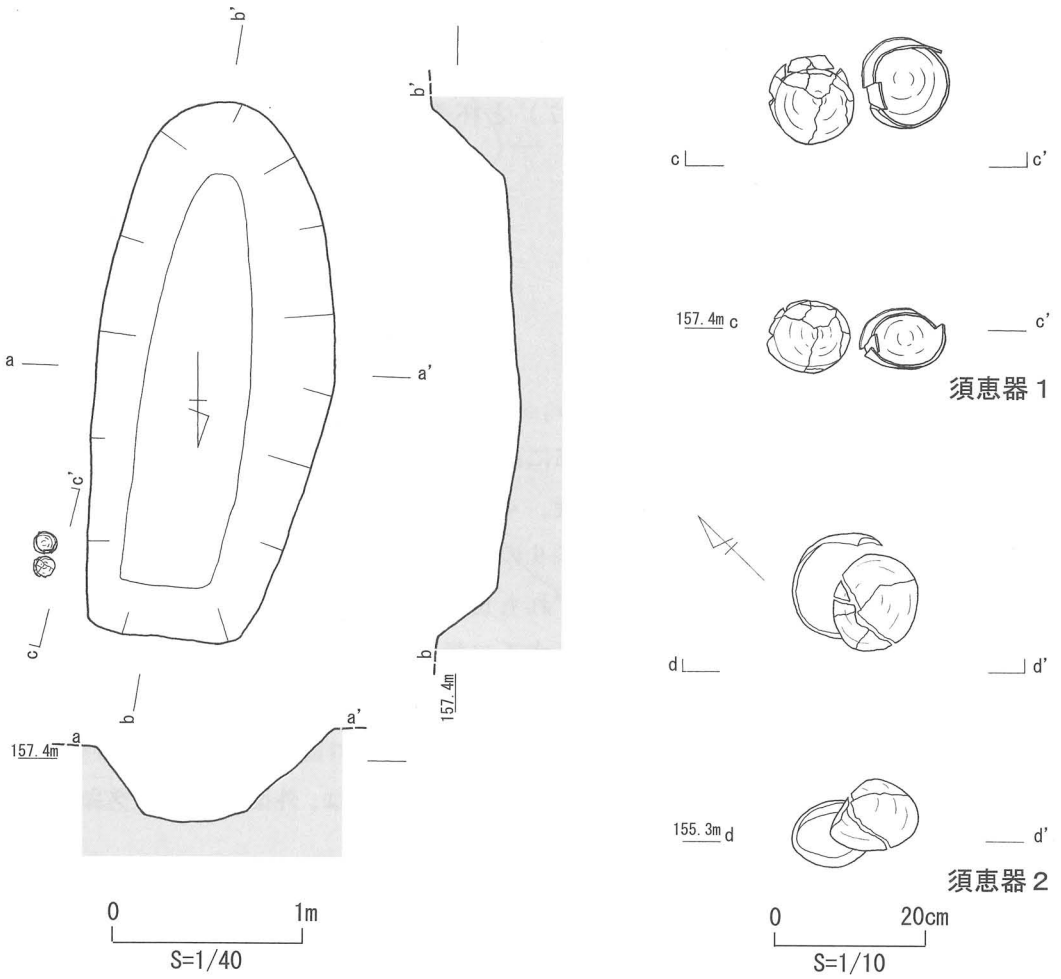


第55図　土器棺墓１平面・見通し図（S=1:10）

１．遺構

箱式石棺１（第53図）

調査区の北東にて検出された。遺存状況はあまり良好ではなく、石棺の南側半分は撹乱を受けており、原位置から動いていると考えられる。また、蓋石及び側壁の一部の石材の移動と抜き取りが認められる。掘り方は現長約4.3m、幅約1.3mの不整形を呈する。石棺の内法は、現長3.6m、幅0.6m、高さ0.2mを測る。石棺に使用されている石はいずれも自然石であるが、石棺小口と蓋石には山石を用い、側壁には山石と川原石を併用している。棺内出土遺物は少ない。北側小口から須恵器高杯の蓋と、脚部を打ち欠いた有蓋高杯が出土している。これらは枕と考えられ、頭位方向は北西であったと思われる。



第 56 図　須恵器１・須恵器２出土状況（S=1:40 S=1:10）

土器棺墓１（第 55 図）

土壙 16 を一部切る形で作られる。墓壙は現長 0.85m、幅 0.4m、高さ 0.3mを測り、円形と方形が２つくっついたような形である。主軸は南西方向であり、墓壙の北側に土師器の甕を横に据え、南側から口縁を打ち欠いた須恵器の甕をはめ込み蓋としている。棺を固定するため、土師器甕頸部の墓壙床面側、須恵器甕底部の墓壙南西側、及び棺合わせ口の両側面の計４か所に石が置かれている。土器棺内からは、刀子（図面網掛け部）が１点出土している。

須恵器１・須恵器２（第 56 図）

須恵器１は調査区の東側にて検出された。西隣に土壙が検出されているが、須恵器１は据えられた痕跡がなく、また、周囲から他に遺物も出土していないため、この土壙には伴わないと考えられる。身と蓋が計２セット分南北に並んで出土しており、北側は蓋を上にして杯身（第 57 図４）と杯蓋（第 57 図３）が組み合わさった状態、南側は杯蓋（第 57 図５）が単独で上下逆さまになった状態であった。

須恵器２は調査区の東端にて検出された。須恵器１と同様の出土状況であり、また、周囲に遺構がなく、斜面からの出土であることから、丘陵の頂部から転がってきたものと考えられる。身を上にして、杯身（第57図７）と杯蓋（第57図６）が組み合わさるような状態で出土した。

２．出土遺物

遺構に伴う遺物（第57図）

１は須恵器高杯蓋、２は有蓋高杯である。２は枕として利用されたため、脚部が打ち欠かれており、復元できない。残存する脚部には、３方向の台形のスカシが認められる。

３から７は須恵器杯、３・５・６が杯蓋、４・７が杯身である。ヘラケズリの範囲は半分から３分の２ほどであり、６はヘラケズリの後にナデている。口縁端部は３から５は段をもち、６・７は丸く収める。焼成はいずれも良好である。

８は土師器の甕で、くの字状でやや外反する口縁と球形の体部をもつ。口縁端部は丸く収め、体部外面にはハケメが、内面にはヘラケズリが施される。また、黒斑が認められる。

９は須恵器の甕である。土器棺として利用される際に、口縁部を打ち欠かれている。頸部にはカキ目が施され、あまり肩のはらない長胴形の体部には、外面に平行タタキが施され、内面には同心円当て具痕と肩部にオサエが認められる。

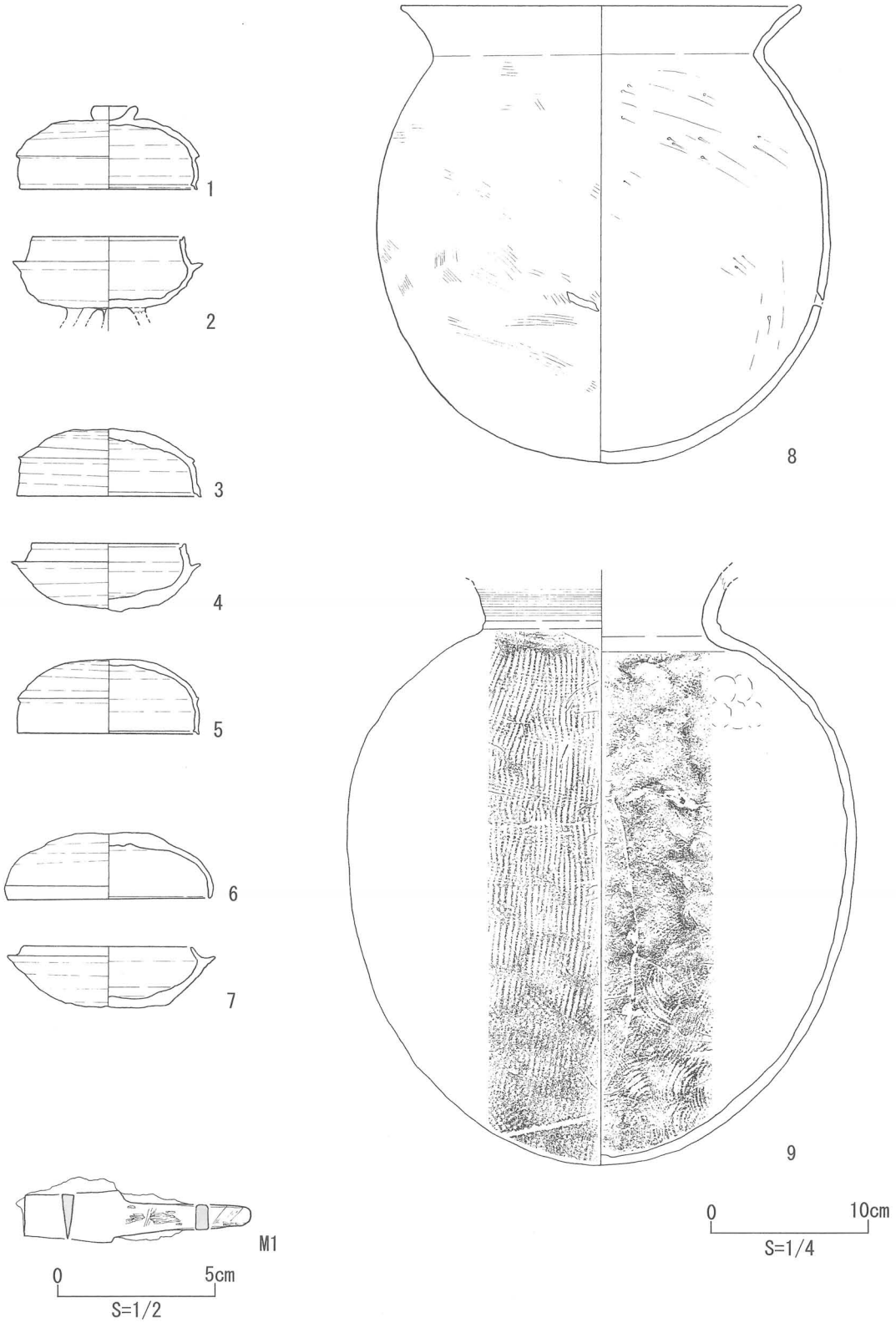
Ｍ１は刀子である。土師器甕８（土器棺）内から出土しており、刃先部分が欠損している。棟線が少し湾曲する両関式で、関部分から茎尻にかけて幅を狭め、茎尻を丸く収める。茎には木質とともに樹皮状物で巻いた痕跡が認められる。長畝山北古墳群３号墳出土のものに類似している。

１から５、８、９およびＭ１は古墳時代後期前半、６、７は古墳時代後期後半であると思われる。

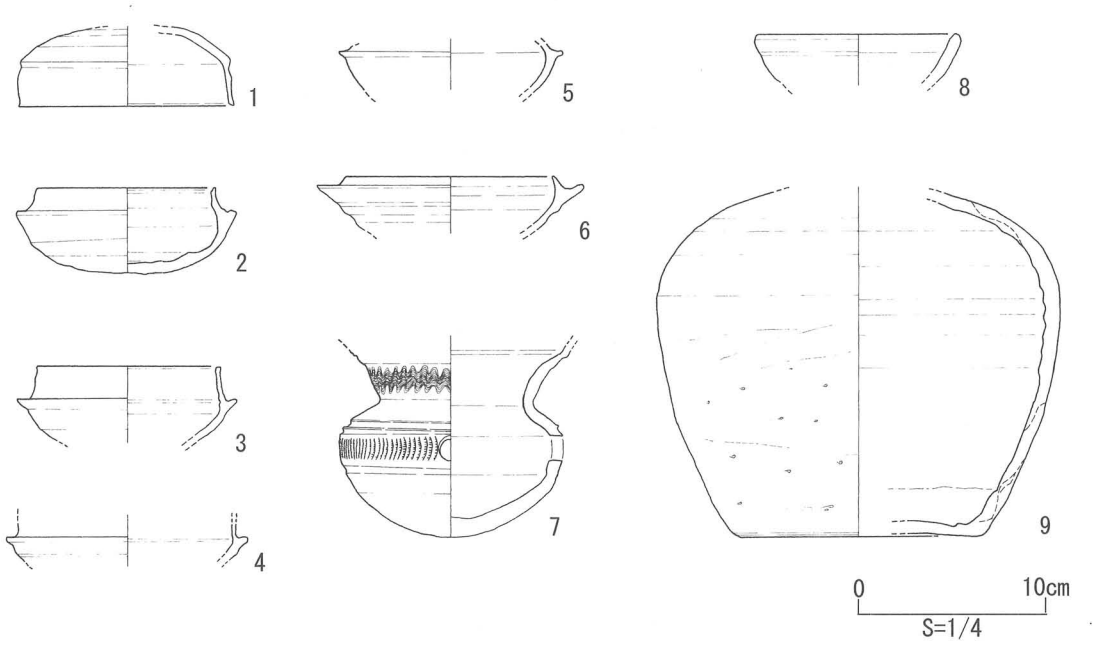
遺構に伴わない遺物（第58図）

１から６は須恵器杯で、１が杯蓋、２から６が杯身である。１～３・５でヘラケズリが認められ、範囲は半分強である。口縁端部の形状は２が段をもち、１・３は内傾する面をもち、６は丸く収める。焼成はいずれも良好で、４は他に比べておおきめの作りである。７は須恵器瑳である。頸部に櫛描波状文、肩部に沈線と刻み目文による装飾が施される。８は勝間田焼の椀で、口縁部外面に重ね焼きの痕跡が認められる。９は須恵器の壷で、おそらく短頸壷である。体部外面には上半部にヘラケズリ、下半部にヘラケズリの後ナデが、内面には横ナデが、底部外面にはナデ、内面には荒いナデが施される。

１から５，７は古墳時代後期前半、６は古墳時代後期後半、９は９世紀頃、８は12世紀頃であると思われる。この他図示できない遺物についてもおおむねこの時期に当てはまり、調査区の北側からの出土が多かった。



第 57 図　遺構に伴う遺物（S=1:4 S=1:2）



第58図　遺構に伴わない遺物（S=1:4）

３．小結

箱式石棺１と土器棺墓１は、伴う須恵器から、須恵器編年のＴＫ23・ＴＫ47に並行する時期であり、古墳時代後期前半と判断した。検出地点は離れているが、２基とも丘陵北側の緩やかな斜面上に立地する。出土遺物も少ないため、先後関係は不明であるが、埋葬時期にあまり差はないと思われる。

須恵器１も箱式石棺１らと同時期に属し、須恵器２は、同編年のＴＫ209に並行する時期で、古墳時代後期後半と判断した。両者は遺構に伴わないものの、組み合わさった状態という出土状況から、何らかの人間活動があったと推定される。

また、遺構に伴わない遺物にも、古墳時代後期前半、後期後半の須恵器があり、やや時期が離れるが、９世紀頃の須恵器壷や、12世紀頃の勝間田焼の椀も出土している。

以上より、遺跡は古墳時代後期前半に北側斜面が墓域として利用され、その後も断続的に利用があったと思われるものの、遺構が検出されていないため、用途は不明であることがわかった。（宮﨑）

参考文献

津山市教育委員会 1992『長畝山北古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第45集

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

山田邦和 2011「須恵器の編年　西日本」『古墳時代の考古学』第１巻　同成社

第４節　まとめ

１．黒岩遺跡弥生時代墳墓群の築造時期

黒岩遺跡の発掘調査では、弥生時代後期の方形台状墓を中心とした多数の土壙墓群や土器棺墓、及び古墳時代後期前半の箱式石棺や土器棺墓などが発見された。ここでは、遺跡の立地する丘陵上における遺構の変遷を追い、その性格について若干の考察を行う。

遺構の年代を考える上で最も有効な手がかりのひとつとなるのは出土遺物であるが、今回の発掘調査では、土壙墓に伴う土器がほとんどなく、土器以外の副葬品等もみられなかったことが大きな特徴としてあげられる。よって、本遺跡の変遷を考える際には、表土直下から出土した多数の土器や、遺構の切り合い関係、及び遺構の特徴などを総合的に捉える必要がある。

黒岩遺跡で検出された埋葬施設は、方形台状墓、土壙墓群、及び土器棺墓などがある（第７～８図）。このうち、方形台状墓に伴う土壙墓及び周辺でみつかった土壙墓群については、その特徴から大きく４つの類型に分けられる。１．土壙墓内及び墓壙上に石を配置したもの、２．墓壙の両小口に溝をもつもの、３．墓壙内の頭位に枕石のあるもの、４．小口溝や枕石をもたないもの、である。１の配石墓はＡ群を中心とする土壙墓１～８がこれに該当すると考えられる。Ａ群は丘陵の最高所から少し南東に下がったところにまとまってみられ、一部方形台状墓１の周溝と重複している。２の小口溝をもつものは木棺の小口板を墓壙床面に埋め込むものであり、土壙墓の大半を占める。方形台状墓１内の土壙墓については、土壙墓の重複により不明なものもあるが、ほぼすべてがこの類型である。また、台状墓に伴わないＢ群及びＣ群の土壙墓についても、Ｃ群の西側に位置する土壙墓 58、59 を除くほぼすべてがこの類型であることから、２の類型は、土壙墓群の中心的な埋葬類型であったことが分かる。３の枕石をもつ土壙墓は、小口溝をもたないものであることから棺形態は不明であるが、確実なものは方形台状墓２の埋葬施設である土壙墓 67 ～ 69 にほぼ限定される。方形台状墓２の周溝である溝５内の埋葬施設である土壙墓 54 や 70 については枕石はみつかっていない。４の小口溝や枕石をもたないものは、先の土壙墓 54、70 のほか、方形台状墓３の中心的埋葬である土壙墓 71 ～ 74、77 などがある。方形台状墓４の埋葬施設である土壙墓 78、及び周溝内の 79 も、この類型になる可能性がある。また、Ｃ群の土壙墓 58、59 についても同様である。このように、黒岩遺跡でみつかった土壙墓の４つの類型については、その大半が墓壙に小口溝をもつ２の類型にあてはまり、丘陵からやや下がったところに位置する方形台状墓２は３の類型、方形台状墓３、４は４の類型となる。各類型については混在することなく、ある程度のまとまりをもってみられることが分かる。

それでは、これらの土壙墓群はどのような順序で築かれたのかを考える。方形台状墓１の南東部に位置するＡ群については、他の土壙墓群とは規模、構造が異なる一群と捉えられる。Ａ群の土壙墓の規模は、いずれもほぼ全長２ｍを下回り、他の土壙墓群と比べて小さい。また、検出された土壙墓の大半を占める両側に小口溝をもつものはみられない。石

は墓壙床面から浮いた状態で検出されており、整然と並べられたものでなく、大小様々な石が集積しているような状態である。また、中には墓壙内の四隅に置かれたような状態で遺存するものもあり、これらの石については木棺の支えとなるための石である可能性が考えられる。墓壙内にみられる石は、検出状況から、墓壙上あるいは木棺上に置かれていた石が棺内に落ち込んだような状況である。

このような墓の形態は、「配石墓」あるいは「配石遺構」と呼ばれ、中国地方では主に山陰地方や広島県北部地域などに分布している(註１)。これらの墓は、出土遺物から弥生時代前期後半～中期初頭に位置づけられる墳墓にみられる。山陰地方や広島県北部にみられる配石墓は、墓壙上あるいは墓壙に沿った形に石を並べているものも多くみられる。これらと比べると黒岩遺跡のＡ群にみられる土壙墓は石を並べたような状況ではない点において異なっている。

今回の調査で検出されたＡ群の土壙墓群が弥生時代前期後半から中期初頭の墳墓と同じ系譜のものであると考えると、美作では初めての例となり、本遺跡でみられる方形台状墓や土壙墓群が築かれたと考えられる後期より大きく遡ることになる。しかし、これらＡ群土壙墓の配置をみると、頂部から少しずれたところに位置しており、後につくられた方形台状墓１が丘陵の頂部を占めている。最初に作られた配石墓が丘陵の頂部に築かれなかった点には疑問が残る。

このように、Ａ群の配石墓が遺跡の大半を占める後期の土壙墓群に大きく先行する土壙墓群であることを示すのは困難であるが、類例から判断すれば、Ａ群の土壙墓群は遺跡の存在する丘陵上に最初に築かれた土壙墓群である可能性が考えられる。今後、同様の例が周辺地で発見されることを期待したい。

次に、丘陵頂部と南斜面にかけて築かれた方形台状墓１～４と周辺の土壙墓群の時期について検討する。これまで述べてきたように、黒岩遺跡においては土壙墓埋土中からの出土遺物はほとんどなく、多くの土器は墳墓上に供献された土器と推測されるが、土壙墓の個々の時期を判断するのは困難である。しかし、台状墓を区画する溝から一定量の土器が出土していることから、方形台状墓の時期をある度推測することは可能である。丘陵上及び台状墓を区画する溝から出土した土器は土器棺など後期前葉に遡ると考えられるものもみられるが、中心となるのは弥生時代後期中葉～後葉のものである。器種は、壺、甕、高杯、器台などが中心であるが、鋸歯文などの装飾されたものが目立つ。また、丹塗りのものや、ミニチュア品など、明らかに祭祀用と考えられるものも多い。このうち、遺構に伴って出土した土器からみていくと、方形台状墓１の溝２や３から出土した土器は後期中葉のものが多く。方形台状墓２の溝５は後期中葉～後葉の土器、方形台状墓３、及び４に伴う溝６は後期後葉の土器が中心となっていることから、方形台状墓１が最も古く、次いで２、最後に３、４という築造順序が成り立ちそうである。

では、これらの墳墓群がどのように形成されたのか考えてみる。個々の築造の前後関係については土器からは判断し得ないが、各遺構の配置や切り合い関係などからある程度の推測は可能である。遺構の配置を考えると、まず丘陵の最も中心にあたる場所に最初に方形台状墓１がつくられたと考えるのが自然である。また、方形台状墓１の北西に位置する

Ｂ群については、Ｂ群の土壙墓群が方形台状墓１に伴う溝１が埋まった後に掘り込まれていることから、方形台状墓１が墓域を北西部に広げ、Ｂ群の土壙墓群が築かれたと考えられる。さらに、北東部に位置するＣ群についても同様に、墓域を広げたことにより形成されたのではないだろうか。

ただし、Ｂ群のうち、溝１よりも明らかに西側に位置する土壙墓群（土壙墓 10、13 ～ 17 など）については注意を要する。それは、これらの土壙墓群のさらに西側が削平されているためである。削平された西側部分にも埋葬施設が存在したと考えると、溝１が、方形台状墓１に伴うものではなく、方形台状墓１の西側に別の方形台状墓があり、それに伴う溝であった可能性も考えられるのである。西側の一帯が削平されており、明らかにすることはできないためここでは可能性を指摘するにとどめる。

丘陵南斜面に位置する方形台状墓２、３、４については、出土土器からは、方形台状墓２が若干古い様相を呈する土器があるものの、方形台状墓３、４については大きな時期差はみられない。方形台状墓１との関係をみると、方形台状墓１に伴う溝４を切る形で方形台状墓２が築かれていることや、出土土器の時期差から、方形台状墓２は方形台状墓１より後出すると考えられる。方形台状墓２と３の前後関係は明確ではないが、出土土器からは、方形台状墓３が少し新しい土器を含むことから、方形台状墓２よりも新しく位置づけられよう。この２基が築かれたのち、さらに斜面下に築かれたのが方形台状墓４であったと考えられる。しかし、土器に大きな時期差は見いだし難いことから、方形台状墓１～４については大きく時期を隔てることなく築かれたと考えられる。

また、丘陵上で検出された墓のうち、方形台状墓１の北西方向で検出された土器棺墓に使用されている甕は弥生時代後期前葉のものである。後期前葉の土器は出土はあるものの個体数はわずかであり、遺構としてみられるのは土器棺墓が唯一である。

古墳時代の遺構についてみると、箱式石棺及び土器棺墓があり、これらは後期前半に位置づけられる。丘陵下位にも須恵器の出土が複数個体みられることから、本来はもう少し多くの埋葬施設が存在したと推測される。黒岩遺跡の丘陵は、古墳時代前期から中期にかけての遺構がみられないことから、断絶した時期はあるものの、弥生時代後期を中心に、弥生時代中期頃から古墳時代後期まで集団墓地として長く利用されていたことが分かる。

２．黒岩遺跡弥生墳墓群の特質（第 59・60 図）

黒岩遺跡で発見された土壙墓群は、列石あるいは溝によってつくられた区画内あるいは区画外にまとまった状態で検出されている。これらの多くは墓壙の両小口部に溝をもつもので、もとは木棺が安置されていた墓壙であったと考えられる。これとは別に、方形台状墓２、３、４の方形区画内の埋葬施設は、方形台状墓１と異なり小口溝をもたないものであり、方形台状墓２には頭位部分に枕石を置くものである。この埋葬の違いは、どのような要因からなのか、周辺地域の例をとりあげて検討する。

美作地域における弥生時代墳墓群の主な例として、三毛ケ池遺跡（津山市）、下道山遺跡（同）、有本遺跡（同）などが挙げられる。

三毛ケ池遺跡は下層に中期後半の方形台状墓１基、上層に後期前半の土壙墓がそれぞれ

第 59 図　美作地域の弥生時代墳墓群 1

1．三毛ケ池遺跡下層墓　2．下道山遺跡土壙墓群

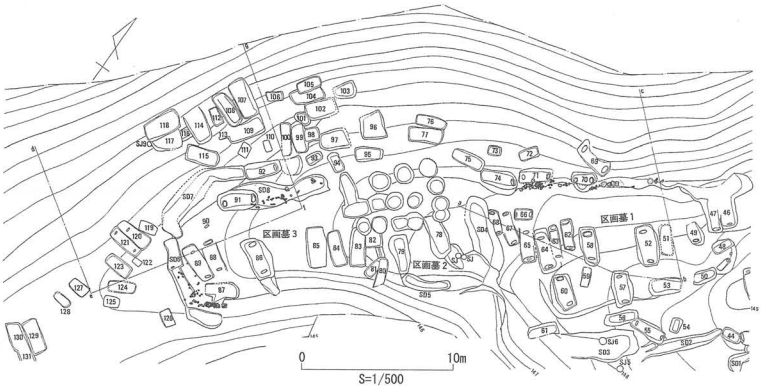
築かれている。中期後半のものは削平をうけているものの方形の区画を削り出しており、区画内外に合計 34 基の土壙墓がある。土壙墓のほとんどが黒岩遺跡同様小口溝をもつもので、一部もたないもの、墓壙内に石を立てているものなどがある（小郷 1993）。

下道山遺跡は丘陵尾根上に築かれた後期前半の墳墓群である。方形台状墓２基と、そこから緩やかに傾斜した斜面に土壙墓群 120 基あまり、及び土器棺６基が形成されている。埋葬施設は方形台状墓の１号墓の中心に２基あり、２号墓には中心に８基と裾部に２基の計 10 基みられる。土壙墓の形式は２号墓の一つは小口溝をもたないものであるが、それ以外は小口溝をもつものである。斜面の土壙墓群については、100 基あまりが小口溝をもつもので占められる（栗野・岡本 1977）。

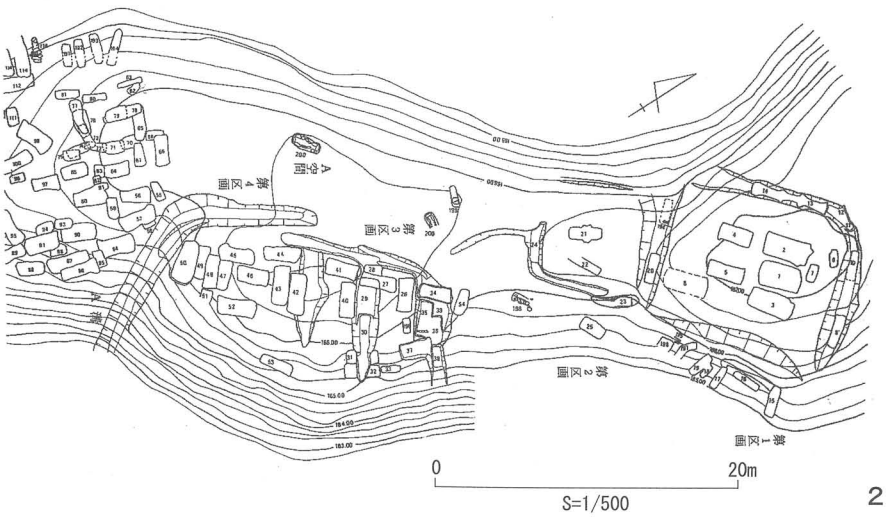
中期後半の三毛ケ池遺跡の下層方形台状墓や、後期前葉の下道山遺跡の方形台状墓及び

土壙墓群については、主流となるのが小口溝をもつものであり、その中に小口溝をもたないものが少数みられるという様相を呈している。また、方形台状墓内に複数の埋葬施設をもち、その中に副葬品や規模等で突出したものがみられない。これらの点については後期中葉～後葉の墳墓群である黒岩遺跡についてもいえることである。美作地域の墳墓群においては小口溝をもつもの、つまり木棺の小口板を支えるための溝をもつものは弥生時代中期から後期にかけてみられる埋葬形態であるといえる。さらに、複数の土壙墓の中に副葬品や規模で突出したものがなく、均一的な集団墓地のあり方を示している点も共通しているといえる。

黒岩遺跡と同時期と考えられる弥生時代後期後半の墳墓群としては、有本遺跡がある。有本遺跡は、後期中葉から後期後葉の区画墓３基、及び土壙墓群102基が南北方向の丘陵尾根筋に築かれている（第60図１）。区画墓３基の埋葬施設の数は、それぞれ23基、２基、13基である。土壙墓群には、小口溝をもつもの、小口溝をもたないもの、小口溝をもたず枕石があるもの　の３類型の土壙墓があることが判明している。区画墓以外の土壙墓は、分布状況から大きく９つのグループに分けられ、尾根の南から小口溝のないグループ→小口溝のあるものとないものが共存するグループ→小口溝のないグループ→枕石があるグル



1



2

第60図　美作地域の弥生時代墳墓群２

１．有本遺跡土壙墓群（部分）　２．中山遺跡Ａ調査区土壙墓群

ープと位置していることが指摘されている（小郷 1998）。さらに、枕石のあるグループの北側には古墳時代前期の有本古墳群が位置しており、古墳群の埋葬施設は枕石をもつ。枕石のもつものは県南部の大規模な弥生時代の墳墓群であるみそのお遺跡などにもあり、後期後葉（報告書ではⅢ期の終わりとある）に出現することから、小口溝をもつものと小口溝のないもの→枕石をもつもの　として、これらの埋葬施設の違いが時期差によるものであることを指摘している（註２）。一方、山陰弥生墳墓の埋葬施設について論及した岩橋孝典氏は、福永伸哉氏の先行研究に基づき、墓壙の両小口に溝をもつもの、片側だけのもの、小口溝をもたないもの、木棺の両側板が小口板から大きく突出するもの、とに分類し、各遺跡における棺形態の割合を詳細に検討している。その結果、地域ごとの差異はあるものの、時期的な推移としては、小口溝のあるものは前期から後期後葉まで継続して使用されるが、後期以降、小口溝をもたない型式のものがもつものを凌駕し、古墳時代初頭には小口溝をもつものがみられなくなることを指摘した（岩橋 2007）。

以上のように、岡山県内及び山陰の事例からは、時代が下るとともに小口溝をもつ形態からもたない形態のものへ緩やかに推移している状況がみて取れる。

黒岩遺跡の土壙墓群についてみると、方形台状墓１が小口溝を有する土壙墓を主流とするのに対し、丘陵斜面に築かれた方形台状墓２は小口溝をもたず、枕石をもつもの、３は小口溝をもたず、枕石ももたないものをそれぞれ埋葬施設の主体としている。先述のように、方形台状墓の築造についてはあまり期間を置くことなく築かれたと推測されるため、時期差によるものと即断できない。これを示すものとして四辻土壙墓群（赤磐市）があげられる。四辻土壙墓群は、１基の方形台状墓とその周囲に多数の土壙墓群を配する遺跡であり、出土した土器から弥生時代中期中葉から後葉を中心とした集団墓地であることが判明している。このうち、B 地区に存在する方形台状墓には 23 基の埋葬施設があり、小口溝を有するものが 11 基、枕石をもつものが８基みられる（註３）。同じ台状墓内に２つの類型の埋葬施設が存在している例である（神原 1973）。

時期差によるものではないとすれば何に起因するのだろうか。福永伸哉氏は弥生時代墳墓における木棺形式の差異について類型化し、遺跡において主流となる木棺型式と、それ以外の少数派の木棺形式がみられることを指摘し、出土土器の中に他地域産の土器が含まれることなどから、木棺型式の違いは被葬者の出自の違いを表すことを論じた（福永 1985）。黒岩遺跡から出土した土器には他地域からの搬入土器はみられず、在地産のものと考えられるため、木棺墓型式の違いと枕石の使用・不使用について、出自の違いと判断するのも困難である。

黒岩遺跡においては、各墳墓に時期的な違いはあまりみとめられない上、各墳墓ごとにほぼ同じ木棺形態を採用していることから、同一の丘陵を墓地として利用した大集団の中に、埋葬方法が異なる小集団が複数存在していたとは考えられないだろうか。異なる埋葬形態を採用する背景は明らかでないが、その小規模な集団こそが最も強い結びつきをもったまとまりであったと推測される。

次に、黒岩遺跡における集団墓地の特質について検討する。黒岩遺跡において出土した土器は、丘陵の掘削埋土中全体から出土したものである。このことから、埋葬行為を行う

際に各土壙墓に供えられたというより、むしろ集団全体の埋葬行為に対して供えられたものという印象を受ける。これは土壙墓の中に、大型のものはみられるが、それが中心となるような突出した規模のものではないことにも関係していると考える。有本遺跡の土壙墓についても、各方形台状墓における中心となる埋葬は想定されるが、それが突出した規模あるいは副葬品をもつものではない。

同じ県北部の弥生時代後期後葉の集団墓地である中山遺跡をみる（第60図２）。中山遺跡は丘陵の尾根筋に築かれた墳墓群で、墓域の中心となるＡ調査区とＣ調査区で土壙墓がみつかっている（山磨編 1978）。Ａ調査区では４基の区画墓及び区画の外に多数の土壙墓がみられ、その総数は198基である。土壙墓は、小口溝をもたないものが大多数で、枕石のあるものも一定数みられる。土器は弥生時代後期末～古墳時代初頭のものが多く出土しており、特殊器台も出土している。特殊器台は集団墓地の祭祀に使用されたと考えられる状況で出土しており、特定の突出した勢力の存在を伺わせるものではない。

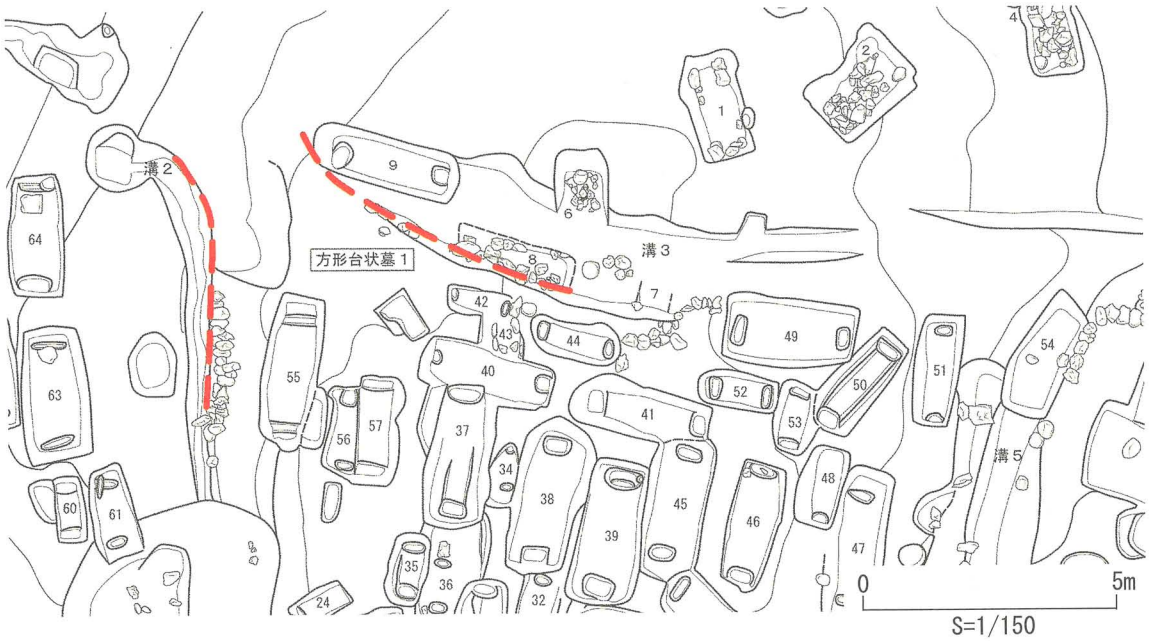
以上のように、県北部の集団墓地における祭祀のあり方として、弥生時代後期後葉から後期末においても突出した勢力の存在を墓からうかがうことはできず、比較的均質な埋葬が行われていることが特徴としてあげられる。特殊器台が独立した勢力の墓と考えられる墳丘墓に使用される岡山県南部地域とは、この点において大きく異なると言えよう。

黒岩遺跡でみられる個々の土壙墓には副葬品がほとんどなく、台状墓全体に供献されたとされる土器からは、黒岩遺跡の台状墓に埋葬された人々の強いまとまりをみることができる。また、とりわけ突出した墓がいまだこの地にはみられず、集団の墓地として営まれていたことが推察される。なお、これらの人々の居住地である集落跡は判明していないが、大きくは離れていないものの、墓地とは別の丘陵上に存在していたのかもしれない。

方形台状墓１が四隅突出型墳丘墓である可能性について（第61図）

黒岩遺跡における方形台状墓１については、墓の周囲４辺に溝が巡らされており、方形を呈しているため方形台状墓とした。しかし、溝はすべてが完全な形で残っておらず、端部は不明瞭な箇所が多い。溝１は、方形台状墓１に伴う溝としては他の溝２～４と比べて規模が大きいことや、西側に土壙墓群が存在することなどから別の台状墓に伴う溝である可能性を先に記した。溝２～４をみると、流出している箇所はあるがいずれも溝の内側（台状墓側）に列石を伴っている。列石をみると、溝２の列石が北東端でわずかに張り出しており、溝３の列石についても北東に向かって張り出している。溝３は内湾しており、南東端についても張り出した形状を呈する。この形状から、方形台状墓１が山陰地方を中心に分布する四隅突出型墳丘墓である可能性が考えられるのではないだろうか。

四隅突出型墳丘墓については、近年の調査事例の増加に伴い多くの研究がなされている。四隅突出型墳丘墓の特徴である隅部の張り出しについては、弥生時代中期中葉から中期後葉に三次盆地を中心とする中国山間部や日本海沿岸部に分布する、貼石による区画をもつ方形貼石墓にその系譜をもとめる考えがある（註４）。突出部には貼り石や縁石によって通路が表現されており、山陰にみられる多くの四隅突出型墳丘墓にはこの施設が存在する。四隅突出型墳丘墓と方形貼り石墓の区別については、方形貼石墓の隅部稜線上にみられる



第 61 図　方形台状墓 1 の東隅部

石列が発達し、墳丘の貼り石から飛び出したものを四隅突出型墳丘墓の指標とする見解がある（仁木 2007）。また、方形周溝墓の溝が隅でとぎれている部分を聖域と外界とを結ぶ通路と捉え、これが発達をとげた結果、突出部になるとみる考え方もある（都出 1974）。

この他に、突出部に貼り石や縁石をもつ典型的な四隅突出型墳丘墓ではないが、石を用いずに貼り石や列石のないスペースを作ることによって道を表現したものもあり、これを四隅突出型墳丘墓とする考え方もある（藤田 2010）。黒岩遺跡の方形台状墓 1 における隅角部分は、貼り石や列石はないが、北東部分の隅角部については通路を意図したと考えられるスペースである可能性がある（第 55 図赤点線部分）。また、内部の埋葬施設の配置をみると、他の多くの土壙墓が等高線に平行または直交する向きで配置されているのに対し、南東隅の土壙墓 50、南西隅の土壙墓 28・30、北西隅の土壙墓 24、25 などは斜め方向に配置されている。この配置は、隅部の張り出しを意識したものであると考えられないだろうか。

美作地域において四隅突出型墳丘墓の可能性があるものとしては、これまでに竹田 8 号墓（鏡野町）、門の山 1 号墓（津山市）などがあげられている。竹田 8 号墓は、墳墓内部には土壙墓 14 基と土器棺墓 4 基があり、半分が遺存しているのみであるため全容は不明であるが、四隅突出型墳丘墓とする根拠として、墳丘裾部南西端にみられる列石が張り出している点があげられている。墳墓の時期は土器から後期初頭のものと考えられている（鏡野町教育委員会 1984）。門の山 1 号墓は箱式石棺 3 基をもつ台状墓で、裾部に列石をもつ。時期が明確ではないが、列石の形状が四角形でなく五角形状に配列されている（近藤・中島 1952）。2 例とも列石が四隅突出型墳丘墓風に張り出してはいるが、典型的な四隅突出型墳丘墓にみられるような張り出し部をもたないため、慎重な検討を要する。

このように美作地域における四隅突出型墳丘墓の存在は依然として不明確ではあるが、少なくとも岡山県北部に出土する土器からは山陰地方の影響をみることができることから、

その影響下で四隅突出型墳丘墓が採用されたとしても違和感はない。今回の調査によって発見された方形台状墓１にみられる列石のあり方が四隅突出型墳丘墓といえるのか、また、四隅突出型墳丘墓であるとすれば丘陵の中心に築かれ、墳墓内部に34基もの土壙墓をもつこの台状墓と、他の方形台状墓２～４との集団関係はどのようなものであったのか、周辺地の例を踏まえて検討すべき課題である。(豊島)

註

（１）例として、島根県松江市友田遺跡や、広島県北広島町岡の段Ｃ地点遺跡などがある。友田遺跡は、弥生時代中期から後期の墳墓群である。検出された配石墓は、副葬品や、覆土から出土した弥生土器の年代から後期前半を中心とした時期のものとされている。岡の段Ｃ遺跡は、河岸段丘上に位置する集落遺跡で、約100基の土壙墓がみつかっている。出土した土器等から、配石墓は弥生時代前期のものとされている（岡崎他1983、梅本編1984)。

（２）有本遺跡、みそのお遺跡（岡山市）のほか、弥生時代後期の集団墓地がみつかっている前山遺跡（総社市）においても、同様のことが指摘されている（正岡1997)。

（３）小口溝をもち、かつ枕石をもつ土壙墓も１基みられる。

（４）桑原隆博2005、野島永1991、藤田憲司2010などがある。

参考文献

岩橋孝典2007「山陰弥生墓制の検討と四隅突出型墳丘墓の特質」『四隅突出型　墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター

梅本健治1984『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅳ)』(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第132集）財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター

岡崎雄二郎他1983「友田遺跡」『松江圏都市計画事業乃木地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』松江市教育委員会

小郷利幸1993『三毛ケ池遺跡』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第48集）津山市教育委員会

小郷利幸1998『有本遺跡　男戸嶋古墳　上遠戸嶋遺跡』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第62集）津山市教育委員会

鏡野町教育委員会1984『竹田墳墓群』(竹田遺跡発掘調査報告第１集)

栗野克己・岡本寛久1977『下道山遺跡緊急発掘調査概報』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（17)）岡山県文化財保護協会

桑原隆博2005「四隅突出型墳丘墓の新展開」『季刊考古学』第92号

神原英朗1973『四辻土壙墓群・四辻古墳群』(岡山県山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報（３)）岡山県赤磐郡山陽町教育委員会

近藤義郎・中島壽雄1952「門の山第１号墳発掘調査報告」『佐良山古墳群の研究』津山市

都出比呂志1979「古墳出現期の社会」『考古学研究』第26巻３号　考古学研究会

仁木聡2007「四隅突出型墳丘墓の「配石構造」の系譜と展開」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター

野島永 1991「京都府北部の貼り石方形墳丘墓について」『京都府埋蔵文化財論集　第２集』財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター
福永伸哉 1985「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』第 32 巻１号　考古学研究会
藤田憲司 2010『山陰弥生墳丘墓の研究』日本出版ネットワーク
正岡睦夫 1997『前山遺跡　鎌戸原遺跡』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 115）岡山県教育委員会
山磨康平編 1973『中山遺跡』落合町教育委員会

表１　黒岩遺跡土壙墓一覧表

番号	平面形	墓壙上面		墓壙底		深さ	主軸方向	等高線	小口溝	小口溝距離・最大長	遺物	備考
		長さ	幅	長さ	幅							
1	隅丸方形	188	96	146	66	40	N-79° -W	斜交	×	—		A群・配石墓
2	隅丸方形	178	114	147	68	37	N-17° -W	直交	×	—		A群・配石墓
3	隅丸方形	176	76	157	70	35	N-44° -W	直交	×	—		A群・配石墓
4	隅丸方形	166	85	141	62	36	N-75° -W	平行	×	—	土器	A群・配石墓
5	隅丸方形	122	57	100	48	35	N-28° -W	直交	×	—		A群・配石墓
6	隅丸方形	120～	95	80	64	(9)	N-60° -W	直交	×	—		A群・配石墓か(溝３に切られる)
7	長方形か	20～	58	—	50	26	N-56° -W	直交	×	—		A群・配石墓か
8	長方形	193～	62～	—	—	—	N-40° -E	直交	×	—		A群・配石墓か
9	長方形	266～	88	212	73	60	N-42° -E	直交	○	182・50		方形台状墓１周溝内
10	長方形	260	156	235	126	71	N-56° -W	直交	○	180・50		B群・墓壙底が一部段になる
11	長方形	126	70	111	56	17	N-52° -W	直交	○	82・28	土器	B群
12	長方形	96	59	84	45	14	N-56° -W	直交	×	—		B群・土壙墓11を切る
13	長方形	260	148	234	120	76	N-55° -W	直交	○	187・48	土器	B群
14	長方形	152～	95	145～	67	60	N-53° -W	直交	○(片)	—・67		B群・西側は削平
15	長方形	80～	83	75～	75	40	N-53° -W	直交	○(片)	—・38		B群・西側は削平
16	長方形	237	91	204	70	50	N-64° -W	直交	○	170・52		B群・上層に古墳時代土器棺墓
17	長方形	230～	92	215	77	28	N-65° -W	直交	○	190・47		B群
18	長方形	220～	73～	215～	58～	(6)	N-50° -W	直交	○	190・55		B群・溝１を切る
19	長方形	228～	103	206	80	80	N-54° -W	直交	○	182・43		B群・溝１を切る
20	長方形	140～	54	125～	35	(28)	N-52° -W	平行	×	—		B群・溝１を切るか
21	長方形	247～	96	215	75	63	N-47° -W	平行	○	165・55		B群・溝１を切るか
22	長方形	235～	145	145～	115	12	N-64° -W	斜交	○	176・64		B群・溝１を切る
23	長方形	135～	76	130～	70～	20	N-59° -W	平行	○	93・53		B群・溝１を切る
24	長方形	105～	55	94	40	18	N-1° -W	直交	○(片側)	—・40		方１
25	長方形	133～	55	124	40	13	N-21° -E	直交	○	113・29		方１
26	長方形	242	88	216	60	40	N-37° -E	直交	○	180・31		方１・溝１を切る
27	長方形	212～	93	187	75	56	N-40° -E	直交	○	165・50		方１・土壙墓31を切る
28	長方形	205～	96	203～	83	35	N-73° -E	斜交	○	160・48		方１
29	長方形	98	46	82	30	18	N-46° -E	平行	○	75・28		方１
30	長方形	85～	77～	75～	50～	32	N-80° -E	斜交	×	—		方１
31	長方形	102～	86	92～	55	14	N-73° -W	平行	○(片)	—・40		方１
32	長方形	108～	70	100～	56	14	N-44° -W	平行	○	80・30		方１
33	長方形	216	90	198	70～	47	N-65° -W	平行	○	174・43		方１
34	楕円形	115	49～	100	45～	21	N-53° -W	平行	○	66・22		方１
35	長方形	132	70	103	47	40	N-52° -W	平行	○	80・40		方１
36	長方形	205	122	180	97	36	N-57° -W	平行	○(片)	—・30		方１・土壙墓33を切る

番号	平面形	墓壙上面		墓壙底		深さ	主軸方向	等高線	小口溝	小口溝距離・最大長	遺物	備考
		長さ	幅	長さ	幅							
37	長方形	260	112	250	73	72	N-55° -W	平行	○	206・63	土器	方１・墓壙底に段がある
38	長方形	282	115	230	85	48	N-52° -W	平行	○	190・48		方１
39	長方形	254	110	240	97	50	N-53° -W	平行	○	205・68		方１
40	長方形	233	85	205	65	54	N-40° -E	直交	○	190・29		方１・土壙墓43を切る
41	長方形	240	92	208	62	46	N-42° -E	直交	○	185・40		方１
42	長方形	116	48	103	35	12	N-40° -E	直交	○	95・30		方１
43	長方形か	55～	74	55～	62	17	N-58° -W	斜交	―	―		方１・河原石あり(浮いた状態)
44	長方形	167	62	137	40	30	N-41° -E	直交	○	120・32		方１
45	長方形	268	101	253	88	44	N-49° -W	平行	○	180・49		方１
46	長方形	222	90	207	75	35	N-50° -W	平行	○	190・54		方１・南東小口に石(浮いた状態)
47	長方形	300	120	258	65	54	N-58° -W	平行	○	185・50		方１
48	長方形	145	78	126	45～	42	N-51° -W	平行	○(片側)	―・28		方１
49	長方形	224	122	210	98	56	N-32° -E	斜交	○	180・52		方１
50	長方形	214	83	196	62	56	N-31° -W	斜交	○	166・48	土器	方１・墓壙底に段がある
51	長方形	198	78	176	45～	48	N-54° -W	平行	○	155・30		方１
52	長方形	140	64	117	42	34	N-38° -E	斜交	○	93・43		方１
53	長方形	126	70	106	45～	25	N-48° -W	平行	○	94・37	土器	方１
54	長方形	226	92	183	72	28	N-39° -W	平行	○(片側か)	―	土器	方２の周溝内
55	長方形	269	104	240	76	45	N-51° -W	平行	○	192・55		方１
56	長方形	156	50～	142	32～	30	N-55° -W	平行	○	120・35		方１
57	長方形	188	74	166	55	47	N-53° -W	平行	○	150・60		方１
58	長方形	210	75	184	60	38	N-54° -W	平行	×	―		C群・中心に石(浮いた状態)
59	長方形	280～	140～	265～	98～	35	N-50° -W	平行	×	―		C群・石(列石の転落か)
60	長方形	119	53	100	37	14	N-68° -W	平行	○	85・35		C群
61	長方形	165～	77	157～	60	48	N-70° -W	平行	○	105・35		C群
62	長方形	217	95	202	86	35	N-68° -W	平行	○	168・55		C群
63	長方形	236	117	204	82	58	N-68° -W	平行	○	170・60		C群・墓壙東側に石(浮いた状態)
64	長方形	216	98	191	84	30	N-65° -W	斜交	○	175・58		C群・墓壙東側に石(浮いた状態)
65	長方形	284	107	230	72	12	N-46° -W	平行	○	165・63		C群
66	長方形	266	85	230	64	42	N-67° -W	平行	○	190・50		B群
67	長方形	304	120	274	100	84	N-52° -E	直交	×	―	土器	方２・南西側に枕石
68	長方形	185	55	163	35～	76	N-52° -E	直交	×	―	土器	方２・南西側に枕石
69	長方形	350	163	280	120～	100	N-53° -E	直交	×	―	土器	方２・南西側に枕石
70	長方形	160～	46	150～	38	30	N-43° -E	直交	○(片)	―		方２の周溝内
71	長方形	142～	100	132～	80	56	N-46° -E	直交	×	―		方３
72	長方形	233～	120	220～	100	54	N-60° -W	直交	×	―	砥石	方３
73	長方形	283	130～	244	104～	96	N-8° -W	平行	×	―	土器	方３
74	長方形	230	62～	197	50～	88	N-10° -W	平行	×	―	土器	方３
75	長方形	137	63	116	53	16	N-42° -W	平行	×	―		方３
76	楕円形	110	64	92	52	36	N-36° -E	直交	○(片側)	―・56		方３
77	長方形	124	53	94	35～	36	N-40° -E	平行	×	―		方３
78	楕円形	216～	80	185～	60	56	N-61° -E	直交	○(片か)	―・46		方４
79	長方形	185	65	167	56	44	N-44° -W	平行	×	―		方４の周溝内

※小口溝の「片」は、片側のみに小口溝があり、もう一方は不明なもの。「片側」は片側のみにあるものをいう。
※備考の「方１」は方形台状墓１、「方２」は方形台状墓２、「方３」は方形台状墓３、「方４」は方形台状墓４を指す。

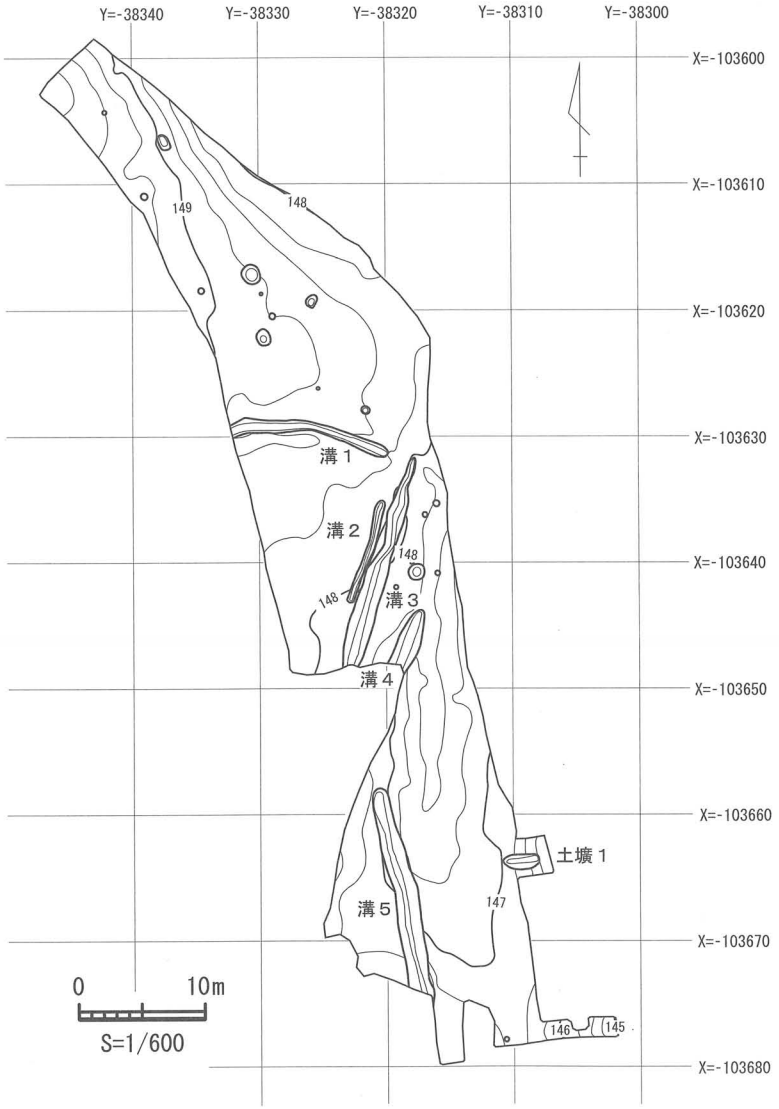
第８章　追坊師Ｂ遺跡

第１節　遺跡の概要

追坊師Ｂ遺跡は、津山市領家 1378-1 に所在し、新クリーンセンター建設予定地の南東端の丘陵上に位置している。遺跡の範囲の標高は約 145 ～ 149ｍである。

遺構は、溝５条と土壙１基を検出している。これらの遺構から土器片等が数点出土しており、時期は奈良時代から江戸時代末のものである。

なお、その他に数基の土壙及び柱穴と思われるものを検出しているが、遺物等の出土がなく詳細は不明である。これらのものについては、第１図の遺構配置図にて位置のみを記している。（平井）

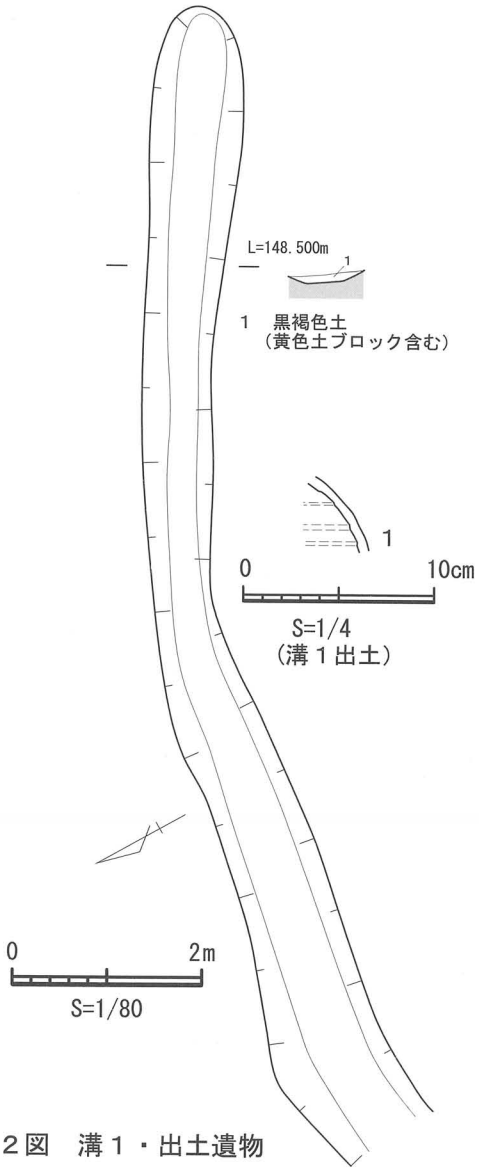


第１図　追坊師Ｂ遺跡遺構配置図

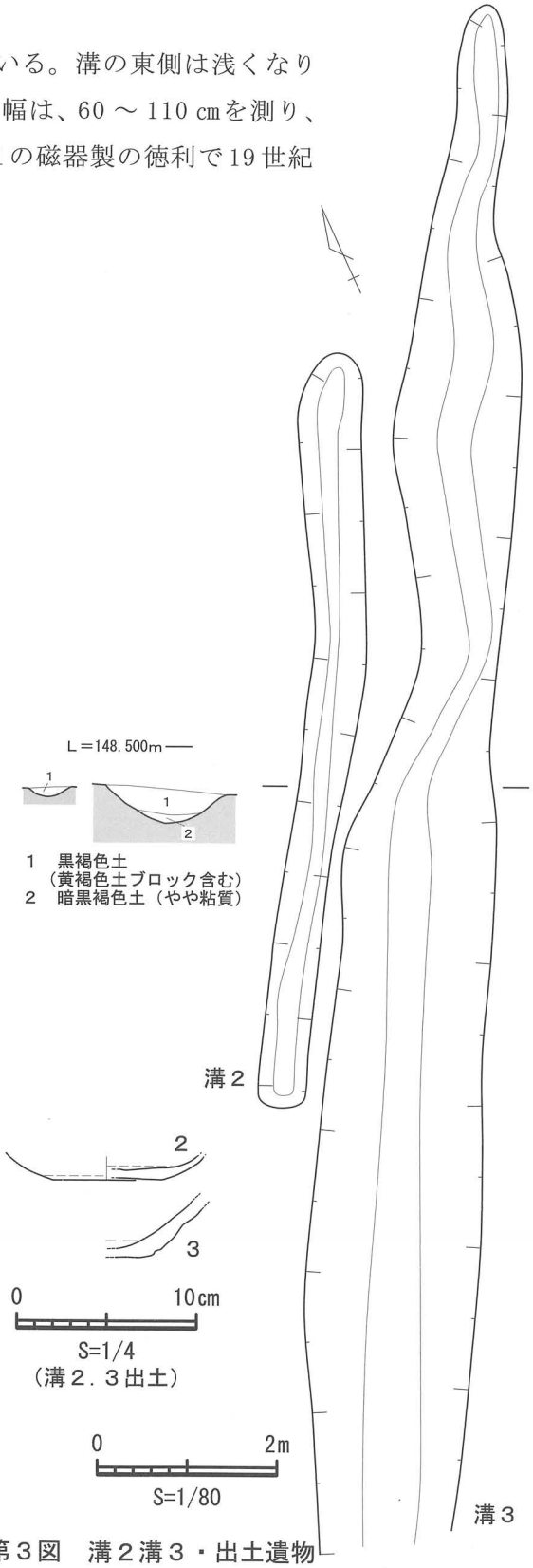
第２節　検出された遺構と遺物

溝１（第２図）

調査区の中央部に位置し、東西に流走している。溝の東側は浅くなり途切れており西側は調査区外にのびる。溝の幅は、60 ～ 110 ㎝を測り、深さは５～ 18 ㎝程度残存していた。遺物は１の磁器製の徳利で19 世紀中ごろのものであろう。



第２図　溝１・出土遺物



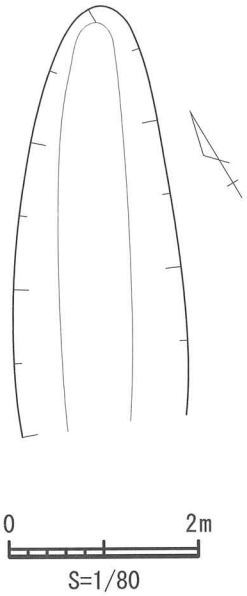
第３図　溝２溝３・出土遺物

溝２（第３図）

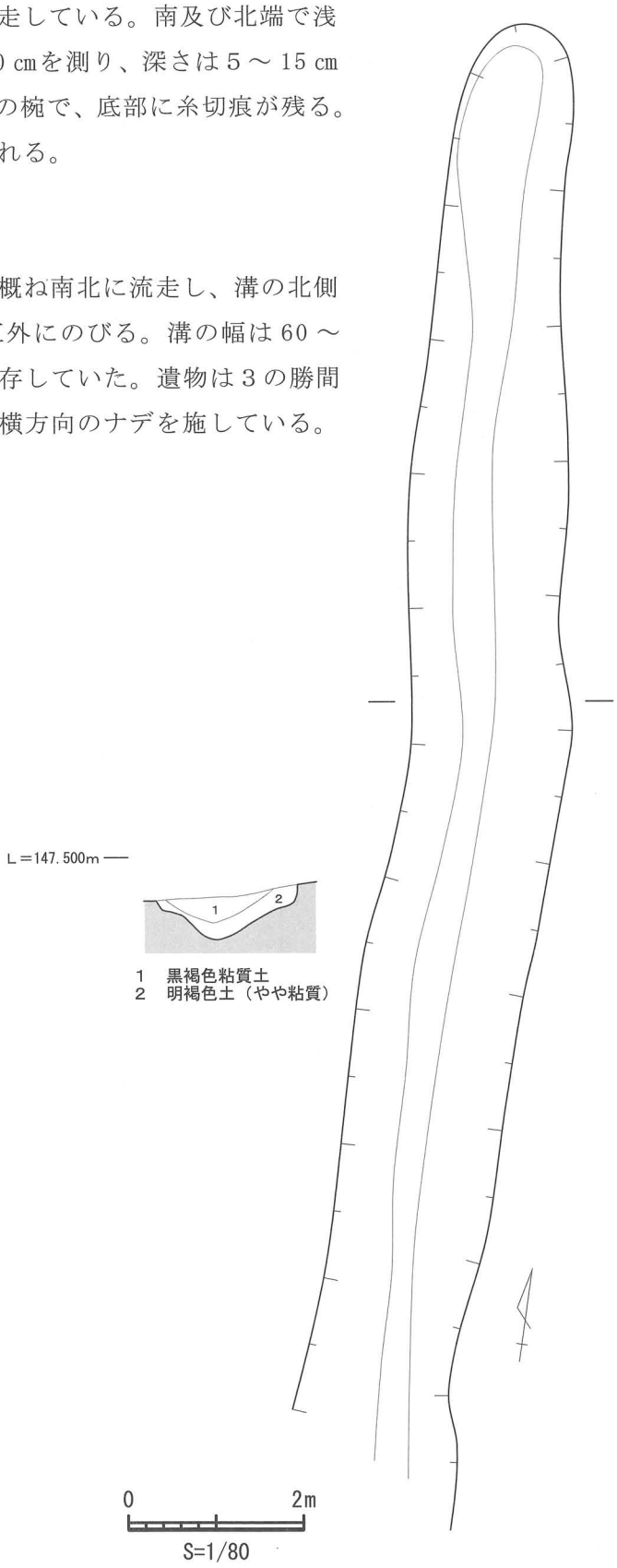
調査区中央部に位置し、概ね南北に流走している。南及び北端で浅くなり途切れている。溝の幅は、50 ～ 70 ㎝を測り、深さは５～ 15 ㎝程度残存していた。遺物は２の勝間田焼の椀で、底部に糸切痕が残る。古代末から中世にかけてのものと考えられる。

溝３（第３図）

調査区中央部に位置し、溝２に接して概ね南北に流走し、溝の北側は浅くなり途切れており、南側は調査区外にのびる。溝の幅は 60 ～ 160 ㎝を測り、深さは 11 ～ 34 ㎝程度残存していた。遺物は３の勝間田焼の壺で、底部は平底で内外面ともに横方向のナデを施している。古代末のものであろう。



第４図　溝４



第５図　溝５

溝４（第４図）

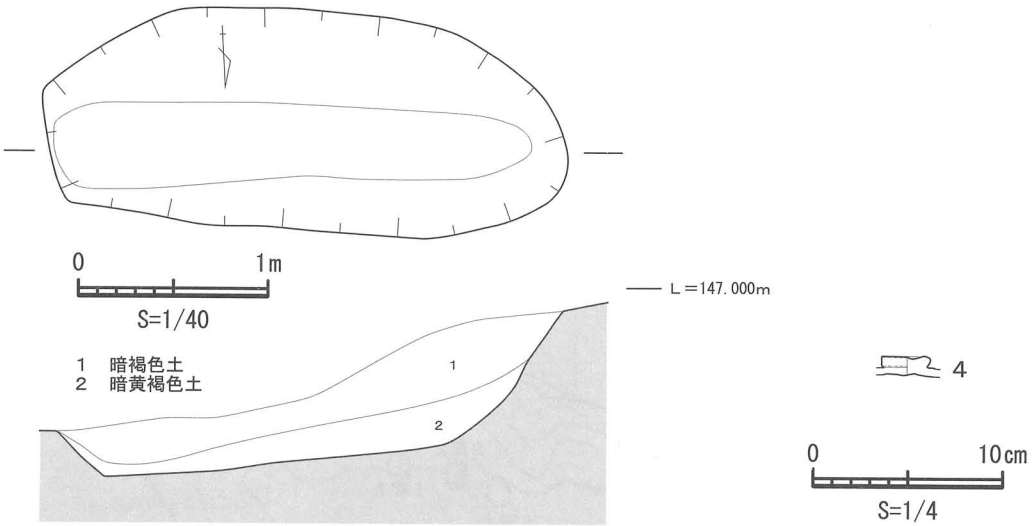
調査区中央部に位置し、溝の幅は、100 ～ 180 cmを測り深さは、24 ～ 45 cm程度残存していた。溝の大部分が調査区外に存し、遺物もなく詳細は不明である。

溝５（第５図）

調査区南側に位置し、概ね南北に流走している。溝の北側は浅くなり途切れており、南側は調査区外にのびる。溝の幅は、130 ～ 210 cmを測り、深さは、25 ～ 57 cm程度残存していた。遺物の出土はなく、詳細は不明。

土壙１（第６図）

平面形が120 ～ 280 cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは20 ～ 45 cmを測る。遺物は４の須恵器の坏蓋のつまみ部分が１点のみ出土しており、外面は横方向のナデを施す。奈良時代前半のものであろう。



第６図　土壙１・出土遺物

第３節　まとめ

今回調査した調査区では、検出した遺構及び出土遺物が少なく詳細な遺跡の様相を明らかにすることができなかった。

遺構は奈良時代から江戸時代にかけてのものであるが、集落の形成は見られず、土地利用は限定的なものであったと思われる。（平井）

表１　追坊師Ｂ遺跡遺構一覧表

溝

遺構名	断面形	上端幅 (cm)	床面幅 (cm)	深さ (cm)	床面標高 (m)	時期
溝１	逆台形	60～110	30～60	5～18	148	19世紀中頃
溝２	椀の底形	50～70	15～20	5～15	148	古代末～中世
溝３	椀の底形	60～160	20～70	11～34	147～148	古代末
溝４	椀の底形	100～180	50～70	24～45	147	
溝５	椀の底形	130～210	30～80	25～57	146～147	

土壙

遺構名	平面形	長軸（cm）	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	備考
土壙１	楕円形	280	120	20～45	奈良時代前期	

表２　追坊師Ｂ遺跡遺物観察表

土器

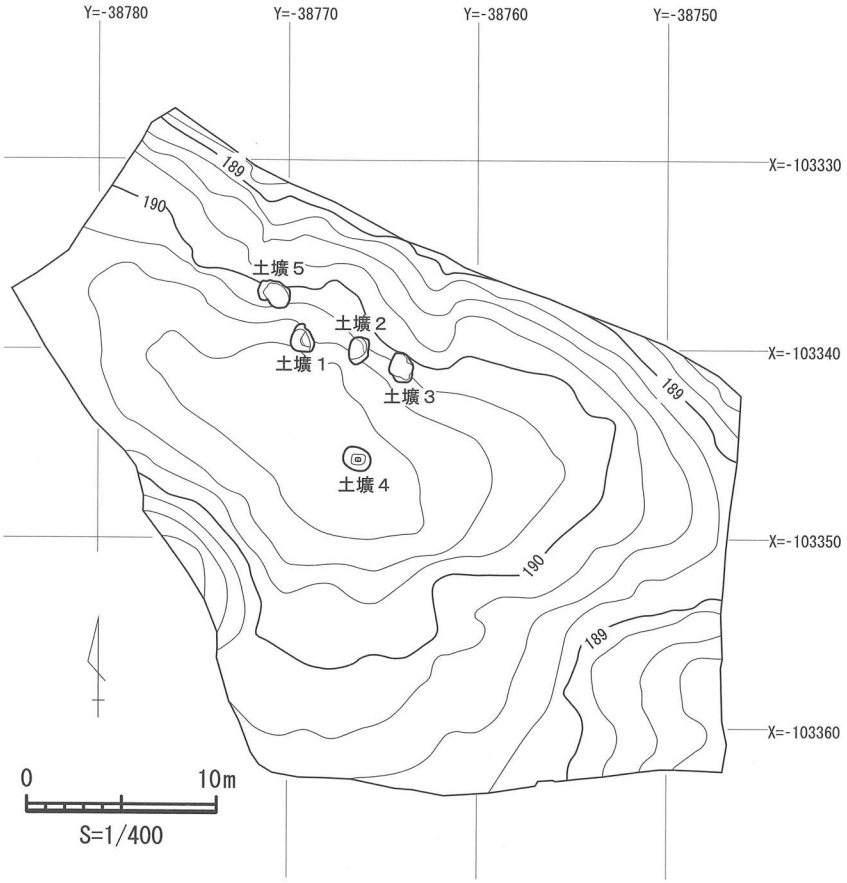
掲載番号	遺構名	器種	計測値（ｃｍ）（　）は復元値			色調	形態・手法の特徴	備考
			口径	底径	器高			
1	溝1	徳利				灰白色		
2	溝2	椀		(6.0)		緑灰色	内外：ヨコナデ　底に糸切痕	
3	溝3	壺				明緑灰色	内外：ヨコナデ	
4	土壙1	坏蓋（つまみ）				青灰色	ヨコナデ	

第９章　城山遺跡

第１節　遺跡の概要

城山遺跡は、津山市領家 1446 に所在し、畔田遺跡・追坊師Ａ遺跡・黒岩遺跡・追坊師Ｂ遺跡が所在する丘陵と谷を隔てて向かい合う独立した丘陵の頂部に位置している。遺跡の範囲の標高は約 188 ～ 190ｍである。

遺構は、調査区北側斜面に貯蔵穴と考えられる土壙４基を検出し、そのうち２基の土壙から人骨が出土した。調査区中央付近の丘陵尾根上では落し穴と考えられる１基の土壙を検出した。遺構はこれらの土壙５基のみであり、遺構、遺物ともに局所的な検出にとどまっている。また、事前に行った試掘調査でも本遺跡周辺では、他に遺構、遺物は確認されていない。（平井）



第１図　城山遺跡遺構配置図

第２節　検出された遺構と遺物

土壙１（第２・３図）

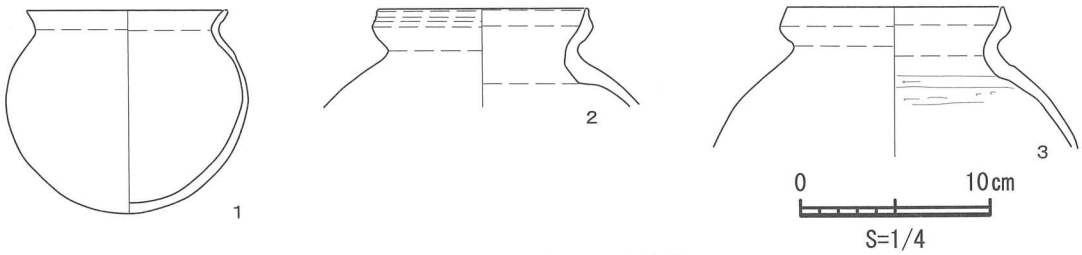
調査区の北斜面に位置する。平面形は100×135 cmのやや不整な円形を呈し、残存する深さは、最深部で175 cmを測り、断面形がいわゆる袋状の土壙である。また、この土壙の床面に床面中心から東側の場所に平面形が80×80 cmの円形を呈し深さが最深部で110 cmを測る土壙が掘られている。

土層観察からは、この土壙は人為的に埋められた状況は確認できなかった。しかし床面からの土壙については、分層ができなかったが、基盤層の土がブロック状に含まれ、明らかに堆積状況が異なり、床面からの土壙は人為的な埋戻しが想定される。

遺物は１・２・３の壺、甕及び人骨である。人骨は床面からの土壙より出土しており、鑑定の結果、人骨は１個体で年齢不詳ながら女性の可能性があることが分かった。また、人骨の出土状況からは、骨を丁寧に並べて置いたような状況が確認され、一回での埋葬もしくは埋没では、このような出土状況になるとは考えにくいため、再葬が行われた可能性も考えられる。

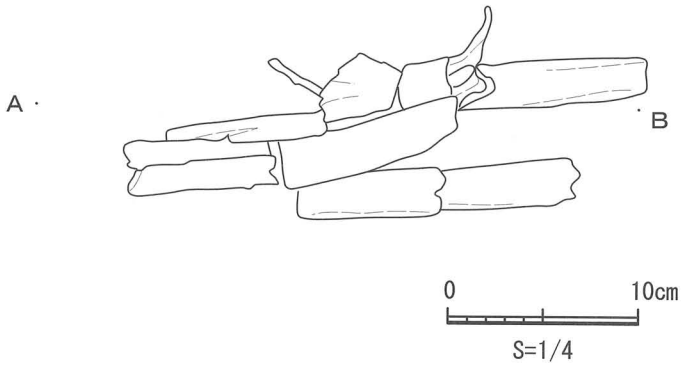
なお、埋葬施設としての痕跡（例えば墓標的なもの）は検出されていない。

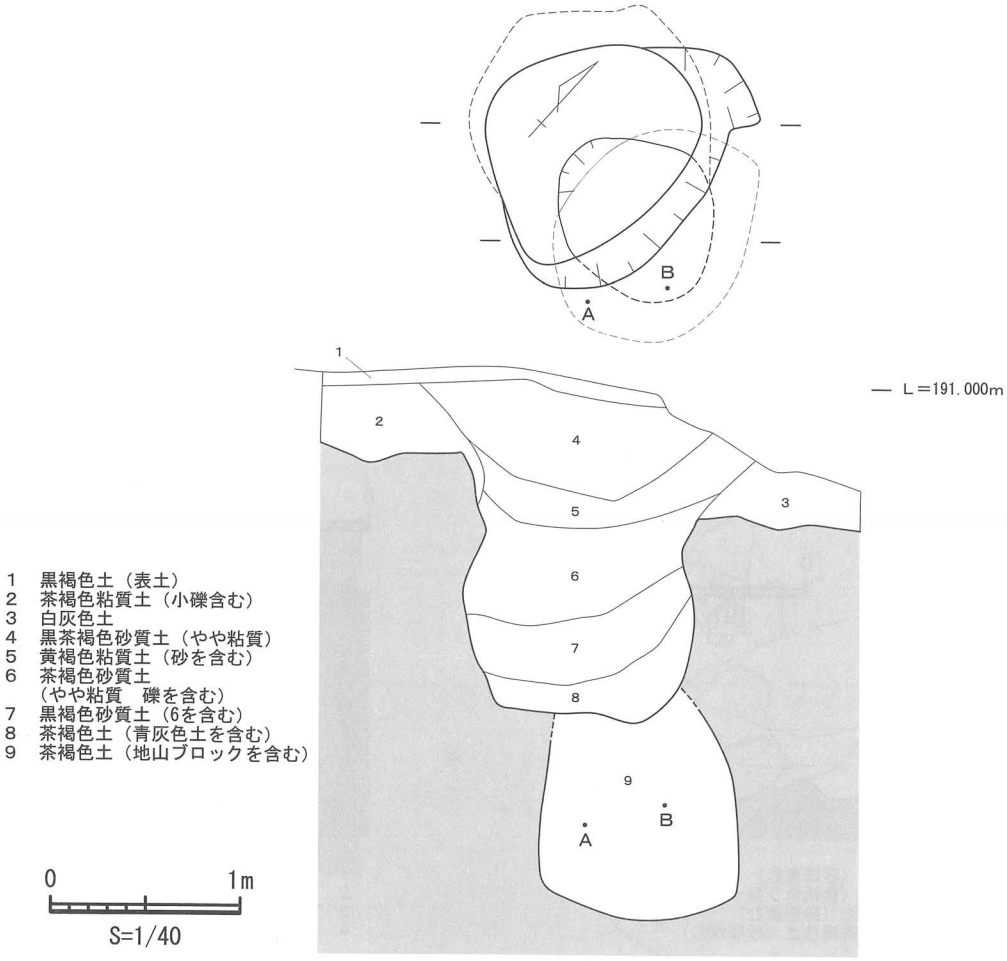
遺物の特徴から土壙の時期は、弥生時代後期後葉のものであろう。



第２図　土壙１出土遺物

挿図写真１　人骨出土状況





第３図　土壙１・人骨出土状況

土壙２（第４図）

調査区の中央部分北側に位置する。平面形は110×145 cmの不整形な円形を呈する。残存する深さは最深部で95 cmを測り、断面形はいわゆる袋状を呈する。

土層観察からは、第１・２・３層が埋戻しもしくは埋没後改めて掘り返されたものと考えられる状況が確認できた。

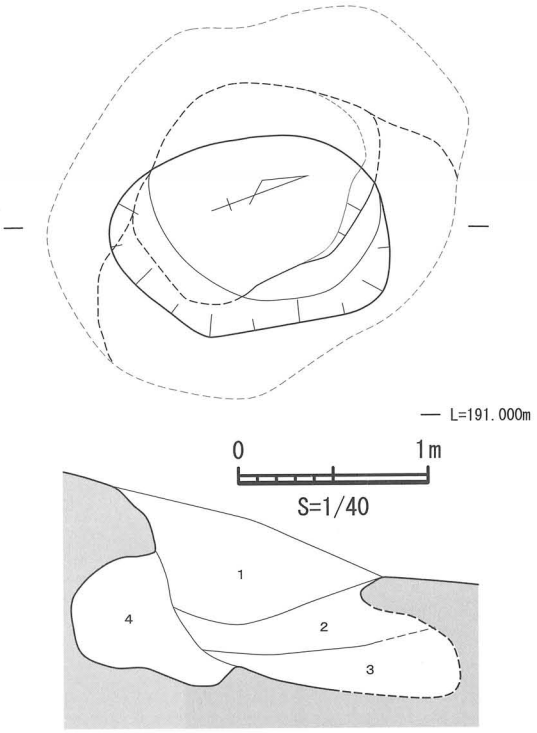
この土壙からは、遺物の出土はないが、周囲の状況から見て、他の土壙と大差ない時期に、貯蔵穴として利用されていた土壙と考えても差し支えはないであろう。

土壙３（第５図）

調査区の中央部分北側に位置する。130×150 cmの不整形な円形を呈する。残存する深さは、最深部で110 cmを測り、断面形はいわゆる袋状を呈する。

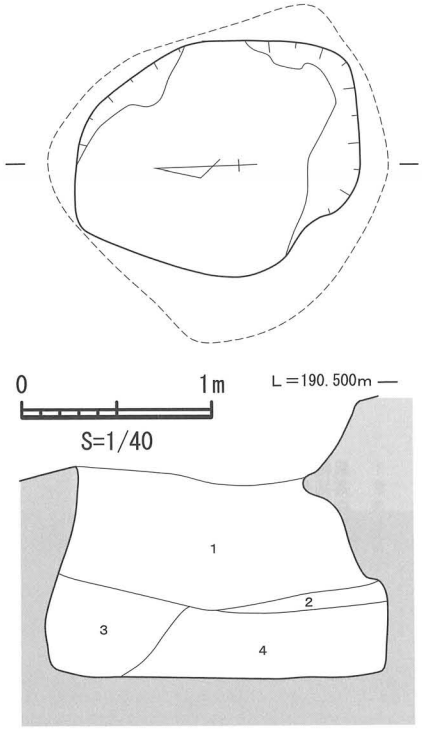
堆積土の下半は基盤層の土がブロック状に入る水平堆積であり人為的かつ短期間の埋戻しが考えられるが、土壙１、５のように人骨等は出土しなかった。

この土壙からは、遺物の出土はないが、周囲の状況から見て、他の土壙と大差ない時期に、貯蔵穴として利用されていたと考えても差し支えはないであろう。



1　茶褐色土（砂礫含む）
2　茶褐色土（黄褐色ブロック含む）
3　暗茶褐色土（砂礫含む）
4　やや暗い茶褐色土（砂礫含む）

第４図　土壙２



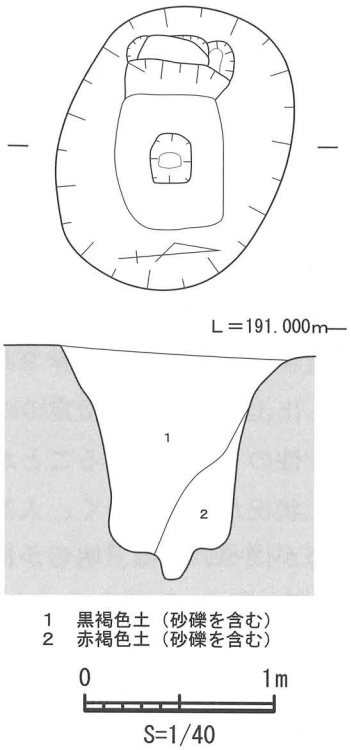
1　茶褐色土（砂礫含む）
2　黒褐色土（1のブロック含む）
3　茶褐色土（地山ブロック含む）
4　黒褐色土（1ブロック含む）

第５図　土壙３

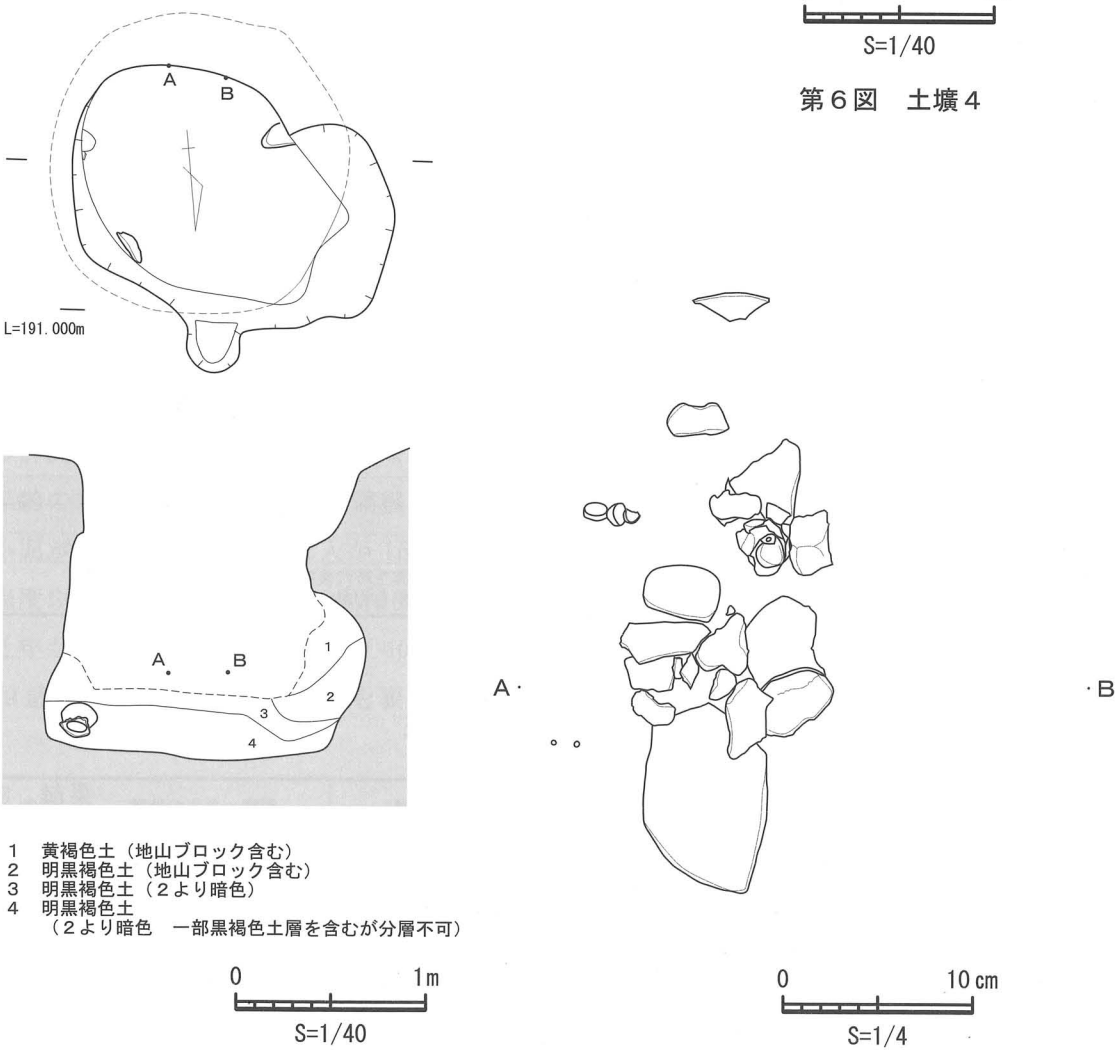
土壙４（第６図）

調査区中央付近の丘陵尾根上に位置する。周囲に同様の土壙はなく単独での検出である。床面中央にピットを伴う。平面形は120×147㎝の楕円形を呈し、残存する深さは、105㎝を測る。床面のピットは径22～26㎝、土壙床面からの深さは15㎝を測る。

遺物は出土していないため、遺構の時期は判然としないが、このような遺構は、一般的には縄文時代のものと考えられるものが多く、そのころの落穴としての機能を持つものであろう。



第６図　土壙４



第７図　土壙５・人骨出土状況

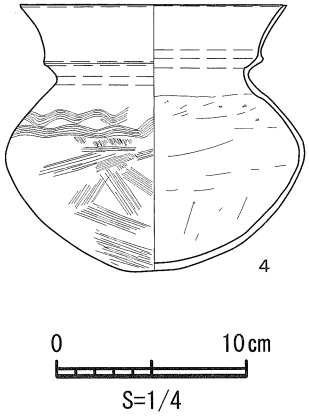
土壙５（第７・８図）

調査区の北西部に位置し、平面形は125×175㎝の不整形な円形を呈する。残存する深さは、最深部で165㎝を測る。断面形は、いわゆる袋状を呈する。

土層観察からは、第１・２層は基盤層の土がブロック状に堆積しており、人為的な埋戻しが想定される。

出土遺物は、４の甕と人骨である。人骨は３層上面から出土しており、鑑定の結果成年から壮年前半の女性の可能性があることがわかった。しかし、出土状況が良好でなく、人為的に埋葬されたものか否かについては、明らかにできないが、前述の土層観察から考えると、土壙の埋没過程のくぼみを利用した埋葬も否定できない。

遺物の特徴から土壙の時期は、弥生時代後期後葉から古墳時代初頭頃のものであろう。



第８図　土壙５出土遺物

表１　城山遺跡遺構一覧表

土壙

遺構名	平面形	長軸（cm）	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	備考
土壙１	不整形な円形	135	100	175	弥生時代後期後葉	床面に掘られた土壙あり（80×80cm　円形　深さ110cm）人骨出土
土壙２	不整形な円形	145	110	95		
土壙３	不整形な円形	150	130	110		
土壙４	楕円形	147	120	105		底面中央にピットあり
土壙５	不整形な円形	175	125	165	弥生時代後期後葉から古墳時代初頭	人骨出土

表２　城山遺跡遺物観察表

土器

掲載番号	遺構名	器種	計測値（ｃｍ）（ ）は復元値			色調	形態・手法の特徴	備考
			口径	底径	器高			
1	土壙1	壺	(10.6)		(10.6)	橙色	外：ハケ	
2	土壙1	甕	(11.2)			灰白色	内：ヘラケスリ　外：ヨコナデ	
3	土壙1	甕	(11.5)			灰白色	内：ヘラケスリ　外：ヨコナデ	
4	土壙5	甕	14.0		14.1	にぶい黄橙色	内：ヘラケズリ　外：ハケ	波状文

第３節　城山遺跡出土骨の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

城山遺跡（岡山県津山市に所在）の発掘調査では、弥生時代後期後半の可能性がある土壙１（以下SK１という。）と弥生時代後期末～古墳時代初頭頃の土壙５（以下SK５という。）から人骨が出土している。今回の分析調査では、２基の土壙から出土した人骨について形態学・解剖学的観察を行い、部位および性別等、出土人骨に関する情報を得る。

１．試料

人骨資料は、SK１とSK５から出土した人骨片である。SK１の人骨は、頭蓋骨の上に大腿骨が存在する状況で検出されている。SK５は、袋状の断面をした土壙で、土壙底面上50cmから出土している。出土骨は、現地取上後、表面の泥をクリーニングした後、番号を付けてアルミホイルで包み、ビニール袋にて保存されていた。SK１が12試料（No.①～⑩・⑪・⑪）、SK５が13試料（No.①～⑫および番号なし）、合計25試料である。試料の詳細は結果と合わせて示す。

２．分析方法

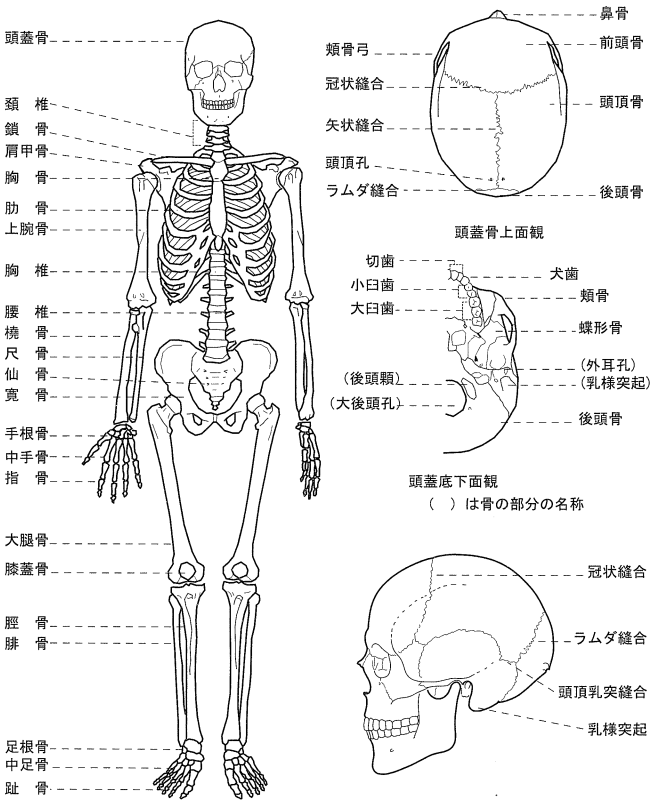
試料に付着した砂分や泥分を乾いた筆・竹串等で除去する。試料を肉眼で観察し、その形態的特徴から、種類および部位の特定を行う。歯牙の計測は、藤田(1949)に従う。なお、年齢の記載は、幼児が１～５歳程度、小児が６～15歳程度、成人が16歳程度以上、成年が16～20歳程度、壮年が20～39歳程度、熟年が40～59歳程度、老年が60歳以上を表す。

３．結果

同定結果を表３に示す。いずれもヒトであった。以下、遺構ごとに同定結果を記す。人体骨格各部の名称を図９に示す。

（１）SK１

・No.①・②(SK１)



第９図　人体骨格各部の名称

表３　出土骨の同定結果

遺構	番号	試料記載事項	種類	部位	左	右	状態等	数量		備考
SK1	①	SK1	ヒト	大腿骨/脛骨			破片	1	個	
	②	SK1	ヒト	大腿骨/脛骨			破片	1	個	
	③	SK1	ヒト	大腿骨			破片	1	個	No.④と接合関係
	④	SK1	ヒト	大腿骨			破片	1	個	No.③と接合関係
	⑤	SK1	ヒト	腓骨			破片	1	個	
	⑥	SK1	ヒト	橈骨?			破片	1	個	
	⑦	SK1	ヒト	尺骨			破片	1	個	
	⑧	SK1	ヒト	側頭骨		右	破片	1	個	
				脳頭蓋			破片	1	個	
				不明			破片	4	個	
			残渣					1.16	g	
	⑨	SK1内 クリーンG	ヒト	側頭骨?			錐体部?	1	個	
		2012.9.28		不明			破片	5	個	
	⑩	SK1(下)埋土中 クリーンG	ヒト	四肢骨			破片	2	個	
		2012.9.27		不明			破片	7	個	
			残渣					15.82	g	
	⑪	SK1 頭骨？	ヒト	頭蓋			破片	3	個	
				不明			破片	12	個	
			残渣					25.18	g	
	⑪	SK1 クリーンG	ヒト	大腿骨			破片	1	個	
		2012.9.24		脛骨?			破片	1	個	
				不明			破片	38	個	
			残渣					4.39	g	
			土器				破片	5	個	
SK5	①	SK5 歯1	ヒト	歯牙			破片	3	個	
	②	SK5埋土3(上層) 人骨破片(四肢骨)	ヒト	不明			破片	1	個	年代測定用
	③	SK5骨ワク東側の清掃中	ヒト	四肢骨			破片	2	個	
		2012.11.01		不明			破片	7	個	微細片有り
	④	SK5内 クリーンG 2012.10.4	ヒト	頭蓋?			破片	2	個	微細片有り
	⑤	SK5人骨取り上げ後の土 城山G地区 2012.11.2	礫					1	個	
	⑥	SK5埋土	ヒト	不明			破片	6	個	
			残渣					8.32	g	
	⑦	SK5(121207C)	ヒト	側頭骨			錐体部	1	個	
		2012.12.7		頭蓋			破片	2	個	
				不明			破片	33	個	
			残渣					4.56	g	
	⑧	SK5位置不明(人骨集積付近) 2012.12.11	ヒト	不明			破片	4	個	微細片有り
	⑨	SK5土器No.2南壁際 歯	ヒト	下顎第1大臼歯	左		破片	1	個	
		2012.10.30		下顎第2大臼歯	左		破片	1	個	歯冠幅10.80,歯冠厚10.28
				下顎第2大臼歯		右	破片	1	個	歯冠幅11.10,歯冠厚10.28
				大臼歯			破片	1	個	
				歯牙			破片	1	個	
			残渣					1.60	g	
	⑩	SK5(121207B)	ヒト	上顎第1大臼歯		右	破片	1	個	歯冠幅10.49,歯冠厚11.18
		2012.12.7		上顎第2大臼歯		右	破片	1	個	歯冠幅9.68,歯冠厚10.45
				歯牙				1	個	
			残渣					0.14	g	
	⑪	SK5人骨(出土位置不明) 人骨	ヒト	頭蓋			破片	3	個	
		2012.12.7		不明			破片	12	個	
			残渣					1.17	g	
	⑫	SK5(121211A) 人骨	ヒト	頭蓋			破片	2	個	
		2012.12.11		不明			破片	2	個	
			残渣					1.13	g	
		SK5内埋土 クリーンG	ヒト	不明			破片	49	個	
		2012.10.4	土器				破片	1	個	
			残渣					0.49	g	

２試料とも大腿骨ないし脛骨の破片と思われる。

・No.③・④(SK１)

大腿骨の破片である。No.③とNo.④は、接合関係にある。

・No.⑤(SK１)

腓骨の破片である。

・No.⑥(SK１)

橈骨の可能性がある破片である。

・No.⑦(SK１)

尺骨の破片である。

・No.⑧(SK１)

右側頭骨の破片、脳頭蓋の破片、部位不明破片である。

・No.⑨(SK１内　クリーンG)

側頭骨錐体部の可能性がある破片である。

・No.⑩(SK１(下)埋土中　クリーンG)

四肢骨の破片である。

・No.⑪(SK１　頭骨？)

頭蓋の破片である。

・No.⑪(SK１　クリーンG)

大腿骨の破片、脛骨の可能性がある破片、部位不明破片である。この他、土器片が含まれる。

(２) SK５

・No.①(SK５　歯1)

歯牙の破片である。

・No.②(SK５埋土3(上層)　人骨破片(四肢骨))

部位不明破片である。

・No.③(SK５骨ワク東側の清掃中)

四肢骨の破片である。

・No.④(SK５内　クリーンG)

頭蓋の可能性がある破片である。

・No.⑤(SK５人骨取り上げ後の土　城山G地区)

礫である。

・No.⑥(SK５埋土)

部位不明破片である。

・No.⑦(SK５(121207C))

側頭骨錐体部、頭蓋の破片、部位不明破片である。

・No.⑧(SK５位置不明(人骨集積付近))

部位不明破片である。

・No.⑨(SK５土器No.2南壁際　歯)

左下顎第１大臼歯、左下顎第２大臼歯、右下顎第２大臼歯、大臼歯および歯牙の破片である。左下顎第２大臼歯は、歯冠幅 10.80mm、歯冠厚 10.28mm を測る。また、右下顎第２大臼歯は、歯冠幅 11.10mm、歯冠厚 10.28mm を測る。

・No.⑩(SK５(121207B))

右上顎第１大臼歯、右上顎第２大臼歯、および歯牙の破片である。右上顎第１大臼歯は、歯冠幅 10.49mm、歯冠厚 11.18mm を測る。また、右上顎第２大臼歯は、歯冠幅 9.68mm、歯冠厚 10.45mm を測る。

・No.⑪(SK５人骨（出土位置不明）　人骨）

頭蓋の破片、部位不明破片である。

・No.⑫(SK５(121211A)　人骨）

頭蓋の破片、部位不明破片である。

・番号なし(SK５内埋土　クリーンG)

部位不明破片である。

４．考察

今回、検出された人骨は、保存状態が悪く、形質を完全に保つ骨片が認められない。SK１から出土した人骨は、大腿骨（No.③・④・⑪）が華奢である。右側頭骨（No.⑧）をみると乳様突起の発達が弱く、錐体部が小さい。これらの状況より、SK１出土人骨は女性の可能性がある。年齢は不明である。

一方、SK５から出土した人骨は、側頭骨錐体部が小さい。また歯牙計測値は、權田(1959)と比較すると女性的である。したがって、本人骨も女性の可能性がある。年齢は、咬耗状況から成年～壮年前半の可能性がある。

引用文献

藤田　恒太郎，1949，歯の計測基準について．人類学雑誌，61，27-32.

權田　和良，1959，歯の大きさの性差について．人類学雑誌，67，151-163.

第４節　まとめ

城山遺跡で、検出した遺構は、貯蔵穴と考えられる土壙４基と落し穴と考えられる土壙１基である。貯蔵穴のうち２基からは人骨が出土している。

土壙１内の人骨の出土状況を見ると、骨を並べているような状況が確認できるため、土壙内への遺体の遺棄といったことは考えにくく、貯蔵穴としての機能を失った後にその土壙を利用して人為的に埋葬されたものと考えられる。また、推測の域をでないがこのような出土状況から再葬（遺体を骨化し再度埋葬すること）が行われた可能性も否定できない。ただ、従来から知られている弥生時代の再葬墓とは、分布域、時期、さらに蔵骨器としての土器の使用といった埋葬方法などが大きく異なり、同一の範疇で考えることはできない。

今回の調査で分かったことは、①他の目的で使用された土壙を再利用して墓壙としていること。②人骨は女性のものである可能性が高いこと。③土壙からは、１個体のみの人骨が出土していること。④蔵骨器が出土していないこと。⑤副葬品が出土していないこと。⑥埋葬施設としての痕跡（例えば墓標的なもの）は確認されていないこと。などがあげられる。

また、人骨が出土した土壙は２基であるが、城山遺跡内には同様の土壙が２基あり人骨は今回の調査では確認されていないがこれらの土壙も埋葬が行われていた可能性がある。

これらのことから、城山遺跡周辺に、このような貯蔵穴を用いた埋葬を行う集団が存在した可能性が考えられるが、本遺跡内を含め、周辺には、今のところ集落は確認されていない。

今回の調査で確認できた貯蔵穴を利用した埋葬例については、同様の調査例が確認できないため、このような埋葬方法が、どのような影響を受け成立したのか、墓域の構造や立地、例えば城山遺跡では確認できなかった墓を造営した集団の集落遺跡とのあり方、そしてそもそもこの埋葬方法が一般的なものであったのか否か等について、比較検討をすることができなかった。今後の調査例の集積を期待したい。

土壙４の落し穴と考えられる土壙については、調査区や試掘の範囲内に同様の土壙は検出されず、丘陵頂部付近の尾根上に単独で存するのみであった。けもの道上に掘られた落し穴の一つであろう。

これらのことから、城山遺跡は、弥生時代後期に集落跡は見つかっていないものの、貯蔵穴が掘られ、何らかの人の活動が行われており、集落の一部として機能していたのであろう。その後この貯蔵穴は役割を失った後に埋葬施設として利用されその後廃絶したものと考えられる。（平井）

参考文献

石川日出志「再葬墓」『弥生文化の研究８』雄山閣　1987

土生田純之『墓の考古学』吉川弘文館　2013

設楽博己『弥生再葬墓と社会』塙書房　2008

写 真 図 版

１　調査位置遠景
（南から）

２　Ｔ－１（北西から）

３　Ｔ－２（北東から）

図版２　辰尾池東南遺跡確認調査

１　Ｔ－３（南から）

２　Ｔ－４（北から）

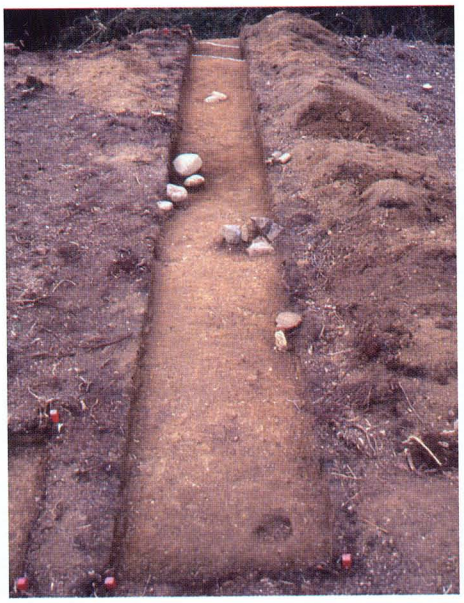
３　Ｔ－５（南から）

１　Ｔ－６（北から）

２　Ｔ－７（北西から）

３　調査前状況（南から）

図版４　試掘調査



１　Ｔ－１（南から）

２　Ｔ－２（西から）

３　Ｔ－３（北から）

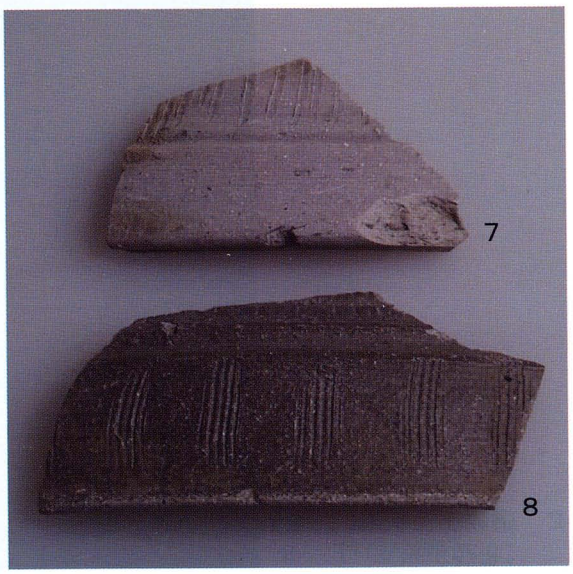
１　Ｔ－４（北東から）

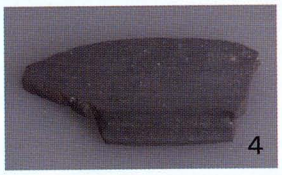
２　遺物出土状況（Ｔ－２）
（北西から）

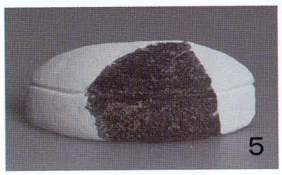
３　遺物出土状況（Ｔ－４）
（西から）

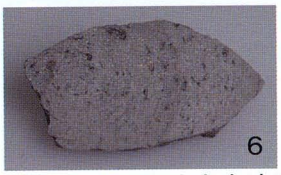
図版６　辰尾池東南遺跡確認調査・試掘調査

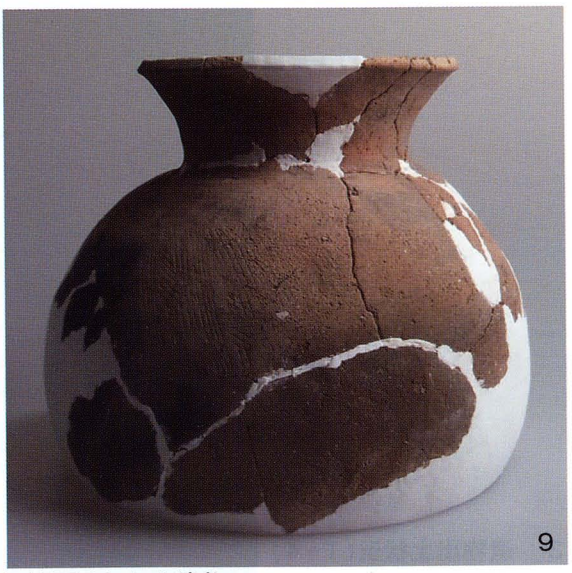
１　調査状況（Ｔ－４）
（北東から）











２　辰尾池東南遺跡確認調査出土遺物

1　Ａ地区試掘調査前

2　Ａ地区遺構検出状況
（東から）

3　Ｂ地区試掘調査前

図版８　試掘・確認調査（平成 21 年度）

１　Ｂ地区試掘調後
（南から）

２　Ｃ地区試掘調後
（北から）

３　Ｄ地区試掘調前

1　Ｄ地区重機掘削中

2　Ｅ地区試掘調査前

3　Ｅ地区試掘トレンチ
（西から）

図版 10　試掘・確認調査（平成 23・24 年度）

1　Ｆ地区調査前現況
（北西から）

2　Ｇ地区調査前現況
（西から）

3　作業状況（Ｇ地区）

1　Ｆ地区及びＧ地区
調査状況遠景
（北西から）
遠方は畔田遺跡

2　Ｆ地区トレンチ
（上空から）（左上が北）

3　Ｇ地区　平成 23 年度
調査トレンチ
（上空から）
（下方が北、ブルーシート位置は遺構確認位置）

図版 12　畔田遺跡

1　畔田遺跡遠景（北から）

2　畔田遺跡全景（左が北）

1　土壙 1（北から）

2　土壙 14（東から）

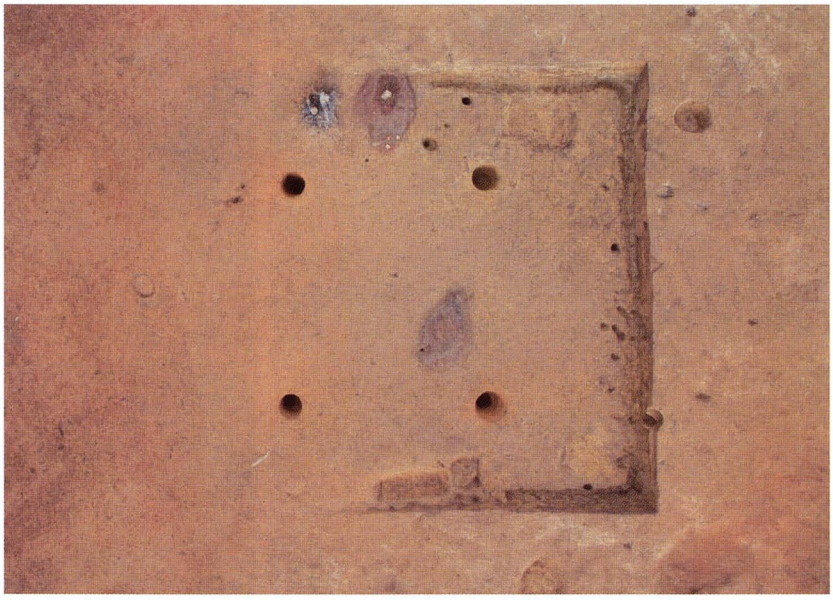
3　土壙 18（北から）

図版 14　畔田遺跡

1　土壙 19（東から）

2　墓 1（北から）

3　建物 1（上が北）

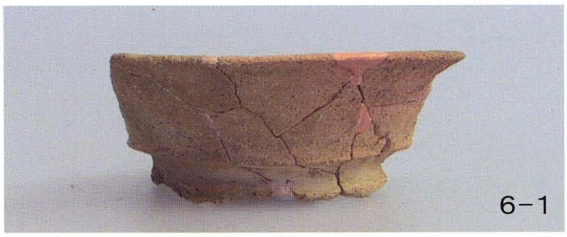


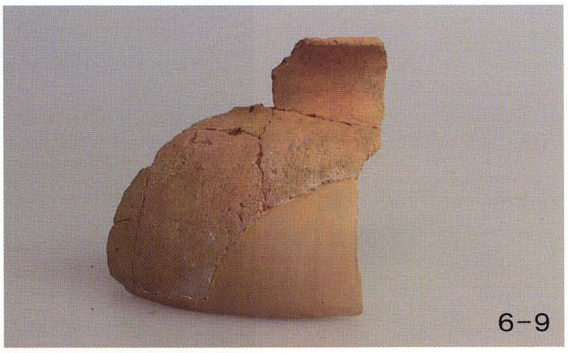
1　住居１（上が北）

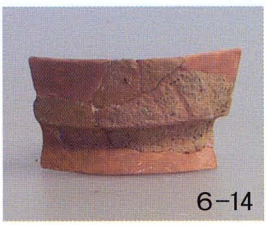
2　住居１（北から）

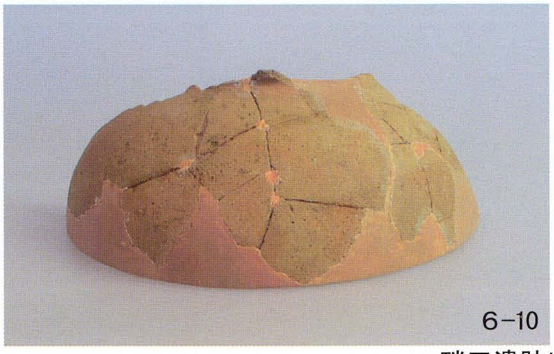
3　住居１内の土器 34
出土状況

図版 16　畔田遺跡

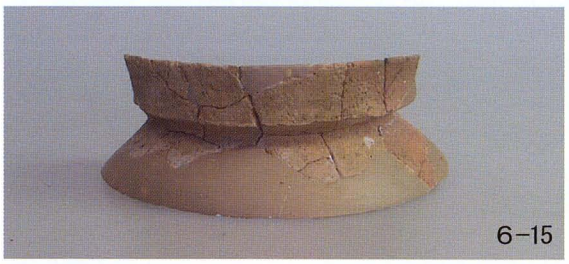


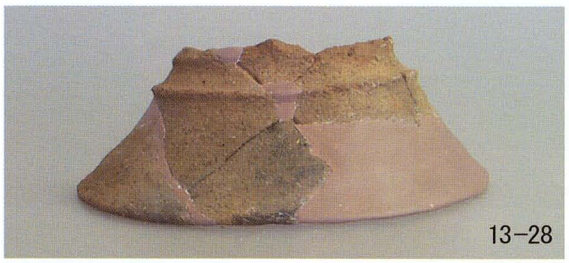


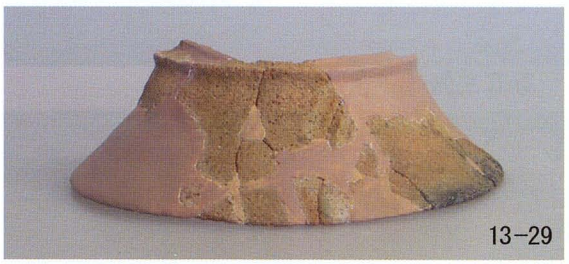


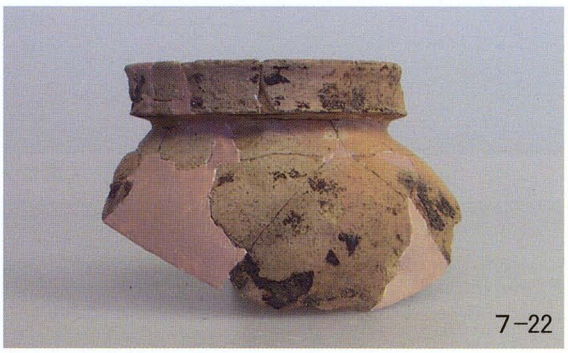


畔田遺跡出土遺物 1









畔田遺跡出土遺物２

図版 18　追坊師Ａ遺跡

1　追坊師Ａ遺跡遠景（東から　写真左側　右側は畔田遺跡）

2　追坊師Ａ遺跡全景（右が北）

1　溝１（東から）

2　溝２（東から）

3　溝２断面

図版 20　黒岩遺跡

1　黒岩遺跡発掘調査前（西から）

2　黒岩遺跡発掘後全景（左上が北）

1　遺構全景

2　Ａ群土壙墓１～５（左上が北）

図版 22　黒岩遺跡

1　B群土壙墓（左上が北）

2　C群土壙墓（左上が北）

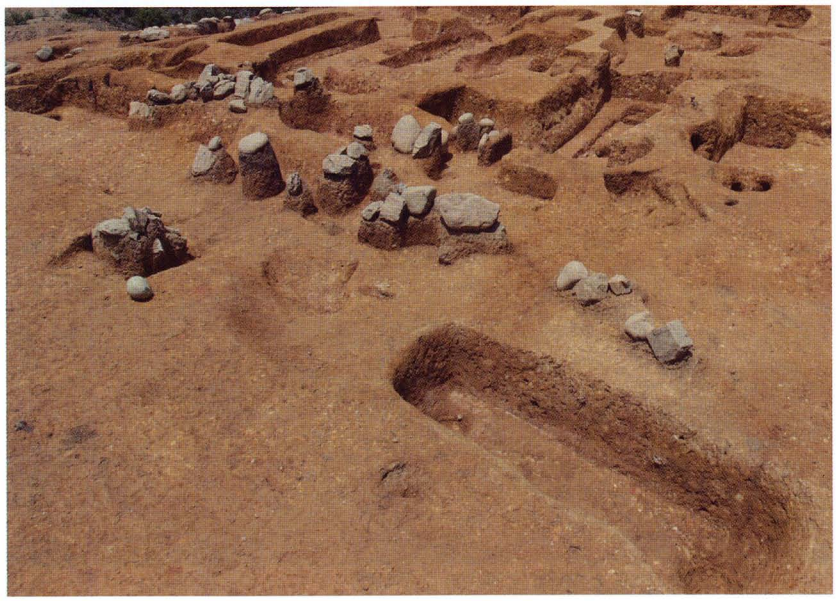
1　箱式石棺１（上が北）

2　古墳時代の土壙墓（下）（上が北）

図版 24　黒岩遺跡

1　上層遺構（南西から）

2　土壙墓１～５
（西から）



3　溝３、土壙墓６～９
（東から）

1　左：土壙墓１
（南西から）
右：土壙墓２
（北から）

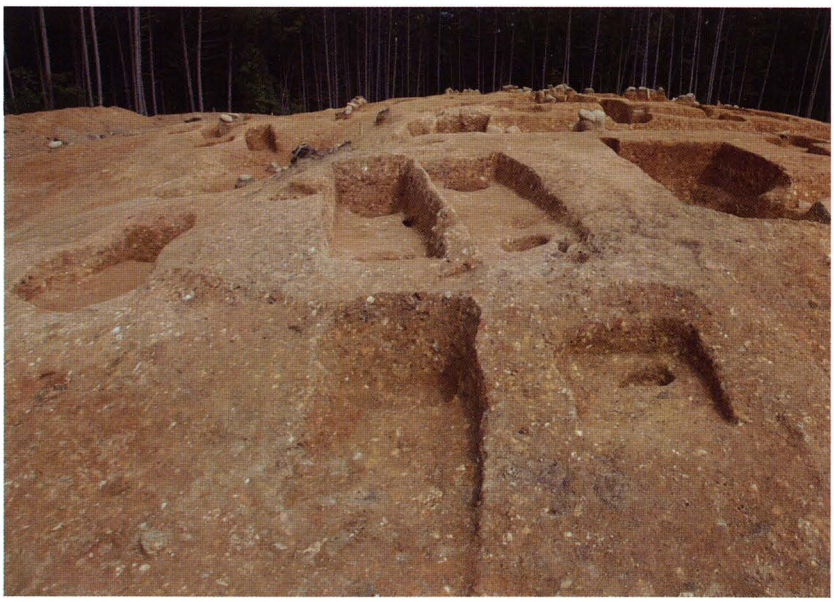
2　土壙墓４（南から）

3　左：土壙墓３
（東から）
右：土壙墓５
（北から）

図版 26　黒岩遺跡

1　土壙墓 10、16、17
（東から）

2　土壙墓 11～13、22
（南から）



3　土壙墓 14～17
（西から）

1　土器棺墓１検出状況
（北から）

2　土器棺墓１完掘状況
（東から）

3　土壙墓 18、19、21
（東から）

図版 28　黒岩遺跡

1　土壙墓 25、33、35、36（西から）

2　土壙墓 26～29、31、32、38、39、45、46（西から）

3　土壙墓 38、39、41, 45（東から）

1　土壙墓 55～57
（東から）

2　土壙墓 49、50、52、
53（西から）

3　溝５、土壙墓 51、54
（南東から）

図版 30　黒岩遺跡

1　C群土壙墓（西から）

2　溝２、土壙墓 62～64
（東から）

3　溝１（西から）

1　溝１北側アゼ土層
断面（北から）

2　溝１南北アゼ土層
断面（東から）

3　溝２列右（北から）

図版 32　黒岩遺跡

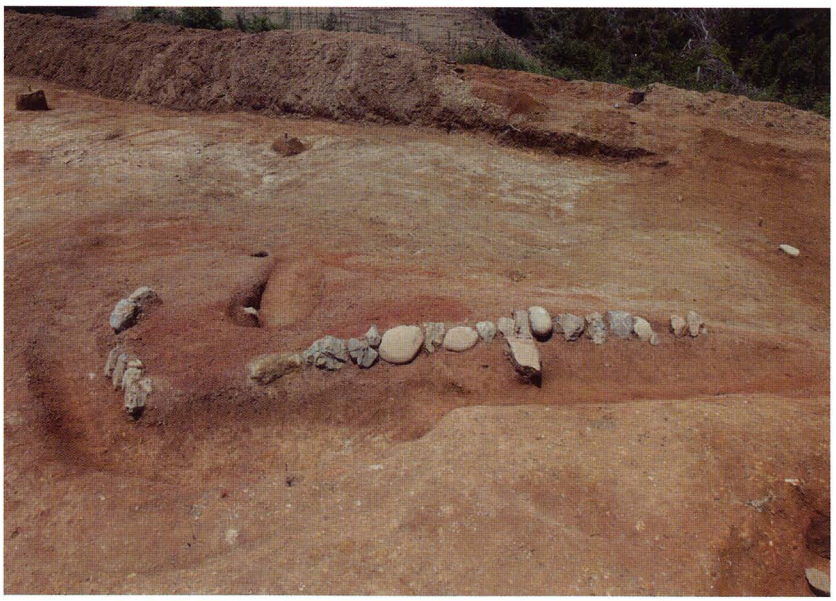
1　方形台状墓１
東隅部拡大（東から）

2　方形台状墓２
（南東から）

3　方形台状墓２
（北から）

1　方形台状墓３
（南から）

2　方形台状墓４
（南東から）



3　方形台状墓４
（北東から）

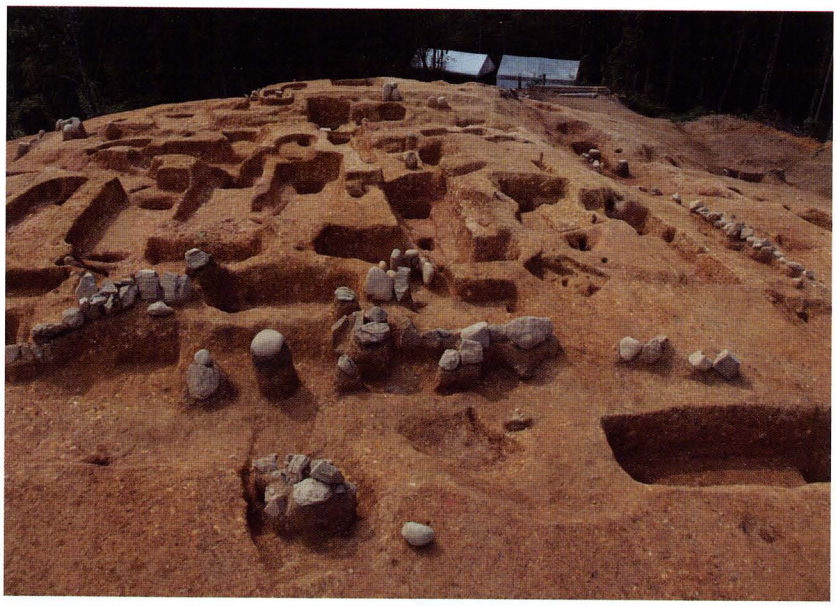
図版 34　黒岩遺跡

1　溝７（西から）

2　土壙墓 58、59、66
（北から）

3　方形台状墓１内土壙
墓群（北から）

1　方形台状墓１内土壙墓群（南から）



2　方形台状墓１内土壙墓群（東から）

3　発掘作業風景

図版 36　黒岩遺跡

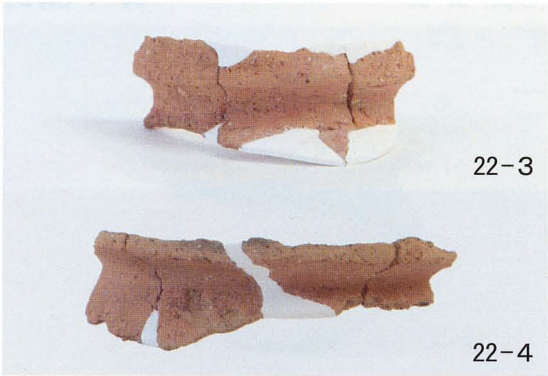
1　中学生職場体験

2　現地説明会

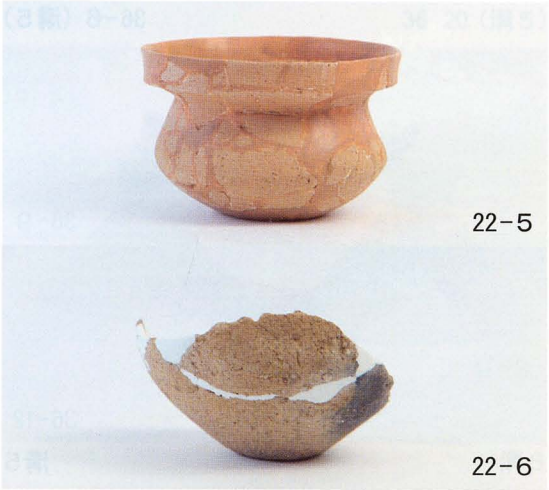
21-1（溝2）

22-1（溝3）

22-2（溝3）

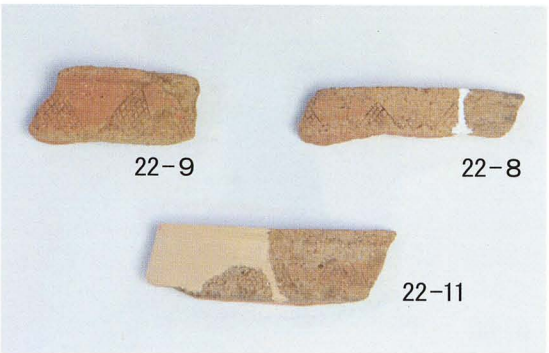


溝3



溝3

22-7（溝3）



溝3

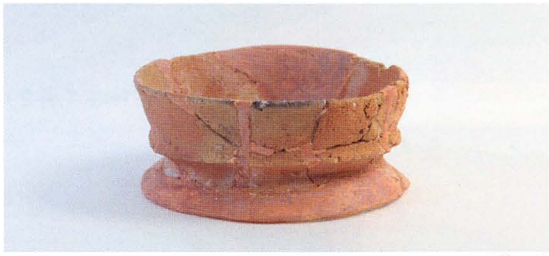
22-12（溝3）

黒岩遺跡出土遺物 1

図版 38　黒岩遺跡

36-1（溝5）

36-2（溝5）



36-3（溝5）

36-7（溝5）

36-6（溝5）

36-10

36-9

36-11

溝5

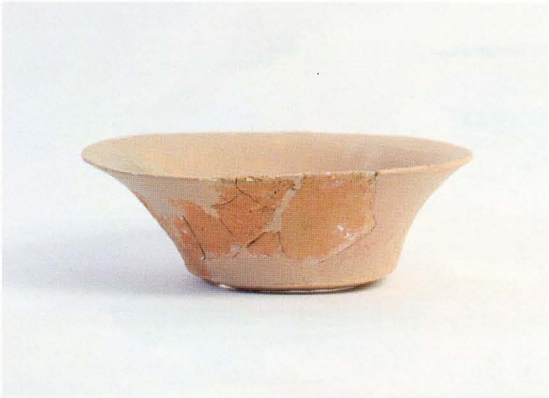
36-12

溝5

36-13（溝5）

36-17（溝5）

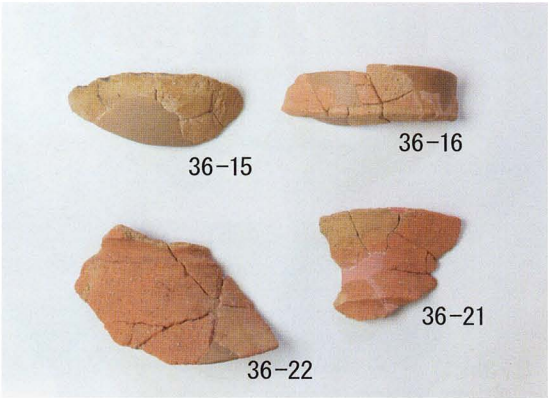
黒岩遺跡出土遺物２



36-18（溝5）

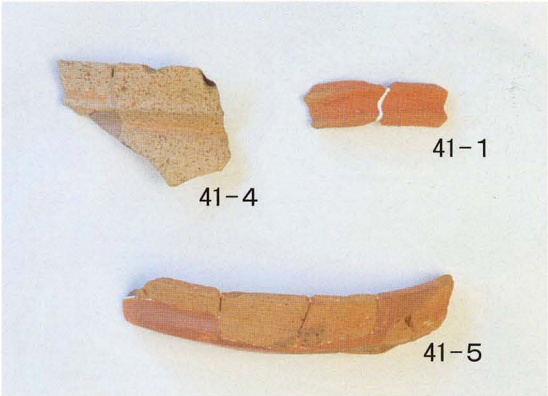
36-19（溝5）

36-20（溝5）



溝5

溝6



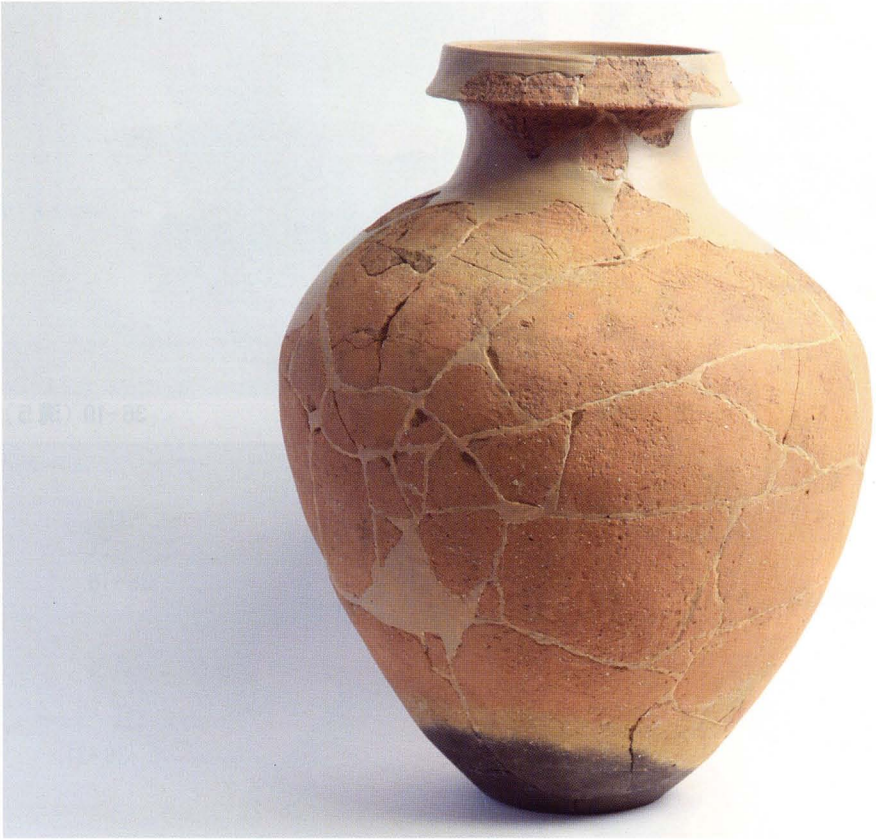
溝6

土壙墓 73・74

左：土壙墓 73・74　右：土壙墓 72

黒岩遺跡出土遺物３

図版 40　黒岩遺跡



17-1（土器棺墓1）

土器棺墓1文様部拡大

45-1（A区）

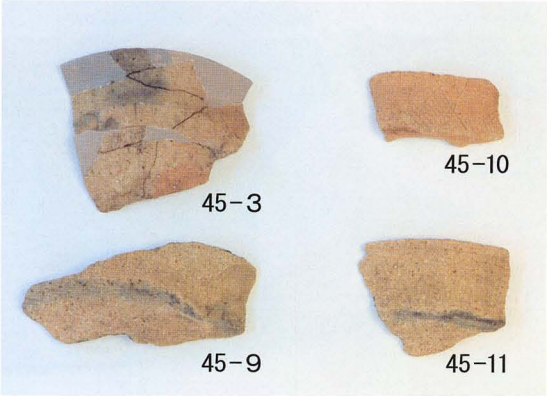
45-2

45-12
A区

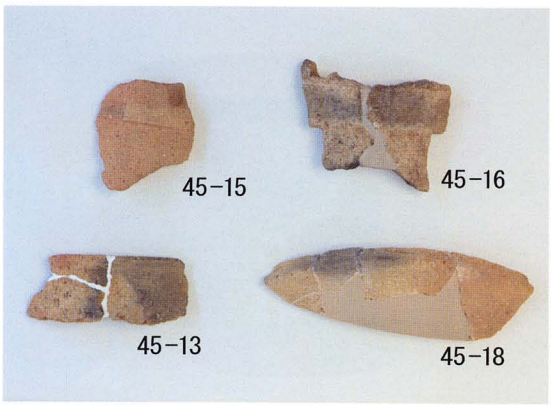
45-4（A区）

黒岩遺跡出土遺物4

A区



A区



A区

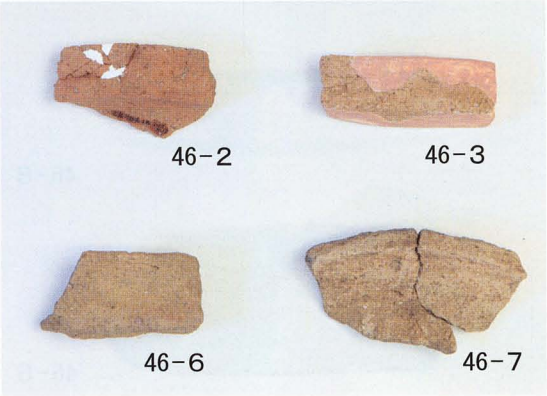
B区

46−3（B区）

黒岩遺跡出土遺物５

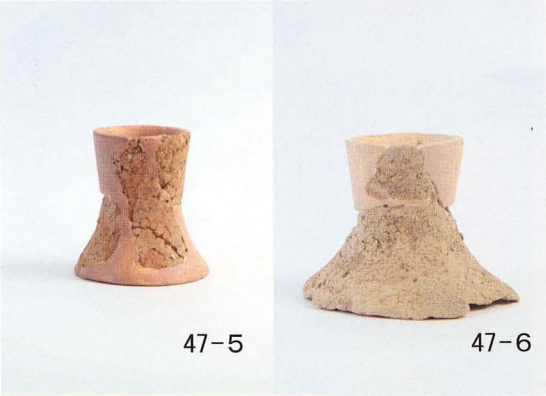
図版 42　黒岩遺跡

46-10（B区）



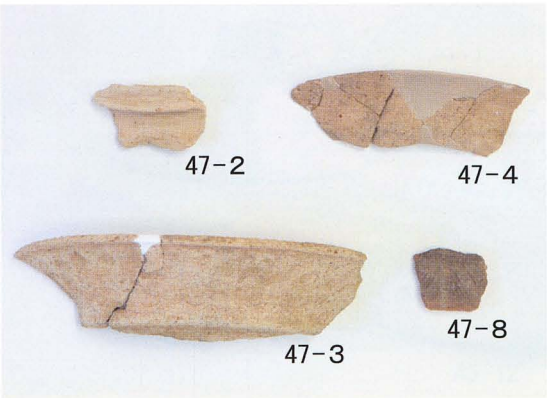
B区

47-1（C区）



D区

47-7（D区）



C区（47-3）・D区

47-12（C区）

黒岩遺跡出土遺物６

47-13（C区）

47-13 底部

48-2（その他）

48-3（その他）

48-4（その他）

48-5（その他）

48-7

49-2

上：その他　下：1997 年トレンチ 1

49-1（1997年トレンチ 1）

黒岩遺跡出土遺物 7

図版 44　黒岩遺跡

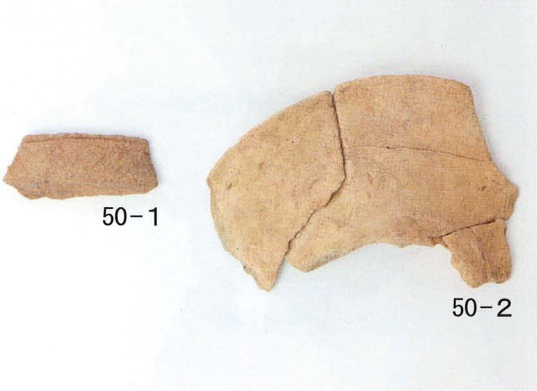
49-3（トレンチ1）

49-4（トレンチ1）

49-5

49-6

トレンチ1



50-1

50-2

トレンチ2

50-4（トレンチ2）

50-5（トレンチ2）

51-1（トレンチ4）

51-4（トレンチ4）

黒岩遺跡出土遺物8

51-5（トレンチ4）

51-3（トレンチ4）・51-6（トレンチ3）

トレンチ内

52-5（トレンチ内）

トレンチ内

52-7（トレンチ内）

52-8（トレンチ内）

トレンチ内

黒岩遺跡出土遺物９

図版 46　黒岩遺跡

1　土器棺墓１
（古墳時代）
検出状況（北西から）

2　土器棺墓１
（古墳時代）
刀子出土状況
（北東から）

3　須恵器２検出状況
（南から）

1　箱式石棺１
（古墳時代）
蓋石取り外し後
（西から）

2　箱式石棺１
（古墳時代）
完堀状況（南東から）

3　須恵器１検出状況
（南東から）

図版 48　黒岩遺跡

57-1

57-2

57-3

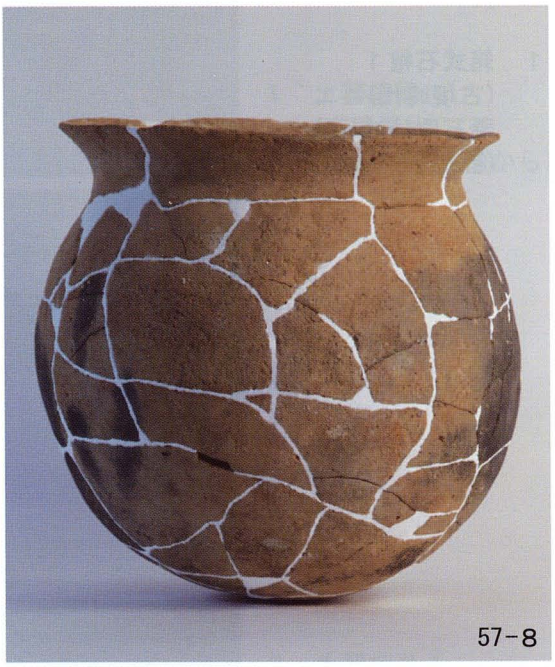
57-4

57-5

57-6

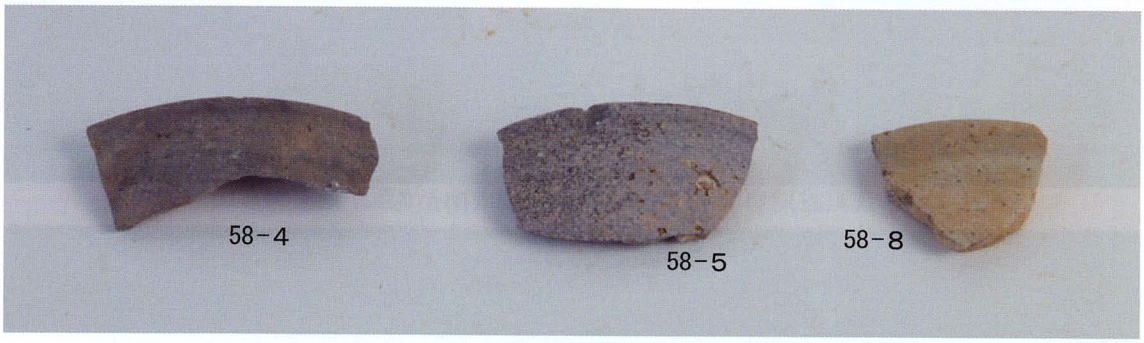
57-7

57-M1


57-8

57-9

黒岩遺跡出土遺物 10



黒岩遺跡出土遺物 11

図版 50　追坊師Ｂ遺跡

1　追坊師Ｂ遺跡遠景（南から）

1　追坊師Ｂ遺跡全景（右が北）

1　城山遺跡遠景（西から）（右側半分は平成 24 年度試掘調査のトレンチ）

2　城山遺跡全景（上が北）

図版 52　城山遺跡

1　土壙１（西から）

2　土壙１人骨出土状況
（南西から）

3　土壙１人骨出土状況

1　土壙２（北から）

2　土壙３（北から）

3　土壙４（北西から）

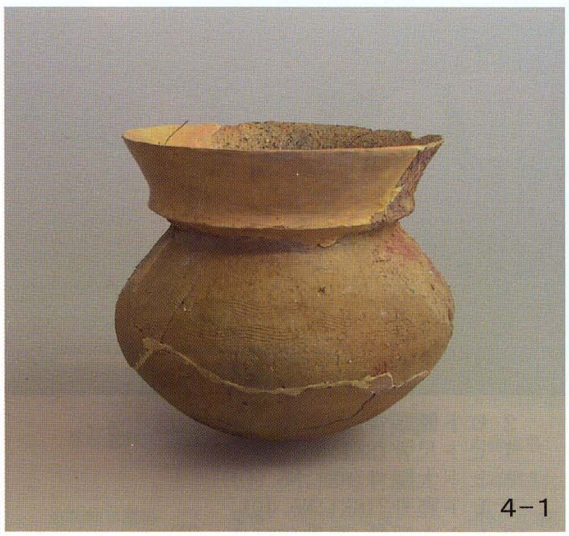
図版 54　城山遺跡

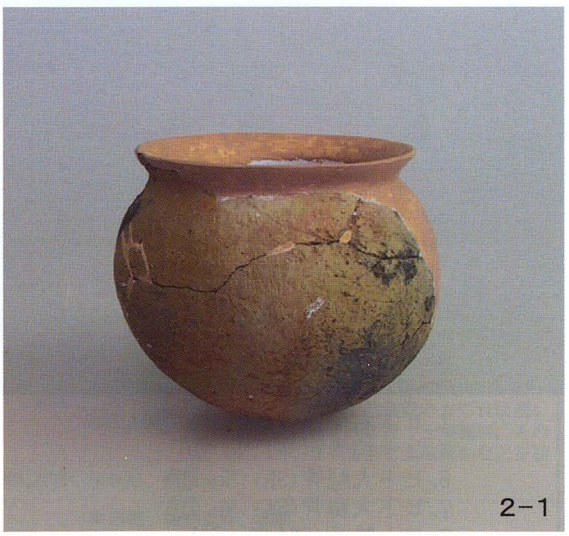
1　土壙５（北東から）

2　土壙５人骨出土状況

3　土壙配置（右から土壙５・１・２・３）

1　畔田遺跡出土金属製品





2　城山遺跡出土遺物

図版 56　城山遺跡

1. ヒト右側頭骨(SK1;No.⑧)
2. ヒト側頭骨?(SK1;No.⑨)
3. ヒト橈骨?(SK1;No.⑥)
4. ヒト尺骨(SK1;No.⑦)
5. ヒト大腿骨(SK1;No.③)
6. ヒト大腿骨(SK1;No.④)
7. ヒト大腿骨(SK1;No.⑪)
8. ヒト脛骨?(SK1;No.⑪)
9. ヒト腓骨(SK1;No.⑤)
10. ヒト大腿骨/脛骨(SK1;No.①)
11. ヒト大腿骨/脛骨(SK1;No.②)
12. ヒト側頭骨(SK5;No.⑦)
13. ヒト頭蓋(SK5;No.⑦)
14. ヒト頭蓋(SK5;No.⑦)
15. ヒト頭蓋(SK5;No.⑪)
16. ヒト頭蓋(SK5;No.⑪)
17. ヒト頭蓋?(SK5;No.④)
18. ヒト右上顎第1大臼歯(SK5;No.⑩)
19. ヒト右上顎第2大臼歯(SK5;No.⑩)
20. ヒト左下顎第1大臼歯(SK5;No.⑨)
21. ヒト左下顎第2大臼歯(SK5;No.⑨)
22. ヒト右下顎第2大臼歯(SK5;No.⑨)
23. ヒト大臼歯(SK5;No.⑨)
24. ヒト四肢骨(SK5;No.③)
25. ヒト四肢骨(SK5;No.③)

報告書抄録

ふりがな	はんだいせき　おいぼしえーいせき　くろいわいせき　おいぼしびーいせき　じょうやまいせき
書名	畔田遺跡　追坊師Ａ遺跡　黒岩遺跡　追坊師Ｂ遺跡　城山遺跡
副書名	津山圏域クリーンセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	津山市埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第84集
編著者名	小郷利幸　仁木康治　豊島雪絵　平井泰明　宮﨑絢子 株式会社パリノ・サーヴェイ
編集機関	津山市教育委員会
所在地	〒708-0824　岡山県津山市沼600-1　　電話 0868-24-8413　　FAX 0868-24-8414
発行年月日	2015年3月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
はんだいせき 畔田遺跡	おかやまけんつやましりょうけ 岡山県津山市領家	33203		35°4′2″	133 54′46″	20110926 ～ 20120313	3,500	記録保存調査
おいぼしえーいせき 追坊師Ａ遺跡	おかやまけんつやましりょうけ 岡山県津山市領家	33203		35°3′59″	133 54′46″	20111018 ～ 20120313	900	記録保存調査
くろいわいせき 黒岩遺跡	おかやまけんつやましりょうけ 岡山県津山市領家	33203		35°4′55″	133 54′50″	20120120 ～ 20120803	4,600	記録保存調査
おいぼしびーいせき 追坊師Ｂ遺跡	おかやまけんつやましりょうけ 岡山県津山市領家	33203		35°5′55″	133 54′48″	20111130 ～ 20120416	600	記録保存調査
じょうやまいせき 城山遺跡	おかやまけんつやましりょうけ 岡山県津山市領家	33203		35°4′3″	133 54′30″	20120516 ～ 20121115	950	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
畔田遺跡	集落	弥生時代	土壙5	弥生土器	
		古墳時代～古代	住居1、掘立柱建物1	須恵器、土師器	
		近世以降	墓1	金属製品、人骨	
追坊師Ａ遺跡	集落	弥生時代～古代	溝2、土壙2	弥生土器、須恵器	
黒岩遺跡	墳墓	弥生時代	方形台状墓4、土壙墓79 土器棺墓1	弥生土器	弥生時代後期の方形台状墓4とそれに伴う土壙墓49。その他の場所に土壙墓30などを検出
		古墳時代	土器棺墓1、箱式石棺1	須恵器、鉄製品	
追坊師Ｂ遺跡	集落	古代～近世	溝5、土壙1	須恵器、勝間田焼、磁器	
城山遺跡	集落	縄文時代	土壙1		弥生時代の土壙より、埋葬されたと思われる人骨が出土
		弥生時代	土壙4	弥生土器、須恵器、人骨	

要約

畔田遺跡では、弥生時代後期の土壙や、古墳時代前期～中期頃の住居跡1、古代に属するものと考えられる掘立柱建物1を検出したが、いずれの時代の集落も確認されていない。

追坊師Ａ遺跡については、弥生時代から古代にかけての溝等を検出しているが詳細は不明。

黒岩遺跡では、弥生時代後期を中心として、弥生時代中期から古墳時代中期にかけての集団墓地であることが分かり、特に弥生時代の方形台状墓4及びそれに伴う土壙を49、台状墓周辺の場所で土壙を30検出している。
また、古墳時代の遺構として、土器棺墓1、箱式石棺1を検出している。

追坊師Ｂ遺跡については、古代から近世にかけての溝等を検出したが詳細は不明。

城山遺跡では、土壙を4検出し、そのうちの2つの土壙からは、埋葬されたものと考えられる人骨が出土した。試掘調査及び本調査では、周辺に集落は確認されていない。

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第84集

畔田遺跡
追坊師A遺跡
黒岩遺跡
追坊師B遺跡
城山遺跡

津山圏域クリーンセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

平成27(2015)年3月19日　印刷
平成27(2015)年3月19日　発行

編集・発行　津山市教育委員会
岡山県津山市山北520
印刷　株式会社 津山朝日新聞社
岡山県津山市田町13